備前市埋蔵文化財調査報告７

伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅱ

２００６

備 前 市 教 育 委 員 会

備前市埋蔵文化財調査報告７

伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅱ

２００６

備 前 市 教 育 委 員 会

1．伊部南大窯跡全景（北上空より）

2．伊部南大窯跡全景（東上空より）

１．東６号窯跡全景（北側より）

２．東６号窯跡出土遺物

１．ＫＰ－１地点窯跡全景（北側より）

２．ＫＰ－１地点窯跡出土遺物

１．ＫＰ－２地点窯跡トレンチ２物原（北西より）

２．ＫＰ－２地点窯跡出土遺物

序

本書は、備前市伊部に所在する国指定史跡「伊部南大窯跡」周辺窯跡群の確認調査報告です。この確認調査は、平成11年度から14年度にかけて実施したもので、ボランティア団体「伊部里づくりの会」によって計画された観光開発にともなうものです。平成15年３月には、その前半部分の成果をまとめた「伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅰ」を刊行しており、本書はその後半部分にあたるものです。

伊部南大窯跡は備前焼の長い歴史の中で、窯の規模や操業期間の長さに関して国内では例のない貴重な窯跡であり、窯業史上貴重な遺跡であるとして昭和34年、国の史跡指定を受けています。史跡地周辺の調査では、予想外に合計８基もの窯跡が確認されました。本報告では、江戸時代末ごろ、室町時代後期、平安時代前半ごろの合計３基についての調査結果を収載しました。

備前市教育委員会ではこれらの調査結果もふまえ、伊部南大窯跡とその周辺の窯跡群、備前北大窯跡、備前西大窯跡、中世の窯跡群について「史跡伊部南大窯跡整備基本構想」を昨年策定し、これらの歴史的遺産を恒久的に保存し次世代へ引き継ぐための作業を進めています。

一次の確認調査からすでに７年もの歳月が流れていますが、伊部南大窯跡周辺窯跡群の確認調査の成果をすべて刊行することができました。本書に収められた成果が、文化財の保護・保存・活用、今後の歴史研究、地域の歴史を深める資料として少しでも寄与できれば幸いです。

最後になりましたが、文化庁をはじめ岡山県教育委員会、並びに地元の関係各位から賜りましたご支援とご協力に対しまして、心から厚くお礼申し上げます。

平成18年７月

岡山県備前市教育委員会
教育長　正　宗　洋　三

例　言

1　本書は国指定史跡「伊部南大窯跡」周辺において、「伊部里づくりの会」によって計画された観光開発にともなって、備前市教育委員会が実施した確認調査の報告書である。

2　国指定史跡「伊部南大窯跡」周辺で確認された遺跡は「伊部南大窯跡周辺窯跡群」と総称し、岡山県備前市伊部2568－1・2571・2596－1に所在する。

3　調査は史跡地周辺において平成11年から平成14年にかけて、４回実施した。一次調査・二次調査および三次調査の一部については、その成果を「伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅰ」にまとめた。本報告書は平成13年10月５日から12月26日まで実施した三次調査、平成14年４月２日から６月13日まで実施した四次調査の成果をまとめたものである。調査した面積は全体で184㎡である。

4　調査は石井啓が担当した。

5　本事業をすすめるにあたっては、文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官坂井秀弥氏、小野健吉氏から指導およびご助言を賜った。記して深甚の謝意を表したい。

6　発掘調査および、報告書の作成にあたっては、河本清氏から現地指導およびご助言を賜った。明記して感謝の意を表したい。

7　KP地点の調査については、土地所有者の金重有邦氏から格別のご配慮をいただいた。明記して感謝の意を表したい。

8　報告書の作成は、備前市教育委員会埋蔵文化財作業室において随時実施し、石井が担当した。執筆、編集、遺構写真、遺物写真は石井がおこなった。

9　遺物の実測は、入江津々美、草加尚子、上西高登、佐伯導代、横井美由紀が行い、トレース業務は入江津々美、草加尚子がおこなった。また、一部を「岡山県緊急地域雇用創出特別基金事業補助金」を受けて、㈱フジテクノに委託した。

10　附編１については備前市文化財保護審議会委員小西通雄氏より報告文をいただいた。

11　附編２・３については、㈱吉田生物研究所より報告文をいただいた。

12　測量については、一部業務を倉測建設コンサルタント株式会社に委託した。

13　航空写真については、有限会社アールシースカイワークス、㈱フジテクノに委託した。

14　発掘調査および遺物整理作業については下記の方々の協力を得た。

能勢強　野村文夫　福島一行　湯浅馨　行本英文　小橋節子　梶藤繁美　藤澤健太郎　小林幹佳　藤岡泉　石田幸

15　調査および報告書の作成にあたっては、以下の方々・機関のご指導・ご助言を賜った。記して感謝の意を表する。

岡山県教育庁文化財課　岡山県古代吉備文化財センター

間壁忠彦氏　葛原克人氏　西村康氏　長尾清一氏　肥塚隆保氏　伊藤晃氏　上西節雄氏　花岡志郎氏　松本和男氏　平井泰男氏　小西通雄氏　乗岡実氏　亀山雄氏　扇崎由氏　白石純氏　大橋雅也氏　武田恭彰氏　田村啓介氏　山本博利氏　重根和弘氏　馬場昌一氏　岡本芳明氏　若松拳史氏　團正雄氏　木村倶子氏　的野豊子氏　米田久夫氏　ほか多くの方々

16　出土遺物・実測図・写真等は、備前市教育委員会（岡山県備前市東片上126）において保管している。

凡　例

1　本書に用いた高度は海抜高であり、北方位は磁北で示している。

2　本報告書に掲載した遺構・遺物図面の縮尺は、基本的に次のように統一している。

　遺構　　1/80・1/40　　遺物　土器：1/4・1/8

3　本報告書で用いた土色の標記は『標準土色帳』（農林水産省・農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本彩色研究所票監修）に従っている。

4　本報告書に掲載した遺物番号については、ひとつの窯跡について土器・陶磁器ごとに連番としている。

　東6号窯跡地点　1～192

　ＫＰ地点　ＫＰ－１：１～181　　ＫＰ－２：301～419

5　本報告書の第1図に使用した地図は、備前市作成（昭和63年）の1/10,000の「備前市全図No.4」を複製・加筆したものである。

目　次

巻頭図版
序
例　言
凡　例
目　次
第１章　遺跡の位置と環境 …… 1
第２章　調査の経緯 …… 5
　第１節　調査に至る経緯 …… 5
　第２節　調査の経過 …… 7
　第３節　調査および報告書作成の体制 …… 14
第３章　東６号窯の調査概要 …… 23
　第１節　位置と調査の概要 …… 23
　第２節　遺構の概要 …… 23
　第３節　遺物 …… 30
　第４節　器種と法量分布について …… 32
　第５節　窯詰めについて …… 34
第４章　ＫＰ－１地点窯跡の調査概要 …… 49
　第１節　位置と調査の概要 …… 49
　第２節　遺構の概要 …… 49
　第３節　遺物 …… 52
第５章　ＫＰ－２地点窯跡の調査概要 …… 78
　第１節　位置と調査の概要 …… 78
　第２節　遺構の概要 …… 78
　第３節　遺物 …… 81
　第４節　擂鉢の受け部型式分類と物原サンプル …… 82
第６章　まとめ …… 110
　第１節　はじめに …… 110
　第２節　東６号窯跡の操業期間と窯構造について …… 110
　第３節　ＫＰ－１地点窯跡の操業期間と窯構造について …… 111
　第４節　ＫＰ－２地点窯跡の操業期間と窯構造について …… 113
　第５節　総括 …… 114

附編１　二基の天保窯に関する文献史料 …… 117
附編２　東６号窯跡検出炭化材の放射性炭素年代測定について …… 120
附編３　東６号窯跡などから検出した炭化材の樹種同定について …… 122

附編４　窯の構造・立地からみる備前焼生産画期の予察 …… 125
写真図版
あとがき
報告書抄録

表　目　次

表１　東６号窯跡出土遺物観察表 …… 42
表２　ＫＰ－１地点窯跡出土遺物観察表 …… 71
表３　物原サンプルと型式 …… 83
表４　ＫＰ－２地点出土遺物観察表 …… 105

挿　図　目　次

第１章
第１図　伊部南大窯跡周辺の地形と主要窯跡 …… 3
第２章
第２図　備前歴史フォーラム …… 7
第３図　三次調査現地説明会 …… 9
第４図　窯跡位置図 …… 11
第５図　見学会パンフ …… 20
第３章
第６図　平成13年度調査トレンチ配置図（１/400）…… 25
第７図　平成14年度調査トレンチ配置図（１/200）…… 25
第８図　東６号窯灰原平断面図（トレンチ601)（１/80）… 26
第９図　東６号窯跡平断面図（１/40） …… 27
第10図　トレンチ602断面図（１/80）…… 29
第11図　トレンチ605断面図（１/80）…… 29
第12図　トレンチ603断面図（１/80）…… 29
第13図　トレンチ604断面図（１/80）…… 29
第14図　トレンチ606断面図（１/80）…… 29
第15図　杯Ａ類法量分布図 …… 32
第16図　杯Ｂ類法量分布図 …… 32
第17図　蓋法量分布図 …… 32
第18図　器種構成図（１/８） …… 33
第19図　窯詰め復元模式図（１/４） …… 34
第20図　トレンチ601出土遺物（13年度分）（１/４） …… 36
第21図　トレンチ601出土遺物（13年度分）（１/４） …… 37
第22図　トレンチ602出土遺物（13年度分）（１/４） …… 37
第23図　トレンチ605出土遺物（13年度分）（１/４） …… 37
第24図　トレンチ601出土遺物１（１/４）…… 38
第25図　トレンチ601出土遺物２（１/４）…… 39
第26図　トレンチ601出土遺物３（１/４）…… 40
第27図　トレンチ602出土遺物（１/４）…… 41
第４章
第28図　ＫＰ－１・ＫＰ－２地点窯跡トレンチ位置図
（１/400）…… 50
第29図　ＫＰ－１地点窯跡立面図（１/80） …… 53
第30図　ＫＰ－１地点窯跡平断面図（１/80） …… 53
第31図　初戸出土遺物１（１/４） …… 57
第32図　初戸出土遺物２（１/４） …… 58
第33図　１房出土遺物（１/４） …… 59
第34図　２房出土遺物１（１/４） …… 59
第35図　２房出土遺物２（１/４） …… 60
第36図　３房出土遺物（１/４） …… 61
第37図　３房から４房の隔壁付近出土遺物（１/４） …… 62
第38図　４房出土遺物（１/４） …… 63
第39図　５房および６房との隔壁付近出土遺物１（１/４）
…… 64
第40図　５房および６房との隔壁付近出土遺物２（１/４）
…… 65
第41図　６房出土遺物１（１/４） …… 65
第42図　６房出土遺物２・６房東側トレンチ出土遺物・
煙道出土遺物１（１/４） …… 66
第43図　煙道出土遺物２（１/４） …… 67
第44図　南北トレンチ出土遺物１（１/４） …… 67
第45図　南北トレンチ出土遺物２（１/４） …… 68
第46図　初戸上層出土遺物（１/４） …… 69

第47図　表採資料遺物（１/４）…… 70
第５章
第50図　ＫＰ－２地点窯跡平断面図（１/80）…… 79
第51図　ＫＰ－２地点窯跡擂鉢型式分類図（１/２）…… 83
第52図　トレンチ１出土遺物１（１/４）…… 85
第53図　トレンチ１出土遺物２（１/４）…… 86
第54図　トレンチ１出土遺物３（１/４）…… 87
第55図　トレンチ１出土遺物４（１/４）…… 88
第56図　トレンチ１出土遺物５（１/４）…… 89
第57図　トレンチ１出土遺物６（１/４）…… 90
第58図　トレンチ１出土遺物７（１/４）…… 91
第59図　トレンチ１出土遺物８（１/４）…… 92
第60図　トレンチ１出土遺物９（１/４）…… 93
第61図　トレンチ１出土遺物10（１/４）…… 94
第62図　トレンチ１出土遺物11（１/４）…… 95
第63図　トレンチ２出土遺物１（１/４）…… 96
第64図　トレンチ２出土遺物２（１/４）…… 97
第65図　トレンチ２出土遺物３（１/４）…… 98
第66図　トレンチ２出土遺物４（１/４）…… 99
第67図　トレンチ２出土遺物５（１/４）…… 100
第68図　トレンチ２出土遺物６（１/４）…… 101
第69図　トレンチ２出土遺物７（１/４）…… 102
第70図　物原出土遺物（サンプル）１（１/４）…… 103
第71図　物原出土遺物（サンプル）２・
　　表採資料遺物（１/４）…… 104

第１章　遺跡の位置と環境

伊部南大窯跡周辺窯跡群は、ＪＲ赤穂線伊部駅の南約200ｍ、榧原山山麓の北向きの斜面、国指定史跡「伊部南大窯跡」周辺に位置する。ここから南側には伊部の町並みが広がり、その中央を東西に国道２号線が横切り、車が頻繁に往来する。町の北部、不老山南斜面には北大窯跡、天保窯が位置する。その不老山を山陽新幹線がトンネルで西に抜けると、標高約300ｍの医王山の鋭利な山容があらわれ、その山裾には西大窯跡が位置する。さらに西に進むと、12世紀代にはすでに存在し、江戸時代に熊沢蕃山の提案で津田永忠が改修した備前市内最大の池「大ヶ池」が広がる。

この伊部の町の南端に位置する伊部南大窯跡は、「規模や操業期間に関して国内でも例のない窯」として昭和34（1959）年国史跡の指定を受けた。

備前市は、岡山県南東部、兵庫県との県境に位置している。平成17（2005）年３月22日、吉永町、日生町と合併し、現在「海とみどりと炎のまち」新備前市としてまちづくりが進められている。市域の北部、吉永町は兵庫県佐用郡に接し、北は美作市に接する南北に長い地域である。吉永地域は流紋岩土壌であるが、標高539ｍの八塔寺山は石英粗面岩の残丘である。和意谷には、国指定史跡「岡山藩主池田家墓所」が所在する。市域の南東部日生町は、東は兵庫県赤穂市、南は瀬戸内海に臨む。階段状に降下する山々が直接海にいたる典型的な沈降海岸の地形で、沖合いには鹿久居島、頭島、大多府島、鶴島などのかなる日生諸島が展開する。地質は流紋岩類で、砂浜は少なく、岩が切り立った海蝕崖が多く見られるが、鹿久居島には中世の拠点的な遺跡と考えられる「千軒遺跡」が所在する。

旧備前市域の西部香登から新庄にかけては吉井川左岸にあたり沖積平野の平坦地が広がり、低丘陵上には国指定史跡丸山古墳をはじめとする古墳群が点在する。伊部から三石にかけては急峻な山並みが続き、平坦地が谷に沿って細長く開けている。これは埋積谷とよばれる地形で、後氷期の海面上昇によって瀬戸内海に入り込んだ海水によって谷が沈水し「おぼれ谷」になるのに対し、海水の侵入が緩やかで堆積作用が優勢である場合に形成される地形である。備前大橋がかかる片上湾はおぼれ谷の典型で、その縁辺部の鶴海、久々井、浦伊部、片上、穂浪などに埋積谷の細長い平坦地が形成される。片上には西日本の縄文時代中期末の集落遺跡として著名な長縄手遺跡が所在する。

山地の部分は市域総面積の２／３以上をもしめる。その地質は流紋岩や石英斑岩等である。流紋岩地域は花崗岩地域にくらべて、樹木が再生しやすく、アカマツ林が広く発達する。事実、慶長期に描かれた「備前国図」には伊部付近に松林が描写されている。この流紋岩から生成される山土や堆積した「田土」などは備前焼の原料粘土として使用され、独特の味わいを器表に描き出す。この豊かな山林資源、原料の粘土、水運に恵まれた立地などが、中世以降、窯業史を飾る「備前焼」を生み出すことになる。

備前市において最も古い時期の遺物・遺跡は亀井戸廃寺の調査の際確認されたサヌカイト製ナイフ形石器と翼状剥片で、旧石器時代に属するものであるが、遺構に伴うものではない。

続く縄文時代では、早・前期には吉井川河口や島嶼部に貝塚が点在するが、備前では中期末の集落が確認された片上の長縄手遺跡、後期前半の新庄西畑田遺跡などが知られる。

弥生時代では竪穴住居や大溝などが確認され、母村的集落が想定されている、前期後半から中期中

ごろまで継続した船山遺跡などがある。

古墳時代では吉井側西岸の浦間茶臼山に続いて、全長68mを超える前方後円墳の長尾山古墳が築かれ、これに続いて40mを超える大形円墳、新庄天神山古墳、丸山古墳、小丸山古墳などが展開する。内部主体を横穴室石室とする後期の古墳は石室長9.5mの池灘古墳をはじめ大内地区を中心に10数基の大滝道古墳群、香登本の谷筋に展開する奥谷古墳群などが知られ、その後の香登廃寺への建立につながる。

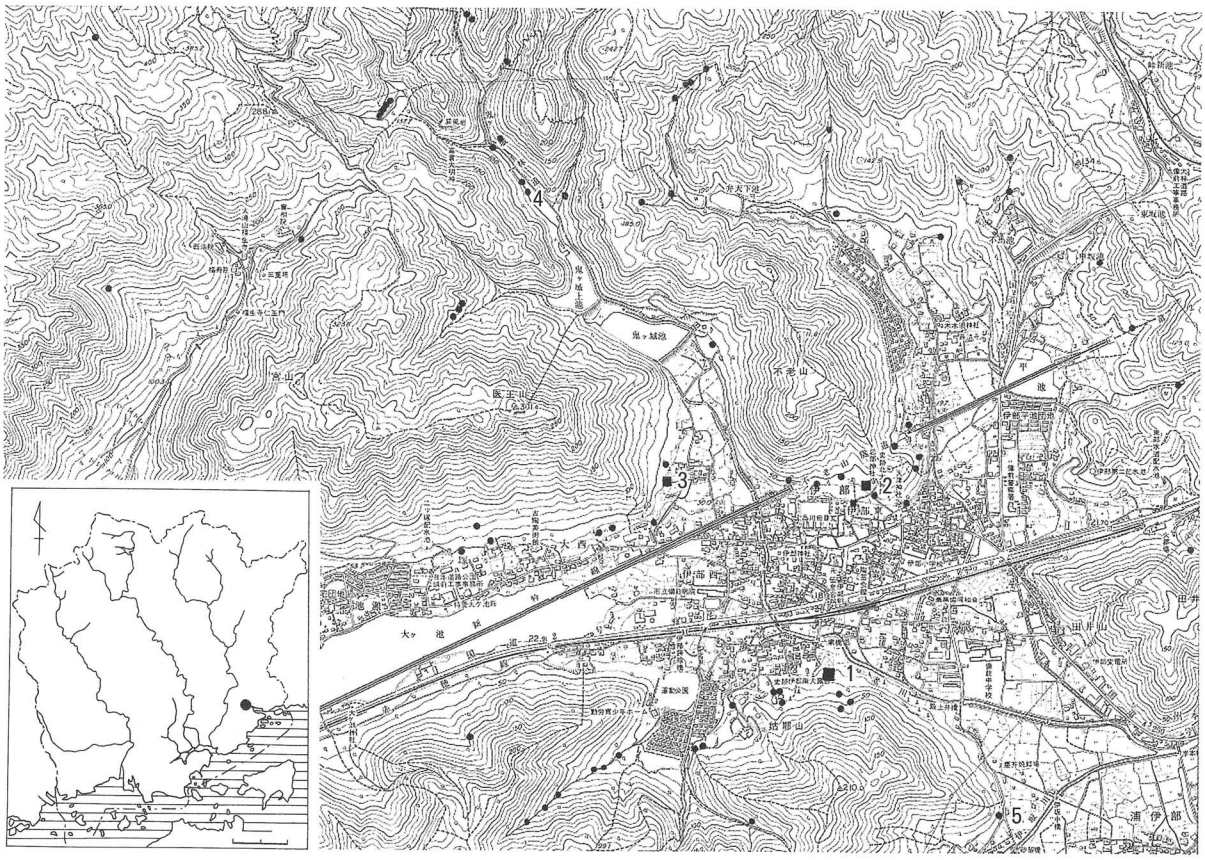
また、市域の南西部、長船町に接する佐山地区は、中国地方で最大の須恵器窯跡群である邑久古窯跡群の北東端に位置する。佐山では遅くとも７世紀末ごろには生産が開始され、奈良時代に最盛期を迎え、平安時代後半まで続けられるが、その後はこの地で生産がされなくなる。それに呼応するかのように伊部の地で本格的に備前焼の生産が開始される。

平安時代の末、西の山窯跡や大ヶ池南窯跡など伊部の山麓で生産が開始された備前焼は、鎌倉時代中ごろになると山の中腹に立地することが多くなり、南北朝期にはさらに高度をあげ、標高400mをこえるような熊山山塊に位置するものもある。熊山山頂には熊山遺跡を代表とする石積み遺構が点在し、平安時代には霊山寺という山上寺院が建立される。南北朝末ないしは室町時代はじめ頃、ふたたび窯は山麓に築かれるようになる。規模も山崎古窯跡の幅2.5m、推定全長20m、不老山東口窯跡の幅3.4m、推定全長40mも巨大化し、量産化を指向する。その後16世紀後半のある段階で、山麓に点在していた大窯は北大窯、西大窯、南大窯へ集約されることになる。

時代はさかのぼるが、律令制下の旧備前市域は、当初邑久郡香登郷、方上郷などに属していたようで、その後天平神護２（766）年、藤野郡（のちの和気郡）に編入されている。現在の旧備前市域は『倭名類聚抄』では和気郡坂長郷、香止郷であるが、記載のない「方上郷」は「延喜式」では美作の港「片上津」となっている。香止郷は伊部を含む香登の平野部だったと想定されるが、白河天皇の勅旨田となり、その後堀河天皇の時代（白河院の院政期）に荘園として成立する。その後、香登荘は鳥羽院、八条院に伝えられるが、母の美福門院藤原得子の菩提を弔うために高野山菩提心院に領家職が寄進される。こうして香登荘は八条院を本家とし、菩提心院を領家とすることになる。

菩提心院は、高野山内で金剛峰寺方と対立していた大伝法院方の末寺に属する。その紛争の結果、正応元（1288）年大伝法院は、和歌山県那賀郡根来町へ移る。この地にある根来寺はその大伝法院を前身とする真義真言宗の総本山であるが、その坊院跡から埋甕遺構として大量の備前焼の大甕が出土したことで知られる。その数は根来寺全山で、1,500個以上といわれており、その多くが16世紀後半に属するものである。用途は甕倉で油を蓄える容器として使用が推定されている。その量的なものを香登荘と大伝法院との関係に見る向きもあるが、香登荘は南北朝の動乱によって領有は仁和寺に帰し、最終的に室町幕府領として伝領されていったと考えられている。したがって大量出土の理由を別に考える必要がある。

室町時代、備前の地は赤松氏、山名氏、浦上氏など勢力がめまぐるしく入れ替わるが、最終的に宇喜多氏が覇権をにぎる。そのころ活躍した豪商で来住法悦という人物は、片上湾の最奥部浦伊部に居住し、瀬戸内海の交易で何万石もの富を築いたという。交友関係も日禎をはじめとする日蓮宗本山関係者、保津川を開削したことで知られる京都の大商人角倉了以との結びつきがある。天正18（1590）年には、岡山城築城の銀を調達した功績により、岡山城下に一町を賜り、屋敷を構えるなど宇喜多氏とも非常に強く結びついている。



１ 南大窯跡　２北大窯跡　３西大窯跡　４愛ヶ淵窯跡　５山崎古窯跡

第１図　伊部南大窯跡周辺の地形と主要窯跡

浦伊部の地は伊部南大窯跡からわずか1.5km東にあたり、備前焼を海上ルートで積み出す際、要地となったところで、根来寺での大量の備前焼大甕出土の背景には豪商来住法悦を要とした海上交易ルートのかかわりが深いと考えられる。平成12年の調査で確認され天正期の窯と推定されている東３号窯跡はまさに根来寺に大甕を大量に提供した窯のひとつであった。

「香登荘」と備前焼の関係についてみてきたが、文献資料・考古資料に「香登」がやきものの産地として登場することもある。和歌山県西牟婁郡日置川町長壽寺境内から出土した大甕は「備前國住人　香登御庄□　二　暦応五年□　あつらう也」銘文があり、「暦応５（1342）」年の年号は知見のある年銘資料としては最古のものである。

応安４（1371）年、九州探題へ下向する途中の今川了俊は、「さて、かがつ（香登）というさとは、いえいえごとに玉だれの小瓶といふ物を作ところなりけり（中略）某日はふく岡につきぬ・・・」という記述を『道ゆきふり』という紀行文の中に残している。

その福岡については、時代が少しさかのぼるが、正安元（1299）年円伊を主宰とする工房で制作された『一遍聖絵』の福岡の市の場面に、布や魚鳥など商いの商品とともに簡単な掘建て小屋の下に備前焼が転がっている様が描かれている。一遍がこの地を布教に訪れたのは、弘安元（1278）年ごろだったといわれている。

このほか「香登荘」の関係ではないが『兵庫北関入舩納帳』に文安２（1445）年に備前焼の壺や甕

が1200個余り兵庫港（現神戸港）に運ばれた記載がある。

このように過去の備前焼は機能性の高い商品として西日本を中心に流通し、織豊期、その味わいから為政者に茶道具として取上げられた。近世以降は他の窯業地で生産された施釉陶や磁器に商品として市場をうばわれ衰退の道をたどるが、昭和に現れた備前焼中興の祖と呼ばれる金重陶陽によって、美術品としてその市場価値を見出して、今日にいたる。

現在、窯元・備前焼作家は400人を超えるという。その未来はどこに向かっているのだろうか。

※本章「遺跡の位置と環境」は備前市教育委員会2003「伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅰ」の第１章を加筆訂正したものである。

（参考文献）

・記念誌編集委員会『わがまちの文化遺産』　備前市文化協会　1998
・桂又三郎『伊部南大窯址発掘資料』　日本陶磁協会　1952
・文化庁文化財保護部史跡研究会『図説日本の史跡第８巻近世近代２』　紀行社　1991
・谷口澄夫・石田寛監修『岡山県風土記』　旺文社　1996
・光野千春他『岡山の地学』　山陽新聞社　1982
・備前市総務部市史編さん室『備前市二十年の歩み』　備前市　1993
・岡山理科大学『岡山学』研究会『備前焼を科学するシリーズ『岡山学』１』吉備人出版　2002
・岡山大学附属図書館「備前慶長国絵図のふしぎ」『池田家文庫等貴重資料展リーフレット』　2000
・亀山行雄「岡山県備前市長縄手遺跡」『日本考古学年報』46　日本考古学協会　1993
・岡山県史編纂委員会『岡山県史　古代Ⅱ』第３巻　岡山県　1988
・上西節雄『日本のやきもの備前』　淡交社　2002
・京都国立博物館『特別陳列修理完成記念　国宝・一遍聖絵』　2003
・北脇義友・目賀道明『「伊部と秀吉」展によせて』　1992
・和歌山県立博物館『根来寺の歴史と文化―興教大師覚鑁の法灯―』　2002
・竹林栄一「中世瀬戸内の商品流通―兵庫北関の二つの入船帳からみた―」『研究報告』15　岡山県立博物館　1994
・河本清・葛原克人「不老山古備前窯址」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』　岡山県文化財保護協会　1972
・田代健二『東備西播開発有料道路建設事業実施にともなう埋蔵文化財調査報告』　備前市教育委員会　1974
・田代健二「亀井戸廃寺確認調査報告」『備前市埋蔵文化財調査報告』２　備前市教育委員会　1984
・田代健二「亀井戸遺跡確認調査報告」『備前市埋蔵文化財調査報告』３　備前市教育委員会　1986
・田代健二「備前市文化財年報」（１）『備前市埋蔵文化財調査報告』４　備前市教育委員会　1988
・田代健二『船山遺跡発掘調査報告』エヌ・テー・エヌ東洋ベアリング運動場建設事業埋蔵文化財調査委員会　1985
・田代健二「備前市内採集の遺物について」『古代吉備』第10集　1988
・千葉豊「備前市新庄西畑田遺跡採集の縄文土器」『古代吉備』第９集　1987
・時實奈歩ほか「船山遺跡」『岡山県埋蔵文化財調査報告』155　岡山県教育委員会　2001
・中野栄夫「備前国香登荘」『岡山県史研究』第５号　岡山県史編纂室　1983
・長船町史編纂委員会『長船町史』通史編　2001
・岡山理科大学『岡山学』研究会『備前焼を科学する～窯はなぜ移動したか～』　2000
・重根弘和「山崎古窯跡」『岡山県埋蔵文化財報告』167　岡山県教育委員会　2002
・亀山行雄ほか「長縄手遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査方報告』189　岡山県教育委員会　2005

第２章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

１．平成13年度

10月５日　三次調査の器材を整え、法58条の２の報告をおこなう。

10月９日　三次調査開始。「東６号窯跡」「東３号窯跡の全長」「金重地点１号窯跡（第三の天保窯）」「同２号窯跡」を確認。

12月１日　現地説明会開催。約150名の参加。

12月25日　三次調査終了。

平成14年３月７日

伊部南大窯跡が史跡公有化時の会計検査の対象となる。検査官より「市民や見学者が窯跡の全体像・内容を理解しやすいように復元図を提示した説明板や模型などを設置し、より活用できる史跡として公開するよう」講評を受ける。

３月26日　岐阜県土岐市「元屋敷窯跡」（当時整備中）を見学。助言を受ける。

２．平成14年度

４月５日　岡山県教育庁文化課へ今年度の事業内容の説明。指導、助言を受ける。

４月15日　奈文研の西村康先生に依頼して、伊部南大窯跡史跡地内で磁気探査及び地中レーダーの探査をおこなう。指定地内にもう１基窯がある可能性。

４月22日　四次調査開始。東６号窯跡の調査。同日、58条の２の報告をおこなう。

５月28日　文化庁文化財調査官坂井秀弥氏より指導を受ける。（資料１参照）

５月29日　東６号窯跡を３日間の予定で一般公開。合計60名程度の見学者あり。

６月14日　四次調査ほぼ終了。遺物整理開始。

８月23日　伊部地区との協議のため平成14年度第１回史跡伊部南大窯跡等整備連絡会の開催。教育委員会が提示した整備案について異論はなかったが、実施期間10年の短縮を求める意見がでる。（資料２参照）

９月２日　市長はじめ四役で構成される庁議で南大窯跡整備について専門委員会を立ち上げることの了解を得る。

11月１日　「史跡伊部南大窯跡整備委員会設置要綱」を施行。（資料３参照）

平成14年３月９日、第１回「史跡伊部南大窯跡整備委員会」開催。（資料４参照）

３月15日　東６号窯跡西上部を九十九折状の小型重機で造成。事前連絡なし。

３月31日　西１号、西２号、東３号～５号の調査内容を収録した「伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅰ」を刊行。

３．平成15年度

10月８日　伊部の市政懇談会で９月18日の山陽新聞の記事を紹介し、伊部南大窯跡については地元が６年間もがんばってきたのに「前向きな取り組みが見えない」「学識経験者の皆さんによる整備委員会はあると聞いているが、地域を交えて情報交換が成されるべき」などの意見がでた。教育長が整備するにはいろいろな問題があることを説明し、今後「意見交換の会」や「資料館で史跡を紹介する企画展」を開催すると回答。

11月26日　桜ヶ丘いきいき交流センターで開催された「東備地域知事・町内会長等懇会」で伊部総区長柴部暁星氏より「地区内の史跡である南大窯について、国（文化庁）の指定を受けている関係でボランティアによる周辺整備を行なおうとして教育委員会と衝突することがたびたびある。地元からお願いしたことについて、もっと事務処理のスピードアップしていただけないか」という要望が県知事になされた。「教育委員会の担当課へ、事務のスピードを上げて処理するようこちらの方からもお願いしておく」と県知事が回答。

12月８日　「伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅰ」を関係機関に配布

平成16年１月９日

平成15年度第１回史跡伊部南大窯跡整備委員会開催。（資料５参照）

４．平成16年度

６月９日　坂井秀弥文化庁主任文化財調査官より指導を受ける。（資料６参照）

７月10日　歴史講座「備前焼研究最前線～千年の歴史を８日間で学ぶ～」開始。

７月13日　歴史民俗資料館企画展「発掘資料が語る中近世の備前焼」開催。

８月５日　史跡伊部南大窯跡保存整備基本構想策定業務を競争入札の結果、336万で㈱空間文化開発機構と契約。

９月21日　平成16年度第１回史跡伊部南大窯跡整備委員会開催。（資料７参照）

12月21日　伊部地区との協議のため平成16年度史跡伊部南大窯跡等整備連絡会開催。（資料８参照）

平成17年２月６日

平成16年度第２回史跡伊部南大窯跡整備委員会開催。（資料９参照）

２月24日　史跡伊部南大窯跡整備委員会委員葛原克人氏倒れられる。

３月18日　史跡伊部南大窯跡保存整備基本構想策定。

３月22日　備前市、日生町、吉永町が合併し、新「備前市」誕生。

３月22日　坂井秀弥文化庁主任文化財調査官より指導を受ける。（資料10参照）

５．平成17年度

９月10日、11日　備前歴史フォーラム「備前焼研究最前線Ⅱ」開催。各日とも参加者約100名。

６月１日　伊部南大窯跡発掘調査について4,484千円の国庫補助交付決定を受ける。

８月19日　伊部南大窯跡内の発掘調査のため、法125条第１項による現状変更許可申請をおこなう。

９月16日　現状変更の許可がおりる。

９月16日　平成17年度第１回史跡伊部南大窯跡等整備連絡会開催。（資料11参照）

10月６日　伊部南大窯跡発掘調査開始。

10月７日　法99条の規定により埋蔵文化財発掘調査の報告を行なう。

10月15日、16日
備前焼まつりにあわせて発掘調査の現場をみてもらうため「伊部南大窯跡自由見学会」を開催。15日は雨天のため中止。16日は約40名の見学者あり。（資料12参照）

第２図　備前歴史フォーラム

12月２日　坂井秀弥文化庁主任文化財調査官より現地にて指導を受ける。その後、備前市指定史跡北大窯跡、西大窯跡、愛が淵窯跡なども見学。（資料13参照）

12月３日　平成17年度第１回の史跡伊部南大窯跡整備委員会開催。現地にて指導を受ける。（資料14参照）

12月10日　発掘調査現地説明会。参加者約150名。

12月14日　史跡伊部南大窯跡整備委員会委員葛原克人氏永眠される。享年63歳。

12月27日　発掘調査終了。

平成18年１月６日
遺物整理開始。

２月１日　平成17年度第２回史跡伊部南大窯跡等整備連絡会開催。（資料15参照）

２月24日　平成17年度第２回史跡伊部南大窯跡整備委員会開催。（資料16参照）

３月20日　「北大窯跡・西大窯跡調査概報」刊行。

３月20日　区との協議が整わないまま、史跡南側に作業道が付けられる。

６．平成18年度

５月30日　伊部区に対し、追加指定想定地内での墓地造成の中止協力を求める。

６月１日　伊部南大窯跡発掘調査について6,350千円の国庫補助交付決定を受ける。

７月28日　伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅱ（本書）刊行。

第２節　調査の経過

１．三次調査の経過

期　間　平成13年10月５日～12月26日

10月５日　器材準備。法58条の２の報告をおこなう。

10月９日　器材搬入、整地を行いテント設営。

10月10日　東３号窯の焚口地部分を確認するためにトレンチ301をテント東側に設定し掘り始める。

10月11日　伊部南大窯跡及びその周辺の地形測量の打合せを、現地で㈱クラソクの技師とおこなう。

10月12日　トレンチ301では、東３号の焚口が大部分削平を受けていることが判明。

10月15日　作業道のため昨年度調査できなかった部分にトレンチ302を設定。東３号の北側端（焚口部分）を確認するため。

伊部南大窯跡約南東70ｍの地点にトレンチ601を設定。分布調査の際、作業道の崖面で黒色土と須恵器片が確認されたので、その性格を明らかにするため。

10月16日　テントの台風対策をおこなう。雨天作業中止。

10月18日　トレンチ601で黒色土のたまりが確認され、それがかなり広範囲に広がる可能性が出てくる。

10月19日　トレンチ302で東３号の窯の床と一部柱基底部を確認。

トレンチ601で確認された黒色の広がりを確認するために、南５ｍの所に平行してトレンチ602を設定。

10月23日　トレンチ601の黒色たまりの上面にかなりの湧水があり、写真撮影が進まず。

トレンチ602の東端で少量の須恵器片と黒色土を確認。

10月24日　トレンチ601出土状況の写真撮影。平面図作成。

トレンチ603を設定。黒色のたまりの東への広がりを確認するため。

トレンチ604を設定。磁気探査で反応があった箇所の遺構を確認するため。

10月25日　トレンチ603は表土直下が礫層で、遺構がないことを確認。

10月26日　トレンチ301断面等写真撮影。

トレンチ601黒色たまりが東に広がるので、トレンチを東へ拡張。

トレンチ605を設定。掘り下げ開始。ごく少量の須恵器片を確認。

10月29日　トレンチ301、302断面図作成。

トレンチ605上層で須恵質の土錘を確認。

10月30日　トレンチ601東拡張部分で黒色たまりはおさまることを確認。

トレンチ602の東端で確認された焼土層は幅１ｍ前後で東へは広がらないことを確認。

トレンチ604北側部分を拡張。確認された集石の性格を把握するため。

トレンチ606を設定。南側山頂に向かっての遺構のひろがりを確認するため。

調査担当石井、日本六古窯サミット特別展「日本六古窯名品展」の打合せ。

10月31日　トレンチ302平面図作成。

トレンチ601東拡張部分がほぼ堀上がり。

トレンチ602堀上がり。平断面写真撮影。

トレンチ604継続して掘下げるが、集石の性格は不明。

トレンチ605東端で、須恵器坏片及び窯壁と思われる部分を確認。この時点で初めてトレンチ602の焼土層が窯の壁で、焚口付近であることが判明。全長５ｍ弱、幅１ｍ弱、急勾配の傾斜をもつ窯を想定。

トレンチ606継続して掘下げ。北側山頂に向かっての遺構の広がりはない模様。

11月１日　トレンチ601遺物出土状況６×７写真撮影。

トレンチ602断面写真撮影。

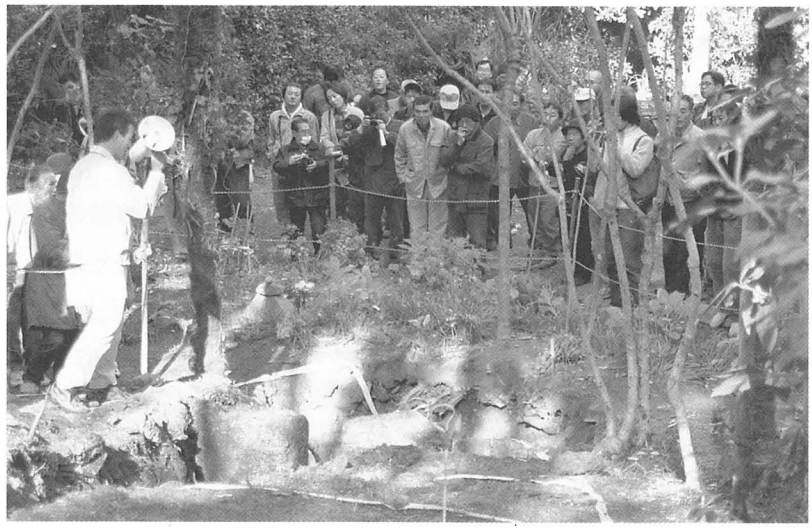
トレンチ605煙出し部分のメモ写真。中央軸を設定、半分下げる。

トレンチ606写真撮影。

11月２日　トレンチ601遺物出土状況平面図作成。

トレンチ602断面図作成。

トレンチ604北側に拡張して継続して掘下げ。



第３図　三次調査現地説明会

トレンチ605窯内のみ半分掘下げた所で、６×７写真撮影。

トレンチ301トレンチ東側黒色部分掘下げ。

11月３日～11月12日まで

日本六古窯サミット特別展「日本六古窯名品展」借用資料返却のため現場を１週間中断。

11月12日　トレンチ601北側を拡張して黒色部分を掘下げる。

トレンチ602断面図作成。

トレンチ605煙出し部分の平面図作成。

トレンチ604最終的に遺構・遺物確認されず。集石は自然の堆積の可能性が大きい。写真撮影のための清掃。

金重第１地点調査開始。調査前の写真撮影。長軸の設定。掘下げ開始。煙出しの一部を確認。

11月13日　トレンチ301継続して黒色部分掘下げ。

トレンチ601黒色たまりの状況がよくわからないので、サブトレンチを設定して掘下げ。

トレンチ602～605窯断面図作成。

トレンチ604堀上り。写真撮影。

金重第１地点長軸のトレンチ内で、窯壁、土柱を確認。土柱は従来の丸柱と角柱の２種類ある模様。

11月14日　トレンチ601サブトレンチ掘り上がり。断面写真撮影、図面作成。

トレンチ604断面図作成。

トレンチ606断面図作成。

金重第１地点長軸トレンチを引き続き掘下げ。「大日本伊部陶」との陶印のある破片確認。排土置場を２ヶ所追加。

11月15日　トレンチ301、302の配置図を作成。トレンチ601～606の配置図を作成。

トレンチ301継続して黒色部分掘下げ。

金重第１地点焚口を確認。長軸トレンチ中程で、床面の角度を補正する板状の窯道具を確

認。以上から、この窯は全長18m以上と想定。

11月16日　金重第１地点初戸部分東半分のみ掘り上がり。煙出し部分の東南コーナー確認。煙出し南側溝を堀上。溝南側は、客土か。この時点でこの窯が初戸＋６部屋＋煙戸（煙出）の８部屋で構成されていることが判明。

11月19日　金重第１地点窯断面図写真撮影。各房の東側の壁の位置を確認するために、長軸に直交する形で４箇所の拡張区を設定。窯西側未掘部分の草刈。

11月21日　金重第１地点拡張区がほぼ掘り上がる。その結果、煙出し付近で窯床の傾斜が緩やかになっていること及び床が張り替えられていること、初戸と１の部屋の仕切りの柱が巨大な３本柱であることが判明。

11月22日　23日に開催される吹奏楽フェスティバルの準備のため現場中止。

11月26日　金重第１地点写真撮影のため全面掃除。

11月27日　金重第１地点全景及び部分写真撮影。

金重第２地点伐採開始。

11月28日～30日

現地説明会準備。見学ルートの整備および環境整備。

11月30日　備前市文化財保護審議会開催。現地見学。

12月１日　現地説明会開催。現場が史跡地周辺のかなり広い範囲に及ぶため、コースを周遊する形で説明を行う。約120名の方の参加があり。

12月３日　金重第１地点　窯の測量のため割付。

金重第２地点　トレンチ１、２設定。

12月５日　金重第１地点　平断面図作成。

金重第２地点　トレンチ１掘り下げ開始。表土直下で床面を確認。

12月７日　金重第２地点　トレンチ２掘り下げ開始。

12月10日　金重第１地点　実測継続。

金重第２地点　トレンチ１の西側で確認された物原の掘下げ。

12月11日　金重第２地点　トレンチ１ほぼ掘り上がり。

12月12日　金重第２地点　トレンチ２中央付近で窯の落ち込みと考えられる地点を確認。

12月14日　金重第１地点　実測ほぼ終了。

金重第２地点　窯内ほぼ掘りあがり。

トレンチ301・302埋め戻し。

12月17日　金重第２地点写真撮影。トレンチ603・604埋め戻し。

12月18日　トレンチ601埋め戻し。

12月19日　金重第１地点埋め戻し開始。

金重第２地点トレンチ１・２平断面図作成。

12月20日　金重第１地点埋め戻し終了。

12月21日　金重第２地点埋め戻し終了。

12月25日　器材撤収。テント片付け。第３次伊部南大窯周辺確認調査現場終了。

1　西１号窯跡（窯の下東古窯跡群）
2　西２号窯跡
3　東３号窯跡
4　東４号窯跡
5　東５号窯跡
6　東６号窯跡
7　伊部南大窯跡東側窯跡（国指定史跡）
8　伊部南大窯跡中央窯跡（国指定史跡）
9　伊部南大窯跡西側窯跡（国指定史跡）
10　ＫＰ－１地点窯跡（窯の下西古窯跡群）
11　ＫＰ－２地点窯跡（窯の下西古窯跡群）
12　窯の下西古窯跡群Ａ３号

第４図　窯跡位置図

２．四次調査の経過

期　間　平成14年４月３日～６月13日

４月２日　磁気探査のため史跡地内草刈開始。発掘調査予定地の地権者にあいさつし、承諾書をもらう。

４月３日～５日　８日～９日

草刈。

４月10日　磁気探査のための調査区を設定。庶務課職員の協力でくい打ち。午後から現場テント設営のための整地、コンパネ搬入。

４月11日　器材搬入。テント設営。

４月12日　磁気探査用器材を受け取るため、奈良へ出張。

４月13日　調査関連のため事務。

４月15日～18日

奈良文化財研究所埋蔵文化財センター測量室長西村康氏による磁気探査。調査結果の詳細は伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ｉ参照。18日には調査を公開。20名前後の参加あり。

４月20日　調査関連の事務。

４月22日　発掘地点が標高60ｍ付近にあるため、コンパネなどを猫車で複数回にわけて運び上げる。

現場は急傾斜地のため、コンパネを利用して排土置場を設営。

４月23日　磁気探査用器材を返却するため、奈良へ出張。

４月24日　トレンチ601、602の埋め戻し土を排出。

４月25日　トレンチ605埋め戻し土を排出。窯にともなう遺構を確認するためトレンチ602を東側へ拡張。灰原や窯の広がりの範囲を確認するためトレンチ601を南側へ拡張。

４月26日　カメラ不調。トレンチ602東拡張区には遺構はない模様。トレンチ601南拡張区の表土層をはぐ。近世末備前焼片確認。

現場終了後、佐山地区でオオサンショウウオが発見されたとの報があり、対応に追われる。

４月28日～５月６日　現場ゴールデンウィークのため休み。

５月７日　トレンチ601南側拡張区掘下げ。午後雨のため中止。

５月８日　トレンチ601南側拡張区掘下げ。南端、表層下５cm部分で径40～50cmの黒色土の部分検出。

５月９日　トレンチ601南側拡張区北側部分掘下げ。先日確認した黒色土部分検出写真。南側拡張区内に窯の長軸延長ラインを設定。

トレンチ602東側拡張区壁写真。

５月10日　雨天。現場中止。

５月13日　トレンチ601南側拡張区　北側部分掘下げ。黒色土部分、平面図作成、半裁堀上。

トレンチ602とトレンチ605間の窯主要部分に西１～３区、東１～３区を設定。西１、２、３区の表土層を下げる。この時点で窯のプランは検出できず。

５月14日　トレンチ601南側拡張区　北半分を引続き掘下げ。黒色土部分、全面写真。

トレンチ602南側　西１～３区掘下げ。

５月15日　雨天作業中止。

５月16日　にわか雨程度だが、急斜面のため滑落の恐れがあるので作業を中止し、道具の手入れを午前中おこなう。

５月17日　雨。作業中止。

５月19日　調査資料作成。

５月20日　トレンチ601南側拡張区　土手はずし。西側から1.5m部分で鉢確認。全体に水が染み出て部分的にしか作業できず。

トレンチ602南側　西１～３区、東２～３区、数cm掘下げ。東２、西３区でかすかに窯壁検出。

５月21日　トレンチ601　ベース層上の流土層をさげる。相変わらず湧水あり。

トレンチ602南側　西１～３区、東１～３区、掘下げ精査。ほぼ全区で窯壁検出。写真撮影のため掃除。

５月22日　トレンチ601　流土層掘下げ。湧水が多いので、西側に排水溝設定。窯の長軸延長ラインの断面撮影。

トレンチ602南側　窯跡検出時の全景写真。窯内掘下げ。西２区で床面確認。

５月23日　蒸し暑さのためか、作業員がほとんど来ず。

トレンチ602南側　東１、２区窯内掘下げ。西１、２区窯内掘下げ完了。この時点で窯の

構造がほぼつかめる。全長４ｍ弱、最大幅１ｍ強、勾配30度。

５月24日　日中かなり暑くなる。

トレンチ601　湧水がおさまったので、北半分の面をそろえる。

トレンチ602南側　東３区掘り始め。他の区はほぼ完了。東１区、天井残存部写真。東３区で、床面に引きちぎられるような感じの割れ目。

５月25日　補助金関連事務。

５月27日　トレンチ601　灰原上面検出時写真。

トレンチ602南側　セクションポイントにそって土手整形。

見学者用の土手設営。大手前大学赤松さん見学。

５月28日　トレンチ601　黒色土を堀下げ。

トレンチ602南側　土手の整形。

文化庁坂井秀弥文化財主任調査官、岡山県松本和男課長代理現地指導。窯についてはこの状態で埋め戻すよう指導あり。

５月29日　トレンチ601　黒色土上面薄くはいで、遺物検出。

トレンチ602南側　土手清掃。

午後からＲＣスカイワークスのラジコンヘリによる写真撮影。撮影中、ヘリが墜落したため、翌日再撮影。本日より現場公開。堀江祥山氏、横山隆俊氏等見学者約20名。

５月30日　トレンチ601　土手の北側と南側で遺物の検出状況が異なっていたが、精査で解釈可能になる。

トレンチ602南側　現時点での全面写真。

午前中、ＲＣスカイワークスと再打合せ。午後ラジコンヘリで撮影。

備前陶芸センター研修生、河本清くらしき作陽大学教授等約10名の見学者。

５月31日　トレンチ601　写真測量準備。フジテクノと打合せ。

トレンチ602南側　平面図作成。

６月３日　午後から文化財補助金ヒアリングのため、午前中のみ窯の平面図作成。

６月４日　トレンチ601　写真測量のため、清掃。

トレンチ602南側　窯延長断面作成。

６月５日　本日33.2度の最高気温。

トレンチ601　遺物検出写真を６×７で。ベース層の最終確認のため、サブトレ設置。

トレンチ602南側　窯の図面にレベル入れ。遺物ナンバーつけて取り上げ。

６月６日　本日32.6度の最高気温。

トレンチ601　窯延長断面写真。実測。遺物をナンバーつけて取り上げ。

トレンチ602南側　全面清掃。

６月７日　文化財担当者会議のため現場休み。

６月８日　トレンチ601　遺物取り上げ継続。

トレンチ602南側　全景写真。部分写真。

６月10日　トレンチ601　埋め戻し開始。

トレンチ602南側　西３区実測。

６月11日　台風接近の影響で湿度が高い。
　　トレンチ601　南側ほぼ埋め戻し完了。
６月12日　最高気温31.6度。全面埋め戻し完了。
　　道具箱などを解体して、コンパネなどを持って下山。
６月13日　最高気温31.2度。テント・器材撤収。
　　伊部南大窯跡周辺で実施した４次に及ぶ窯跡群の調査は、この日すべて終了。

第３節　調査および報告書作成の体制

調査および報告書作成は以下の体制で行った。

備前市教育委員会

教育長　中西利男（～平成16年５月）
　　日下弘海（平成16年５月～平成17年５月）
　　正宗洋三（平成17年６月～）
教育次長　武内清志（～平成17年３月）
　　東原恒男（平成17年３月～平成17年６月）
　　杉原慶悟（平成17年７月～）

生涯学習課

課　　長　甲矢　弘（～平成15年３月）
　　武内清志（平成15年４月～６月）※教育次長兼務
　　細見峰一（平成15年７月～平成17年３月）
　　谷口富祥（平成17年３月～）
課長代理　山下茂樹（平成12年４月～平成15年３月）※文化係長兼務・現場総括
　　末長章彦（平成16年４月１日～18年３月31日）
　　福山哲明（平成18年４月～）
文化係長　岡正千丈（平成15年４月～平成16年３月）
　　石井　啓（平成14年4月～副主幹～平成16年４月）※調査、整理担当
主　　任　福本浩子（平成16年４月～）

備前市歴史民俗資料館

学 芸 員　岩﨑紅美（平成17年４月～）

常勤臨時職員

入江津々美（平成13年４月～非常勤臨時職員～平成18年４月）

非常勤臨時職員

草加尚子　（平成14年４月～平成17年５月）
松末左知子（平成17年４月～平成18年６月）

資料１

文化庁文化財調査官坂井秀弥氏来備前時について

日　時　平成14年５月28日(火)
出席者　文化庁記念物課文化財調査官　坂井秀弥
岡山県教育委員会文化課課長代理　松本和男
備前市教育委員会生涯学習課課長　甲矢　弘
備前市教育委員会生涯学習課課長代理　山下茂樹
備前市教育委員会生涯学習課副主幹　石井　啓
場　所　14:00　市庁舎２階応接会議室
（課長経過説明・石井遺跡概略説明）
14:30　伊部南大窯跡及びその周辺
15:30　西大窯跡　北大窯跡　天保窯

指導内容
・周辺地については、図面上で追加指定も可能。
・中世の西日本の多くの遺跡で備前焼が出土している。そういう意味でも近世の窯跡だけでなく、中世の窯跡にも着目し、全体の群として指定の方向もありうる。また、そういった意味でも備前焼の資料館などがあればいいのではないか。
・市指定「西大窯跡」、「北大窯跡」、「天保窯」も伊部南大窯の追加指定時に「近世の備前焼」という総合的な視点で指定を考えてもいいのではないか。そのためには、文化庁の補助金（重要遺跡確認緊急調査）などの交付を受け、それぞれの遺跡の基本的調査（地形測量図、試掘、窯跡の基数などの確認）を実施してみてはどうか。
・「備前焼」は西日本の窯業地の中でも重要なので、市全体の姿勢として、史跡等を取上げ、活用していくことが望ましいのではないか。
・一度、東京へ「市としては伊部南大窯跡およびその周辺、また市内に所在する備前焼の窯跡群についてはこう考える」という叩き台をもって説明しにいく必要がある（松本課長代理）。
・現在調査中の東６号については、窯跡についてはこれ以上調査せず、将来の整備に備えて、保存を考えた埋戻しをしてください。また、物原については、プラン（平面）が確認できたら、それで十分だと思います。

資料２

平成14年度第１回史跡伊部南大窯跡等整備連絡会について

日　時　平成14年８月23日(金) 14:00～15:40
会　場　備前焼伝統産業会館２階研修室
出席者　木村宏造（陶友会理事）　柴部暁星（伊部総区長）
永岡嗣雄（伊部里づくりの会事務局長）
宮本俊二（商工会議所専務）
長尾清一（保護審議会委員長）　土地所有者および代理

備前市教育委員会
中西利男教育長　甲矢弘課長　山下茂樹課長代理
石井啓副主幹

(1) 市の方針提示後の質問等について
・どこまで補助金がでるのか。
・周辺について新たに窯はでないのか。とにかく窯については現状で保護して欲しい。「小さな世界都市構想」とリンクさせることはできないか。
・この連絡会の意見はどうなるのか。この会の性格は。教育委員会としては具体的にどうしたいのか。
・墓地については別に移転してもいいのではないか。
・できるだけ早く、計画を前倒しして進めて欲しい。
・策定したばかりの備前焼振興策とすりあわせをして欲しい。
・文化財を保護する立場から、計画は進めていただきたいが、もう少し短い期間で実施できるよう財政部局と調整して欲しい。
・土地所有者としては協力します。
・地元としては協力します。
・周辺の道路など環境整備については関係部局とよく調整をしてください。
・次回会議は伊部南大窯跡の草刈を委託管理している「大南町内会」長を加える。
・専門委員会が立ち上がり、基本構想などができあがれば、この会に提示し、意見をもとめることになると思う。（事務局）

会の総意
・教育委員会の提示した整備案については、とくに異論はなく、了承できるが、実施期間については10年とは言わず、できるだけ速やかに短期間で完了させて欲しい。土地所有者についても、用買等そういう段階になれば協力します。

資料３

○史跡伊部南大窯跡整備委員会設置要綱

平成17年３月22日
教育委員会訓令第９号

（設置）
第１条　史跡伊部南大窯跡の史跡整備事業（以下「事業」という。）について円滑な推進を図るため、史跡伊部南大窯跡整備委員会（以下「委員会」という。）を設置する。
（所掌事務）
第２条　委員会の所掌事務は、次のとおりとする。
(1) 史跡伊部南大窯跡の調査について指導すること。
(2) 事業の実施について審議・指導すること。
(3) 前各号に掲げるもののほか、目的達成のため必要な事項
（組織）
第３条　委員会は、委員８人以内で組織する。
２　委員は、史跡整備に関し高い識見を有するもののうちから、教育委員会が委嘱する。
（委員長及び副委員長）
第４条　委員会に、委員長及び副委員長各１人を置く。
２　委員長及び副委員長は、委員の互選による。
３　委員長は、会務を総理する。
４　副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるときは、その職務を代理する。
（会議）
第５条　委員会の会議は、委員長が招集し、委員長が議長となる。
２　委員会は、委員の半数以上が出席しなければ会議を開くことができない。
３　委員長は、必要に応じて、委員会に関係者の出席を求め、説明又は意見を聴くことができる。
（任期）
第６条　委員の任期は、事業の完了の日までとする。
（庶務）
第７条　委員会の庶務は、教育委員会生涯学習課において行う。
（その他）
第８条　この訓令に定めるもののほか、委員会に関し必要な事項は、委員長が別に定める。
附　則
この訓令は、平成17年３月22日から施行する。

資料４

平成14年度第１回史跡伊部南大窯跡整備委員会について

日　時　平成15年３月９日(日) 13:30～15:30
場　所　市役所２階応接会議室
出席者　河本清委員長　長尾清一副委員長　間壁忠彦委員
西村康委員　葛原克人委員
岡山県教育庁文化課
松本和男課長代理　田村啓介課長補佐
備前市教育委員会　中西利男教育長
生涯学習課　甲矢弘課長　山下茂樹課長代理
石井啓副主幹

協議事項
(1) 委員長・副委員長の選出
委員長　河本清　委員
副委員長　長尾清一委員

(2) 史跡伊部南大窯跡整備委員会設置までの経過報告について
・「小さな世界都市構想」、「備前焼振興策」の内容についての質問。（西村委員）
・「追加指定」を含めてこの委員会として考えていくのですね。（葛原委員）
・「えとむら」の内容、「整備連絡会」の性格について質問。（葛原委員）
・「周辺の開発」は市（市長部局）も絡んでいたのですね。（間壁委員）
・主導権を教育委員会がとり市長部局と「すり合わせ」を。（葛原委員）
(3) 整備基本方針について
・備前焼の地理的なもの、年代的なものについて質問。（西村委員）
・まず「南大窯跡」を整備し、後で周辺の窯の整備にとりかかるのがいいのではないか。（松本課長代理）
・南大窯でモデル的な整備を行い、段階的に西、北の整備に移っていくのがいいのでは。（田村課長補佐）
・10年とういスケジュールはやはり長い。１段階、２段階と分けていくのがいいのではないか。備前焼の歴史をきちんと押さえる作業が必要ではないか。（葛原委員）
・南大窯、西大窯、北大窯は備前焼の歴史の核になるもの。西大窯跡群は比較的集約して残存している。南大窯群を整備して、西大窯群にかかるスケジュールがいいのでは。北・西大窯は測量するのなら、裏側の斜面までお願いします。（間壁委員）
・伊部の谷全体を見ながら、南大窯をはやめに整備しよう。でも、10年は長い。（河本委員長まとめ）
・④のトレンチ調査はどこを掘るのか。（河本委員長）
・磁気探査で反応のあったもうひとつの窯について一番興味がある。その調査は整備計画ともすり合わせなければならない。（間壁委員）
・史跡内を見学者が歩く道、史跡までのアプローチ、道、ガイダンス、駐車場など整備になると総合的に考えていく必要がある。（西村委員）
・史跡の北広場の活用も考えなければならない。（河本委員）
・南大窯だけ見に来るのだけでなく、周辺の観光も含めたコースの中に位置づけるのがいいのでは。（間壁委員）
・資料館、ガイダンス施設を充実しないと、人がこない。（河本委員長）
・環境、自然科学、保存科学など専門家の意見を聞く必要があるのでは。（西村委員）
・崩落等の問題はあるが、物原等は迫力があるので、撤去せずに残す方向で考えた方がいいのでは。（河本委員長外）
・委員会で整備の方針をいただいて、基本計画の策定はコンサルタントを入れてとりかかり（単市）、駐車場など周辺の整備は文化財を核にした旧自治省関連の補助金をもらい、ガイダンス施設は文化庁の補助金、それと全体的な絵をコンサルタントにかかして、前倒しして16年度で実施しては。（田村課長補佐）
・筆境未定地については、図面上で指定をする方向だが、西側だけでも先に指定は可能ですか。（間壁委員）
・飛び地になっている金重地点の窯についてはどう考えますか。（河本委員長）
(4) 現地見学
　※ 特に必要ないとのことで、中止。
総括
①できるだけ早くスケジュールを実施する。
②南大窯跡の整備を先におこない、北、西等についてはその後着手する。
③整備について自然科学、環境など専門家の意見を聞くことについて事務局で配慮する。
④次回開催時に素材（コンサルからのパース図等の提示）の提示がなければ、会議は進展しないので、他の窯の整備関連の資料も含めて、事務局で配慮をお願いします。
⑤可能な作業、例えば西側の追加指定などからおこなう。次回の開催は事務局で調整する。「追加指定」が協議題のみの委員会は開催せず、持ち回りで行なう。

資料５

平成15年度第１回史跡伊部南大窯跡整備委員会について

日　時　平成16年１月９日（金）14:00～16:00
場　所　備前市市民センター４階第２会議室
出席者　河本清委員長　長尾清一副委員長　間壁忠彦委員
　　岡山県教育庁文化課　平井泰男課長補佐
　　備前市長　栗山志朗（あいさつ）
　　備前市教育委員会　中西利男教育長
　　生涯学習課　細見峰一課長　岡正千丈主幹　石井啓副主幹
あいさつ　備前市長
自己紹介
協議および報告
(1) 平成14年度第１回委員会（平成15年３月９日）の議事報告及び現在までの経過
・石井経過報告
・整備計画策定にあたっての調査予定は。復元的整備になるのか、現状維持的整備になるのか。（肥塚委員）
・市はどういう整備をしたいのか、何をしたいのかという考えがあった上での話だと思うが。（間壁委員）

(2) 史跡伊部南大窯跡整備の現状と課題について
・岡正主幹報告
・指定地やその周辺の境界の確認及び作業段取りの確認。（河本委員長）
・市として整備計画イメージ図はないのか。（河本委員長）→細見課長が来年度予算の状況の説明。前回の復元想定図をコピーして配布・説明。
・史跡地はかなり傾斜がある。樹木は窯跡保存のため除去されるとは思われるが、そうすると雨水がかなりあると思う。整備前の今の段階からどこかの大学等に依頼して雨水量などの調査をしてみては。（肥塚委員）
・窯の床面を全部出すとなるといろいろ問題があるかな。（間壁委員・肥塚委員）
・整備後の管理も考えておかないと。（肥塚委員）
・天保窯の復元は「現在の窯築技術者」ができるのか。（間壁委員・肥塚委員）
・復元的整備をしないと見に来た人が理解できないのでは。（肥塚委員）
・物原の整備はどうするのか。（間壁委員）
・物原の断面を現地で見せるのはかなりおおがかりになるね。（河本委員長）
・墓地移転は考えていないのですね。（河本委員長）
・北の広場の活用方法は。（間壁委員）→備前焼まつり前夜祭「かべりたいまつ」などのイベント会場としての刷り合せが必要。（事務局）
・遺跡の中に人が入れるのが前提ですね。（肥塚委員）
・天保窯は最低限遺構が見えるようにする。（河本委員長）
・整備費用はどれくらい思っているのか。（肥塚委員）→「物原の安定化」をのぞいて３億円ぐらい。（事務局）
・物原の断面の剥ぎ取りを行なって、ガイダンス施設に展示しては。（事務局）→技術的にはできるのでは、例えばウレタンでブロック取りとか。（肥塚委員）
・お金があればきっちり保存処理をして東窯をみせることも可能。後のメンテ費用も必要。東窯の一部を見せてもいいけど。（肥塚委員）
・たとえば東窯については完全に埋め戻しをして保存するのではなく、一部をみせたほうがいいのでは。（河本委員長）
・東、中央、西の窯については確認調査時、それぞれきちんとトレンチを入れ、規模・構造・年代をつかめば、整備手法はおのずと明らかになろう。（間壁委員）

整備についての基本的考え方
①物原については一番深い所の確認調査を行い、剥ぎ取りまたはブロック取りを実施後、ガイダンス施設ができれば展示。
②東、中央、西窯跡については確認調査を実施し、その後整備手法を案出するが、現段階では完全に埋め戻しして保存するのではなく、一部露出展示等を視野にいれておく。
③天保窯については全掘して遺構を露出し、保存処理をしたのち覆屋をし展示。どこまで復元するかは予算との兼合いになる。

(3) 整備委員会への地元代表の選任について
岡正主幹・石井報告
・地元との関係も大事だからいいのでは。(間壁)
・概ね了解しました。(各委員)

(4) その他
・説明板、標柱、ベンチの更新の報告。(事務局)
・追加指定については、東側部分も筆境未定地の解消の努力をしつつ、西側の申請を先行していきたい。(事務局)
・金重地点の天保窯については整備計画の中に含めない。(事務局)
・次回開催日は来年度予算が計上されれば、４月下旬から５月上旬にかけて第１回を開催し、あと２回程度開催できれば（事務局）

閉会あいさつ　　長尾副委員長
予算獲得について努力してください。

資料６

国指定史跡「伊部南大窯跡」等についての打合せについて

日　時：平成16年６月９日(水) 13:30～15:00ごろ
出席者：文化庁文化財部記念物課埋蔵文化財部門主任文化財調査官　坂井秀弥
岡山県教育庁文化財課総括副参事　平井泰男
備前市教育委員会生涯学習課文化係長　石井　啓

●経過説明

●坂井主任調査官より以下の指導を受ける
(1) 伊部南大窯跡の基本構想を作成する際は、当然中世の段階も含めて、備前北大窯跡、備前西大窯跡も視野にいれつつ、計画策定を行なうこと。
(2) 伊部南大窯跡の西側の隣接地だけの追加指定では、「備前はこんなもんかと思われるので」備前北大窯跡・備前西大窯跡も含めて国の追加指定と考えたい。市指定として保護されているので国指定にもっていきやすいと思う。時期については平成16年12月ごろ申請し、17年度春の指定としたい。呼称については例えば「伊部備前大窯跡」など考えられるが。北・西大窯跡の資料を坂井主任調査官まで事前に提出してください。
(3) 伊部南大窯跡の東側追加指定想定地の状況は了解しました。追加指定が現状では困難かもしれませんが、今後整備を進めていく中で方策を考えていきましょう。
(4) 備前焼は日本を代表する焼き物です。備前焼の古窯跡群の保存や整備については積極的取り組みが必要と考えます。例えば調査員の増員など調査体制の強化をはかったらどうでしょうか。

今後のスケジュールについて（予定）

８月下旬～９月中旬	平成16年度第１回史跡伊部南大窯跡整備委員会
10月中旬～11月中旬	平成16年度第２回史跡伊部南大窯跡整備委員会 ※スケジュール調整がつかない場合は持ち回り
９月下旬	「第３回史跡伊部南大窯跡等整備連絡会」の開催など地元との調整
17年１月	南大窯跡西側隣接地、備前北・西大窯跡など国へ追加指定申請
17年１月下旬～２月上旬	平成16年度第３回史跡伊部南大窯跡整備委員会
17年３月	「基本構想」成果物作成
17年５月	文化審議会が指定を文部科学省へ答申

資料７

平成16年度第１回史跡伊部南大窯跡整備委員会について

日　時　平成16年９月21日(火) 14:00～16:30
場　所　備前市役所２階　応接会議室

出席者　河本清委員長　長尾清一副委員長　間壁忠彦委員
西村康委員　葛原克人委員
岡山県教育庁文化課　田中秀樹総括主幹
平井泰男総括副参事
備前市教育委員会　日下弘海教育長
細見峰一生涯学習課課長　石井啓文化係係長
福本浩子文化係主任
(株)空間文化開発機構研究　杉本政和研究員

１　開　会
あいさつ　教育長
自己紹介

２　協議及び報告
(1) 文化庁との協議内容
資料にもとづき事務局説明→特になし
(2) 史跡伊部南大窯跡保存整備基本構想について
◎意見・質問等
●基本構想全体について
・備前市の都市計画にも係わるような内容の構想となっているが、他部局との調整が必要になるのではないか。備前市では今後しばらく大規模な開発の予定はないのか？（葛原委員）
→現在のところ開発の予定はない。(教育長)
●整備の方法等について
・地元の陶芸家の方々から協力を得て窯を復元したり、セラミックセンターの技術協力を受けたりしてはどうか？（西村委員）
・陶芸家の方々を結びつけて整備に協力してもらうのは。(間壁委員)
・陶友会等、陶芸家の組合を巻き込むのはどうか。個人個人に協力を求めるよりもやりやすいのでは。(西村委員)
・陶友会は財団法人ということもあり整備に巻き込むのは難しいと思われる。(事務局・教育長)
・天保窯を復元（修理）して火を入れれば面白い。やってみようという意気のある陶芸家はいないものか。(西村委員)
・天保窯を復元するのは難しい。管理者の数が長年の間に分かれて、今では200～300名になっている。一人一人に承認をもらうのは事実上不可能。(事務局)
・天保窯は市に寄贈してもらうなどしないと現状での整備は困難。(葛原委員・河本委員長)
・伊部南大窯跡東６号窯あたりまで道がつけられているが、あれは樹木などで外部から見えないように目隠ししてはどうか。(西村委員)
・あの道を登ったところに展望台を設けてはどうか。(西村委員)
・６号窯の下に位置し、史跡指定地に隣接している３号窯、４号窯が追加指定を受けられないのに、６号窯の整備までは難しい。(間壁委員)
●ネットワークについて
・アクセス、ネットワークを整備することが大切。現状では鉄道や国道によって南大窯と北・西大窯とが分断されてしまっている。鉄道に陸橋を架けるなど策を講ずるべき。(西村委員)
・駅前の再開発との関連は無視できない。(西村委員・間壁委員)
・長船では実際に備前刀の鍛冶をやっている。そういったものと連動したネットワーク構想にできないか。(河本委員長)
・備前市に留まらずもう少し広域の文化財とも連携を図ってはどうか。行政区画に縛られた見方をしていると、近隣の良い文化財を見落としてしまう。(西村委員)
・備前市は有名な文学者とも関係が深い。文学に道などのネットワークを考えてみてはどうか。(葛原委員)
・現在正宗白鳥宅は取り壊して、文庫だけが陶芸家の方々の寄付等で応急処置を受けて残っている。(事務局)
●その他
・次回の委員会には、鉄道によって分断されている構想範囲をうまく結びつける具体案を２～３案提示してほしい。
・12月中旬くらいまでに今回出された意見を取り入れて、構想の内容を詰めてほしい。
・活用整備という用語が多用されているが、これは保存整備とどのように異なるのか。保存整備という語は聞いたことがあるが、活用整備という語は聞いたことがない。活用整備という語の意味、定義付けをしてもらいたい。(河本委員長)

・丸山古墳は鶴山丸山古墳が正しい。丸山古墳だけではどこの丸山古墳かわからない。（河本委員長）
・伊部谷という地名の使用は不適切。（河本委員長・間壁委員）
(3) 平成17年度史跡地内発掘調査計画について
・トレンチの幅について確認。（河本委員長）
・トレンチ６が大規模なのは、断面剥ぎ取りが目的なのか。（西村委員・間壁委員）
・トレンチ６剥ぎ取りはかなり困難なのでは。危険性があるのでは。補修の仕方も考える必要があるのでは（葛原委員・間壁委員・西村委員）
・トレンチ１、２の設定の意味は。（西村委員）
・窯内の土柱の掘方は。（西村委員）
・東側窯跡の巨大な木は調査時にどうする。（河本委員長）
・トレンチ７の設定の意味は。トレンチ８との関係は。（西村委員）
・17年度の調査の開始時期は。（河本委員長）
(4) 整備委員会への地元代表の選任について
・協議題について経過説明（事務局）
・選任については反対。間にたって調整するのが行政の役目。委員の選任の判断は事務局の役目。（葛原委員）
・学識経験者、たとえば現代作家（人間国宝）などの方も考えられるが・・・（河本委員長）
・委員の選任については事務局で再考していただきたい。（委員会）
(5) その他

３　閉　会
　　あいさつ　委員長

資料８　　平成16年度史跡伊部南大窯跡等整備連絡会

日時：平成16年12月21日（火）18:00～20:00
会場：備前市保健センター３階研修室１
出席者：木村宏造（陶友会理事）　柴部暁星（伊部総区長）
　　永岡嗣雄（伊部里づくり推進の会）
　　草地清志（大南町内会長）
　　長尾清一（備前市文化財保護審議会委員長）
　　尼子元重（大南町内会副会長）　土地所有者および代理
　　備前市教育委員会　細見峰一生涯学習課長
　　石井啓文化係長　福本浩子主任
●伊部南大窯跡等の保存整備基本構想案について提示後の意見など
・東６号窯跡の上にはもう窯はないのか。地神様の台は東窯跡の天井をささえる柱で貴重なもの。風化が進んでいるので、配慮してほしい。→コンサル等とも相談してみる。（事務局）
・南大窯には看板など、モニュメントが必要。美術館的な施設ができて、南大窯跡のあたりがよくなればいい。史跡整備して立ち入り禁止にされては困る。ボランティアの育成についても配慮をお願いしたい。→ボランティア養成講座の事例（事務局）
・東３号窯跡付近の木については台風などで倒れる恐れがあるので、木をまぶきたい。背を低くしたい。
保存整備だけでなく、観光等も視野に入れてほしい。→他の部署にもプッシュしてほしい。（事務局）
・盛り土などの整備手法はとれないのか。→さまざまな整備手法がある。（事務局）
指定申請はいつするのか。方向を固めてできるだけ早くしてほしい。→北・西大窯の測量後、指定候補範囲が確定後。（事務局）
・東側窯の前にあるコンクリートのラインと北側法面の崩落がなんとかならないか。土を盛るか、切るか。（柴部・草地）
合併があるので、南大窯に集中できるのか。文化庁と市の考え方には違いがあるのでは。→文化庁の考え方も変わってきている。保存だけでなく、活用もという風に。（事務局）
・草刈も観光客がきたり、学習の場として利用されると励みになる。より安全に、よりわかりやすく展示を。前の田んぼも車を止めれるようになったし。案内板を駅周辺にも立てたほうがよい。
・計画が少し長いのでは。計画が早く進むように。周辺の看板も考えてほしい。
・図面の入った大きな看板などを設置してほしい。→商工や企画とも相談していく。（事務局）
・整備委員会への地元からの選任についての説明。（事務局）→別に入らなくていい。かまいません。

資料９

平成16年度第２回史跡伊部南大窯跡整備委員会について

日　時　平成17年２月６日（日）13:00～15:30
場　所　備前市役所２階　応接会議室
出席者　河本清委員長　長尾清一副委員長　間壁忠彦委員
　　西村康委員　葛原克人委員
　　岡山県教育庁文化課　平井泰男総括副参事
　　田中秀樹総括主幹
　　備前市教育委員会　日下弘海教育長
　　細見峰一生涯学習課課長　石井啓文化係係長
　　福本浩子文化係主任
　　(株)空間文化開発機構研究　真鍋建男代表取締役
　　杉本政和研究員

１　開　会
　　あいさつ　教育長
　　あいさつ　委員長

２　協議及び報告
(1) 第１回史跡伊部南大窯跡整備委員会からの現在までの経過報告
・12月21日開催の「史跡伊部南大窯跡等整備連絡会」について、事務局説明。
・横山さんから質問で、指定申請を急いで欲しいという理由は。（河本委員長、間壁委員）
・のり面の崩落は早く対応したほうがよいのでは。（西村委員・間壁委員・河本委員長）
(2) 史跡伊部南大窯跡保存整備基本構想について
・「登り窯」の用語を使うのか？統一はできないのか。（間壁委員）→穴窯で統一する。（委員会）追加指定時に指定説明理由を変更することは可能。（空間文化　真鍋取締役）
・利用プログラム案の「伊部南大窯跡の四季」の「冬の海鳥」「鶯」「ワラビ」「天の川」「雪景色」など季節感がずれているものがある。（間壁委員）→市の観光パンフを参照した。（空間文化　真鍋取締役）
●基本構想について説明（空間文化　真鍋取締役）
・整備委員会で協議するのは基本的な考え方などから行うのか。（委員長）→基本構想をまとめるための協議である。（空間文化　真鍋取締役）
・「存在の顕在化」とはどういう意味か？（河本委員長）
・市の総合計画とのすり合わせは？（河本委員長）→合併後に新市の総合福祉計画に盛り込む。（細見課長）
・南大窯跡の展望空間の扱いは？（河本委員長）→筆境未定地なので、取扱が難しい（事務局）
・備前焼まつりでは南大窯跡にはほとんど見学者がいかない。（間壁委員）
・「ボランティア」（組織化・拠点など）と「安全」が重要なポイントになると思う。（西村委員）
・南北分断の問題の解決（地下道、デッキ）も大切なポイントになる。（西村委員、間壁委員、河本委員長）
・「備前焼情報発信基地」とうい考え方はなかなかいいのでは。（西村委員）
・合併によって閑谷、備前焼、日生などの観光資源が一体として考えられる。（日下教育長）
・16％の人口が備前焼に関連しているのは大きいし、取り込めるのでは。（西村委員）
・都市計画道路については地下トンネルとして計画図に入れる。（各委員）
・南大窯のいつの時代を整備するのか（同時並存？）、窯の存在したときには樹木など景観は？（真鍋代表取締役）→潅木はあるが。窯は同時操業していない。（間壁委員）
・西大窯跡のイベント広場の新規窯は難しいのでは。条例で規制があるのでは。（事務局）
・ユニバーサルデザイン、バリアフリーは意識した表現にする。（河本委員長）
・南北分断の解消にいいアイデアは？→線路をまたがる駅舎の改築などがあるが。（空間文化　真鍋代表取締役）
・まむし対策は何かあるか？（西村委員）→生息環境をなくす。ニコチン、硫黄などもある。（空間文化　真鍋取締役）→タバコを

植えるのは？（西村委員）
・説明板に備前焼をつかうのは、枠など補助的に使う方がいいのでは。（各委員）
３　閉　会
　　あいさつ　長尾副委員長

資料10

史跡伊部南大窯跡整備基本構想等ついての打合せについて

日　時：平成17年３月22日（火）11:30～12:30ごろ
出席者：文化庁文化財部記念物課埋蔵文化財部門主任文化財調査官
　　坂井秀弥
　　文化庁文化財部記念物課史跡整備部門主任文化財調査官
　　小野健吉
　　岡山県教育庁文化財課総括副参事　　平井泰男
　　備前市教育委員会生涯学習課文化係長　石井　啓

●経過説明（平井参事・空間文化・石井説明）

●坂井主任調査官・小野調査官より以下の指導を受ける。
(1) 市指定史跡「西・北大窯跡」については、補助事業で測量後、簡単な報告書を平成17年度末までに作成すること。（坂井主任文化財調査官）
(2) 平成18年度７月、作成した報告書をもとに伊部南大窯跡の西側隣接地とともに一括で国指定申請すること。指定名称としては「備前陶器窯」などが考えられる。（坂井主任文化財調査官）
(3) 追加指定申請後、近世だけでなく、中世の窯跡群も含めて面的な保護をかんがえていくこと。近いうちに中世の窯跡の現状確認にいきたい。（坂井主任文化財調査官）
(4)「まちづくりと史跡整備」の専門家（大学の先生）を委員として加える必要があるのでは。　（小野主任文化財調査官）
(5) 市としては、積極的に取り組んでいくのか。整備委員会のメンバーに、市役所の都市計画部門、企画部門、観光部門の担当者をオブザーバーとしていれてはどうか。（小野主任文化財調査官）

今後のスケジュールについて（予定）

17年度	
４月～７月中旬	西・北大窯跡の土地登記・相続調査
７月	西・北大窯跡の測量調査（国庫補助交付決定後）
８月下旬	「第４回史跡伊部南大窯跡等整備連絡会」の開催など地元との調整
９月上旬	「備前焼フォーラム」開催（資料館紀要発刊）
９月～12月	伊部南大窯跡史跡地内発掘調査
10月	平成17年度第１回史跡伊部南大窯跡整備委員会（調査指導）
２月	平成17年度第２回史跡伊部南大窯跡整備委員会
３月	史跡伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告Ⅱ発刊
３月	西・北大窯跡調査概報発刊
18年度	
18年７月	南大窯跡西側隣接地、備前北・西大窯跡など国へ追加指定申請

資料11

平成17年度史跡伊部南大窯跡等整備連絡会

日　時：平成17年９月16日（金）18:00～19:30
会　場：備前市保健センター３階研修室１
出席者：木村宏造（陶友会理事）平川忠（陶友会理事幹事）
　　柴部暁星（伊部総区長）永岡嗣雄（伊部里づくり推進の会）
　　長尾清一（備前市文化財保護審議会委員長）
　　備前市教育委員会　谷口富祥課長　石井啓文化係長
　　福本浩子主任

開会あいさつ
　谷口課長

①伊部南大窯跡等の保存整備基本構想案（冊子）について提示後の意見など
・北大窯跡は忌部神社を含めた文化ゾーンとして考えたほうがいいのでは。地域に親しみの持てるもの、愛着のもてるものに。→現在駐車場もない。商工や区を含めて考えていかなければ。申請の許可をもらう際、ご協力を。（事務局）
・北大窯のいちばん下の窯はどうなっている？→市指定地にはなっていないが、これから調査をしていく。（事務局）
・南大窯周辺の７ｈａについては、伊部区が購入した。筆境未定については、今専門のチームで解消作業をしている。陶里苑の下まで作業道をつけようと思う。おおきな改変をおこなうつもりがない。伐採については規模が大きいので農林水産課に申請中。東３号窯跡の北側の穴は、伐採した木を燃やすため。また、頂上を将来的に無縁墓地で公園化をしたい。→公有化できないということで、文化庁と協議してきた。分筆して公有化できるとなると、文化庁と再協議が必要になってくる。（事務局）
・将来は東３号窯の東側に実際に焼成できる窯を築きたい。東３号窯跡を生かす道を文化庁と協議してほしい。→東３号窯跡のところは、公有化前提に考えていきたい。補助率が80％のうちに実施したい。ただ、東３号窯跡と指定地間に個人の墓地があるので、公有化が可能か、文化庁とも協議をしていきたい。（事務局）
②伊部南大窯跡発掘調査について
・備前焼まつりに現場を公開する意味は。→史跡を訪れる観光客の安全の確保と史跡の広報（事務局）
・作業員募集の協力（事務局）

閉会あいさつ
　長尾文化財保護審議会委員長
　　予算が厳しいことです。

資料12

備前焼の歴史と南大窯

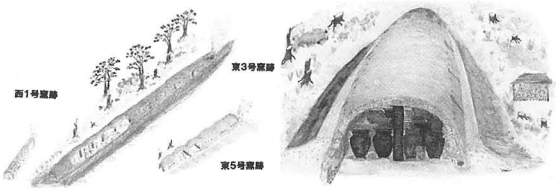
備前焼の歴史は、平安時代の終わりごろ伊部の地に須恵器工人が移住して窯を築いたことに始まる。鎌倉時代になり、日常の容器として実用性のある強靭な陶器が求められるようになると備前焼は、壷・甕・擂鉢を大量に生産するようになる。また壷・甕の口縁も玉縁となるなど、備前焼の特徴が現れる。そして、流通圏は飛躍的に広がり、室町時代後半には畿内を中心にしてほぼ全国に運ばれている。その頃には、共同窯である大窯で生産されるようになるが、桃山時代になると南・北・西の三大窯に集約されることになる。やがて備前焼は素朴な焼味が茶人に注目されるようになり、茶会で用いられ多くの名品が生まれた。中でも桃山時代の製品は美術的に高く評価されている。

江戸時代になると、この南大窯は北・西大窯とともに岡山藩の管理下で生産されるようになり、天保年間（1830-1843）には小型の鉄道窯（天保窯）が築かれ、やがて大窯の時代は終わった。

備前焼の最盛期にあたる桃山時代から江戸時代の様相を物語るのがこの南大窯跡である。南大窯跡は、東窯跡・中央窯跡・西窯跡の三基の窯とそれらに伴う巨大な物原（破損品や窯道具を捨てた場所）から成っている。最大の東窯跡は全長約54mで国内でも最大規模の窯跡のひとつである。3 基とも床面を少し掘り下げた上に天井を架けてトンネル状にした構造で、天井を支えるために土柱が設けられていた。その製品の多くは、壷・甕・擂鉢などの日常雑器類で、現在残る物原からみてもその生産量の多さがうかがわれる。

The history of Bizen ware originated in the end of the Heian period(794-1185),through the immigration to Inbe of Sueki Kozin who were potters of unglazed ceramic ware. People asked for durable and practical pottery for everyday use around Kamakura period and Potters had mainly produced three types of Bizen ware in large quantity. Bizen ware produced in large-scale communal kilns around Kamakura period and it wasn't until Momoyama period (1568-1600) that integrated those kilns into three major kilns; south kilns and north kilns and west kilns.that is Momoyama period was the golden age for Bizen ware. Beside this, the attension of master teacher of the tea to Bizen ware with the distinctive natural apperance and use of those in tea parties led to produce many masterpieces, that ware in Momoyama period received great artistic evaluation.

With the coming of the Edo period(1600-1867), Bizen ware were produced in Minami Ogama Kilns with other two smaller. This South Large Kiln shows the golden ages of Bizen ware from the Momoyama period to Edo period. It consists eastern kiln, central kiln, and western kiln with a huge ash pile in front of kilns respectively called monohara, which included wasters and kiln furniture, The western kiln has a length of about 54 meters It was one of the largest kilns in Japan. A long ditch was dug in the ground and it constructed a roof with clay pillars to support it. This kiln used for making vessels for everyday use, as jars, pots with wide rims, mortars and bottles. Tea sets and vases identified Momoyama era are also put high values as fine arts.



西1号窯跡・東3号窯跡・東5号窯跡復元想像図　　東3号窯内部復元想像図（永井泉画）

第５図　見学会パンフ

資料13

国指定史跡「伊部南大窯跡」等の現地指導について

日　時：平成17年12月２日（金）９:40～14:00ごろ
出席者：文化庁文化財部記念物課埋蔵文化財部門主任文化財調査官　坂井秀弥
岡山県教育庁文化財課総括副参事　平井泰男
備前市教育委員会生涯学習課長　谷口富祥
（議会のため中座）
備前市教育委員会生涯学習課文化係長　石井　啓
備前市教育委員会生涯学習課主任　福本浩子

現　地：伊部南大窯跡→西大窯跡→北大窯跡→愛が淵窯跡→グイビガ谷窯跡

●伊部南大窯跡の発掘調査について
・東側窯跡のＴ５や西側窯跡のT14については、窯構造の把握という目的意識があれば、ごく小規模な範囲で、断面にトレンチをいれてもいいのではないか。
・未着手になっている調査地点については、来年度事業としてすることも可能。ただし今回の調査のように計画倒れにならぬよう、綿密な計画を。
●伊部南大窯の追加指定について
・東側追加指定地は、現代使用の墓地等を除いた３の付近でもかまわない。ただし、地元が南側隣接地へ道路等をつけたり、山頂に墓地公園をするのであれば、榧原山と南大窯という景観が台無しになる。地元へは景観に配慮してもらうよう働きかけるとともに、場合によっては黄色部分を含む範囲に拡大して指定することも可能である。崖が連続するこの部分の位置付けとしては、備前焼生産のためや築窯時の粘土採掘場となる。
●西大窯について
・現地確認と追加指定範囲の確認
●北大窯跡について
・現地確認と追加指定範囲の確認
・指定範囲にある忌部神社は備前焼の陶祖ということで、是非入れるべきである。窯の保存と景観の保持を前提として現状変更は認める。
●愛が淵窯跡・グイビガ谷窯跡
・中世備前焼の代表的な窯跡として現地確認。
・両者とも保存状態が良好であるし、17基が備前焼熊山古窯跡群として市指定史跡になっている。中世備前焼の国指定として、将来的にいい方向付けができると思います。
●全体を通して
・指定名称としては「備前陶器窯跡（南大窯跡、北大窯跡、西大窯跡）」が考える。
・指定理由としては、「南大窯、北大窯、西大窯はそのそれぞれが、近世の備前焼を代表する重要な窯跡群である」と考えられるのでは。

今後のスケジュールについて（予定）

17年度
12月下旬　伊部南大窯跡発掘調査終了
１月ごろ　「17年度第２回史跡伊部南大窯跡等整備連絡会」の開催
２月ごろ　平成17年度第２回史跡伊部南大窯跡整備委員会
３月　「西大窯跡・北大窯跡測量調査概報」刊行
３月　「伊部南大窯跡周辺窯群確認調査報告書Ⅱ」刊行

18年度
７月　南大窯跡西側隣接地、備前北・西大窯跡など国へ追加指定申請
10月　第２次伊部南大窯跡発掘調査（～12月）
11月　平成17年度第１回史跡伊部南大窯跡整備委員会
19年１月　文化審議会が指定を文部科学省へ答申

19年度
・公有化
・遺物整理→報告書作成
・基本計画の策定

資料14

平成17年度第１回史跡伊部南大窯跡整備委員会について

日　時　平成17年12月３日（土）13:00～15:30
場　所　備前焼伝統産業会館二階研修室
出席者　河本清委員長　長尾清一副委員長　間壁忠彦　西村康委員
岡山県教育庁文化財課　平井泰男総括副参事
成本俊治総括主幹
備前市教育委員会　谷口富祥生涯学習課課長
石井啓文化係係長　福本浩子文化係主任

１　開　会
あいさつ　教育長代理で生涯学習課長
合併のこと
あいさつ　河本委員長
整備の方向は？

２　協議及び報告
(1) 平成16年度第２回史跡伊部南大窯跡整備委員会から現在までの経過報告
・平成16年度第２回史跡伊部南大窯跡整備委員会について
・平成17年９月16日開催の「史跡伊部南大窯跡等整備連絡会」について
■作業道とは？（河本委員長）陶里苑へ抜ける道だが、計画自体不明。（事務局）
■作業道のメリットは？（西村委員）車で東へ抜ける道の確保。具体的構想が出てこない。
■性急な整備はやめてもらうよう事務局から協議してほしい。（河本委員長）

(2) 平成18年度事業計画について
■無計画な整備をしないよう地元協議をしっかりお願いしたい。（河本委員長）かべりだいまつの道を残さないと協議は難しいのでは。（事務局）
■かべりだいまつは新しい祭り？山肌が削られて景観がだいなし。今後の開発でさらに景観が損なわれるのが心配。下山山頂に無縁

墓地公園は必要があるのか？（西村委員）
■山の頂上を開発するのはどうか。崩れるし景観がよくない。山の裏側からの道だと伊部のひとにメリットがない。（間壁委員）
■図面黄色部分を含めて追加指定を望みたい。（全員）
■崖の連続した地形は窯に関わるものに違いない。（間壁委員）
■崖面の連続は地形図から見る限り人工的ですね。（西村委員）
■その部分の整備の方法は。（西村委員）文化庁から整備はしたの窯の部分だけでよいとの指導。（事務局）
■整備は他の部署と連携をとってすすめてほしい。市全体でとりくむべきこと。（各委員）
■指定名称については「備前焼窯跡群」がいいのでは。いろんな方の意見を聞いてみる必要がある。（各委員）
■スケジュールに一部間違い。19年１月は指定告示。追加指定申請は一度にまとめてしなければならない。（平井副参事）
■指定申請は延ばすと。どんどん後になるのでがんばってやってもらわないと。（河本委員長）
■単市分の報告書は無理せず来年度でもいいのでは。（河本委員長）（間壁委員）

(3) 現地指導
■東側窯跡の煙道　西半分を掘って煙道部分の確認をしてください。
■中央窯跡　煙出部分の解釈については、色々意見があるが、幅はきちんと確認してください。
■西側窯跡　煙出部の確認を。間壁先生が測量したとき、鎌木先生がすでに、調査しているので掘ってかまわない。
■物原で一番新しい陶器片の確認を。
■現地説明会の時、陶片をもって帰られないように要注意。
■現状変更は指定地内の発掘調査であれば、多少の場所の変更は可能。

３　閉　会
　あいさつ　副委員長

資料15

平成17年度第２回史跡伊部南大窯跡等整備連絡会議議事要録

日　時：平成18年２月１日(水) 18:00～17:40
会　場：備前市保健センター３階研修室１
出席者：木村宏造（備前焼陶友会理事）
　　平川　忠（備前焼陶友会理事幹事）
　　柴部暁星（伊部区総区長）
　　永岡嗣雄（伊部里づくり推進の会）
　　尼子元重（大南町内会会長）
　　宮本俊二（備前焼商工会議所専務理事）
　　長尾清一（備前市文化財保護審議会委員長）
　　土地所有者
オブザーバー
　　伊部区有林関係者　土器豊　吉田たくみ
　　浦伊部区長　幡上義一

●協議事項
(1) 追加指定地について
・一帯を買収した。黄色部分は伊部地区の心臓部になる。黄色部分に道が通らないと西の地区が分断されてしまう。車が通れる道がほしい。４メートルの道路をつけたい。明日・明後日に重機を入れる。
・文化庁は、景観を含めた環境でないと追加指定はしない。（北・西を含め）もし景観が壊れると追加指定自体がなくなる可能性がある。調査だけで終わってしまう。（事務局）
・道は、常時車は通らない。県に見に来てもらえないか。
・具体的計画図があれば、文化庁や県と話ができる。すぐ県だけで結論がでるものではない。文化庁や県と話をせず、道を造ってしまった後に文化庁が視察に来たら、追加指定はできなくなる。黄色部分については、文化庁は追加指定もできますよ。というニュアンス。これは景観を守るため。（事務局）
・道については現地で県に説明する。協力はするが道は造る。
・先に具体的な計画図がないと。（事務局）
・景観とはどの程度のものを言うのか。判断基準はどこか。他の史跡地でも史跡を活かした公園化とかある。
・文化庁は、黄色部分は何も手を加えなくていい、という意図。（事務局）
・とにかく土を入れたい。史跡の南側で境界線の所。
・追加指定の可能性がある中で、事前協議は必要。事業の着手は事前協議なしでは難しい。文化庁までの相談が必要。追加指定緑色は確実に指定し、青色部分は一般公開する。③の東側部分で窯の上に通っている道については協議が必ず必要。他の部分は植栽などしていく。（事務局）
・この連絡会の初めの立ち上がりは、青色部分の整備についての意味合いだった。その後③と①の窯を含めた指定になり、今度は黄色部分と変わって、広くなってきている。
・開発時に窯が発見されたことと、最近文化庁の方針が変わってきた。面の広がりをもっての指定という具合になってきた。（事務局）
・どういった道路形態になるか出します。今も周辺を歩けるからそういった道をつけたい。
・いつ、どこで、だれが、どうするか、具体的なものが必要。それをたたき台にして話を進められる。そういった整備について計画の中に入れ込んでいけば、補助対象にもなる。
・一回書いて出します。
・文化庁に追加指定は緑色だけでいいとか言えるのか。
・何十年もほったらかしにしていたではないか。それをこちらが整備していった。指定をして何をしたいのかわからない。窯が他に出たらまた追加指定とかになるのか。（オブザーバー）
・予算的なことなどで、確かになかなか整備できなかったが、スケジュールを組んで補助等が順調にでれば21・22年にかけて整備を行う。なぜ指定が必要かということは、窯跡は後世に伝えていくために保存・保護をしていく。（事務局）
・黄色部分は景観としての追加指定か。④⑤⑥の窯の保護のためか。
・文化庁は景観として。（事務局）
・地元も一生懸命だから、道をつけるならどういう方法があるか、示してもらうほうがいい。それから具体案を出してもらえば。
・黄色部分を活かして公園化しようとした。その中心部を切り離されるのはつらい。地形をあまり変えるなということだな。
・とにかく具体的案を出してもらい、県と相談させて欲しい。（事務局）
・すぐに黄色部分をどうこうしようとは思ってない。つけられるものなら土を持って入りたい。南大窯跡は伊部地区の宝だから協力はする。大切なのは理解している。
・西側の方、全部指定してほしい。
・黄色部分は土を採ってきた範囲であり、あまりにも範囲の距離があると意味付けが必要になる。（事務局）
・青色部分上は区が管理しているので、それなりの対応ができる。緑部分について早く追加してほしいと文化庁に言えないか。
・協議等を行って努力したことが必要になる。（事務局）
・一回具体的計画を出します。石切り場を壊したりしません。景観をなるべく大切にします。

(2) 平成18年度事業計画について
・今回はここだけ指定、次はここ、という追加指定申請はできない。（事務局）
・西・北の隣接地も指定申請するのか。
・南大窯が先行して整備を進める。西・北は図面上での指定になる。これは土地所有者には話をしていない。
　これから進める。（事務局）
・緑色部分が指定になると草刈等の範囲はどうなるのか。
・現在の契約の部分は青色の所。（事務局）

(3) その他
　特になし

資料16

平成17年度第２回史跡伊部南大窯跡整備委員会について

日　時　平成18年２月24日(金) 13:30～15:30
場　所　備前市役所二階応接会議室
出席者　河本清委員長　長尾清一副委員長　間壁忠彦委員

岡山県教育庁文化財課　平井泰男総括副参事
成本俊治総括主幹
備前市　樫本和博商工観光課長　樽家真佐人都市整備課長
備前市教育委員会　末長章彦生涯学習課長代理
石井啓文化係長　福本浩子文化係主任

１　開　会
あいさつ　河本清委員長

２　協議及び報告
(1) 伊部南大窯跡発掘調査の概要について
・中央窯跡の上部・床で一番焼けているのは？（間壁委員）
・どの面もかなり焼けている。横の壁も下までよく焼けている。窯を小さくして何回も焼いたのではないか？（事務局）
・そうでないとそんなに焼けないかな。（河本委員長）
・上の方の焚口はわかりにくいかもしれない。（間壁委員）
・東窯跡のみ煙出の部分に土管を使っている。（事務局）
・土管は貫通している？（河本委員長）
・抜けています。（事務局）
・真ん中はどうなっている？（河本委員長）
・土管は使わず真横に抜けています。（事務局）
・幅は？（河本委員長）
・３～40ｃｍ（事務局）
・調査をするといろんな事がわかるね。（間壁委員）

(2) 北大窯跡・西大窯跡について
・昨年12月、文化庁坂井調査官が現地視察。どこを追加指定するか意見を聞いた。（事務局）
・西大窯跡の字はどう読むの？（間壁委員）
・ヒガマです。（事務局）
・西・北の問題点は？（河本委員長）
・北大窯の範囲が広がった。（事務局）
・特には問題ないね。（河本委員長）
・西については？指定地にどうして⑤を入れたのか？（河本委員長）
・どうしてかわからない。（事務局）
・昔の指定はそういうことがよくある。所有者はどこにいる？（河本委員長）
・埼玉と他２名。（事務局）
・将来的に問題になるのは、③と④だね。まあ、それはまた別の話ですね。（間壁委員）
・西大窯の草刈はいつから？（間壁委員）
・数万円で委託をしている。
・きれいになっている。昔は草が茂っていた。
・西大窯について、座標指定と分筆がある。最近は筆でいくのが多いが、大きい所はやりやすい方、座標指定でもいい。（平井副参事）
・現地に入れば、問題点もあるが、指定はこういう格好でいけばいいのでは。西についても⑤は問題があるが、外してもいいのでは。（河本委員長）
・指定地除外はあまり・・・。（平井副参事）
・指定はいつ？（間壁委員）
・町村合併の時。（事務局）
・その時、書類（印鑑）はもらっているのか？（間壁委員）
・もらっていない。（事務局）
・所有者も指定地なのを知らないのでは？（河本委員長・間壁委員）
・昔は証拠がないものとか多い。こういう機会に整理するのはいい。（河本委員長）
・指定からはずす、外さないは、文化財保護審議委員会で。（河本委員長・間壁委員）

(3) 平成17年度第２回史跡伊部南大窯跡等整備連絡会について
・今までは、黄色部分と③（緑色部分）は、はずして指定とする計画だったが、伊部区が筆境未定地を買収し、協力も話によってはできる。ということだったので、文化庁坂井調査官に話をした。坂井調査官は、景観を守るために、黄色部分についても指定もできます。という話になった。（事務局）
・地元伊部区の事は、前々から聞いている。まちおこし・区おこしに一生懸命だが、これはどう扱えばいい？（河本委員長）
・そのことについて、市で進めている整備について都市整備課長より説明をお願いします。（末長課長代理）
・H11年度にある事業がストップしてから、地元と協議をしていきながらまちづくりを進めようということになった。手元にある「伊部まちづくり」は主に道路の整備。「ＢＩＺＥＮかえる」は備前焼を中心としたまちづくり。H14、15、16で整備。今までの反省を含め住民と一緒に考えることを目的に、ワークショップなどを年４回開催した。住民の意見を聞いて、伊部駅の電柱を地中へ移動させたり、公民館跡を公園化したり、案内板が少ないということで、大ヶ池・伊部交差点に案内板を、国道374号にモニュメントを設置した。
今年度から来年度で、２号線は事故が多いので、旧道を歩行者がゆっくり歩ける道路整備を行う。（樽家課長）
・いんべのまちづくりの方針については、資料の５－２に載せています。そこに、南大窯も含まれている。（末長課長代理）
・いろいろ連絡ややりとりを聞いていると、今南大窯の東で進んでいるものも南大窯跡の拠点整備のひとつなのか？（間壁委員）
・別のものです。南大窯は、新しい案内板などを事務局とタイアップして造った。（樽家課長）
・今日、南大窯跡の写真を撮ろうと思って寄ったら、東側に２台重機が入っていた。これは、窯をぶった切るのか？（河本委員長）
・地元も窯の位置は知っているので、ぎりぎりの所だと思う。課内で話し合ったが、国からの補助80％もらっても、20％は市の負担になる。財政にまだ話をしていないので、どうなるかはっきり言えない。窯跡の所は調査が必要だが、それ以外の所は協力を求めるという形しか言えない。（事務局）
・文化財は住民の方の理解と協力を求めないといけない。だが、③と①部分はこの際に追加指定したほうがいい。（河本委員長）
・道を造るとして、南大窯南側の山側の溝部分は、窯を守るための排水の溝。重要な部分であるので、ここは最低限保護が必要。黄色部分全部が指定無理なら、その部分だけでも指定をかけたらどうか。市としても財政的見通しをたてておかないと。（間壁委員）
・医王山・不老山・榧原は、考古をやっている者にとって伊部を象徴する山である。景観は大切。（河本委員長）
・周知の遺跡はどこまで？（平井副参事）
・赤色部分。（事務局）
・県のＧＩＳではどうなっているかな？周知の遺跡なら事前の届出は必ず必要。違っても、もし工事するとして、事前に調査しないと。遺跡の事を考えないと。史跡のすぐ側に道を造るのは難しい。指定地外ならすぐ側で何をしてもいいかという事ではない。整備で管理道（人が通る道）はいるから、それは考えられるが。（平井副参事）
・聞いているのは、防火林道みたいなもの。（樽家課長）
・それと遺跡との関係を考えてほしい。（河本委員長）
・これは、かなり大きな問題をもっている。指定地のすぐ側に道を造るのは、どうか。（平井副参事）
・伊部の方は性急な方が多い。昨日区長さんには開発の関係などがあるのでストップしてくれと言っている。今日も来ていて、担当と話をしている。話の結果を事務局に通す。（樽家課長）
・教育委員会としては、協議をしながら、県を通して文化庁に話をしていってほしい。この問題は、これからの宿題・課題として残していこう。（河本委員長）

(4) その他
西・北大窯跡の調査概要報告書の案の提示

３　閉　会
あいさつ　長尾清一副委員長

第３章　東６号窯跡の調査概要

第１節　位置と調査の概要

東６号窯跡は、全長46ｍは超えようかという長大な東３号窯跡の煙出し部から約100ｍの南、標高約70ｍの北向きの急斜面に立地する。この地点は伊部南大窯跡の南東方向に位置し、北側に谷が開けた地形をしている。この谷が、やや緩くなる標高55ｍ付近には、東５号窯が平成12年度の調査で確認されている。

この窯については遺跡としては全くの未周知で、研究者等の踏査も全く及んでいなかった。里づくりの会が作業道を造成した際、削平された断面に炭層が観察され、その間からごく少量の杯片が発見されたことから、付近に窯跡があることが想定された。しかし、その断面から南上方は勾配が30度もあろうかという急斜面のうえ、流紋岩の露頭が散見されるため、作業の安全確保や予算的な問題などで調査地点を絞り込む必要があることから、詳細な予備調査を実施した。

予備調査は表面観察による踏査と奈良文化財研究所埋蔵文化財センター遺跡調査技術研究室室長西村康氏に依頼した磁器探査による。事前踏査では遺物はまったく採取ができず、窯跡の位置すら絞り込むことができなかった。平成13年４月、東西18ｍ、南北23ｍの測定区を設定し磁器探査を実施した結果によると、その区内で積極的に窯体の存在を推定することはできなかった。しかし、測定区の中央と南西隅の２箇所小さな磁気異常があり、窯体の存在を否定できない箇所が指摘された。（註１）

これらの結果を受け、平成13年10月から確認調査を実施した。この調査は他の窯跡、ＫＰ－１地点、ＫＰ－２地点窯跡と同時に実施したもので、窯跡の所在確認が目的であった。このため、磁気探査で異常値を示した地点を中心に等高線に並行するかたちでトレンチを設定し、位置を確定した。

平成14年４月からは、東６号窯跡の二次調査を実施した。これは急勾配に位置する窯体が崩落する危険が考えられたため実施したもので、窯構造などが確認できた。

第２節　遺構の概要

１．灰　原

調査は、炭層を確認された崖面（削平された断面）のすぐ南側において、等高線に平行する形でトレンチ601を設定することから始めた。炭層の性格を追求するためである。炭層は主にトレンチの東半分で、多量な杯片とともに確認された。ただトレンチの中央部がちょうど谷地形の最低部で絶えず湧水があり、作業に支障をきたしていたため、北側の削平された断面に向かって切り離し、トレンチ内に湧水がたまらないようにした。また、炭の面も東側へ広がっていると推定できたため、東へ50cm程度調査区を拡張した。その結果、３ｍ×３ｍ程度の炭層の面的な広がりをとらえることができ、それは窯の灰原であることが想定された。このレベルでは20㎝×30㎝～50㎝程度の扁平な石の上に杯片が散見、その周辺に幅10㎝×50～70㎝程度の粘土塊、最大径10㎝程度の焼土塊が確認できた。また、径20㎝前後の柱穴状のプランらしきものも観察されたため、墨層の中央部に幅0.3cm×長さ3.3ｍのサ

ブトレンチをいれた。観察の結果、この炭層は１～２㎝大の小礫を含む灰白色土層上（地山？）に形成されたもので、検出面からの最大の厚さ25㎝のレンズ状の堆積であることが判明した。

念のためある程度杯片等が検出されたレベルにおいて炭層の実測図化をおこなった。その際、この炭層はトレンチ南側断面の一部において南に広がると想定された。

平成14年度の調査では、南側部分の炭層の面的の広がりの追及をおこない、墨層が南側へほとんど広がらないことも確認した。あわせて墨層の堆積を順次掘り下げ、杯片が多量に確認されたレベルで、写真測量による図化および検出状況に合わせた区画を設け、その区画単位で遺物を取り上げた。

２．窯　窖

トレンチ601の調査では、前述のように窯体を確認できなかったため、南西方向に５ｍの地点にトレンチ602をトレンチ601とほぼ並行に設定した。幅約0.5ｍ、拡張部も含めると延長11ｍのトレンチになる。ここは、磁気探査によりごく小さな異常値をしめした地点でもある。

掘削を始めた直後、東側地表下で杯片が少量確認され、明緑灰色の粘土ブロックが検出された。土層断面にもその粘土ブロックがあり内面が赤褐色に被熱していた。その箇所以外は明黄褐色土の礫を含まない均質な土層で、西側へ向かうほどその土層は薄くなる。この層の下には30～50㎝ぐらいの角礫を含むが粘性をもち焼物の粘土としては最適であろうと推測できる、にぶい黄褐色土層がある。

トレンチ602でも窯体が確認できないため、磁気探査で小さな磁気異常値を示した中央部にトレンチ603を設定した。また極端な異常値を示し、鉄製品でも埋蔵されているのではないかと憶測された地点にもトレンチ604を設けた。トレンチ603、トレンチ604の調査成果については後述する。

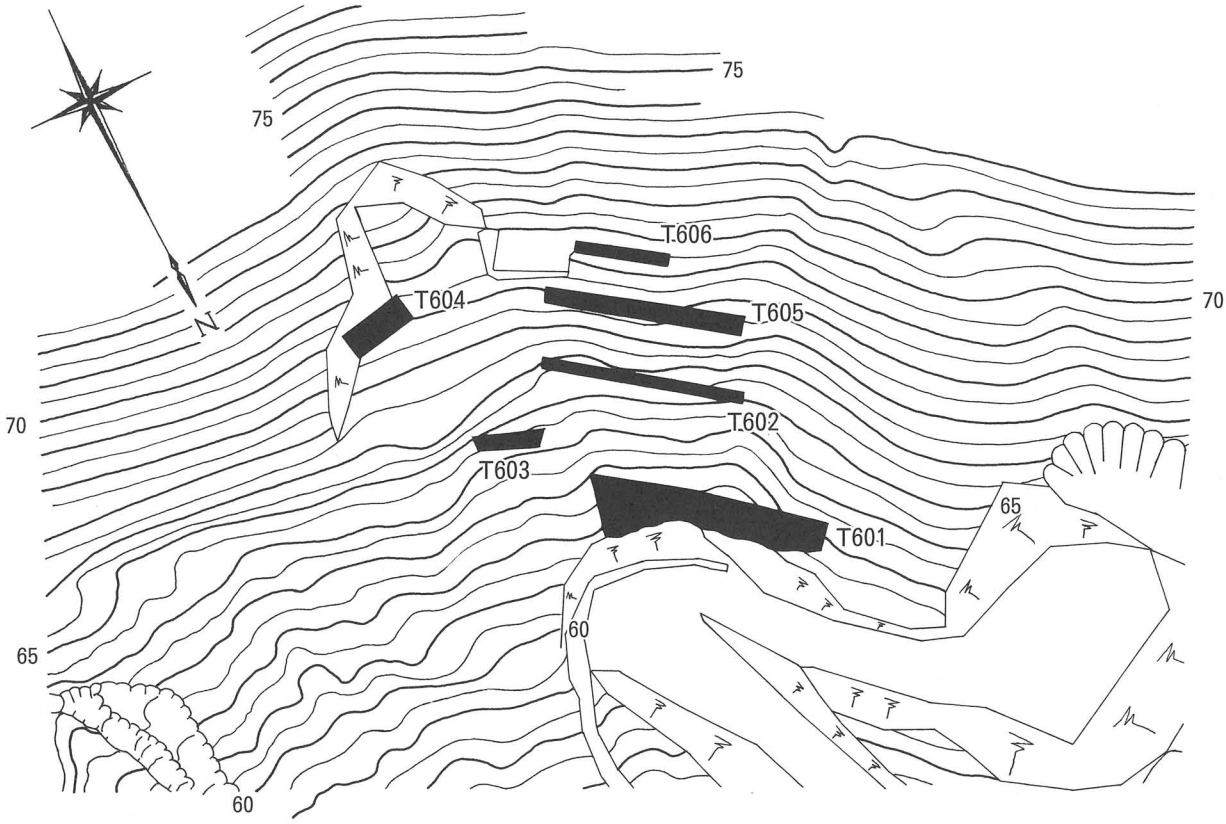
灰原から南西方向へ５ｍ上方のトレンチ602でも窯体が確認できないため、さらに南西方向に３ｍのところにトレンチ605を設定した。先行して調査が進んでいた灰原の状況からすれば、必ず灰原より高い地点に窯があると考えたからである。

掘削を進めたところ、トレンチ605の東端部で杯片とともに焼土面が地表下10㎝程度の深さで検出され、仔細に観察した結果、窯の床面ではないかと考えられた。ただ焼土面は南側ではなく、北側下方へ広がっていることが推定できたため、再度トレンチ602の断面と対応させたところ、東側で確認された被熱面と粘土ブロックがこれに対応するのではないかと推定された。これらの状況からトレンチ602とトレンチ605の間に、全長が４ｍを超える程度の小規模な窯が想定された。

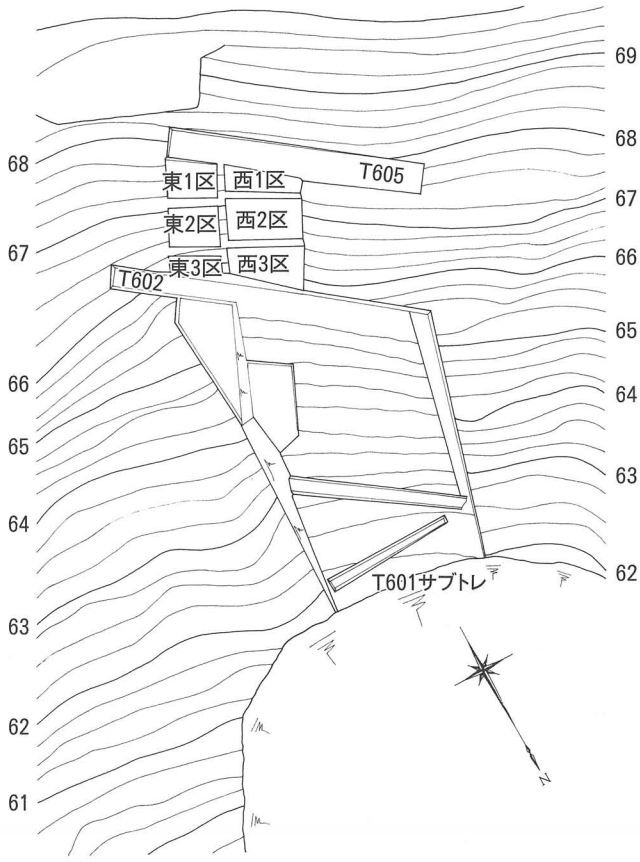
平成13年度の調査は、窯の所在確認が目的であったため、窯本体の調査は行なわずこのトレンチ調査のみで終了した。

平成14年度の調査では、窯の主軸のおおよそのラインを定め、602と605のトレンチ間を西区と東区にわけ、横軸断面を２箇所設定することによって三分割される部分を南側から１区、２区、３区とした。したがって全部で６区になる。幅20㎝の土手を残し、慎重に表土をはがしたところ、どの区においても表土下10㎝～20㎝で窯の立上りが検出でき、その時点で窯内のみの掘下げに移行した。

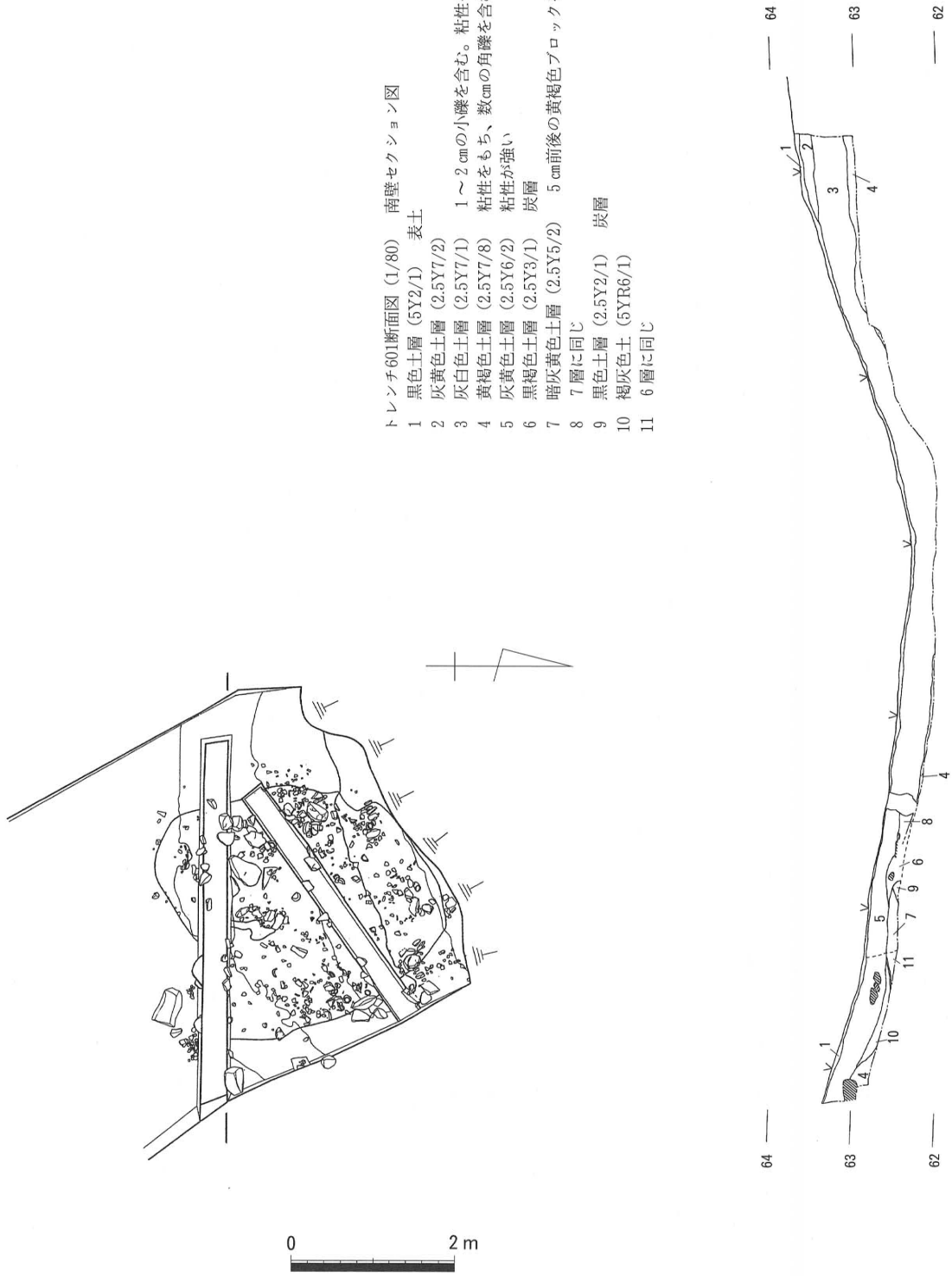
窯内の表土下には、流土層と思われる均質なにぶい黄色土が堆積しており、その下層に窯壁の粘土ブロック片を多く含む上層よりやや明るめな黄色土がたまっていた。遺物は焚口に近い３区を中心に杯片が多く見られた。また煙出しに近い部分では土錘も検出されている。東３区の窯床面には幅３㎝～５㎝、長さ20㎝～30㎝のひび割れが観察でき、30度の急斜面であることから、地すべり的な現象が起こった可能性も推定された。



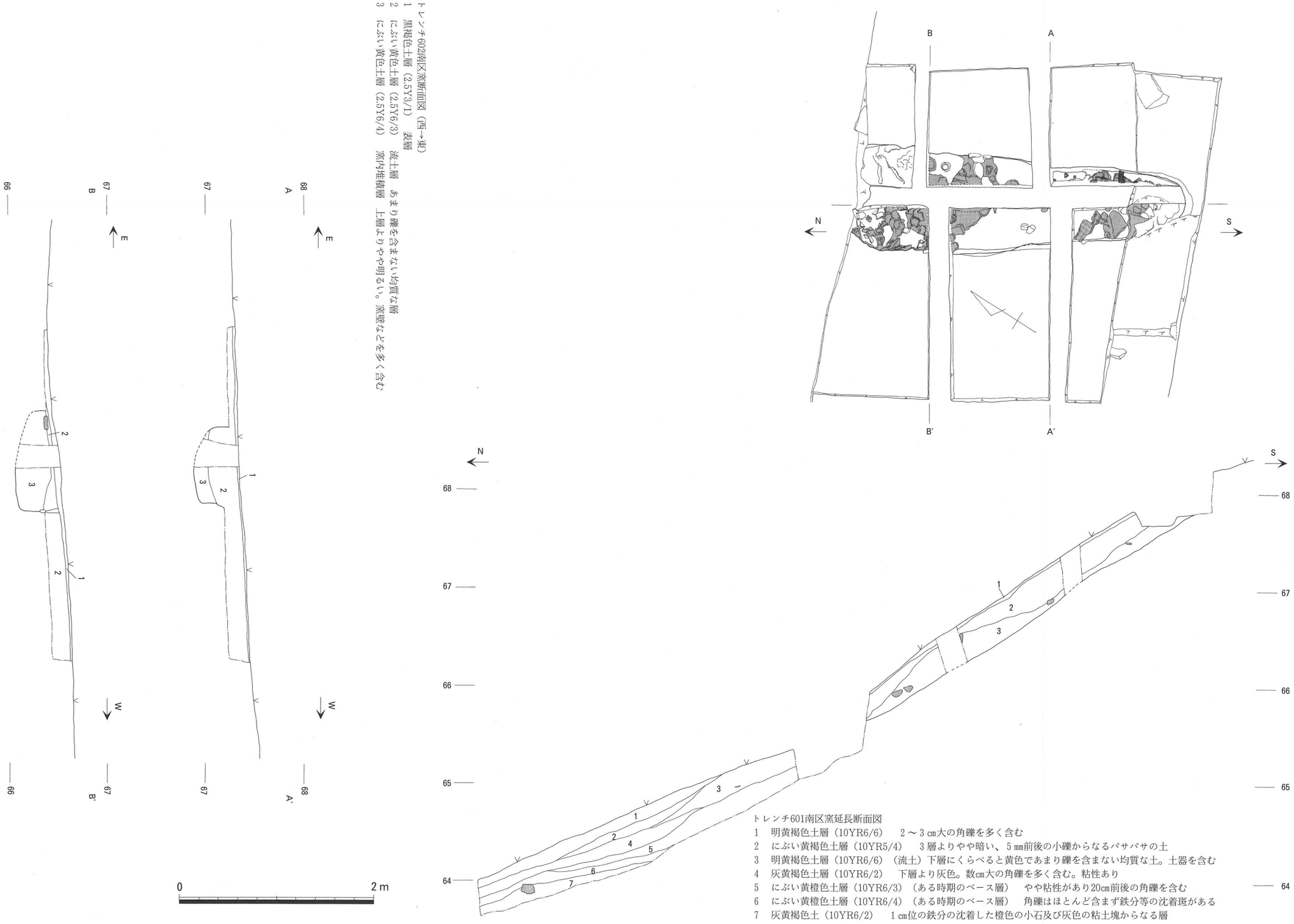
第６図　平成13年度調査トレンチ配置図（１/400）



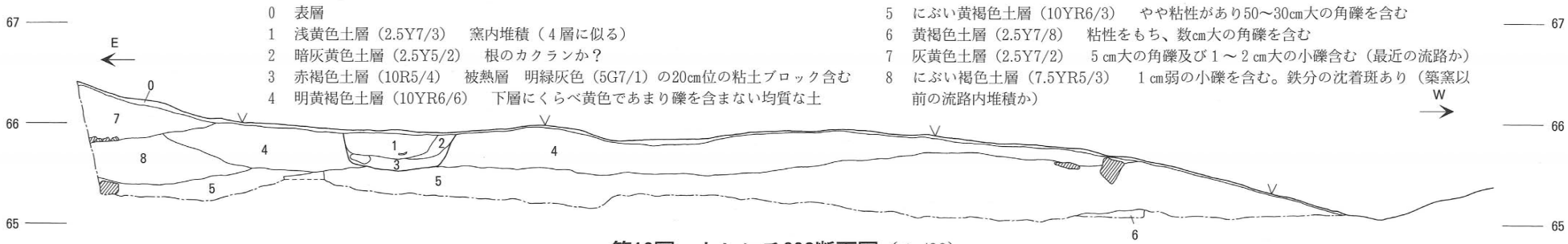
第７図　平成14年度調査トレンチ配置図（１/200）



第８図　東６号窯灰原平断面図（トレンチ601）（1/80）

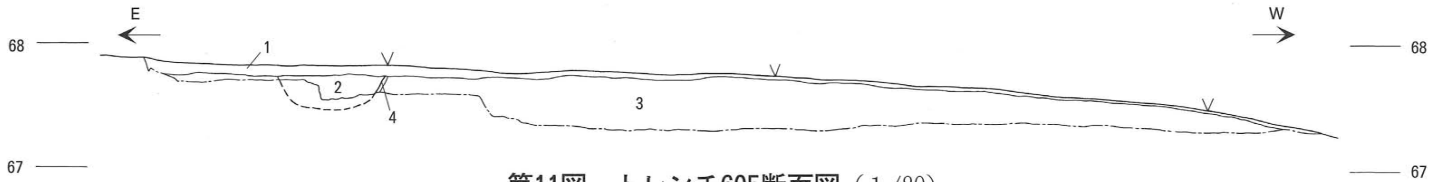


第９図　東６号窯跡平断面図（1/40）



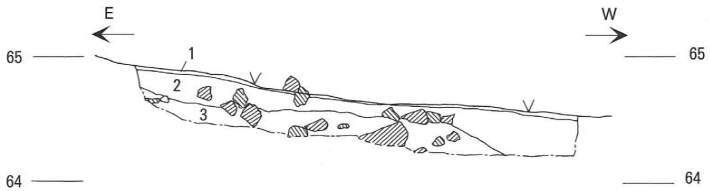
0　表層
1　浅黄色土層（2.5Y7/3）　窯内堆積（４層に似る）
2　暗灰黄色土層（2.5Y5/2）　根のカクランか？
3　赤褐色土層（10R5/4）　被熱層　明緑灰色（5G7/1）の20㎝位の粘土ブロック含む
4　明黄褐色土層（10YR6/6）　下層にくらべ黄色であまり礫を含まない均質な土
5　にぶい黄褐色土層（10YR6/3）　やや粘性があり50～30㎝大の角礫を含む
6　黄褐色土層（2.5Y7/8）　粘性をもち、数㎝大の角礫を含む
7　灰黄色土層（2.5Y7/2）　５㎝大の角礫及び１～２㎝大の小礫含む（最近の流路か）
8　にぶい褐色土層（7.5YR5/3）　１㎝弱の小礫を含む。鉄分の沈着斑あり（築窯以前の流路内堆積か）

第10図　トレンチ602断面図（１/80）



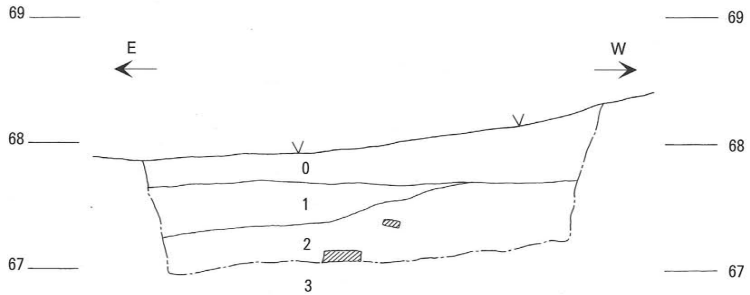
1　表土
2　浅黄色土層（窯内堆積）（2.5Y7/3）
3　灰黄色土層（2.5Y7/2）　50～30㎝大の角礫を含む
4　赤褐色土層（10R5/2）　被熱層

第11図　トレンチ605断面図（１/80）



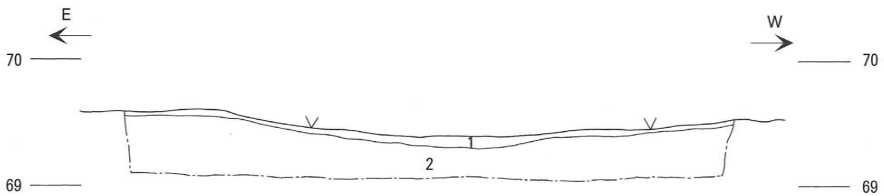
1　黒褐色土層（2.5Y3/1）　表層
2　にぶい黄色土層（2.5Y6/3）　流土層　あまり礫を含まない均質な層
3　にぶい黄色土層（2.5Y6/4）　窯内堆積層　上層よりやや明るい。窯壁などを多く含む

第12図　トレンチ603断面図（１/80）



第13図　トレンチ604断面図（１/80）

崩落の危険があるため２段掘りにして中央軸で断面
0　１層に30㎝大の角礫を含む層
1　浅黄色土（2.5Y7/4）　１㎝大の小礫を少量含む
2　黄灰色土（2.5Y4/1）　１～２㎝大の小礫を多量に含む
3　岩盤（5G7/1）　明緑灰色のブロックを含む岩盤
＊この部分は、中世墓等考えられたが、岩盤の上に水によって堆積した層が厚くある



第14図　トレンチ606断面図（１/80）

1　表土
2　浅黄色土（2.5Y7/3）　数㎝大の角礫を含む
＊自然の堆積

窯の断面は設定した横軸上では断割らなかったため、構造について不明確な部分があるが、前年度のトレンチ602の焚口付近の断面観察の結果、窯内面には明緑灰色の粘土が貼り付けられていて、床面の厚い所では10㎝にもなる。

以上から、この窯について総括をすると次のようになる。東６号窯跡は標高66～68ｍの北向きに開けた谷急斜面に構築されている。窯体付近には流紋岩系？の露頭が散見されるが、窯体自体はその上に形成された明黄褐色土層を掘り込んでつくられている。窯体の残存長は、トレンチで一部破壊してしまった部分も含めると、全長4.3ｍ（水平3.8ｍ）、窯の最大幅は1.0ｍで、奥に行くほど幅が狭まる平面形をもつ。床面は粘土で被覆してあり、ほぼ30度で直線的に立上る。煙道部分から２ｍほど焚口に下った床面がやや傾斜が急になっているが、土手が残存しているため、軸線の設定の問題だけで、構築時に意図されたものかは不明である。主軸は焚口側からいうと、北西から南東方向である。

３．土　壙？

平成14年度の調査において、トレンチ602（窯の焚口）とトレンチ601（灰原）間が５ｍあるため、その間に作業面などの遺構の有無を確認するため４×５ｍの範囲を全面下げた。あわせて窯の軸線をこの部分に延伸し、土層の観察をおこなった。

この区の南端、トレンチ602の北側、表土直下５㎝のところで径40～50㎝、黒色土のたまった凹面を検出。黒色土内で少量の杯片を検出。黒色土の堆積は10㎝程度と浅く平面形も不明瞭なため、作業などに伴う土壙と考えるより、旧地表面の凹凸と考えたほうがいいかもしれない。

４．その他

ｉ）トレンチ603

磁気探査で小さな異常値を示し、窯体の可能性がある地点にトレンチ603を設定した。上層で灯明皿など近世の遺物をごく少量確認したのみである。掘りさげてもほとんどが30～40㎝大の礫で、遺構は検出されなかった。

ⅱ）トレンチ604

磁気探査によって極端な異常値を示し、鉄製品でも埋蔵された中世墓でもあるではないかと憶測された地点にトレンチ604を設けた。上層は30cmの礫層で、その直下には浅黄色土が堆積していた。その面から黒色の凹面などが観察できたが、遺物も伴わず自然のたわみと判断された。最終的に１ｍ近くまで掘りさげたが、明緑灰色の岩盤層にあたり、磁気探査の異常値は遺構にともなう反応ではないと考えられた。

ⅲ）トレンチ606

東６号窯跡の煙道部を検出したトレンチ605の南上方２ｍの地点に設定したトレンチで、東６号窯以外に窯などの遺構がないか確認するために設けた。遺物・遺構なし。

第３節　遺　　物

図化した遺物は全部で192点、その９割が杯類である。**１～60**までが平成13年度調査分、**61～192**が平成14年度調査分である。両者の間で接合関係があるものは、基本的に14年度分としている。

1．トレンチ601（第20図・第21図）13年度分調査

1～42までの遺物が該当する。おおよその層序では灰原層の上層に該当する。杯A類、杯B類が多数をしめる。基本的に底部の外周をヘラキリした後、押圧して成形されている。

杯A類では、12にヘラキリの痕跡が底部に段状に残り、22・29では粗雑な調整がなされている。また7・23のように極端に底部を押圧したものなどが見られる。13・15・22・25・27では、重ね焼をする際、繊維状のものを個体間にはさみこんだため、備前焼でいう「緋襷（ひだすき）」の窯変状のものが内外面に現れている。31のように外面に自然釉が付着し一部光沢をもったものもある。

1・10・34は白色の胎土である。

杯B類の高台は成形後付着したものであるが、9のように付着する際粘土がはみ出したもの、17のように圧着のすきまができたものなど成形が雑なものがある。14では外面に自然釉がかかり一部光沢があり、36では口縁端部と内面の一部に緑色の自然釉がかかり、重ね焼きの痕跡が観察される。5は杯B類の蓋である。

2・39・40は近世の遺物で、灰原上層が江戸後期には露出していた可能性も推定できる。

4は平瓶の把手、20は盤の底部かもしれない。33は外面自然釉の光沢のある鉢、37は壷の底部、38・42は長頸壷の底部の可能性がある。

2．トレンチ602（第22図）13年度分調査

43～58が該当する。そのほとんどがこの窯の焚口部分からと考えられる。58の鉢以外はすべて杯A類、B類である。54～57は外面黒色で焼成不良品である。

3．トレンチ605（第23図）13年度分調査

遺物は59・60の2点で、煙道部からの検出である。59は杯Aで、焼成が非常に悪い。60は全長5.5㎝の有溝土錘である。

4．トレンチ601（第24図～第26図）平成14年度

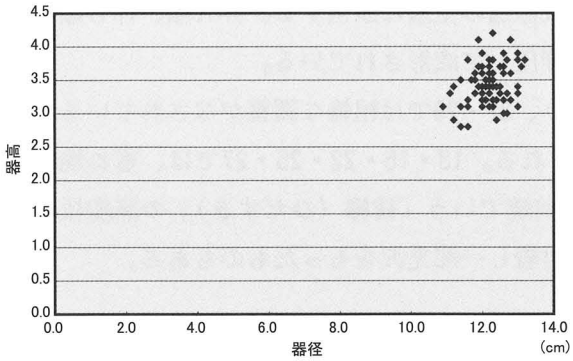
61～160が該当するが、主な検出地点は、61～64が南区の表層、65～73は土壙状遺構、74～98は南区を中心にした検出で、99～160は灰原の下層に相当する。

南区の表層では、61・63・64の杯B類とともに、近世の甕62が検出されている。

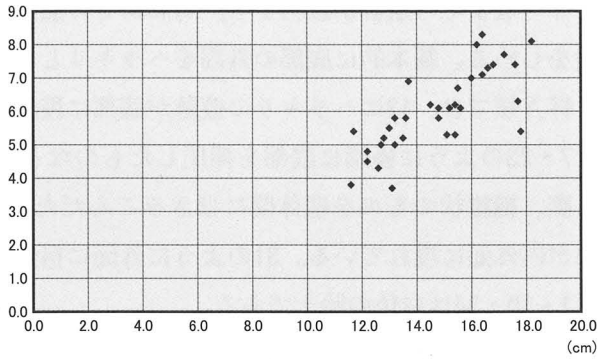
土壙状遺構というか黒色のたまりに伴う遺物は、基本的に杯類であるが、鉢？70も確認されている。65・66・68・69のようにやや色調の淡いものが目立つ。また杯類73のように凹凸の著しい個体もみられる。

南区を中心にした範囲では、79・82・83・87・88・89・91・94・95・96が杯B類の蓋で比較的多く見られる。83のように内外面に8～9㎝前後の焼成痕（ヌケ）が見られ、高台間に蓋を挟みこむ窯詰め技法も推定される。また89には端部のみに自然釉が付着していることから、口縁部と高台で蓋を挟み込む技法も推定できる。反対に91・94のように全く自然釉が付着していない個体もある。97は鉢で端部が非常に丁寧に調整されている。85は近世の窯道具で匣鉢。

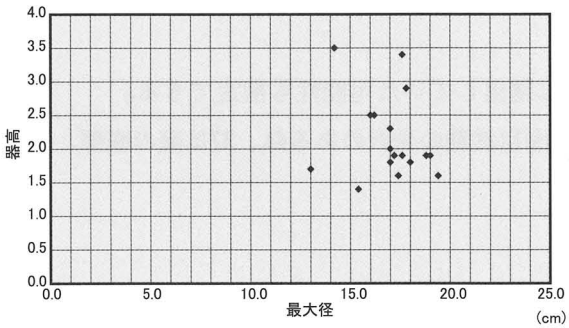
99～160は灰原下層に相当するもので、比較的完形品に近い個体の割合が高い。器種構成としては基本的に杯A類・B類で圧倒的で、それ以外として104・121・154・155の鉢類が確認されたのみであ



第15図　杯A類法量分布図



第16図　杯B類法量分布図



第17図　蓋法量分布図

る。鉢類の中でも154は内面を箆でなでたような丁寧な調整が施されている。

杯類では101の外面には、かせ胡麻風の自然釉がかかり、122では緑色鮮やかな釉が観察できる。また、106・109・117・125・142・147のように複数枚重なって溶着した遺物もあり、窯詰め技法が推定できる。

５．トレンチ602南区（第27図）平成14年度分

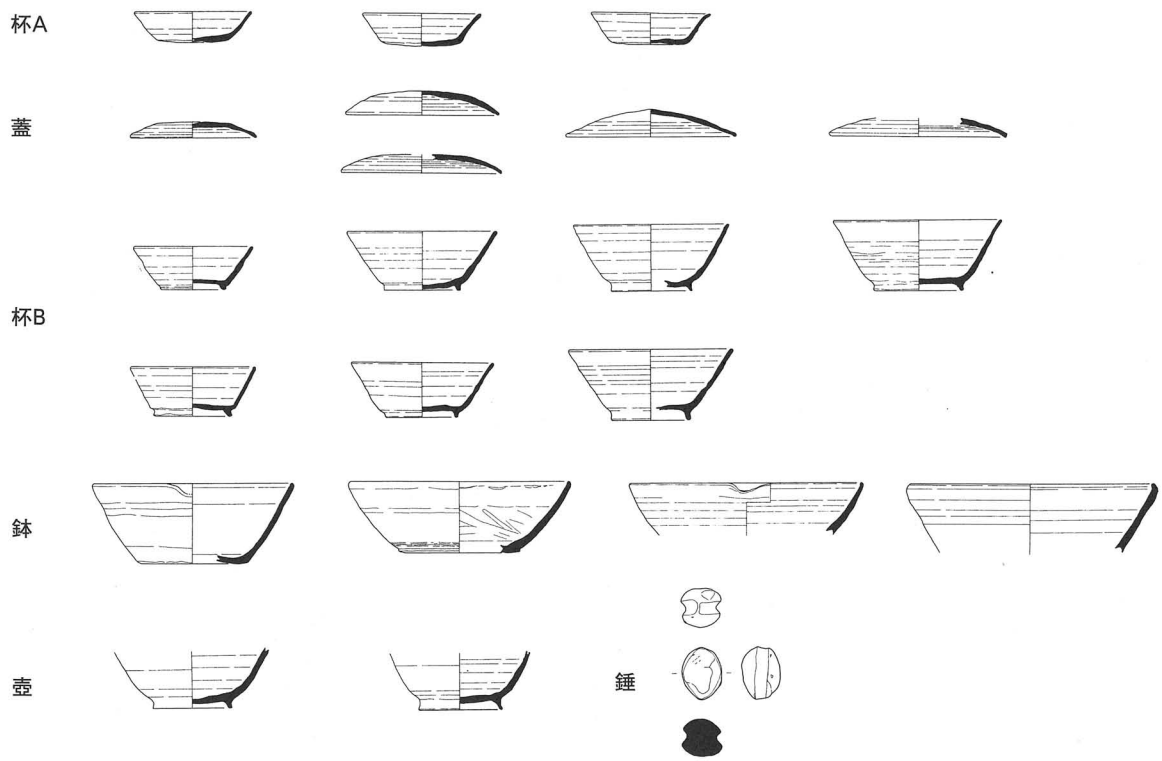
161～192の遺物が該当する。基本的にそのほとんどが窯内からの検出で、小片が多い。167の甕の底部と183の鉢を除けば、そのすべてが杯類である。外面が黒色で、非常に脆い個体が目立つ。

第４節　器種と法量分布について

東６号窯で確認された器種（第18図）について、法量分布図を参考にしながら若干の記述を行ないたい。

１．杯Ａ類（第18図）

この窯跡でもっとも点数の多いものである。前述のとおり外周を箆で切り離した後、底部を指先等で押圧したものである。押圧が施されず、箆きり未調整の個体も確認できる。箆で切り離す際の回転台は反時計回りである。胎土については、１～２割程度白色のものが認められる。



第18図　器種構成図（１/８）

法量の分布図をみると、口径については11～13㎝、器高については３㎝弱～４㎝の範囲にきれいにおさまる。底部の調整に若干のばらつきはあるが、おおむね一型式の範囲内と考えられる。

２．杯Ｂ類（第18図）

杯Ａ類に続いて点数が多いものである。高台は底部を成形後、圧着したものである。法量の分布図をみると大きく３つのグループにわけられる。①口径が12㎝強～14㎝弱、器高が4.5㎝～６㎝弱のグループ。②口径が14.5㎝～15.5㎝、器高が６㎝弱～６㎝強のグループ。③口径が16㎝～17.5㎝、器高が７㎝～８㎝弱のグループ。③のグループでは、口縁端部を外反させる個体が比較的多い。型式的には三型式と考えたいところであるが、分析分母が余多くないため、仮の設定としたい。

３．杯Ｂ蓋類（第18図）

口径については13㎝～19㎝の範囲である。杯Ｂ類の蓋と考えると当然の結論だが、分析分母が少ないためグループを読み取ることは難しい。器高については、大きくひずんだ個体を除けば、おおむね1.5㎝～2.5㎝の範囲に収まるため、多くの個体が扁平な蓋になる。つまみについては、図化されていないものも含めて、１点も確認されていない。

４．鉢　類

鉢類と確認できる個体は９点あまりで、うち２点のみで口径・器高・底径が復元できた。口径は20

～26cm弱、器高は４～８cmとばらつきがある。９点のうち３点では注口が確認できた。**58・97・155・183**は口縁端部を丁寧に調整し内傾させるが、他はそのままである。何型式かあるかもしれないが、分析分母が少ない。

５．壷　類

一見すると**38**、**42**は杯Ｂ類と見間違うが、高台の成形や胴部の器壁の厚さなどから壷と推定される。

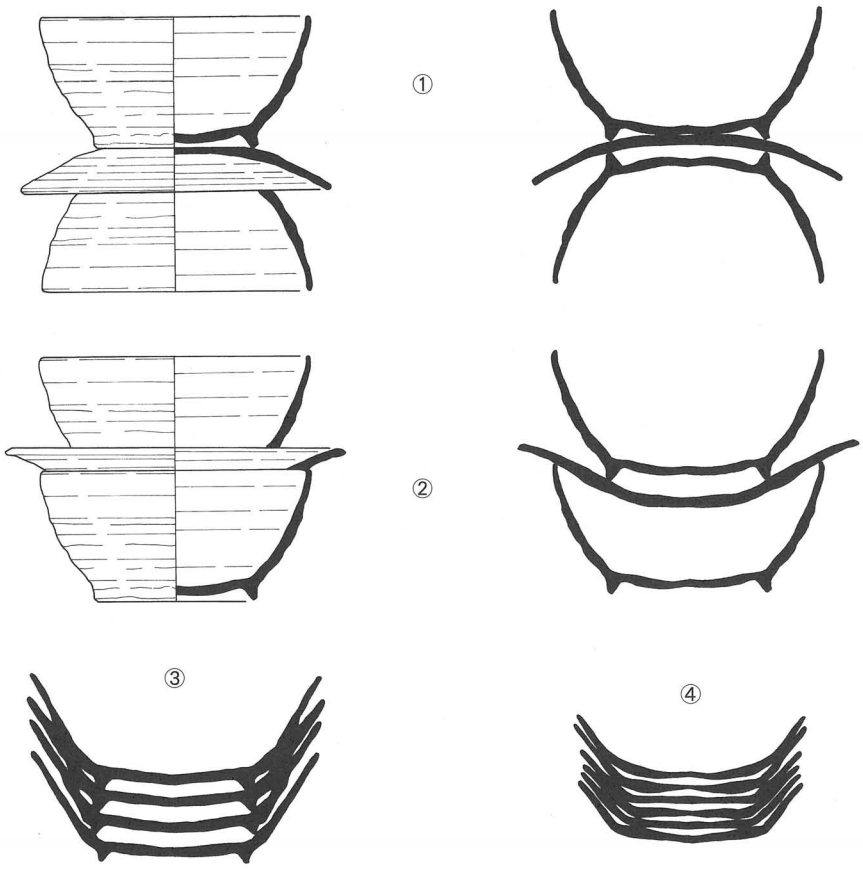
６．その他

そのほか、**４**の平瓶、**20**の盤底部？、**60**の有溝土錘、**167**の甕底部が１点のみの確認である。

第５節　窯詰めについて

多量に出土した杯Ａ類、Ｂ類の内外面の観察や、溶着片からおぼろげながら窯詰めについて知見を得ることができたので、以下に記述する。

106、**117**、**125**、**142**などの複数個体の溶着片から、基本的に同一法量の個体を重ね焼きすることが観察できる。何個体重ねたかは不明であるが、灰原出土の**106**では６枚重ねていることから、廃棄後



第19図　窯詰め復元模式図（１/４）

の剥離を考慮すると10個体程度は重ね焼をしていたのではないかと考えられる。その際、個体間どうしの溶着を防ぐため、植物質の繊維状のものを挟み込み、焼成後の分離をたやすくしたと考えられる。それは杯の内外面に、備前焼でいう「緋襷（ひだすき）」状の痕跡が残ることでもわかる。

杯蓋**83**の観察では、内面、外面とも中央部に8.5㎝程度の個体が置かれていた変化（ヌケ）がみられるため、蓋の上には高台をもつ杯Ｂ類が置かれ、蓋の下側にも、反転させて高台を上側に向けた杯Ｂ類が置かれたと推定される（第19図－①）。

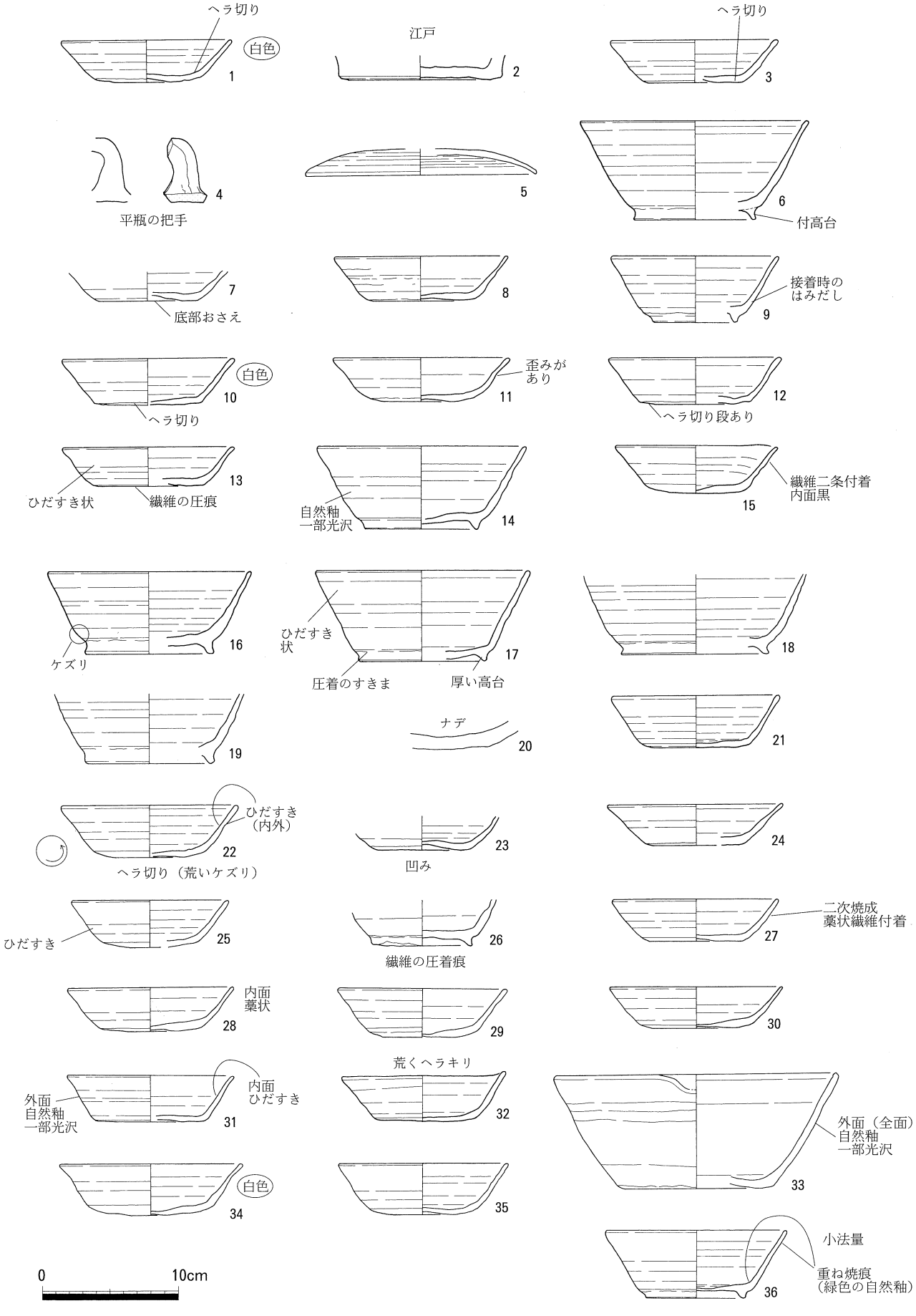
杯蓋**89**は歪が著しい個体である。内面の外周を中心に自然釉が付着するが、中心部は８㎝前後の径で付着が見られない。外面は端部のみにわずかに釉が付着することから、杯Ｂ類の上に、蓋を反転させておき、その上にさらに杯Ｂ類を置いたと考えられる（第19図－②）。

また杯Ｂ類**101**では高台の中までかせ胡麻風の焼成が見られることから、反転して窯詰めされたと推定できる。

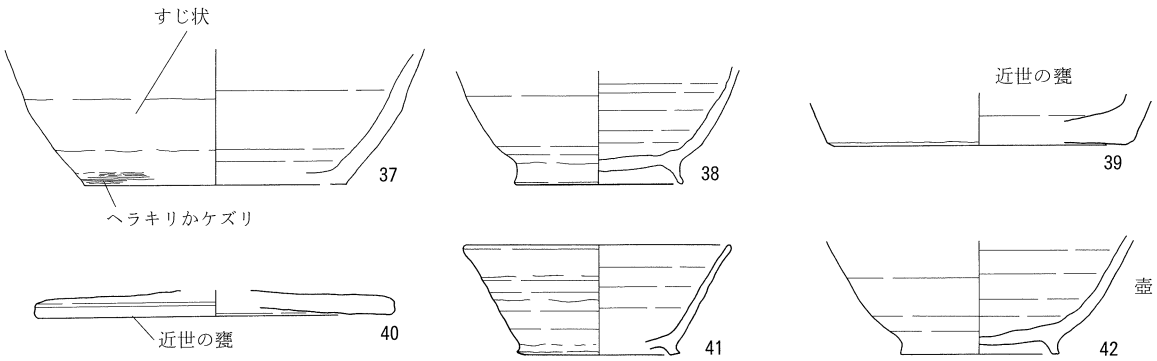
窯詰めについては、基本的に同一法量をもつ個体を10枚程度重ねるが（第19図―③・④）、個体間には植物繊維を挟み込み焼成後の剥離がたやすくなるよう工夫がなされていた。また、蓋類を利用して、規則的な窯詰めに変化をもたせる工夫も看取できる。ただ、窯内での詰める場所や甕類などその他の器種との関係はさだかではない。

【註】

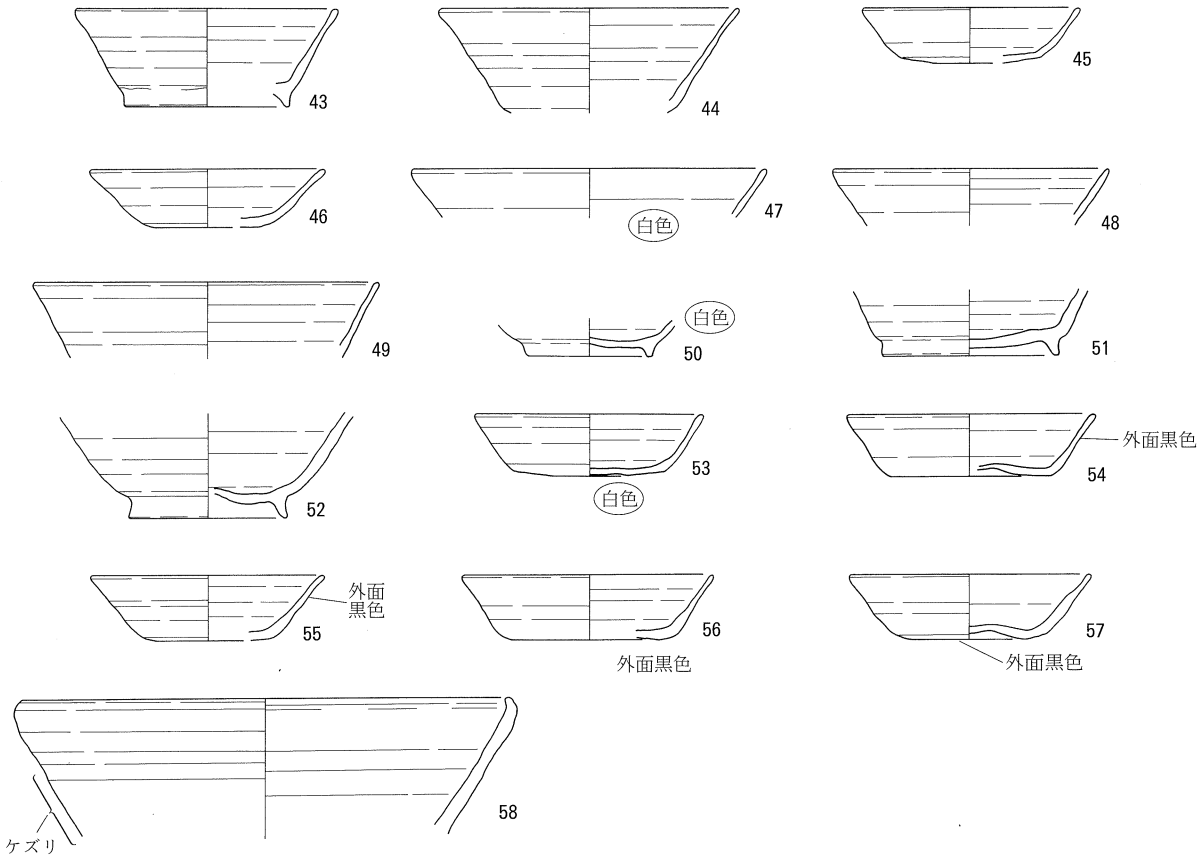
（１）西村康「伊部南大窯の探査」『伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ｉ』備前市教育委員会 2003



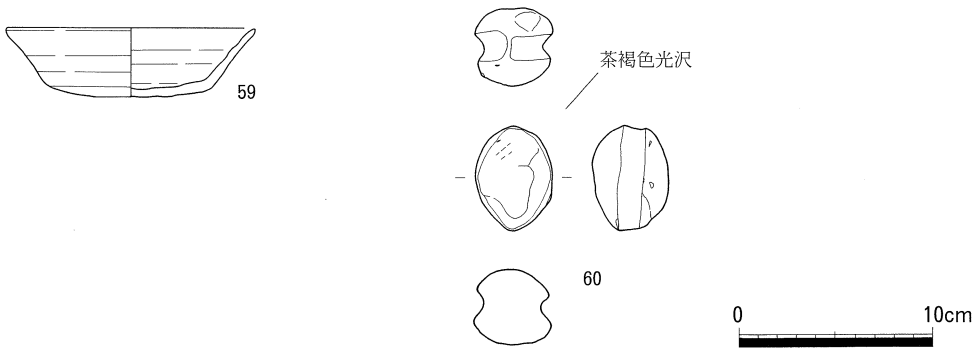
第20図　トレンチ601出土遺物（13年度分）（１/４）



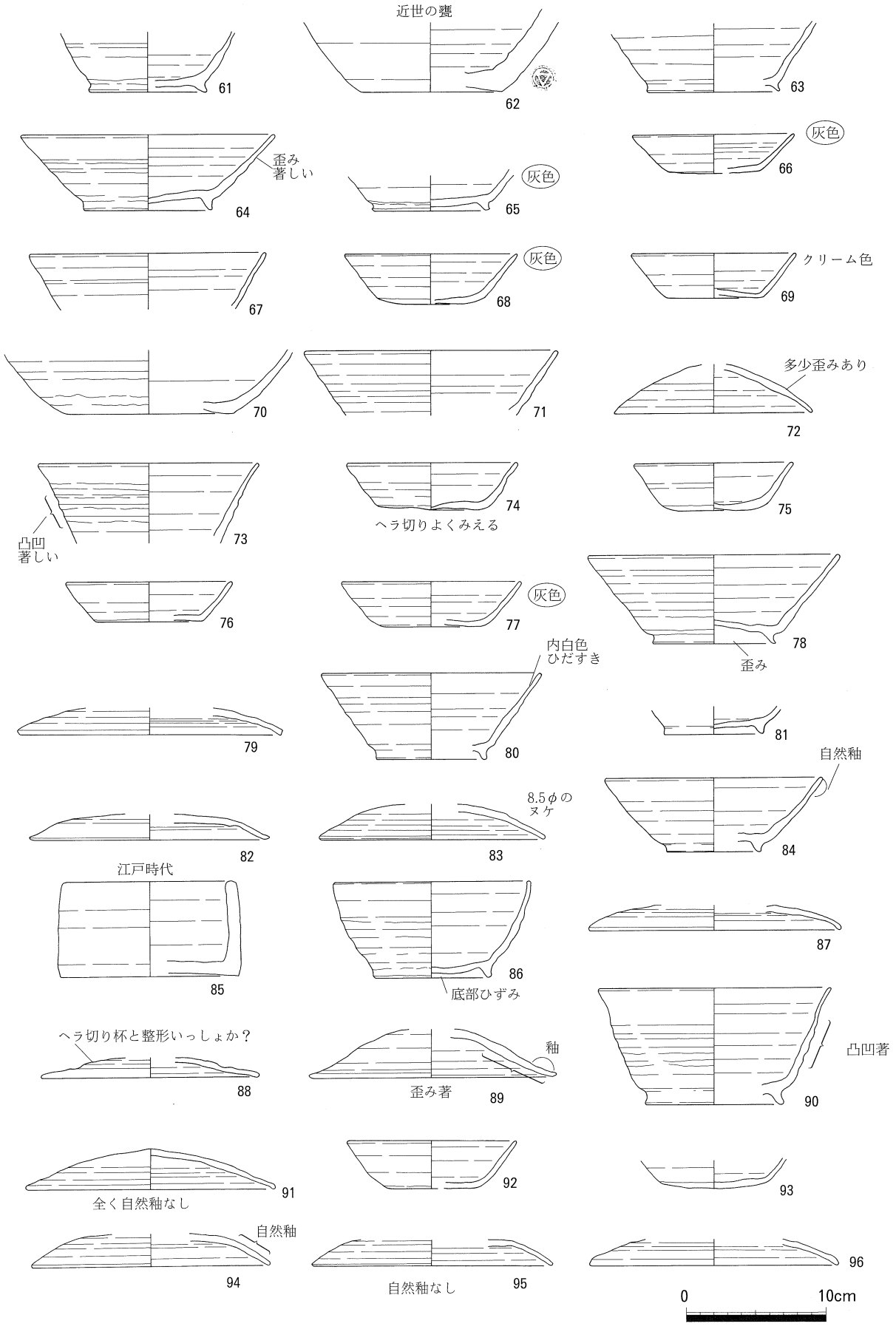
第21図　トレンチ601出土遺物（13年度分）（１/４）



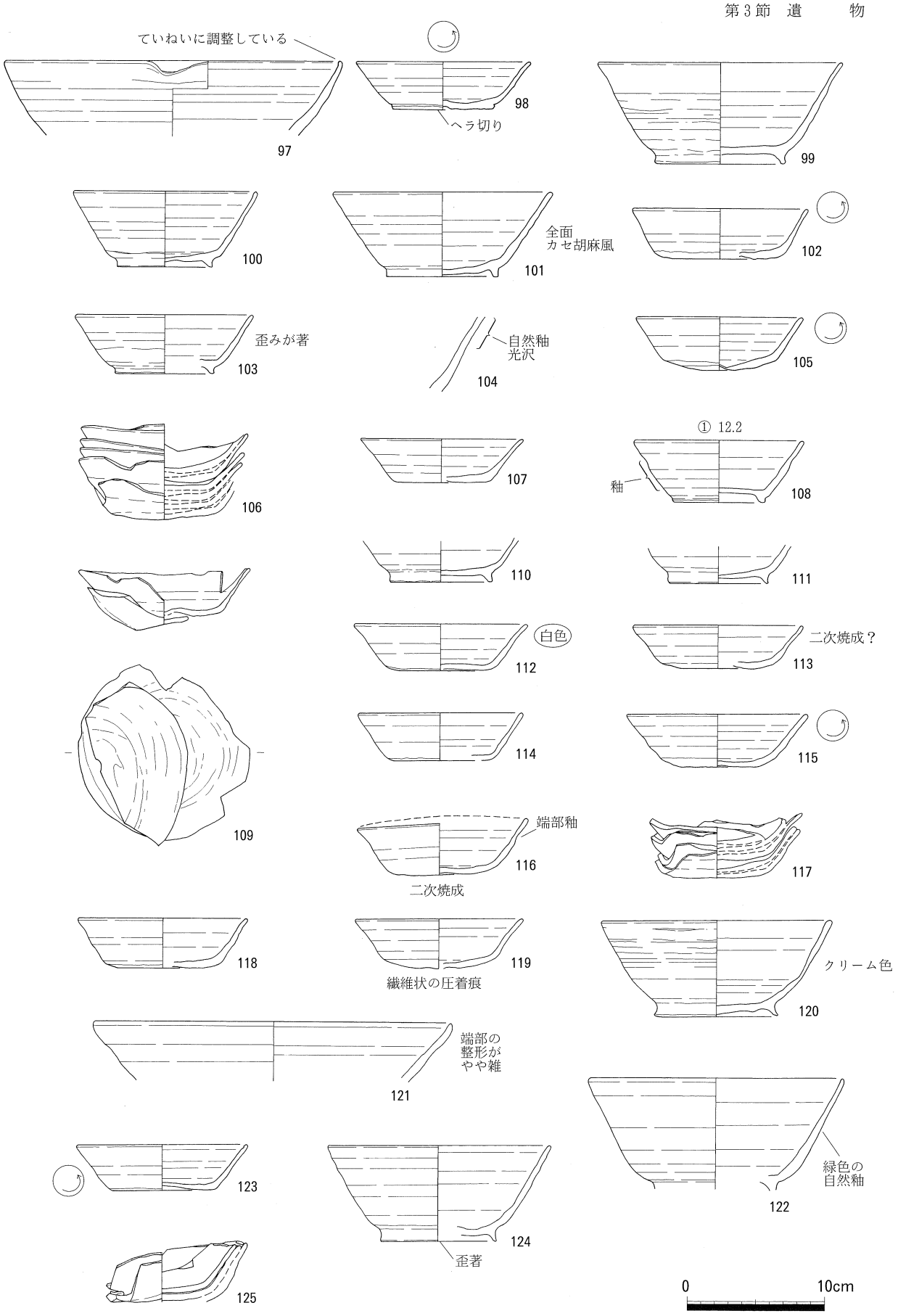
第22図　トレンチ602出土遺物（13年度分）（１/４）



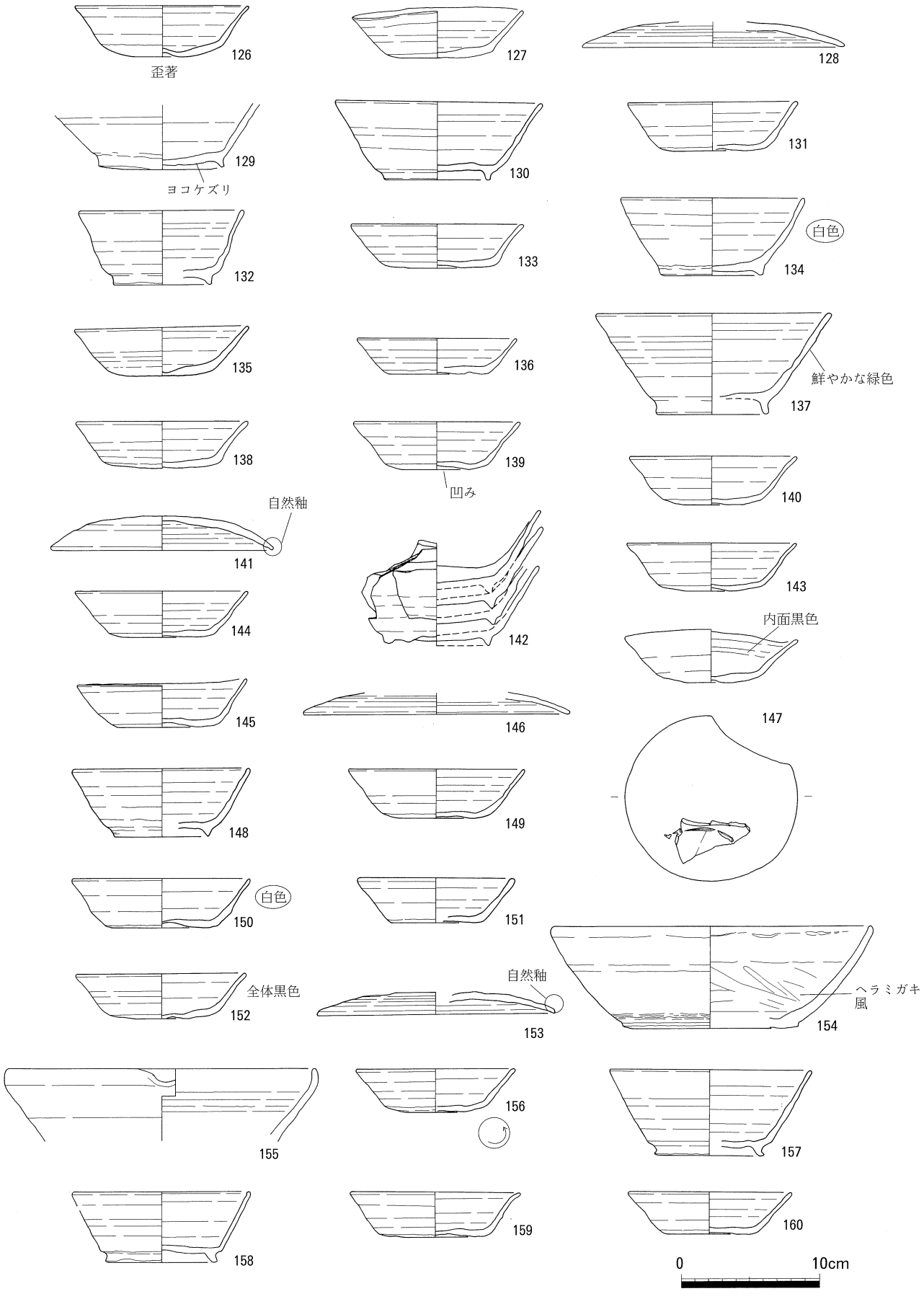
第23図　トレンチ605出土遺物（13年度分）（１/４）



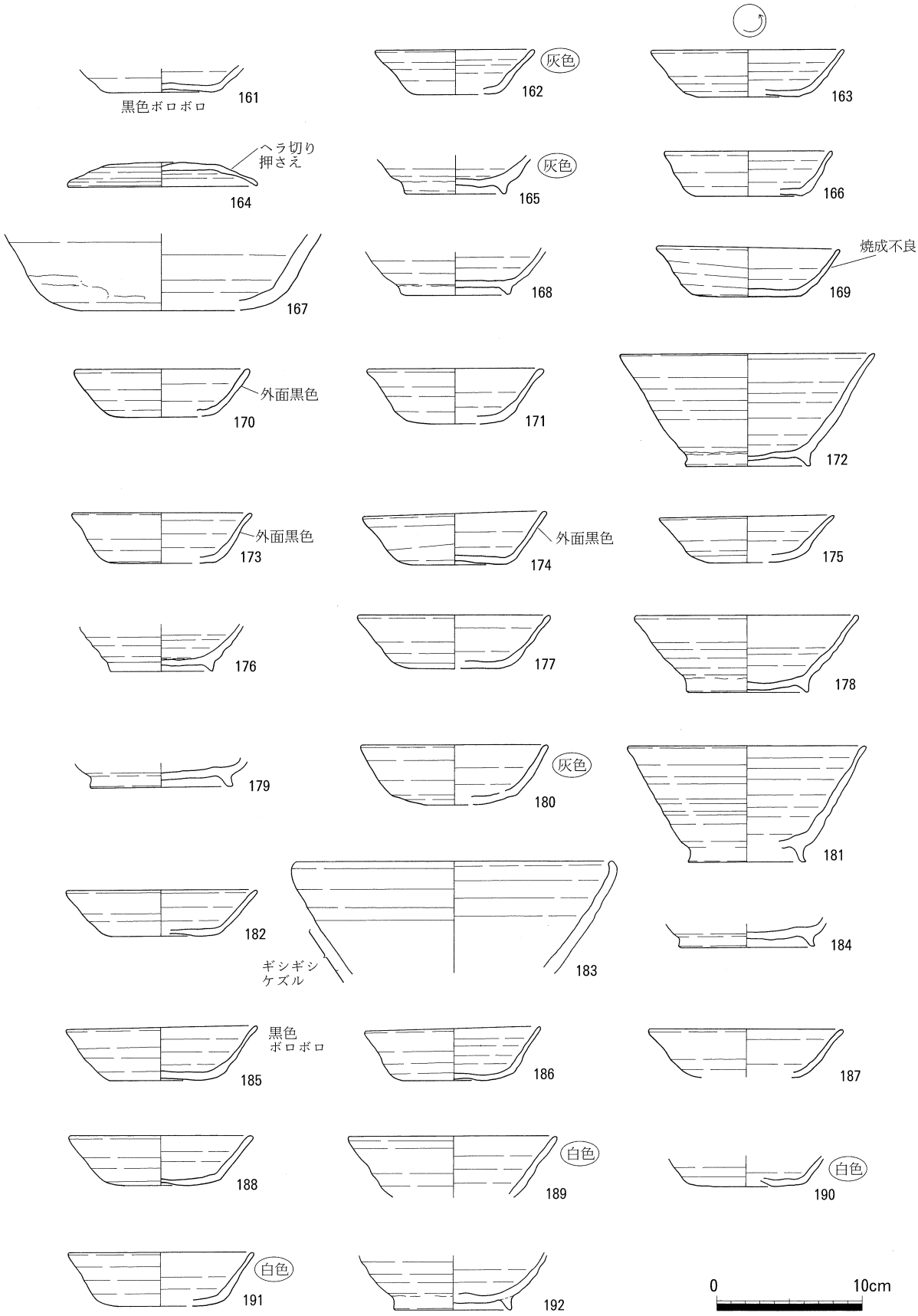
第24図　トレンチ601出土遺物１（1/4）



第25図　トレンチ601出土遺物２（1/4）



第26図　トレンチ601出土遺物３（1/4）



第27図　トレンチ602出土遺物（1/4）

トレンチ601（第20図）

番号	器　種	出土地点	採取日	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	残存部	胎　　土	焼成	釉薬、色調	成形、技法	文様、意匠、陽印	作成時期	備　考
1	坏	MOE-6-T601	011012	12.3	3.1	7.7	12.4	1/3残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	不良	内面：10YR 7/2 にぶい黄橙 外面：10YR 7/2 にぶい黄橙				
2	窯道具 匣鉢	MOE-6-T601	011012	-	(1.8)	12.0	-	底部 1/5残存	0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.5～4.0mm位の茶色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：2.5YR 4/3 にぶい赤褐 外面：2.5YR 3/4 暗赤褐				江戸時代のサヤ
3	坏	MOE-6-T601	011012	12.1	3.2	7.6	12.4	1/4残存	0.1mmの白色粒を含む	良好	内面：2.5Y 6/1 黄灰 外面：2.5Y 6/1 黄灰				
4	平瓶	MOE-6-T601	011012		4.7			把手のみ	0.1mm前後の黒色粒を少量含む 0.1～0.5mm位の白色粒をごく少量含む	良好	内面：10YR 6/1 褐灰 外面：5Y 7/1 灰白				
5	坏蓋	MOE-6-T601-黒	011015	-	2.0	-	17.0 (径)	1/4残存	0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10YR 6/1 褐灰，10YR 5/1 褐灰 外面：2.5Y 6/1 黄灰，2.5Y 6/4 にぶい黄				上面に直径9～10cm位の坏高台跡の窯変あり、内面にも輪郭がはっきりしない窯変あり
6	坏	MOE-6-T601-黒 (旧MO6 T601 黒色クマリ)	011018	16.6	7.3	9.0	16.8	1/10残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：2.5Y 6/1 黄灰 外面：2.5Y 6/1 黄灰				
7	坏	MOE-6-T601-黒 (旧MO6-T601 遺構1黒色（そうじ)中)	011024	-	(2.1)	7.3	-	底部 1/4残存	0.1～1.0mm位の黒色粒を含む 0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：2.5Y 6/1 黄灰 外面：2.5Y 7/1 灰白				
8	坏	MOE-6-T601-黒	011112	12.5	3.3	7.9	12.8	1/4残存	0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：2.5Y 7/1 灰白 外面：2.5Y 7/2 灰黄				
9	坏	MOE-6-T601-黒	011112	12.2	4.8	5.8	12.4	1/4残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を含む 0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：10YR 6/1 褐灰 外面：2.5Y 6/1 黄灰				
10	坏	MOE-6-T601-黒	011112	12.4	3.4	7.8	12.6	1/4残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を含む 0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む	不良	内面：2.5Y 8/2 灰白 外面：2.5Y 8/2 灰白				
11	坏	MOE-6-T601-黒	011112	12.8	3.2	7.6	13.0	1/5残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：5Y 6/1 灰 外面：5Y 7/1 灰白				
12	坏	MOE-6-T601-黒	011112	12.4	3.4	8.2	12.8	1/6残存	0.1～1.0mm位の白色粒を含む	良好	内面：5Y 6/1 灰 外面：2.5Y 5/1 黄灰				
13	坏	MOE-6-T601-黒	011112	12.4	2.9	8.2	12.6	1/3残存	0.1mm前後の白色粒を少量含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：5Y 6/1 灰 外面：5Y 5/1 灰				
14	坏	MOE-6-T601-黒	011112	15.2	6.1	8.2	15.4	1/3残存	0.1mm位の白色粒を含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：5Y 6/1 灰 外面：2.5Y 7/1 灰白				
15	坏	MOE-6-T601-黒	011112	11.8	3.6	7.9	12.0	1/4残存	0.1～1.5mm位の白色粒を含む 0.1mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：7.5Y 5/1 灰 外面：5Y 6/1 灰				歪みがかなりある
16	坏	MOE-6-T601-P-1	011026	14.8	6.1	9.4	15.0	1/5残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10YR 5/1 褐灰 外面：10YR 6/1 褐灰				
17	坏	MOE-6-T601-P-2	011026	15.5	6.7	9.5	15.8	1/5残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5Y 6/1 黄灰 外面：10Y 6/1 灰白				
18	坏	MOE-6-T601-P-3	011026	-	(5.9)	10.8	-	底部 1/5残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10YR 7/1 灰白 外面：5Y 5/1 灰				
19	坏	MOE-6-T601-P-4	011026	-	(5.1)	9.4	-	底部 1/5残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10YR 6/1 褐灰 外面：2.5Y 6/1 黄灰				
20	盤？	MOE-6-T601-P-6	011026	-	(2.1)	-	-	底部 細片のみ	0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：5Y 6/1 灰 外面：5Y 6/1 灰				盤の底？
21	坏	MOE-6-T601-P-7	011026	12.2	3.8	8.2	12.4	1/4残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：5Y 6/1 灰 外面：5Y 8/1 灰白				
22	坏	MOE-6-T601-P-9	011026	12.7	3.8	5.0	13.0	1/4残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む	良好	内面：2.5Y 5/1 黄灰 外面：5Y 5/1 灰				
23	坏	MOE-6-T601 東拡-下層	011029	-	(2.4)	7.7	-	底部のみ 残存	0.1～1.5mm位の白色粒を含む	良好	内面：7.5Y 5/1 灰 外面：5Y 6/1 灰				
24	坏	MOE-6-T601 東拡-下層	011029	12.7	3.0	7.4	13.0	1/5残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を含む 0.1mm前後の白色粒を少量含む	良好	内面：5Y 5/1 灰 外面：5Y 7/1 灰白				
25	坏	MOE-6-T601 東拡-P-6	011113	11.4	3.5	7.1	11.6	1/3残存	0.1mm位の白色粒を含む 0.1mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：5Y 7/1 灰白 外面：2.5Y 6/1 黄灰	外面に火襷状の窯変あり			
26	坏	MOE-6-T601 東拡-P-6	011113	-	3.4	7.3	-	底部のみ残存	0.1mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を多く含む	良好	内面：2.5Y 7/1 灰白 外面：2.5Y 7/1 灰白				
27	坏	MOE-6-T601 東拡-P-12	011102	12.0	3.1	7.1	12.2	1/3残存	0.1～1.0mm位の白色粒を含む	良好	内面：2.5Y 6/1 黄灰 外面：10YR 6/1 褐灰	外面に火襷状の窯変あり			
28	坏	MOE-6-T601 東拡-P-12	011113	12.0	3.2	7.4	12.2	2/3残存	0.1～1.0mm位の黒色粒を含む 0.1～0.5mm位の白色粒を含む	良好	内面：5Y 6/1 灰 外面：5Y 6/1 灰	内面に火襷状の窯変あり			
29	坏	MOE-6-T601 東拡-P-12 MOE-6-T601-黒	011113 011112	12.3	3.6	8.0	12.5	1/3残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：2.5Y 6/1 黄灰 外面：5Y 6/1 灰	外面に火襷状の窯変あり			

表１　東６号窯跡出土遺物観察表（１）

番号	器　種	出土地点	採取日	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	残存部	胎　　土	焼成	釉薬、色調	成形、技法	文様、意匠、陶印	作成時期	備　考
30	坏	MOE-6-T601 東拡-P-12	011113	12.6	3.0	8.2	12.8	1/5残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：5Y 7/1 灰白 外面：2.5Y 7/1 灰白	内外面に火膨状の 窯変あり			内面に溶着片あり
31	坏	MOE-6-T601 東拡-P-12	011113	12.0	3.3	8.1	12.2	1/2残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1mm位の黒色粒を含む	良好	内面：N 6/ 灰 外面：10YR 6/2 灰黄褐				歪みかかなりある
32	坏	MOE-6-T601 東拡-P-12	011113	11.9	3.7	7.6	12.1	4/5残存	0.1～1.0mm位の白色粒を含む0. 1～1.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5Y 6/1 黄灰 外面：2.5Y 6/1 黄灰				
33	片口鉢	MOE-6-T601 東拡-P-13 MOE-6-T601	011102 011012	20.6	8.4	11.6	21.0	1/8残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を含む 0.1～0.5mm位の白色粒を含む	良好	内面：5Y 6/1 灰 外面：2.5Y 7/1 灰白. 10YR 5/2 灰黄褐	口縁部に1ヶ所 トビ口を作る			
34	坏	MOE-6-T601 東拡-P-13	011102	13.2	3.8	6.6	13.4	1/2残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の茶色粒を含む	不良	内面：2.5Y 8/2 灰白 外面：2.5Y 8/2 灰白				
35	坏	MOE-6-T601 東拡-P-13	011102	12.3	3.8	8.0	12.6	1/3残存	0.1mm位の白色粒を含む 0.1mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5Y 6/1 黄灰 外面：5Y 6/1 灰				
36	坏	MOE-6-T601 東拡-P-16	011102	13.2	5.0	7.4	13.4	1/2残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5Y 7/1 灰白 外面：2.5Y 7/1 灰白				
37	壺	MOE-6-T601 東拡-P-19	011113	-	(7.2)	13.8	-	底部 1/6残存	0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.1～1.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：5Y 6/1 灰 外面：5Y 7/1 灰白				
38	壺	MOE-6-T601 東拡-P-22	011113	-	(6.0)	8.6	-	底部 1/3残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10YR 6/1 褐灰 外面：5Y 5/1 灰. 自然釉付着 (緑系)				
39	甕	MOE-6-T601 北拡-黒	011112	-	(2.3)	15.4	-	底部 1/6残存	0.1～1.5mm位の白色粒を含む 0.1～2.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：5Y 4/1 灰 外面：2.5YR 6/6 橙				
40	坏蓋	MOE-6-T601 北拡-上層	011112	-	(1.4)	-	29.0 (径)	1/8残存	0.1mm位の白色粒を含む 0.1mm位の黒色粒を含む	良好	内面：10R 5/6 赤 外面：10R 3/4 暗赤				
41	坏	MOE-6-T601 北拡-上層	011112	13.6	5.8	8.5	14.0	1/8残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を含む 0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：10YR 6/1 褐灰 外面：10YR 6/1 褐灰				
42	壺	MOE-6-T601-サブ	011113 ～ 011114	-	(6.0)	8.2	-	底部 1/4残存	0.1～2.0mm位の黒色粒を含む 0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：2.5Y 6/1 黄灰 外面：10YR 6/3 にぶい黄橙				緑色自然釉か全面に付着、内面底部に規則的に長1cm×0.5cmの押圧

トレンチ602（第21図）

43	坏	MOE-6-T602東	011019	13.5	5.2	8.7	13.8	1/4残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を含む 0.1～0.5mm位の白色粒を含む	良好	内面：10YR 6/1 褐灰 外面：5Y 7/1 灰白. 5Y 5/1 灰				
44	坏	MOE-6-T602東	011019	15.5	(5.5)	-	15.7	口縁部 1/5残存	0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：10YR 6/1 褐灰 外面：2.5Y 7/1 灰黄				
45	坏	MOE-6-T602東	011019	11.2	2.9	7.4	11.4	1/3残存	0.1mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：2.5Y 6/1 黄灰 外面：2.5Y 6/1 黄灰				
46	坏	MOE-6-T602東	011019	12.2	3.1	6.9	12.4	1/6残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：5Y 6/1 灰 外面：5Y 6/1 灰				
47	坏	MOE-6-T602東	011019	18.3	(2.6)	-	18.6	口縁部 1/6残存	0.1～1.0mm位の黒色粒を含む 0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：2.5Y 7/2 灰黄 外面：2.5Y 7/2 灰黄				
48	坏	MOE-6-T602東	011019	14.2	(3.0)	-	14.4	口縁部 1/8残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む	良好	内面：2.5Y 5/1 黄灰 外面：2.5Y 6/1 黄灰				
49	坏	MOE-6-T602東	011019	18.0	(4.0)	-	18.2	口縁部 1/8残存	0.1mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：2.5Y 7/1 灰白 外面：2.5Y 7/1 灰白				
50	坏	MOE-6-T602東	011019	-	(1.6)	6.6	-	底部 2/3残存	0.1mm位の白色粒を含む 0.1～1.5mm位の黒色粒を含む	不良	内面：2.5Y 7/2 灰黄 外面：2.5Y 7/3 浅黄				
51	坏	MOE-6-T602東上層	011029	-	(3.4)	9.0	-	底部 1/2残存	0.1～0.5mmの白色粒を含む 1.0mm前後の黒色粒を含む	良好	内面：2.5Y 7/3 浅黄 外面：2.5Y 7/2 灰黄				
52	坏	MOE-6-T602東上層 MOE-6-T602 東拡焼土内	011029 011030	-	(5.3)	8.2	-	底部 1/2残存	0.1～0.5mmの白色粒を含む 0.1～0.5mmの黒色粒を含む	良好	内面：5Y 6/1 灰 外面：5Y 6/1 灰				
53	坏	MOE-6-T602東上層	011029	11.8	3.3	7.9	12.0	1/3残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を含む 0.1～0.5mm位の白色粒を含む	良好	内面：2.5Y 7/1 灰白 外面：2.5Y 7/2 灰黄				
54	坏	MOE-6-T602東上層	011029	12.7	3.3	8.4	13.0	1/3残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	不良	内面：2.5Y 6/2 灰黄 外面：10YR 4/1 褐灰				
55	坏	MOE-6-T602東上層	011029	12.2	3.5	7.0	12.4	1/6残存	0.1～1.0mm位の黒色粒を含む 0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む	不良	内面：10YR 5/1 褐灰 外面：10YR 4/1 褐灰				
56	坏	MOE-6-T602 東拡焼土内	011030	13.0	3.4	8.1	13.2	1/4残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	不良	内面：2.5Y 4/1 黄灰 外面：2.5Y 4/1 黄灰				
57	坏	MOE-6-T602 東拡焼土内	011030	12.4	3.4	7.8	12.6	1/2残存	0.1mm位の白色粒を含む	不良	内面：10YR 6/2 灰黄褐 外面：10YR 4/1 褐灰				
58	鉢	MOE-6-T602 東拡焼土内	011030	25.6	(7.2)	-	26.4	口縁部 1/8残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を含む 0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：2.5Y 7/2 灰黄 外面：5Y 7/1 灰黄	外面ケズリ調整？			

表１　東６号窯跡出土遺物観察表（２）

トレンチ605（第23図）

番号	器　種	出土地点	採取日	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	残存部	胎　　土	焼成	釉薬、色調	成形、技法	文様、窯匠、陶印	作成時期	備　考
59	坏	MOE-6-T605東	011026	13.1	3.7	8.6	13.3	3/5残存	0.5mm前後の白色粒を少量含む	不良	内面：10YR 7/4 にぶい黄橙 外面：10YR 6/3 にぶい黄橙				
60	土錘	MOE-6-T605東	011029	最大長 5.5	最大幅 4.1	最大厚 4.1		完存	観察不可	良好	A面：2.5Y 6/1 黄灰 B面：7.5YR 4/3 褐（備前焼風の焼け）				有溝

トレンチ601（第24～26図）

61	坏	MOE-6-T601 南区表層	020425	-	(4.2)	8.1	-	底部 1/2残存	0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5Y 7/2 灰黄 外面：2.5Y 6/1 黄灰				
62	甕	MOE-6-T601 南区表層	020425	-	(5.0)	10.1	-	底部 1/4残存	0.1～1.0mm位の黒色粒を含む 0.1～1.0mm位の白色粒を含む	良好	内面：2.5YR 6/6 橙 外面：5YR 6/6 橙		胴部に 陶印：「◎」		江戸時代の甕
63	坏	MOE-6-T601 南区表層	020425	-	(4.9)	9.5	-	底部 3/4残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を含む 0.1～0.5mm位の白色粒を含む	良好	内面：10YR 6/1 褐灰 外面：10YR 6/1 褐灰				
64	坏	MOE-6-T601 南区表層	020425	17.8	(5.4)	9.0	18.0	1/4残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5Y 7/1 灰白 外面：2.5Y 6/1 黄灰				歪著しい
65	坏	MOE-6-T601南区- 南端黒色たまり (5C～下)	020508	-	(2.5)	8.2	-	底部 1/4残存	0.1～1.0mm位の黒色粒を含む 0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：2.5Y 7/1 灰白 外面：2.5Y 7/2 灰黄				
66	坏	MOE-6-T601南区- 南端黒色たまり (5C～下)	020508	11.4	2.8	6.5	11.6	1/4残存	0.1mm位の白色粒を少量含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5Y 7/2 灰黄 外面：2.5Y 7/2 灰黄				
67	坏	MOE-6-T601南区 -南端黒色たまり (5C～下)	020508	16.6	(4.0)	-	16.8	口縁部 1/4残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5Y 7/2 灰黄 外面：2.5Y 6/1 黄灰				
68	坏	MOE-6-T601南区 -南端黒色たまり (堀下中)	020513	12.0	3.6	7.5	12.2	1/5残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	不良	内面：2.5Y 7/2 灰黄 外面：2.5Y 6/1 黄灰				
69	坏	MOE-6-T601南区 -南端黒色たまり (堀下中)	020513	11.6	3.2	7.0	11.8	1/4残存	0.1mm位の白色粒を少量含む 0.1mm位の黒色粒を含む	不良	内面：10YR 8/4 浅黄橙 外面：10YR8/3 浅黄橙				
70	鉢	MOE-6-T601 -黒清掃時	020509	-	(4.3)	12.0	-	底部 1/3残存	0.1～1.0mm位の白色粒を少量含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：N 6/　灰 外面：5Y 6/1 灰				
71	坏	MOE-6-T601 -黒清掃時	020509	17.8	(4.6)	-	18.0	口縁部 1/4残存	0.5mm前後の白色粒を含む	良好	内面：2.5Y 6/1 黄灰 外面：2.5Y 6/1 黄灰				
72	坏蓋	MOE-6-T601 -黒清掃時	020509	14.2	(3.5)	-	14.2 (径)	1/4残存	0.1～0.5mmの白色粒を含む 0.1～1.0mm位の茶色粒を含む	良好	内面：2.5Y 7/1 灰白 外面：2.5Y 7/1 灰白				
73	坏	MOE-6-T601 -黒清掃時	020509	15.5	(5.7)	-	15.6	口縁部 1/4残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を含む 0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：10YR 7/1 灰白 外面：10YR 7/1 灰白				
74	坏	MOE-6-T601-北半	020606	12.0	3.4	7.9	12.1	3/4残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む 0.1mm前後の白色粒を少量含む	良好	内面：N 7/ 灰白 外面：N 7/ 灰白				
75	坏	MOE-6-T601-北 -黒上面検出	020530 ～ 020604	11.2	3.4	7.4	11.4	1/4残存	0.1mm位の白色粒を少量含む 0.1mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：2.5Y 7/1 灰白 外面：2.5Y 6/1 黄灰				
76	坏	MOE-6-T601-北 -黒上面検出	020530 ～ 020604	11.6	2.8	7.4	11.8	1/4残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10YR 6/1 褐灰 外面：N 7/ 灰白				
77	坏	MOE-6-T601-北 -黒上面検出	020530 ～ 020604	12.6	3.2	7.6	12.8	1/5残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を含む 0.1mm前後の白色粒を少量含む	やや不良	内面：2.5Y 7/1 灰白 外面：2.5Y 7/1 灰白				
78	坏	MOE-6-T601南区- 北半-黄中層 (15-20C) MOE-6-T601南区- 黄下（灰上面検出時） MOE-6-T601南区- 黄下黒上面	020513 020527 020528	17.7	6.3	8.8	18.0	底部+ 口縁部 1/8残存	0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.1mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10YR 6/1 褐灰 外面：10YR 5/1 褐灰				
79	坏蓋	MOE-6-T601南区- 黄下黒上面 MOE-6-T601南区- 北半-黄中層(15-20C)	020528 020513	18.8	(1.9)	-	18.8 (径)	1/6残存	0.1～1.0mmの白色粒を少量含む 0.1mm位の茶色粒を含む	良好	内面：2.5Y 7/1 灰白 外面：2.5Y 6/1 黄灰				
80	坏	MOE-6-T601南区- 北半-黄中層(15-20C) MOE-6-T601南区- 黄下黒上面	020513 020526	15.4	6.2	7.8	15.6	1/4残存	0.1～0.5mmの白色粒を含む	良好	内面：10YR 6/1 褐灰 外面：7.5YR 4/1 褐灰				
81	坏	MOE-6-T601南区- 北半-黄中層 (15-20C)	020513	-	(1.7)	7.1	-	底部のみ 残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～2.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：10YR 6/1 褐灰 外面：2.5Y 7/1 灰白				
82	坏蓋	MOE-6-T601南区- 北半-黄中層 (15-20C)	020513	-	(1.8)	-	17.0 (径)	1/5残存	0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：5Y 7/1 灰白 外面：2.5Y 7/1 灰白				
83	坏蓋	MOE-6-T601南区- 北半-黄中層 (15-20C)	020513 ～ 020514	-	(2.5)	-	16.0 (径)	1/3残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を含む 0.1～0.5mm位の白色粒を含む	良好	内面：5Y 7/1 灰白 外面：5Y 7/1 灰白，5Y 5/1 灰白				釉の付着から窯詰め復元可能
84	坏	MOE-6-T601南区- 北半-黄中層 (15-20C)	020513 ～ 020514	15.4	5.3	6.7	15.6	1/4残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5Y 6/1 黄灰 外面：2.5Y 6/1 黄灰				
85	窯道具 匣鉢	MOE-6-T601南区- 北半-黄中層 (15-20C)	020514	11.6	6.8	12.6	13.0	1/5残存	0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mmの黒色粒を含む 0.5mm前後の茶色粒を少量含む	良好	内面：2.5YR 4/2 灰赤 外面：7.5YR 6/4 にぶい橙				江戸時代のサヤ

表１　東６号窯跡出土遺物観察表（３）

番号	器　種	出土地点	採取日	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	残存部	胎　　土	焼成	釉薬、色調	成形、技法	文様、意匠、陶印	作成時期	備　考
86	坏	MOE-6-T601南区-黄下黒上面	020528	13.7	6.9	8.4	14.0	1/6残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む 0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：N 7/ 灰白 外面：5Y 7/1 灰白				
87	坏蓋	MOE-6-T601南区-黄下黒上面	020528	-	(1.8)	-	18.0(径)	1/8残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：N 7/ 灰白 外面：5Y 7/1 灰白				
88	坏蓋	MOE-6-T601南区-黄下黒上面	020528	-	(1.4)	-	15.4(径)	1/5残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を含む 0.1mm前後の白色粒を少量含む	良好	内面：2.5Y 7/1 灰白 外面：2.5Y 7/1 灰白				
89	坏蓋	MOE-6-T601南区-黄下黒上面	020528	-	3.4	-	17.6(径)	1/4残存	0.1mm位の白色粒を含む	良好	内面：5Y 7/1 灰白 外面：N 6/ 灰				
90	坏	MOE-6-T601南区-黄下黒上面	020528	16.4	8.3	9.8	16.6	1/5残存	0.5mm前後の白色粒を含む	良好	内面：10YR 5/1 褐灰 外面：5Y 7/1 灰白				
91	坏蓋	MOE-6-T601南区-黄下黒上面 MOE-6-T601南区-黄下黒上面	020528 020529	-	2.9	-	17.8(径)	1/2残存	0.1mm位の白色粒を含む 0.1mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5Y 7/1 灰白 外面：2.5Y 7/1 灰白				
92	坏	MOE-6-T601南区-南端ベース上面	020514	11.9	3.4	6.9	12.0	1/5残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10Y 6/1 灰 外面：7.5Y 6/1 灰				
93	坏	MOE-6-T601南区-南端ベース上面	020514	-	(2.0)	7.8	-	底1/3残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を含む 0.1～0.5mm位の白色粒を含む	良好	内面：5Y 6/1 灰 外面：5Y 6/1 灰				
94	坏蓋	MOE-6-T601南土手-黒上層	020520	-	(2.3)	-	17.0(径)	1/10残存	0.1～1.0mm位の黒色粒を含む 0.1～0.5mm位の白色粒を含む	良好	内面：5Y 8/1 灰白 外面：5Y 7/1 灰白				
95	坏蓋	MOE-6-T601南土手-黒上層	020520	-	1.9	-	17.2(径)	1/4残存	0.1mm位の白色粒を含む 0.1mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5Y 7/1 灰白 外面：2.5Y 7/2 灰黄				
96	坏蓋	MOE-6-T601南上手-黒上層	020520	-	(1.9)	-	17.6(径)	1/5残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5Y 7/1 灰白 外面：2.5Y 7/1 灰白				
97	片口鉢	MOE-6-T601南上手-黒上層(西より1.5M)	020520	24.0	(5.4)	-	24.4	口縁部1/5残存	0.1～2.0mm位の黒色粒を含む 0.1～1.0mm位の白色粒を含む	良好	内面：2.5Y 7/1 灰白 外面：2.5Y 7/1 灰白				
98	坏	MOE-6-T601南上手-黄1層目 (5C)	020520	12.3	3.5	7.2	12.6	1/4残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む	良好	内面：10YR 6/1 褐灰 外面：10YR 6/1 褐灰				
99	坏	MOE-6-T601南区-P-30	020606	17.6	7.4	9.5	17.8	1/3残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10YR 5/1 褐灰 外面：5Y 7/1 灰白				
100	坏	MOE-6-T601南区-P-30	020606	13.0	5.5	6.8	13.2	1/3残存	0.1～1.0mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：2.5Y 6/1 黄灰 外面：2.5Y 7/1 灰白				
101	坏	MOE-6-T601南区-P-30	020606	15.6	6.1	8.1	15.8	1/2残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む	良好	内面：10YR 7/1 灰白 外面：2.5Y 7/2 灰黄				表面に砂状の付着物あり
102	坏	MOE-6-T601-P-31	020606	12.6	3.6	9.0	12.8	1/2残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む	良好	内面：2.5Y 6/1 黄灰 外面：2.5Y 6/1 黄灰				
103	坏	MOE-6-T601-P-31	020606	12.6	4.3	6.8	12.8	1/3残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10YR 6/1 褐灰 外面：10YR 6/1 褐灰				
104	鉢	MOE-6-T601-P-31	020606	-	(5.4)	-	-	胴部細片	0.1～1.0mm位の黒色粒を含む 0.1～0.5mm位の白色粒を含む	良好	内面：2.5Y 7/1 灰白 外面：2.5Y 7/1 灰白				
105	坏	MOE-6-T601-P-32	020606	12.0	3.9	8.0	12.2	1/3残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：2.5Y 7/1 灰白 外面：2.5Y 7/1 灰白				
106	坏	MOE-6-T601-P-32 MOE-6-T601-P-32-一括	020606 020606	11.9(上から2番目)	4.1(上から2番目)	7.8(1番下)	12.1(上から2番目)		0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5Y 6/1 黄灰 外面：5Y 7/1 灰白	内外面に火襷状の窯変あり			6枚重ね
107	坏	MOE-6-T601-P-32	020606	11.6	3.2	7.3	11.8	1/3残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：2.5Y 6/1 黄灰 外面：2.5Y 6/1 黄灰				
108	坏	MOE-6-T601-P-32	020606	12.2	4.5	6.7	12.4	3/5残存	0.1mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：2.5Y 6/1 黄灰 外面：2.5Y 6/1 黄灰	内外面に自然釉付着(緑)			
109	坏	MOE-6-T601-P-32 MOE-6-T601-P-32-一括	020606 020606	12.1(上)	3.4(上) 4.4(全体)	8.2(上)	12.3(上)		0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：2.5Y 5/1 黄灰 外面：5Y 7/1 灰白	外面に自然釉付着(緑)			2枚重ね
110	坏	MOE-6-T601-P-33	020606	-	(3.0)	7.4	-	底部のみ残存	0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：10YR 6/1 褐灰 外面：2.5Y 7/1 灰白				
111	坏	MOE-6-T601-P-33	020606	-	(2.7)	7.1	-	底部のみ残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：2.5Y 7/1 灰白 外面：2.5Y 7/1 灰白				
112	坏	MOE-6-T601-P-34	020606	12.4	3.4	7.8	12.6	1/3残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	不良	内面：2.5Y 8/3 淡黄 外面：2.5Y 8/3 淡黄				
113	坏	MOE-6-T601-P-35	020606	12.2	3.1	7.2	12.4	1/2残存	0.1mm前後の白色粒を含む	良好	内面：10YR 6/1 褐灰 外面：10YR 6/1 褐灰				
114	坏	MOE-6-T601-P-35	020606	11.8	3.5	7.8	12.0	1/3残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む	良好	内面：2.5Y 6/1 黄灰 外面：2.5Y 6/1 黄灰				
115	坏	MOE-6-T601-P-35 MOE-6-T601-P-38	020606 020606	13.0	3.9	7.4	13.2	1/2残存	0.5mm前後の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：5Y 6/1 灰 外面：5Y 5/1 灰				

表1　東6号窯跡出土遺物観察表（4）

番号	器　種	出土地点	採取日	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	残存部	胎　　土	焼成	釉薬、色調	成形、技法	文様、意匠、陶印	作成時期	備　考
116	坏	MOE-6-T601-P-35 MOE-6-T601-P-38	020606 020606	12.3	4.2	7.9	12.4	2/3残存	0.1mm前後の白色粒を含む	良好	内面：10YR 6/1 褐灰 外面：10YR 6/1 褐灰	外面に自然釉付着(褐色)			
117	坏	MOE-6-T601-P-35-(一括) MOE-6-T601-P-35	020606 020606	-	3.5(1番下) 4.7(全体)	6.6(1番下)	-		0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：2.5Y 7/1 灰白 外面：5Y 6/1 灰	上から3枚目の口縁部に自然釉付着(褐色系)			5枚重ね
118	坏	MOE-6-T601-P-36	020606	12.0	3.6	8.0	12.2	1/3残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1mm前後の黒色粒を少量含む	良好	内面：N 7/　灰白 外面：N 7/　灰白				
119	坏	MOE-6-T601-P-37	020606	12.0	3.6	8.0	12.2	1/2残存	0.1mm位の白色粒を少量含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5Y 6/1 黄灰 外面：2.5Y 6/1 黄灰				
120	坏	MOE-6-T601-P-37 MOE-6-T601-P-39 MOE-6-T601-P-40	020606 020606 020608	16.4	7.1	7.0	16.8	1/4残存	0.1～2.0mm位の白色粒を含む 0.1mm前後の黒色粒を少量含む	不良	内面：2.5Y 7/1 灰白 外面：2.5Y 7/2 灰黄				
121	鉢	MOE-6-T601-P-38	020606	25.8	(4.3)	-	26.0	口縁部1/8残存	0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：2.5Y 6/1 黄灰 外面：2.5Y 6/1 黄灰	口縁端部がほぼ直線的に開く			
122	坏	MOE-6-T601-P-38	020606	18.2	(8.1)	-	18.6	1/5残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5Y 7/1 灰白 外面：7.5Y 7/1 灰白	外面に自然釉付着(緑系)			
123	坏	MOE-6-T601-P-39	020606	12.0	3.4	7.7	12.4	1/4残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：10YR 6/1 褐灰 外面：7.5YR 6/2 灰褐				
124	坏	MOE-6-T601-P-39	020606	16.0	7.0	8.4	16.2	1/3残存	0.1mm前後の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5Y 7/1 灰白 外面：2.5Y 7/1 灰白				
125	坏	MOE-6-T601-P-39	020606	-	4.3(全体) 3.2(上)	-	-		0.1～0.5mm位の白色粒を含む	良好	内面：10YR 6/1 褐灰（上） 外面：10YR 6/1 褐灰（下）	内外面に火襷状の窯変あり			3枚重ね
126	坏	MOE-6-T601-P-40	020606	12.5	3.7	8.9	12.6	2/3残存	0.1mm前後の白色粒を含む	良好	内面：N 5/ 灰 外面：N 6/ 灰	内外面に火襷状の窯変あり			
127	坏	MOE-6-T601-P-40	020606	12.2	3.7	7.6	12.4	9/10残存	0.1mm前後の白色粒を含む	良好	内面：N 6/ 灰 外面：N 6/ 灰	内外面に火襷状の窯変あり			
128	坏蓋	MOE-6-T601-P-40	020606	-	(1.9)	-	19.0(径)	1/5残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：N 7/ 灰白 外面：5Y 7/1 灰白				
129	坏	MOE-6-T601-P-40	020606	-	(4.7)	9.1	-	底部のみ残存	0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：N 7/ 灰白 外面：5Y 5/1 灰				
130	坏	MOE-6-T601-P-40 MOE-6-T601-P-41	020608 020608	14.8	5.8	7.6	15.0	2/3残存	0.1mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：2.5Y 6/1 黄灰 外面：2.5Y 6/1 黄灰				
131	坏	MOE-6-T601-P-40	020608	12.2	3.6	8.0	12.4	1/4残存	0.1mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：N 7/ 灰白 外面：N 7/ 灰白	外面に火襷状に窯変あり			
132	坏	MOE-6-T601-P-40	020608	11.7	5.4	7.0	12.0	1/3残存	0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：5Y 7/1 灰白 外面：5Y 6/1 灰				
133	坏	MOE-6-T601-P-40 MOE-6-T601-P-40	020608 020610	12.3	3.2	8.1	12.5	2/3残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む	良好	内面：N 7/ 灰白 外面：N 7/ 灰白	内外面に火襷状の窯変あり			口縁部の一部に自然釉付着（褐色系）
134	坏	MOE-6-T601-P-40 MOE-6-T601-P-41	020608 020608	13.2	5.8	9.3	13.4	1/2残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む 0.1mm前後の白色粒を極少量含む	不良	内面：2.5Y 8/1 灰白 外面：2.5Y 7/1 灰白				
135	坏	MOE-6-T601-P-40	020610	12.4	3.2	8.3	12.6	2/3残存	0.1mm位の白色粒を含む 0.1mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：2.5Y 6/1 黄灰 外面：2.5Y 6/1 黄灰	内外面に火襷状の窯変あり			
136	坏	MOE-6-T601-P-40	020610	11.4	2.6	8.0	11.6	1/2残存	0.1mm前後の白色粒を含む	良好	内面：N 7/ 灰白 外面：N 6/ 灰	内外面に火襷状の窯変あり			
137	坏	MOE-6-T601-P-40	020610	16.8	7.4	8.1	17.2	1/4残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：5Y 7/1 灰白 外面：2.5Y 7/2 灰黄	外面に緑釉の如くガラス質の釉			
138	坏	MOE-6-T601-P-41 MOE-6-T601-北半	020608 020606	12.3	3.4	8.4	12.5	4/5残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む	良好	内面：2.5Y 6/1 黄灰 外面：2.5Y 6/1 黄灰	内外面に火襷状の窯変あり			
139	坏	MOE-6-T601-P-41 MOE-6-T601-北半	020608 020606	11.7	3.5	7.5	12.0	1/3残存	0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を極少量含む	良好	内面：5Y 6/1 灰 外面：5Y 6/1 灰	外面に火襷状の窯変あり			
140	坏	MOE-6-T601-P-41	020608	12.1	3.5	7.3	12.3	1/2残存	0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：5Y 6/1 灰 外面：5Y 6/1 灰	内外面に火襷状の窯変あり			
141	坏蓋	MOE-6-T601-P-41	020608	-	2.5	-	16.2(径)	1/4残存	0.1～2.0mm位の黒色粒を含む 0.1～0.5mm位の白色粒を含む	良好	内面：N 7/ 灰白 外面：N 7/ 灰白				
142	坏	MOE-6-T601-P-41 MOE-6-T601-北半	020608 020606	-	5.8(1番下) 9.9(全体)	7.4(下から2番目)			0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：N 7/ 灰白 外面：N 7/ 灰白				5枚重ね
143	坏	MOE-6-T601-P-41	020608	12.3	3.5	7.8	12.4	1/4残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10Y 6/1 灰 外面：N 7/ 灰白				
144	坏	MOE-6-T601-P-41	020608	12.4	3.4	7.8	12.6	1/2残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5Y 5/1 黄灰 外面：2.5Y 5/1 黄灰	内外面に火襷状の窯変あり			
145	坏	MOE-6-T601-P-41	020608	12.2	3.5	7.9	12.3	4/5残存	0.1mmの白色粒を少量含む 0.5mm前後の黒色粒を含む	良好	内面：2.5Y 5/1 黄灰 外面：2.5Y 6/1 黄灰				

表１　東６号窯跡出土遺物観察表（５）

番号	器　種	出土地点	採取日	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	残存部	胎　　土	焼成	釉薬、色調	成形、技法	文様、意匠、陶印	作成時期	備　考
146	坏蓋	MOE-6-T601-P-41	020608	-	(1.6)	-	19.4(径)	1/6残存	0.1～0.5mm位の茶色粒を多く含む	やや良好	内面：2.5Y 7/1 灰白 外面：2.5Y 7/1 灰白				
147	坏	MOE-6-T601-P-41	020608	12.6	3.9	7.9	12.7	9/10残存	0.1～1.0mm位の白色粒を含む	良好	内面：N 4/　灰 外面：5Y 6/1 灰	内面に火襷状の窯変あり			外面に陶片が付着
148	坏	MOE-6-T601-P-41	020608	12.7	5.0	6.8	13.0	1/3残存	0.5mm前後の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の茶色粒を含む	良好	内面：2.5Y 7/1 灰白 外面：2.5Y 7/1 灰白				
149	坏	MOE-6-T601-P-41	020608	12.6	3.6	7.8	12.8	1/3残存	0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の茶色粒を含む	良好	内面：5Y 6/1 灰 外面：5Y 6/1 灰	内外面に火襷状の窯変あり			
150	坏	MOE-6-T601-P-41	020608	12.8	3.6	8.2	13.0	1/3残存	0.1～1.0mm位の茶色粒を含む	不良	内面：2.5Y 8/2 灰白 外面：2.5Y 8/2 灰白				
151	坏	MOE-6-T601-P-41	020608	11.1	3.3	7.1	11.4	1/3残存	0.1mm前後の茶色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：2.5Y 6/1 黄灰 外面：5Y 6/1 灰				
152	坏	MOE-6-T601-P-41	020608	12.2	3.3	7.6	12.4	1/3残存	0.1mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：10YR 4/1 褐灰 外面：10YR 5/1 褐灰	内面に火襷状の窯変あり			
153	坏蓋	MOE-6-T601-P-41	020608	-	(1.6)	-	17.4	1/8残存	0.1mmの白色粒を少量含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：N 7/　灰白 外面：2.5Y 6/1 黄灰				
154	鉢	MOE-6-T601-P-42	020606	23.0	7.5	12.8	23.4	1/4残存	0.1～1.0mmの白色粒を含む 0.1～1.0mmの黒色粒を含む	良好	内面：10YR 6/1 褐灰 外面：10YR 6/1 褐灰	内面にヘラナデ調整			
155	片口鉢	MOE-6-T601-P-43	020606	22.4	(5.3)	-	23.0	口縁部1/8残存	0.5mm前後の黒色粒を少量含む	良好	内面：5Y 7/1 灰白 外面：N 7/　灰白	口縁部に1ヶ所トビ口を作る、外面ケズリ調整？			
156	坏	MOE-6-T601-P-43 MOE-6-T601南区-北半-黄中層(15-20C)	020606 020513～020514	11.4	3.1	7.4	11.6	1/3残存	0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：2.5Y 7/1 灰白 外面：10YR 6/1 褐灰				
157	坏	MOE-6-T601-P-46	020606	14.5	6.2	7.8	14.8	1/3残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1mmの黒色粒を少量含む	良好	内面：2.5Y 6/1 黄灰 外面：2.5Y 6/1 黄灰	内面に火襷状の窯変あり			
158	坏	MOE-6-T601-P-46	020606	12.8	5.2	8.0	13.0	2/3残存	0.1mm位の白色粒を含む 0.5mm前後の黒色粒を少量含む	良好	内面：10YR 6/2 灰黄褐 外面：10YR 6/2 灰黄褐				
159	坏	MOE-6-T601-P-46	020606	12.2	3.4	8.0	12.4	ほぼ完存	0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5Y 6/1 黄灰 外面：2.5Y 6/1 黄灰				
160	坏	MOE-6-T601-P-47	020608	11.6	3.1	6.4	12.0	1/2残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を含む 0.1～0.5mm位の白色粒を含む	良好	内面：10YR 6/1 褐灰 外面：10YR 6/1 褐灰	底に火襷状の窯変あり			

トレンチ602南区（第27図）

161	坏	MOE-6-T602南区-窯西1区-P-1	020605	-	(1.6)	8.4	-	底部3/4残存	0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む	不良	内面：N 3/　暗灰 外面：N 3/　暗灰				
162	坏	MOE-6-T602南区-窯西2区-床上3～5cm	020524	10.9	3.1	6.2	11.0	1/5残存	0.1～1.0mm位の白色粒を少量含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	不良	内面：5Y 7/1 灰白 外面：5Y 7/1 灰白				
163	坏	MOE-6-T602南区-窯西2区-P-2	020605	13.0	3.3	7.0	13.2	1/5残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む 0.1mm位の白色粒を極少量含む	良好	内面：5Y 6/1 灰 外面：10Y 7/1 灰白				
164	坏蓋	MOE-6-T602南区-窯西2区-P-2	020605	-	1.7	-	13.0(径)	3/5残存	0.1mm位の白色粒を含む 0.5mm前後の黒色粒を含む	良好	内面：5Y 6/1 灰 外面：2.5Y 6/1 黄灰				
165	坏	MOE-6-T602南区-窯西2区-P-9	020605	-	(2.4)	6.8	-	底部のみ残存	0.1～1.0mm位の黒色粒を含む	やや不良	内面：5Y 8/1 灰白 外面：2.5Y 8/2 灰白				
166	坏	MOE-6-T602南区-窯西3区	020606	11.4	3.1	7.4	11.6	1/4残存	0.1mm前後の黒色粒を含む	不良	内面：10YR 4/1 褐灰 外面：10YR 3/1 黒褐				
167	甕底？	MOE-6-T602南区-窯西1区-P-1 MOE-6-T602南区-窯西3区-P-5	020605 020605	-	(5.3)	12.4	-	底部1/3残存	0.1～2.0mm位の黒色粒を含む 0.1～1.0mm位の白色粒を含む	良好	内面：5Y 6/1 灰 外面：5Y 7/1 灰白				
168	坏	MOE-6-T602南区-窯西3区-P-3	020605	-	(3.0)	7.6	-	底部1/3残存	0.1～3.0mm位の黒色粒を含む 0.1～1.0mm位の白色粒を含む	良好	内面：5Y 6/1 灰 外面：7.5Y 6/1 灰				
169	坏	MOE-6-T602南区-窯西3区-P-7 MOE-6-T602南区-窯西3区-P-4	020605 020605	12.3	3.5	7.4	12.6	3/4残存	0.1～1.0mm位の黒色粒を含む 0.1～1.0mm位の白色粒を少量含む	不良	内面：2.5Y 4/1 黄灰、10YR 7/3　にぶい黄橙 外面：10YR 6/4 にぶい黄橙、10YR 4/1 褐灰				
170	坏	MOE-6-T602南区-窯西3区-P-13 MOE-6-T602南区-窯西3区-P-5	020610 020605	11.8	3.3	7.4	12.0	1/4残存	0.1～1.0mm位の黒色粒を含む 0.1mm位の白色粒を含む	不良	内面：2.5Y 4/1 黄灰 外面：5Y 3/1 オリーブ黒				
171	坏	MOE-6-T602南区-窯西3区-P-5	020605	11.6	3.8	6.8	12.2	1/4残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を含む 0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む	不良	内面：2.5Y 5/1 黄灰 外面：10YR 4/1 褐灰	深め			
172	坏	MOE-6-T605-P-0 MOE-6-T602南区-窯西3区-P-5（旧MOE-6-T605-埋出）	011112 020605 (011102)	17.2	7.7	8.5	17.4	1/3残存	0.1～1.0mm位の黒色粒を含む 0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：5Y 6/1 灰 外面：5Y 6/1 灰				
173	坏	MOE-6-T602南区-窯西3区-P-6	020605	12.2	3.4	7.6	12.4	1/4残存	0.1～0.5mmの黒色粒を含む	不良	内面：2.5Y 7/2 灰黄 外面：10YR 4/1褐灰				

表１　東６号窯跡出土遺物観察表（６）

番号	器　種	出土地点	採取日	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	最大径（cm）	残存部	胎　　土	焼成	釉薬、色調	成形、技法	文様、意匠、陶印	作成時期	備　考
174	坏	MOE-6-T602南区-窯西3区-P-13 MOE-6-T602南区-窯西3区-P-6 MOE-6-T602南区-窯西3区-P-7 MOE-6-T602南区-窯西3区-P-12 MOE-6-T602南区-窯西3区-P-15	020610 020605 020605 020610 020610	12.6	3.6	7.0	12.7	1/2残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	不良	内面：10YR 4/1 褐灰 外面：2.5Y 4/1 黄灰				
175	坏	MOE-6-T602南区-窯西3区-P-6	020605	11.8	3.3	6.4	12.0	1/2残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	不良	内面：2.5Y 5/1 黄灰 外面：2.5Y 4/1 黄灰				
176	坏	MOE-6-T602南区-窯西3区-P-7	020605	-	(3.1)	7.0	-	1/3残存	0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5Y 8/2 灰白 外面：5Y 6/1 灰				
177	坏	MOE-6-T602南区-窯西3区-P-7	020605	13.1	3.7	6.3	13.4	1/4残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を含む 0.1mm位の白色粒を少量含む	不良	内面：2.5Y 6/2 灰黄 外面：2.5Y 6/2 灰黄				
178	坏	MOE-6-T602南区-窯西3区-P-8 MOE-6-T602南区-窯西3区-P-12 MOE-6-T602東上層	020605 020610 011029	15.1	5.3	8.2	15.4	1/3残存	0.1～1.0mm位の黒色粒を含む 0.1mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：5Y 7/1 灰白 外面：5Y 7/1 灰白				
179	坏	MOE-6-T602南区-窯西3区-P-8	020605	-	(1.7)	9.7	-	底部 1/4残存	0.1～2.0mm位の黒色粒を含む 0.1～1.0mm位の白色粒を含む	良好	内面：5Y 7/1 灰白 外面：5Y 6/1 灰				
180	坏	MOE-6-T602南区-窯西3区-P-8	020605	12.8	4.1	8.8	13.0	1/4残存	0.1～1.0mm位の黒色粒を含む 0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む	不良	内面：2.5Y 7/2 灰黄 外面：2.5Y 7/1 灰白				
181	坏	MOE-6-T602南区-窯西3区-P-8	020606	16.2	8.0	8.0	16.4	1/5残存	0.1～1.0mmの白色粒を含む 0.1mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：5Y 5/1 灰 外面：5Y 7/3 浅黄				
182	坏	MOE-6-T602東 拡焼土内 MOE-6-T602南区-窯西3区-P-8	011030 020606	13.0	3.1	6.8	13.2	1/2残存	0.1mm位の黒色粒を含む	不良	内面：10YR 5/1 褐灰 外面：10YR 4/1 褐灰				
183	鉢	MOE-6-T602南区-窯西3区-P-10	020610	21.7	(7.7)	-	22.4	口縁部 1/6残存	0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む 0.5mm前後の黒色粒を含む	良好	内面：2.5Y 7/2 灰黄 外面：2.5Y 7/2 灰黄	口縁端部で内湾する			
184	坏	MOE-6-T602南区-窯西3区-P-11	020610	-	(1.7)	9.2	-	底部 1/2残存	0.1～1.0mm位の黒色粒を含む 0.1～0.5mm位の白色粒を含む	良好	内面：5Y 7/1 灰白 外面：5Y 6/1 灰				
185	坏	MOE-6-T602南区-窯西3区-P-11 MOE-6-T602南区-窯西3区-P-14 MOE-6-T602南区-窯西3区-P-15 MOE-6-T602南区-窯西3区	020610 020610 020610 020606	13.0	3.8	7.3	13.1	1/2残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を含む 0.1～0.5mm位の白色粒を含む	不良	内面：2.5Y 4/1 黄灰 外面：2.5Y 4/1 黄灰				
186	坏	MOE-6-T602南区-窯西3区-P-12 MOE-6-T602南区-窯西3区-P-15	020610 020610	12.0	3.7	6.9	12.2	3/5残存	0.1mm位の黒色粒を極少量含む	不良	内面：10YR 4/1 褐灰 外面：2.5Y 7/4 浅黄				
187	坏	MOE-6-T602南区-窯西3区-P-12 MOE-6-T602南区-窯西3区-P-15	020610 020610	13.2	(3.3)	-	13.4	口縁部 1/4残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	不良	内面：2.5Y 8/4 淡黄 外面：2.5Y 7/3 浅黄				
188	坏	MOE-6-T602南区-窯西3区-P-13 MOE-6-T602南区-窯西3区-P-15	020610 020610	12.5	3.4	8.0	12.7	1/2残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む 0.1～0.5mm位の白色粒を極少量含む	不良	内面：N 4/ 灰 外面：N 3/ 暗灰				
189	坏	MOE-6-T602南区-窯西3区-P-13 MOE-6-T602南区-窯西3区-P-15	020610 020610	14.2	(4.2)	-	14.4	1/5残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1mm位の黒色粒を少量含む	不良	内面：2.5Y 8/1 灰白 外面：2.5Y 8/1 灰白				
190	坏	MOE-6-T602南区-窯西3区-P-13	020610	-	(1.9)	7.8	-	底部 1/2残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	不良	内面：10YR 4/1 褐灰 外面：2.5Y 8/3 淡黄				
191	坏	MOE-6-T602南区-窯西3区-P-14	020610	12.6	3.7	8.1	12.8	1/4残存	0.1～1.0mm位の黒色粒を含む 0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む	やや不良	内面：5Y 7/1 灰白 外面：2.5Y 8/2 灰白				
192	坏	MOE-6-T602南区-窯西3区-P-15	020610	-	(3.7)	8.1	-	底部 1/4残存	0.1～0.5mm位の黒色粒を含む 0.1～1.0mm位の白色粒を含む	良好	内面：2.5Y 6/1 黄灰 外面：2.5Y 6/1 黄灰				

表１　東６号窯跡出土遺物観察表（７）

第４章　ＫＰ－１地点窯跡の調査概要

第１節　位置と調査の概要

遺跡は、国指定史跡「伊部南大窯跡」から西側100m、標高30m前後の北向きの緩斜面に立地する。北は、伊部駅南側に広がる住宅地の北端に接する。遺跡の立地する場所は「牛神下」という小字名で、周辺には「西竈」「竈ノ下」という場所もあるが、遺跡としては周知されていない。遺跡概況としては、全長20m前後、幅数mの高まりが２ヵ所並列するが、東側の高まりがやや緩い。平成12年度に実施した備前市内遺跡分布調査において、江戸時代後期の陶片の散布状況から、連房式窯跡があるのではないかと推定された。この知見を受け、平成13年４月に磁気探査（註１）を奈良文化財研究所西村康先生に依頼して実施した結果、東側の高まりが窯体の可能性が非常に高く、西側は物原と推定された。窯体の東側は狭長な谷地形になっている。

調査にあたってこの窯跡に関する所伝等を調べた。関連する文献等が２～３あるので、第６章にまとめた。

窯と想定される地点は、金重有邦氏宅の敷地内にあり、一段高くなった南側に先生の居宅、工房がある。調査は、最小面積の発掘で窯構造をおさえることを主眼に、推定される窯の主軸から東半分を部分的に調査し、西半分は未掘とした。窯西側にある物原については、表面観察のみにとどめた。作業については、埋め戻しでクローラーダンプを使用した以外はすべて手作業でおこなった。

第２節　遺構の概要

１．連房式登り窯

調査は表面観察によって推定された窯の主軸を設定し、それを任意の基準線として、断面観察を行いながら、東半分の一部分について、窯内の堆積物の除去を行った。その結果、ゆるやかな南斜面の標高28～32mの間に構築された連房式の登り窯を検出した。なお、以下に記載する窯各部の数値は、東半分の一部と西半分が未掘であるため推定復元した値もあるが、表面観察により残存部等の実測をして正確を期した。

規模は全長が水平距離で約18.6m、斜距離で約19.1m、房の幅は最大で約4.5mある。煙出し部を除く燃焼室、焼成室の内寸は18.1m、斜距離で18.5mである。勾配は燃焼部が12°、焼成部が16°、煙出部が４°～11°、平均13°あり、主軸は北北西から南南東に向いている。窯本体で残存しているのは、窯の基底部に近い窯壁と隔壁の一部、各焼成室の床面で、天井は崩壊していて残存していない。最下段は平面形で逆三角形の燃焼室（初戸）があり、これに６つの焼成室（房・部屋）が続き、第６番目の焼成室の後ろは「煙道」と呼ばれる房がつく。その後面は簡易な構造の煙出しになっている。

燃焼室（初戸）は奥行1.9m、焚口はやや東によっていて基底部で幅0.7mを測る。床面及び窯壁の内面は堅固に焼き締まっていた。残存高は0.3mから0.5mで窯壁は、ほぼ直立していた。窯外は未掘であるため焚口付近の様子は不明である。燃焼室と焼成室を隔てる隔壁の下部には素穴と呼ばれる火

第28図　ＫＰ－１・ＫＰ－２地点窯跡トレンチ位置図（1/400）

格子穴が取りつく。第１房にとりつく隔壁は、残存最大高1.0mの平断面隅丸の五角形の土柱で支えられている。土柱は縄目状の圧痕が螺旋状に観察される。主軸部でほぼ全体検出できた平断面が三角形気味なものが中央で、西側未掘部分の地表面にもう１本露出していることから燃焼室と第１房の隔壁は３本で支えられていたと考えられる。この火格子穴部分のみ床面角度が20°と急傾斜になっている。

燃焼室に続く第１房から第６房は基本的に同じ構造となっている。各房を隔てる隔壁の下部は素穴と呼ばれる火格子穴がある。素穴は、平均して直径約0.4m、高さ0.5mの円柱状の土柱で隔壁を支える構造である。土柱の表面には藁の縄目が螺旋状に施されていて、製作方法が推測できる。土柱間は0.2から0.3m弱である。検出された土柱は各隔壁１から２本であるが、未堀部分を含めると円柱状の土柱で各６本と推定される。ただし、第５房と第６房の間の土柱は円柱ではなく、幅0.2m、奥行0.3mの角柱が３本確認でき、角柱の抜き取り痕跡も含めて考えると、約0.2.mの間隔で、計９本で隔壁をささえていたと推定される。この角柱が抜き取られた痕跡は、６房から煙出しの隔壁を除くすべての隔壁の中央部で確認できることから、当初は円柱で隔壁を支えていたものが、後に角柱に改修されたと推定できる。また、各房の隔壁の前後には溝及び段構造のものは検出できなかったので、１～６房の床面は平面が連続している無段の構造と考えられる。

以上のように当初のＫＰ－１窯は、素直径0.4mの円柱状の土柱６本で隔壁を支えるが、第１房にとりつくそれは、残存高1.0mの平断面隅丸の五角形の土柱３本で支えられている。これは平成11年に発掘調査で確認された西１号窯跡同様、燃焼室から焼成室へ効率良く熱を伝えるため素穴部の開口を広くとる必要があること、焼成室が三角形に絞り込まれているためこの部分を構造的に堅固する必要があること、この隔壁部分で勾配が12°から20°と急変しているためさらに構造的に力がかかること、以上から、通常よりも規格の大きな土柱を使用し、本数を少なくする必要があったと考えられる。

窯の主要な構造材は、30cm前後の「らんま」と呼ばれる未焼成の粘土ブロックと粘土と推定されるが、全ての部分でその単位を区別できるわけではない。また燃焼部（初戸）内に幅0.7m、長さ1.0m、厚さ0.6mの崩落した天井片が検出され、内面には繊維状の圧痕が観察できることから、築窯時窯壁の内側への崩落を防ぐために用いられた材と推定される。

各房の幅は内法で、第１房の推定幅3.6m、奥行2.0m、ほぼ中央部第４房の推定幅4.5m、奥行2.0m、第６房の推定幅4.0m、奥行2.2m、煙戸と呼ばれる最後尾の房は推定幅3.6m、奥行1.7mで、窯中央部がやや膨らむ平面形が推定できる。

６房から煙戸にかけての床面は序々に勾配がゆるくなっていて、６房付近で11°、煙道で４°と傾斜をもたなくなっている。また煙戸の床面は５cm程度床を上げる貼り替えが行なわれている。

煙出しは、煙道の後方の壁下の素穴に取り付けられている。この部分の隔壁は円柱ではなく、土管と幅0.3m×残存高さ0.4mの空間で構成される簡易な排煙設備で、推定５ヵ所ある。煙戸側壁を延伸する形で幅0.3mの空間があり、そこから0.5mの箇所に、床面にほぼ半分埋没する形で径0.2m土管が隔壁に埋め込まれている。隔壁ほぼ中央部には、不定形な台形様の高さ約0.4mの煙出しが推定されるが、西側部分は未掘である。

各房の入り口は、第２房、第４房、第６房で東側、第１房、第３房、第５房、煙道で西側につくことが推定される。入り口幅は基底部で0.6m前後である。各房の焚口穴については、窯壁の残存部が高いものでも床面から0.6m程度であるため、確認できなかった。

作業場や覆屋の柱穴の痕跡はトレンチの設定が窯を中心にしたため確認できなかった。

また、今回の調査では主軸断面の断ち割りはできなかったが、全体の地形などから窯は基本的に旧地形の傾斜を利用して、部分的に地山を削り出した基盤上に構築されているようである。

窯内の堆積は基本的に２層に分かれる。上層は黒褐色の腐植土層の堆積で、下層は窯壁崩壊による堆積である。窯壁が崩落して堆積した層は、各房により、破片の大きさや色調が多少異なるが、基本的には形成過程は同じである。焼成室床面には、さやや陶板片が、不良な製品とともに堆積していた。

２房床面においては、0.3m×0.3m前後の陶板を数枚重ねて、段上に組んだ構造物が検出された。陶板と床面の間に陶片を挟みこみ、陶板面を水平に保つ工夫をしていることから、焼成時の窯道具と推定できる。こうした状況から、窯は最後まで機能していたと考えられ、突発的な事故等で終焉を迎えたのではないと推定される。

２．溝

煙出しの後方には幅２ｍ前後の溝が東西方向に走るが、この溝が窯にともなうものか確認するため、窯の主軸を延長し溝を直交する形でトレンチを設定した。断面観察や溝内に堆積している遺物の状況から、溝は地山を削り込んで構築したもので、この窯を保護するために排水施設を構築した可能性が高いことが判明した。この溝内には16世紀代の遺物も混入していることから、居宅造成時に南側部分は埋没したと考えられた。

３．物　原

窯の主軸から西側10ｍのところには、長さ20m、幅約10m、最大高さ４ｍにわたって、不良品やさやなどの窯道具をまとめて投棄した物原が形成されている。今回の調査は物原部分では実施していないので、堆積状況については不明であるが、窯道具や大型品が多いのではないかと思われる。

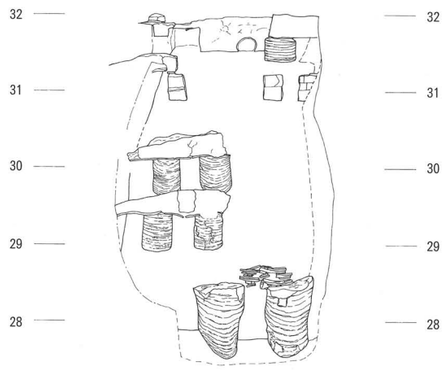
窯の東側については窯に隣接する形で幅３ｍのコンクリート舗装道があり、そこから東側は狭長な谷になって急激に落ち込んでいる。この部分に物原が形成されていたか不明ではあるが、現況の観察からその可能性は低いと推定される。

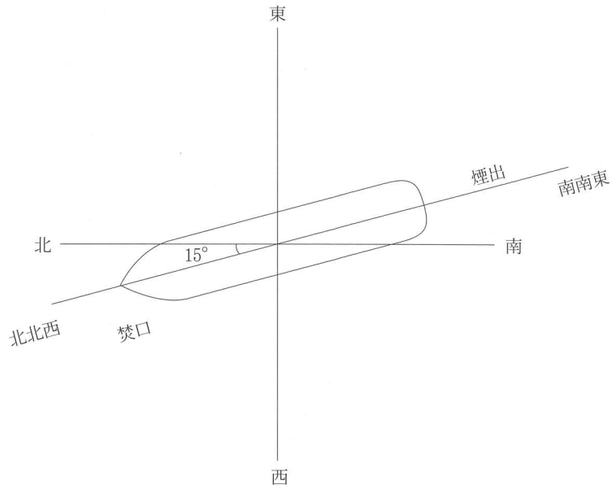
第３節　遺　　物

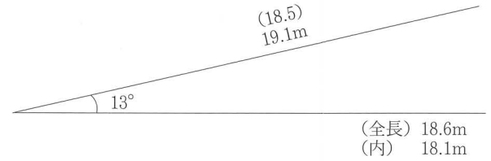
出土した遺物はそのほとんどが備前焼である。窯の西側には長さ20m、幅約10m、最大高さ４ｍの巨大な物原があるが、今回記述する遺物は主に窯内から出土したものが中心になる。窯内の遺物の半数以上は陶板状の窯道具や匣鉢の破片である。それらは膨大な量になるため発掘調査時に陶印のあるものや完形に近いものなど資料的価値がより高いものを選別し、遺物として持ち帰った。それ以外のものについては、現地にて土のう袋につめ出土したそれぞれの地点に戻した。

主な遺物は、人形徳利、角徳利、小形徳利、擂鉢、甕、花入、盃、灯明皿、平鉢、急須、細工物など相当な種類にのぼる。量的には甕類が多く、それに徳利類、擂鉢、皿類が続く。

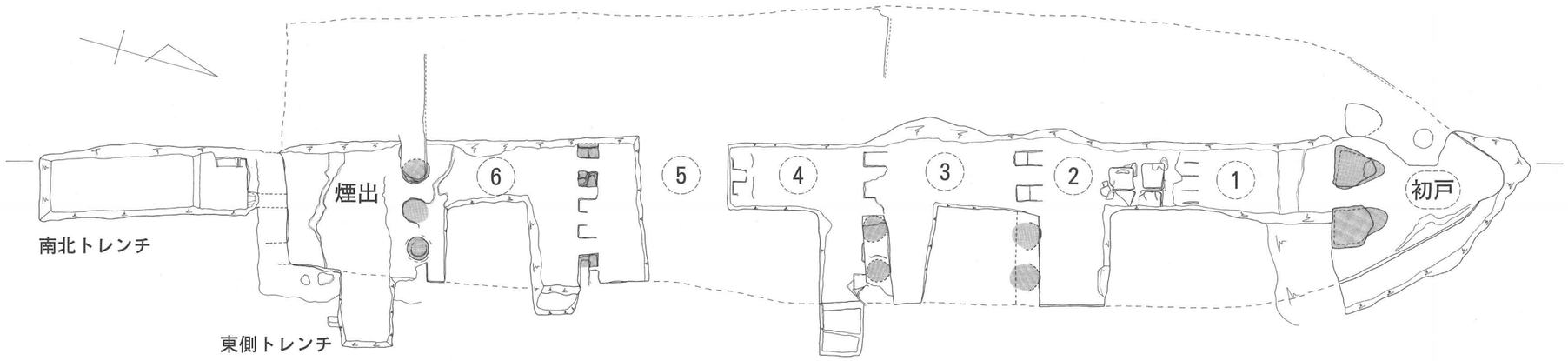
以下窯内については各房ごと、それ以外については出土地点、層序ごとに記述する。また各房の間で接合関係がある遺物については、基本的に出土地点が高いもの、つまり煙出しに近い地点を原位置と考え、数字が大きい房の遺物として記載した。

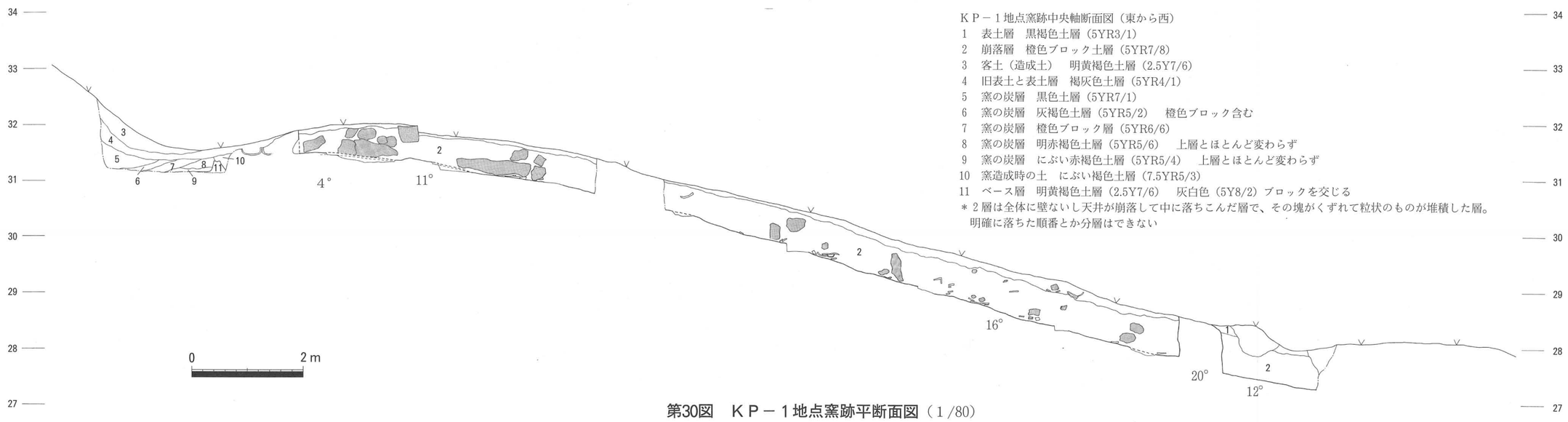






第29図　ＫＰ－１地点窯跡立面図（1/80）





ＫＰ－１地点窯跡中央軸断面図（東から西）
1　表土層　黒褐色土層（5YR3/1）
2　崩落層　橙色ブロック土層（5YR7/8）
3　客土（造成土）　明黄褐色土層（2.5Y7/6）
4　旧表土と表土層　褐灰色土層（5YR4/1）
5　窯の炭層　黒色土層（5YR7/1）
6　窯の炭層　灰褐色土層（5YR5/2）　橙色ブロック含む
7　窯の炭層　橙色ブロック層（5YR6/6）
8　窯の炭層　明赤褐色土層（5YR5/6）　上層とほとんど変わらず
9　窯の炭層　にぶい赤褐色土層（5YR5/4）　上層とほとんど変わらず
10　窯造成時の土　にぶい褐色土層（7.5YR5/3）
11　ベース層　明黄褐色土層（2.5Y7/6）　灰白色（5Y8/2）ブロックを交じる
＊２層は全体に壁ないし天井が崩落して中に落ちこんだ層で、その塊がくずれて粒状のものが堆積した層。
明確に落ちた順番とか分層はできない

第30図　ＫＰ－１地点窯跡平断面図（1/80）

1．初戸出土（第31図・第32図）

1～36が初戸出土遺物で、31～36が下層からの検出である。1・2は甕の蓋で、内面に轆轤左回転のケズリが施してある。3は甕で、2がその蓋の可能性がある。4は菊紋を貼り付けた甕で胴部に雷文を施した中型の甕である。5・9は型抜きの布袋を貼り付けた人形徳利。6は耳付瓢形水指。7・8・21は甕で、8はやや法量が小さい。10・13は蓋で、10はこの窯の中では最も大形の製品である。11は徳利で底部に陶印がある。12は六角徳利。14～16は直径10cm前後の灯明皿。17～19は煎茶器で、17・19は蓮？をモチーフにしたもの。18は後手形。20は備前の名勝地「臥龍松」の絵皿。22は手びねりの皿で、表面に自然釉が厚く付着している。

23～29は窯道具で、23・27は穴あきの丸形の板状のもので、24・25・26・29は匣鉢で、26は胴部が穴あきになっている。28は製品の可能性もあり、用途は不明。30・33は徳利、32は甕、34は擂鉢であるが、ＫＰ－２地点の窯からの流入と考えられる。31・35・36は窯道具。

2．１房出土（第33図）

37～45までが１房で出土した備前焼。37・40・41は小形の徳利で、40・41は松などをモチーフにした線刻が施されている。38は花立、43・44は徳利、43は人形徳利の可能性がある。42は鉢で内面の轆轤目が顕著である。

3．２房出土（第34図・第35図）

調査面積が房の約４分の１になる２房で確認された遺物は46～56までで、中形から大形の甕の割合が多い。

46～47は徳利で、46は扁壷形、48は粗雑化した布袋の型が貼り付けられている。49～51は普遍的に見られる甕。52・53は窯道具の匣鉢。54～56は大形の甕で、頸部から胴部にかけて条線を施した上に菊紋などを貼り付けている。胴部には雷文と○○文（名称不明）が交互にスタンプで押されている。これらの甕は、明治初年で廃窯されたという西１号窯跡では確認されていないことから、明治の新しい意匠かもしれない。

4．３房出土（第36図）

房全体の６分の１程度が調査面積となる３房の遺物は57～64である。

57・62は徳利、58は胴部に桜紋のスタンプが施された鉢で、火入れの可能性がある。61・63は甕で、63は普遍的に見られるタイプ。59・60・64は擂鉢で、59は底面外縁のわずかに外に高台をつけている。64は高台を削りだしている。

5．３房から４房の隔壁付近出土（第37図）

遺物では角徳利の割合が多い。65～78の遺物が該当する。

65は灯明皿、66は甕。67～73は角徳利。69・70は小形で、73は歪みが著しい。74は大形の擂鉢で、75～78はすべて窯道具。75・76ともに上面に径20cm～30cmの藁状の繊維の付着が見られる。77は底部に陶印があり、78は胴部に円形や不定形の穴がある匣鉢。

６．４房出土（第38図）

調査面積は房全体の３分の２程度である。遺物は79～95で比較的擂鉢の比率が高い。

80・81は甕の蓋、83は掛花生で取手が付くタイプ。82・84は角徳利、85～87は窯道具の陶板である。88は瓢付杯と呼ばれる洒落た工夫が施された盃。91から95までは擂鉢で、91はＫＰ－２地点の窯からの流入。93・94の高台は削りだしている。

７．５房および６房との隔壁付近出土（第39図・第40図）

遺物は房の南半分と６房との隔壁付近からの検出の96～113で窯道具が比較的多い。96・97は甕だが、97は一般的な甕とは異なり、底部が粗雑な上、側面に径数cm大の不定形な凹みが数箇所観察される。98・103・104・105は窯道具丸形匣鉢、108～110・113は窯道具の陶板で、108はドーナツ形。99～101は徳利で、すべて底部に陶印が施されている。102は極めて小形の甕。106・107は擂鉢で、106は付け高台。112は浅めの大形の鉢である。

８．６房出土（第41図・第42図）

この房の調査面積は全体の３分の１程度である。遺物は大形の鉢、大形の擂鉢、甕などである。114～128までが該当する。114・115は大形の鉢で、115は胴部に貼り型があり、一部剥離している。116～121は窯道具で、117・118はいわゆる「トチン」であるが、数量はごくわずかである。122は極小の壷か。123～125は普遍的に見られる甕、126は徳利。127・128は擂鉢で高台部はケズリ出し。

９．６房東側トレンチ出土（第42図）

６房の東側に、窯の外側の様子を探るためにトレンチを設定したが、遺物のほとんどは窯道具である。129～133はすべて窯道具であるが、131・132の紐状の粘土塊は現代陶の可能性がある。

10．煙道出土（第42図・第43図）

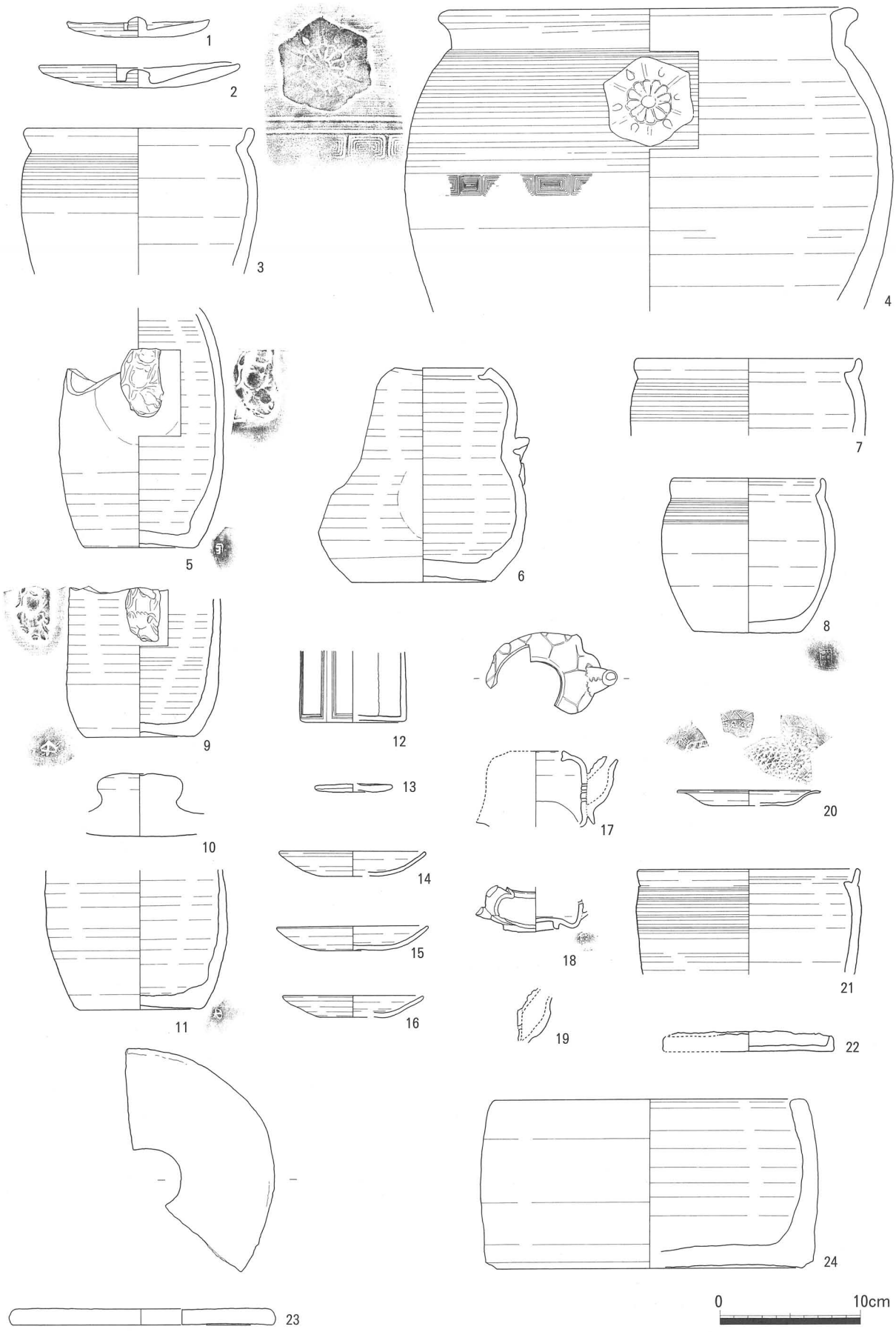
房全体の約半分が調査面積である。灯明皿や甕、徳利などがある。134～145までが遺物である。134～136・145は窯道具。137はつまみ部が欠損している蓋、138は小杯、139は３個体分が溶着した灯明皿。140・141・144は徳利。142は小皿であるが、ＫＰ－２地点の窯からの流入の可能性がある。143は普遍的に見られる甕。

11．南北トレンチ出土（第44図・第45図）

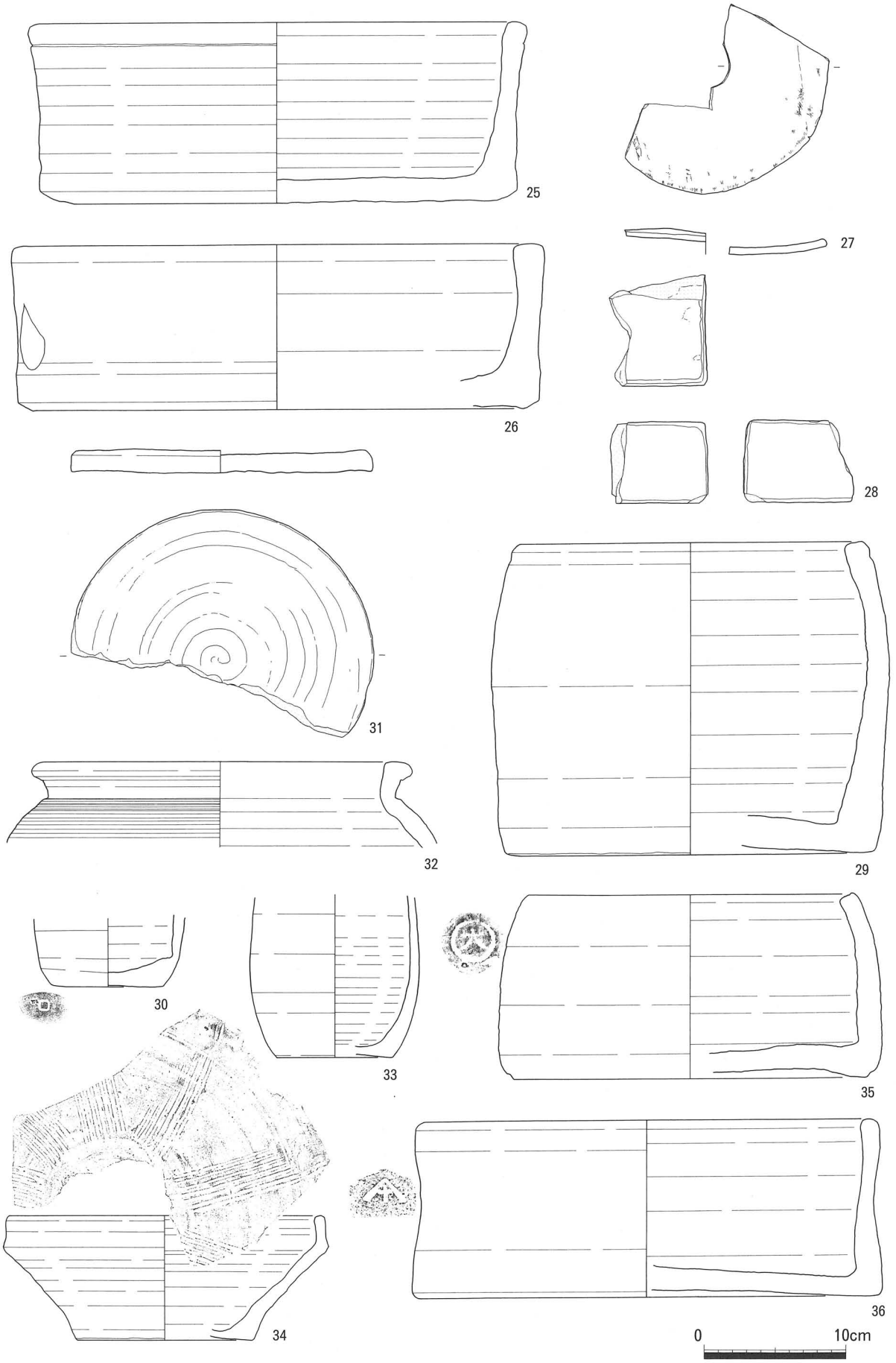
煙道の南側の溝から出土した遺物が主体となる。擂鉢片が半分以上を占めるが、そのほとんどがＫＰ－２地点の窯からの流入である。146～164が該当する。146・147は小形の角徳利、148は大形の土管、149・152は徳利。150～153は窯道具であるが、150は底部が無く、糸きりで切り離された胴部に穴がある特殊な匣鉢。154～164はすべて擂鉢片であるが、158の底部を除いてすべてＫＰ－２からの流入である。

12．初戸上層（客土）出土（第46図）

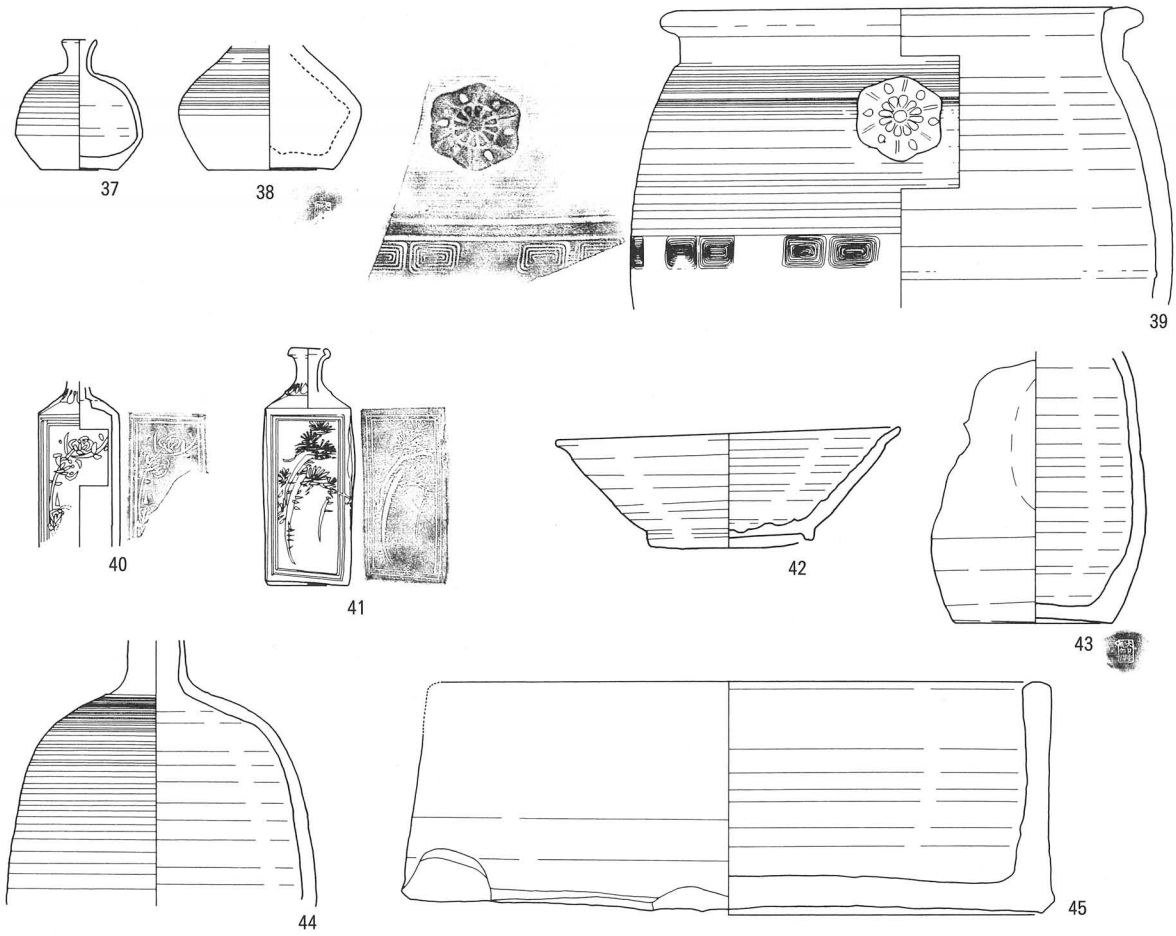
初戸の上層からの出土したもので、そのほとんどが客土からの検出である。原位置を保っていないため資料的にはその価値を減じるが、特徴的な器種もあるのでまとめて報告する。



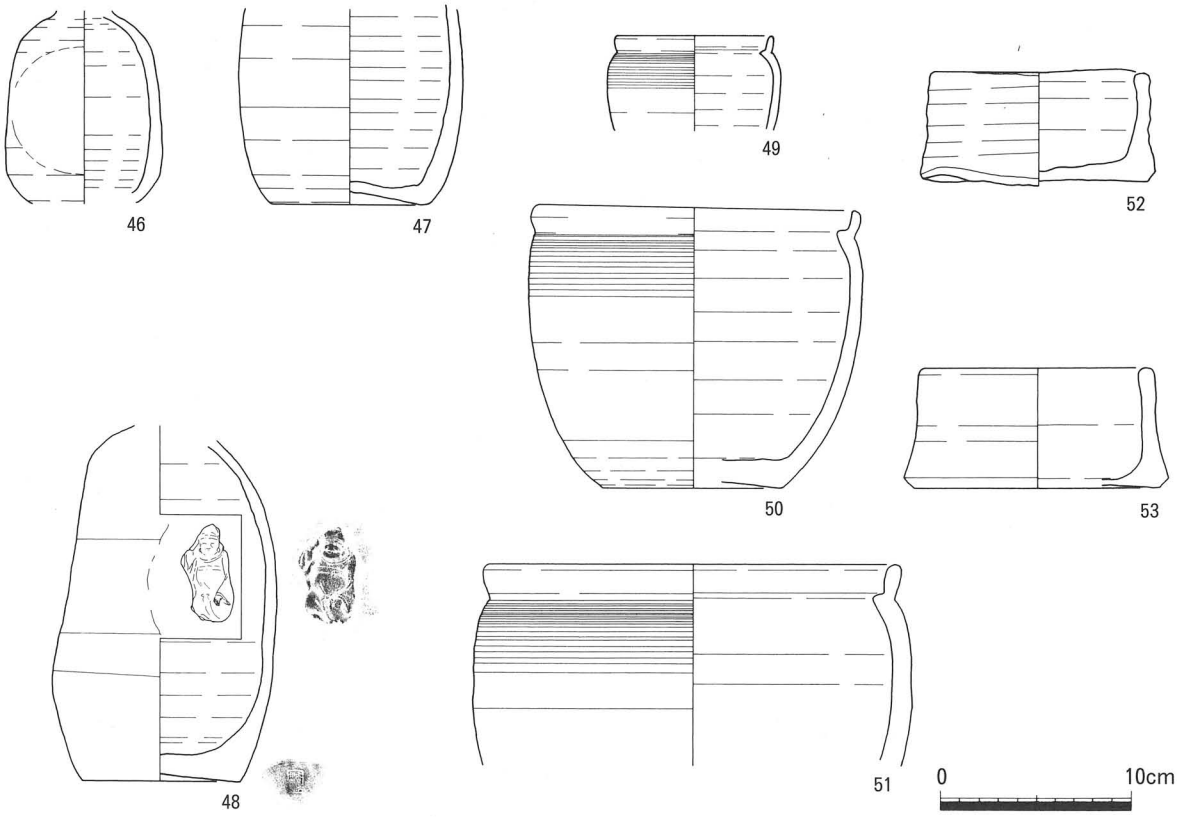
第31図　初戸出土遺物１（1/4）



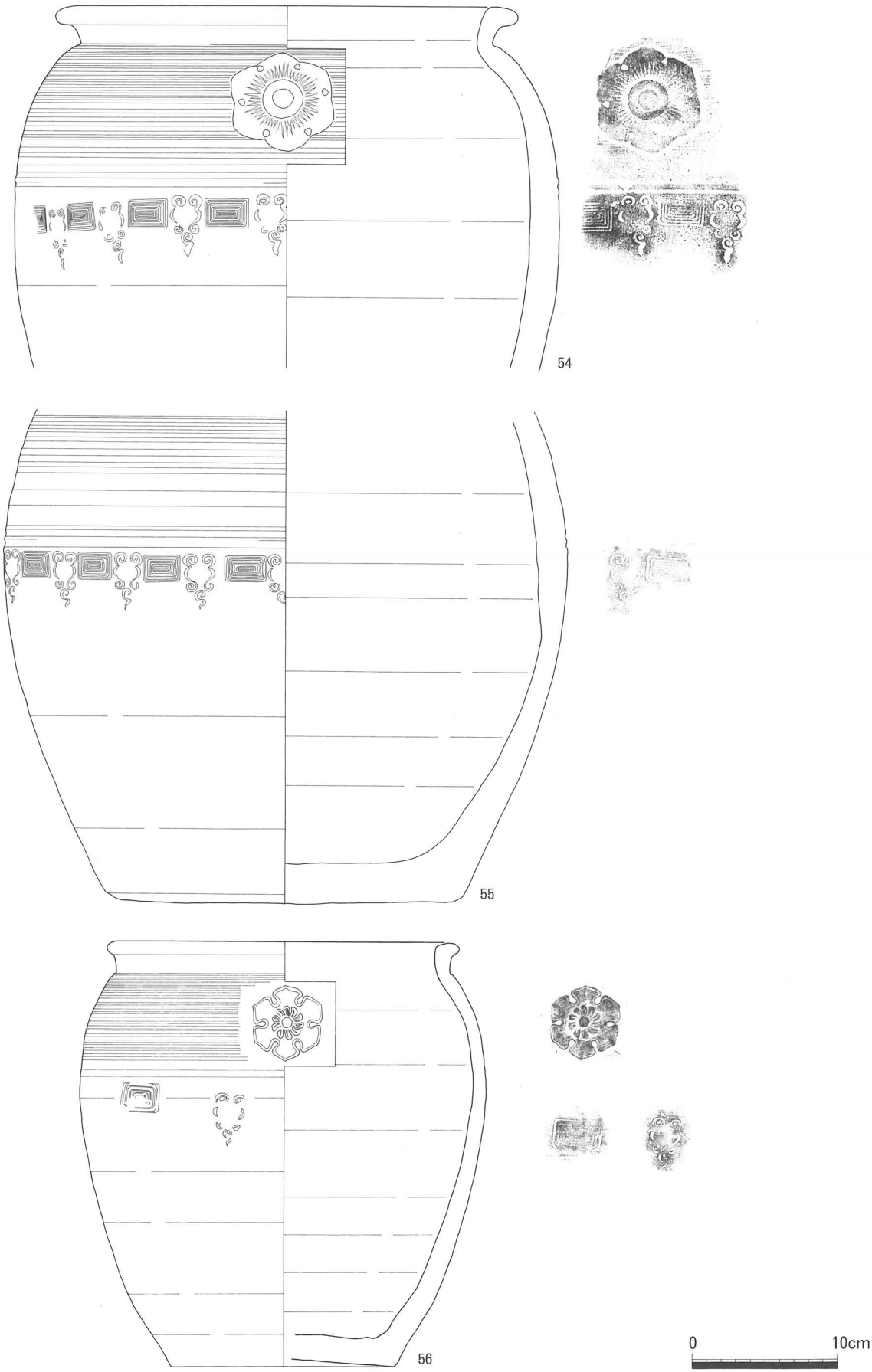
第32図　初戸出土遺物２（１/４）



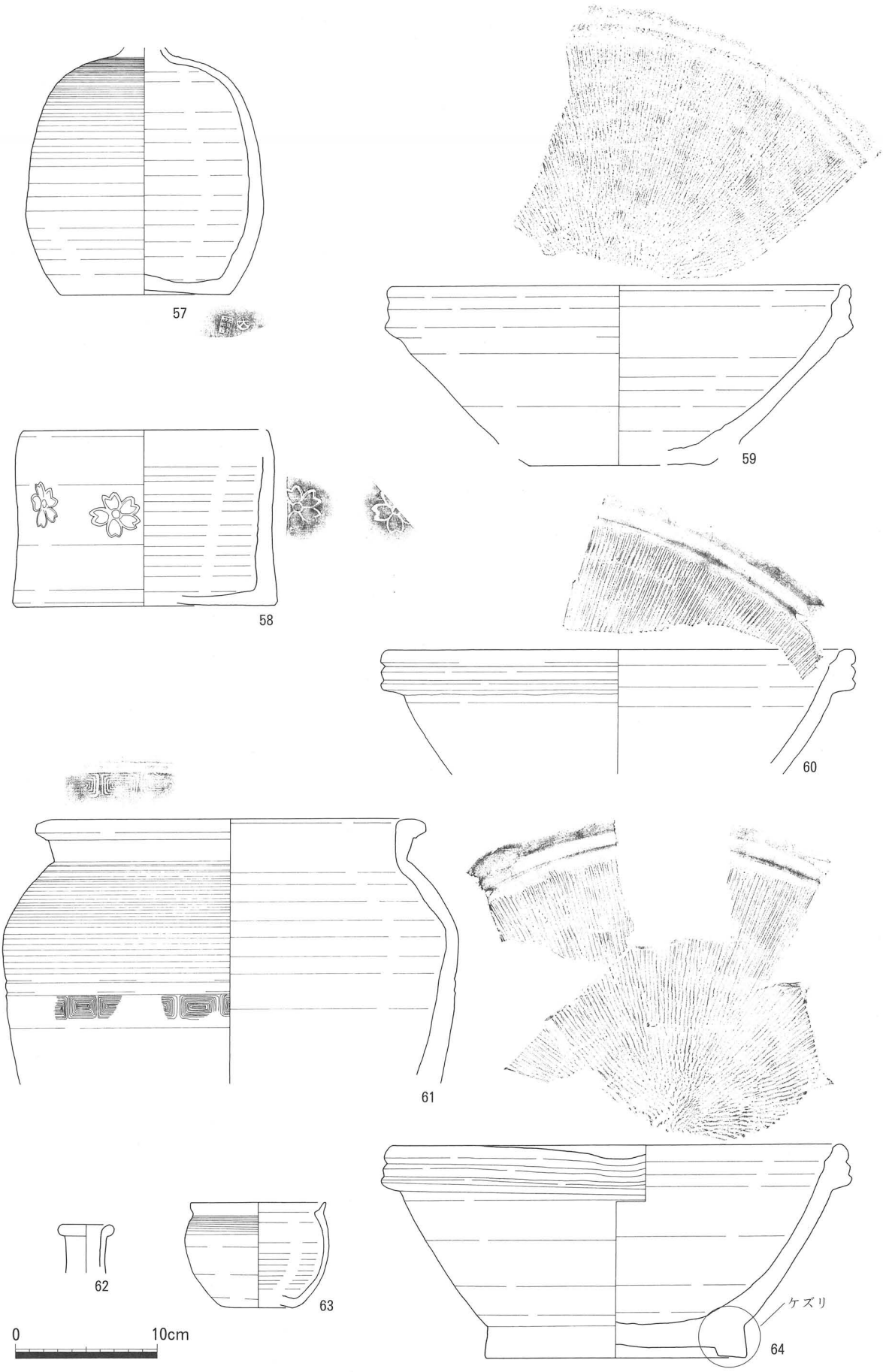
第33図　1房出土遺物（1/4）



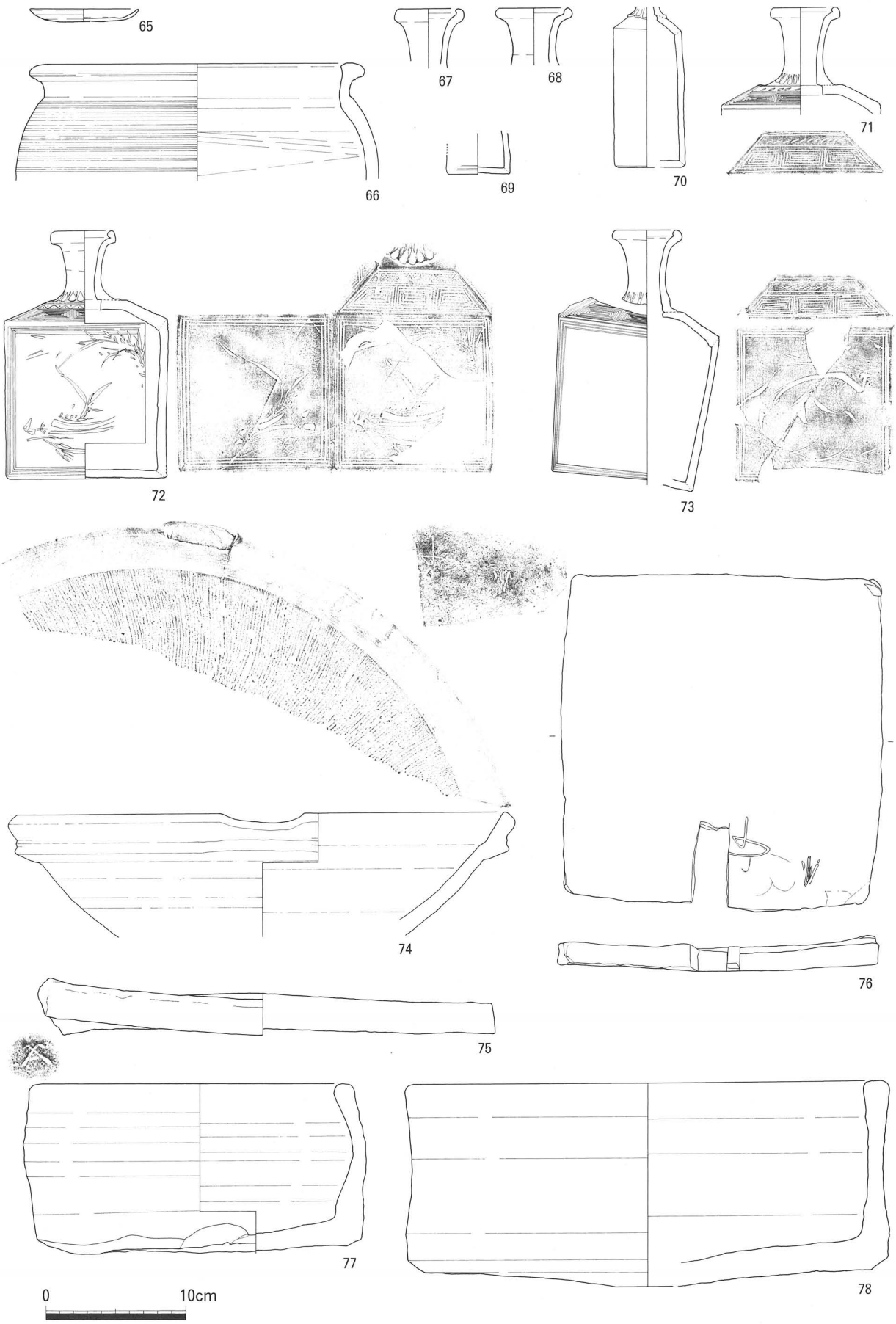
第34図　2房出土遺物1（1/4）



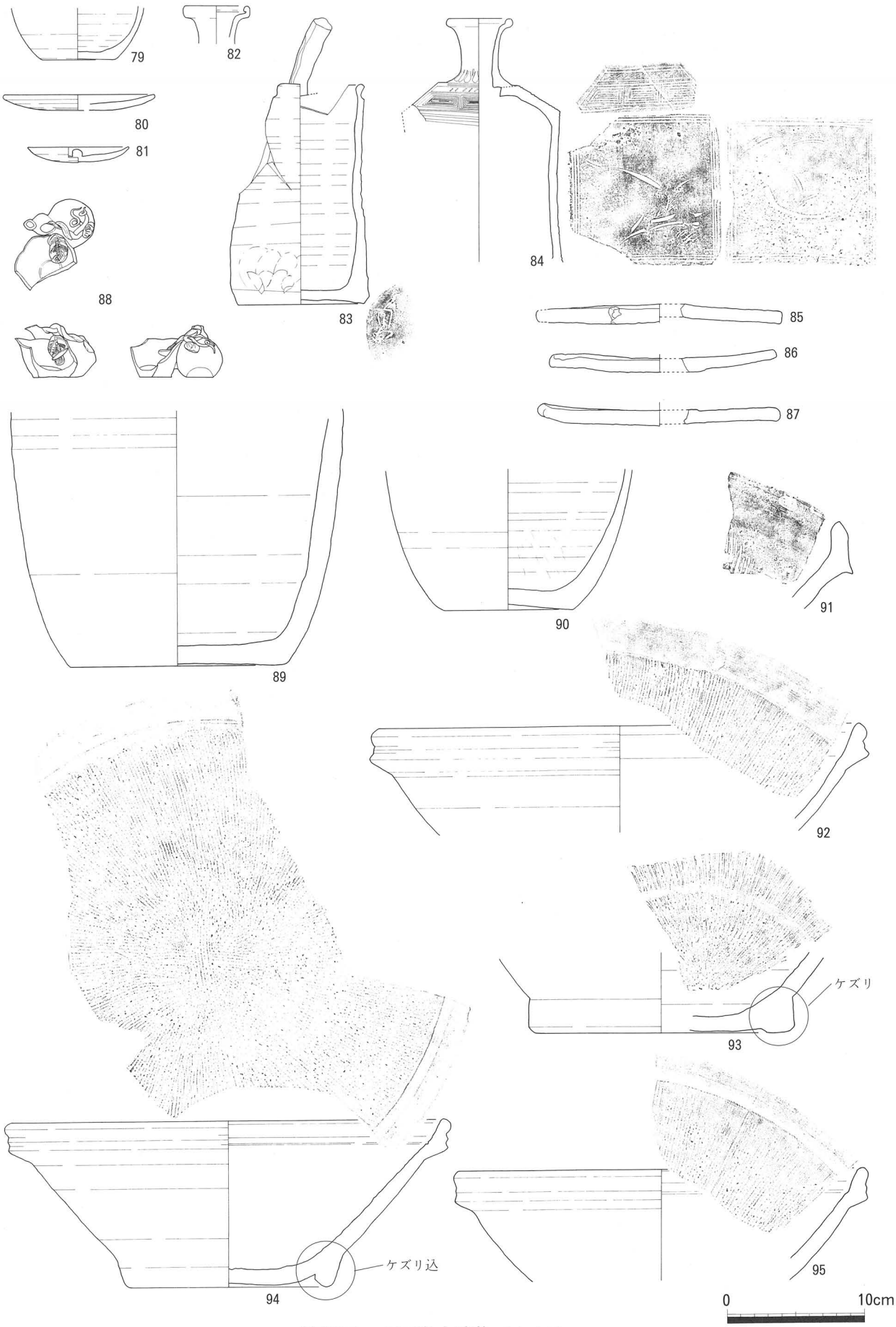
第35図　２房出土遺物２（1/4）



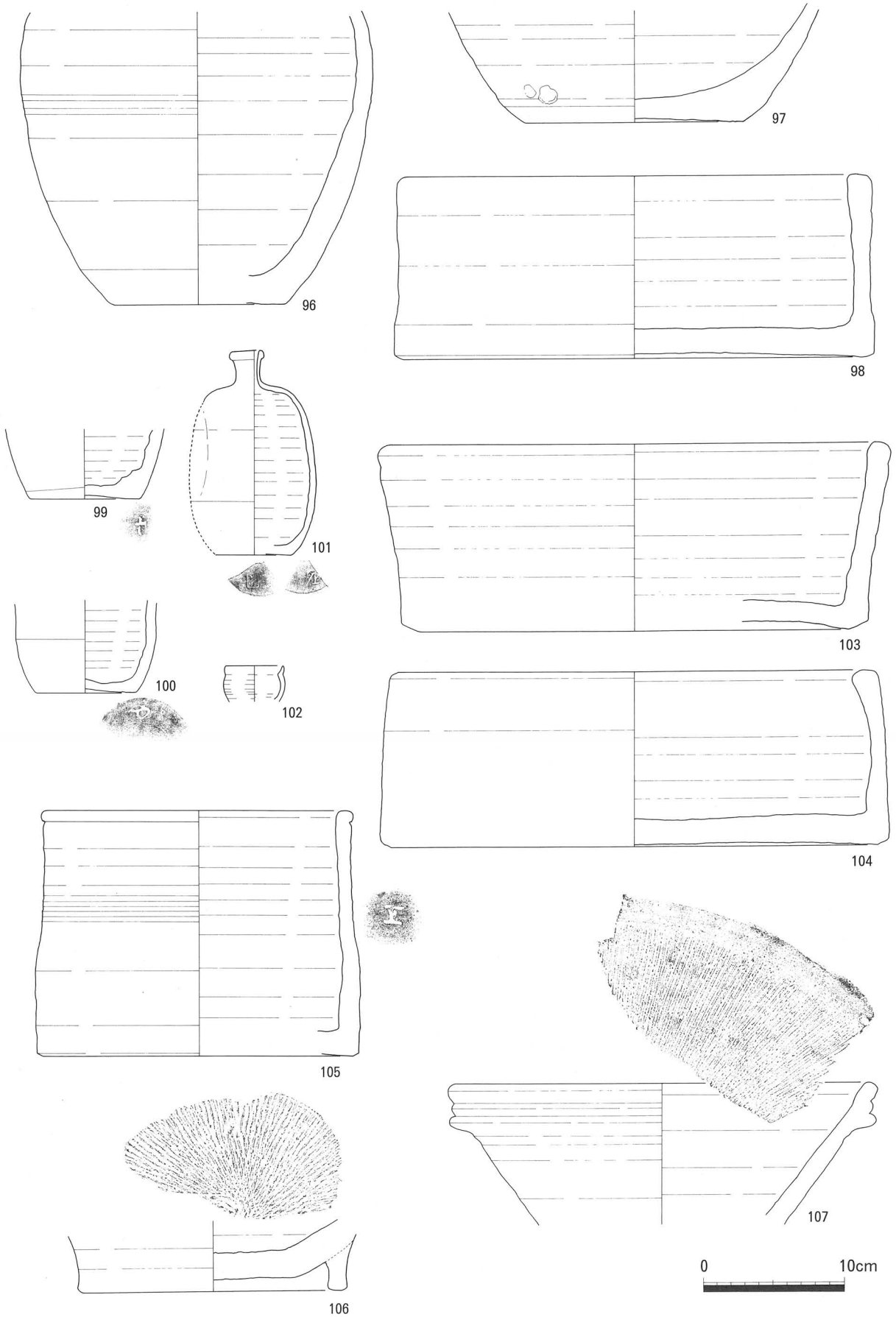
第36図　3房出土遺物（1/4）



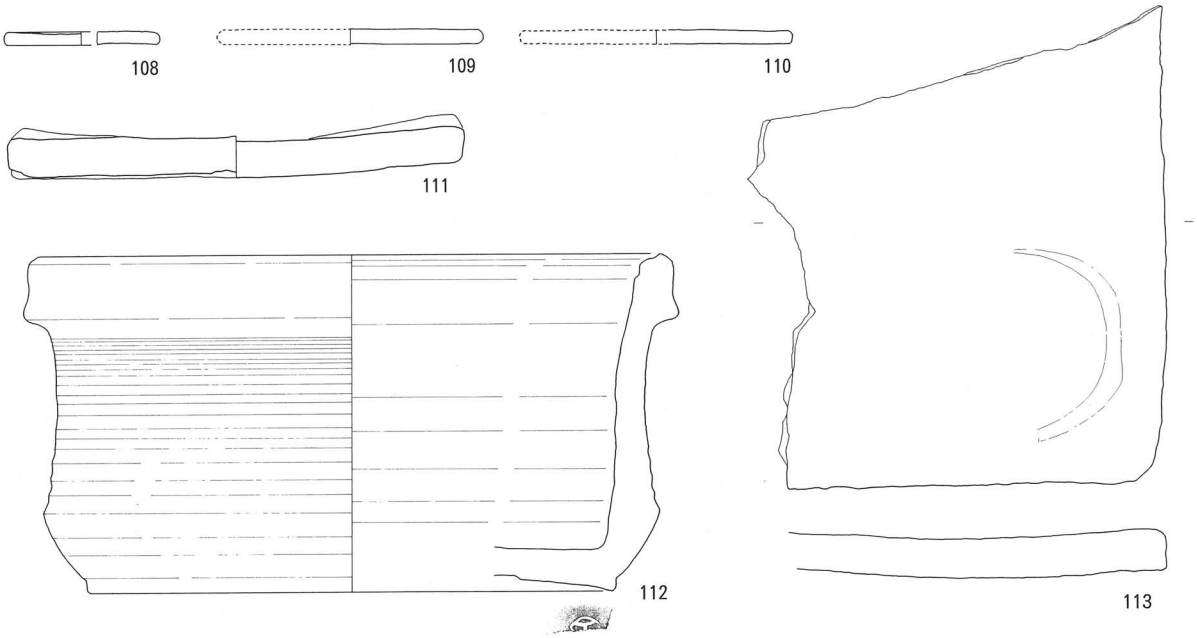
第37図　３房から４房の隔壁付近出土遺物（1/4）



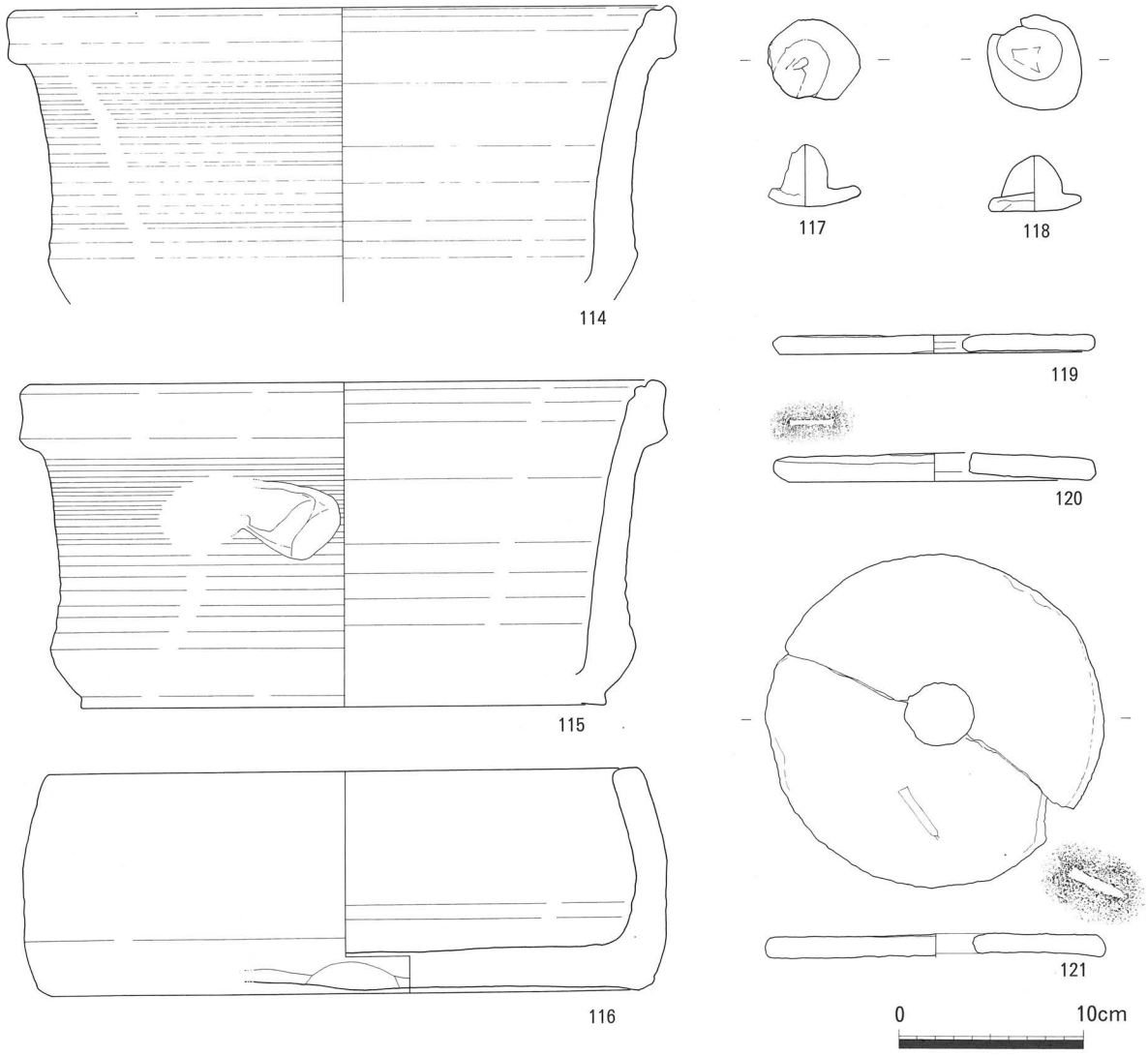
第38図　4房出土遺物（1/4）



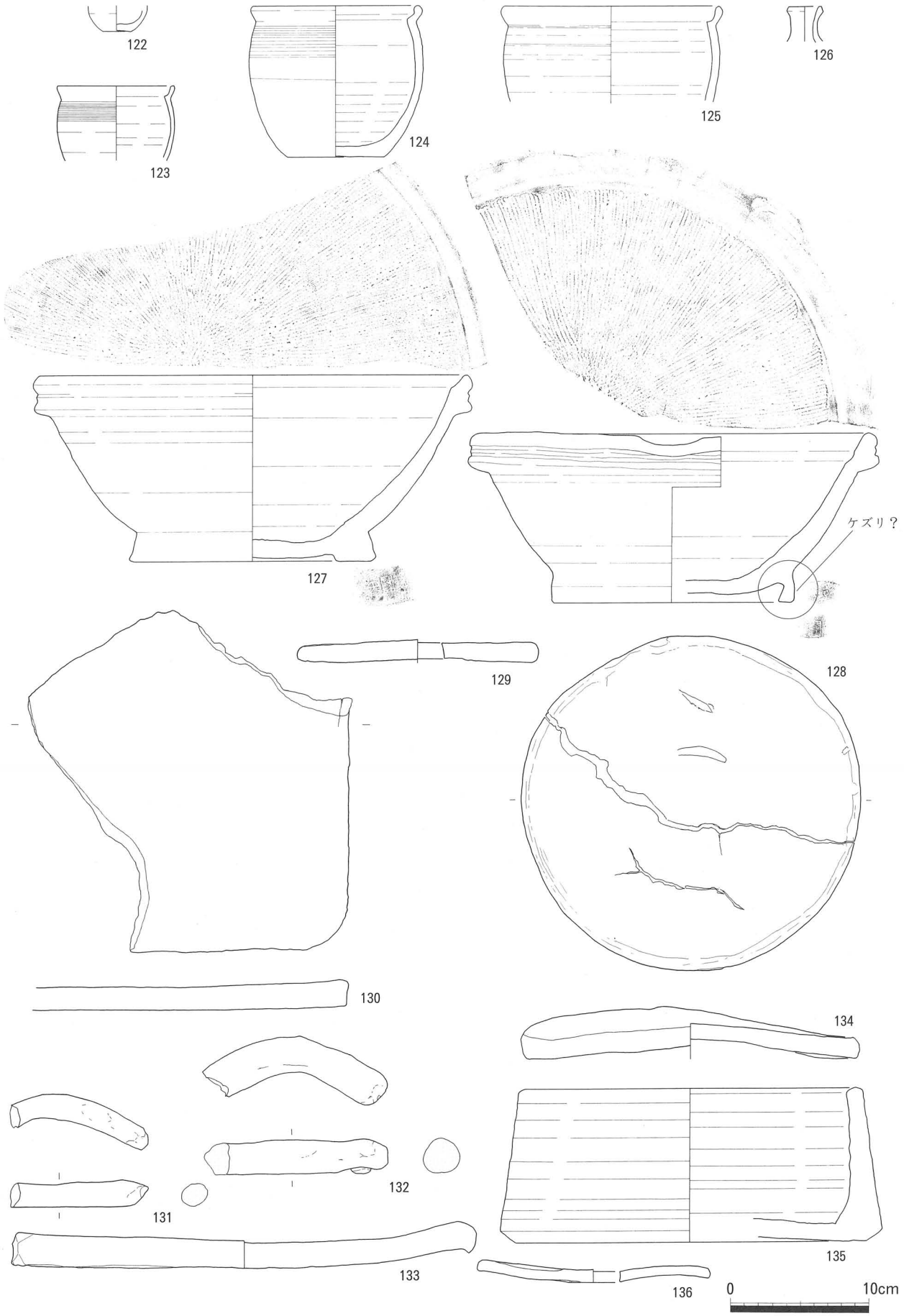
第39図　５房および６房との隔壁付近出土遺物１（1/4）



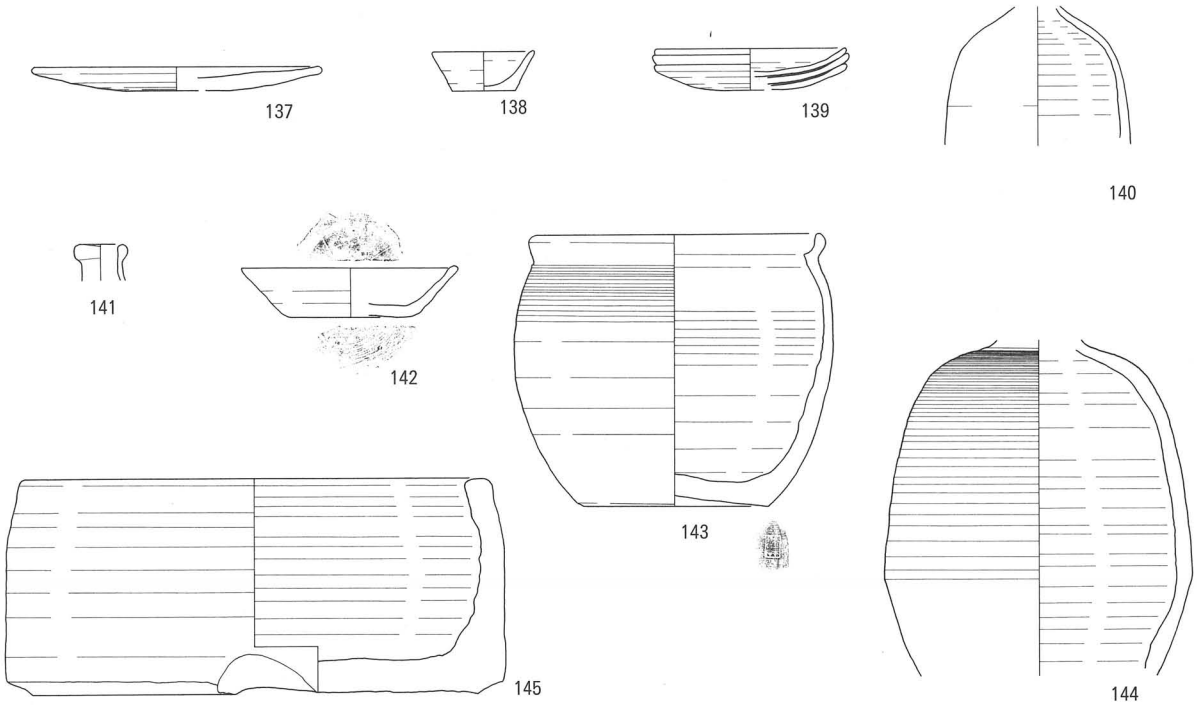
第40図　5房および6房との隔壁付近出土遺物2（1/4）



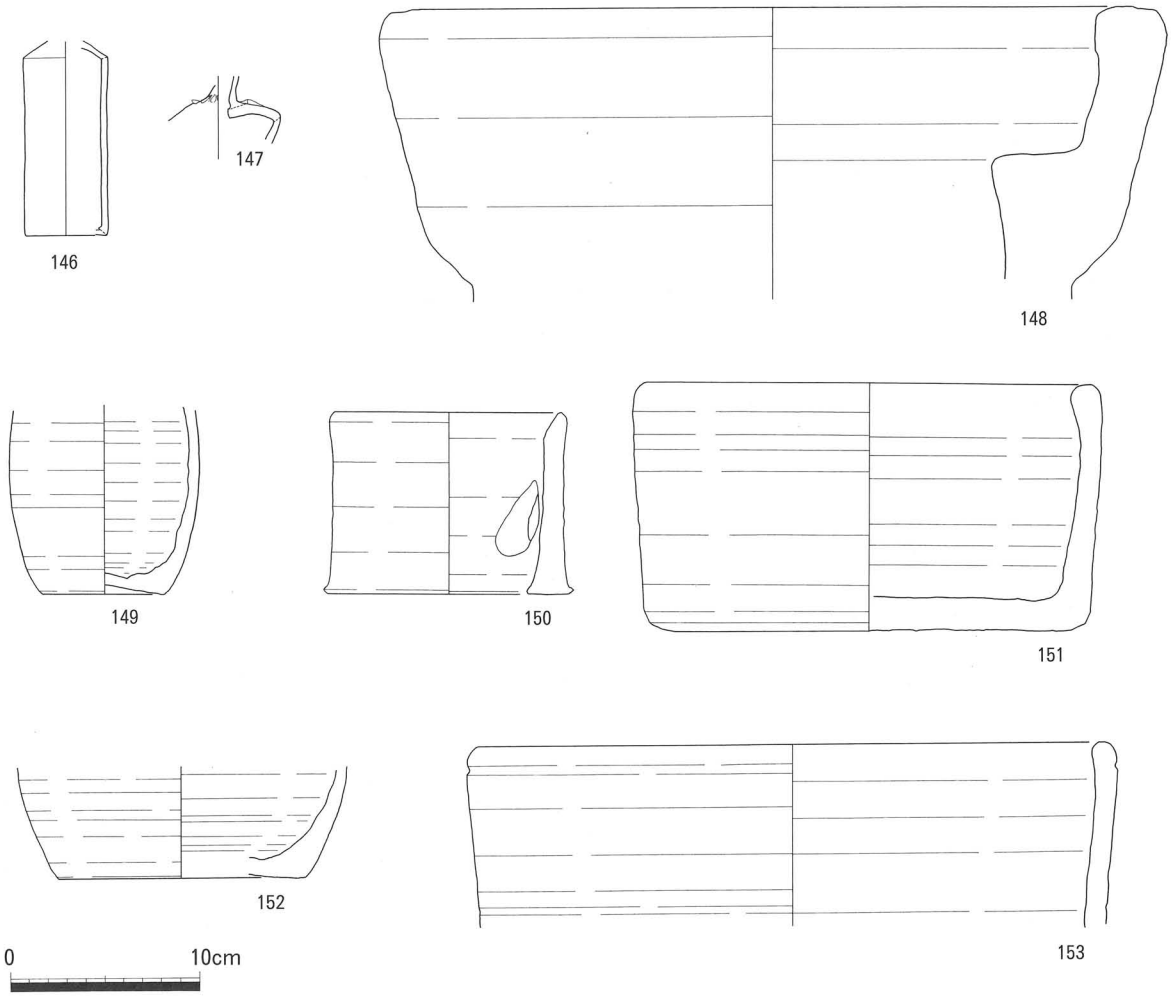
第41図　6房出土遺物1（1/4）



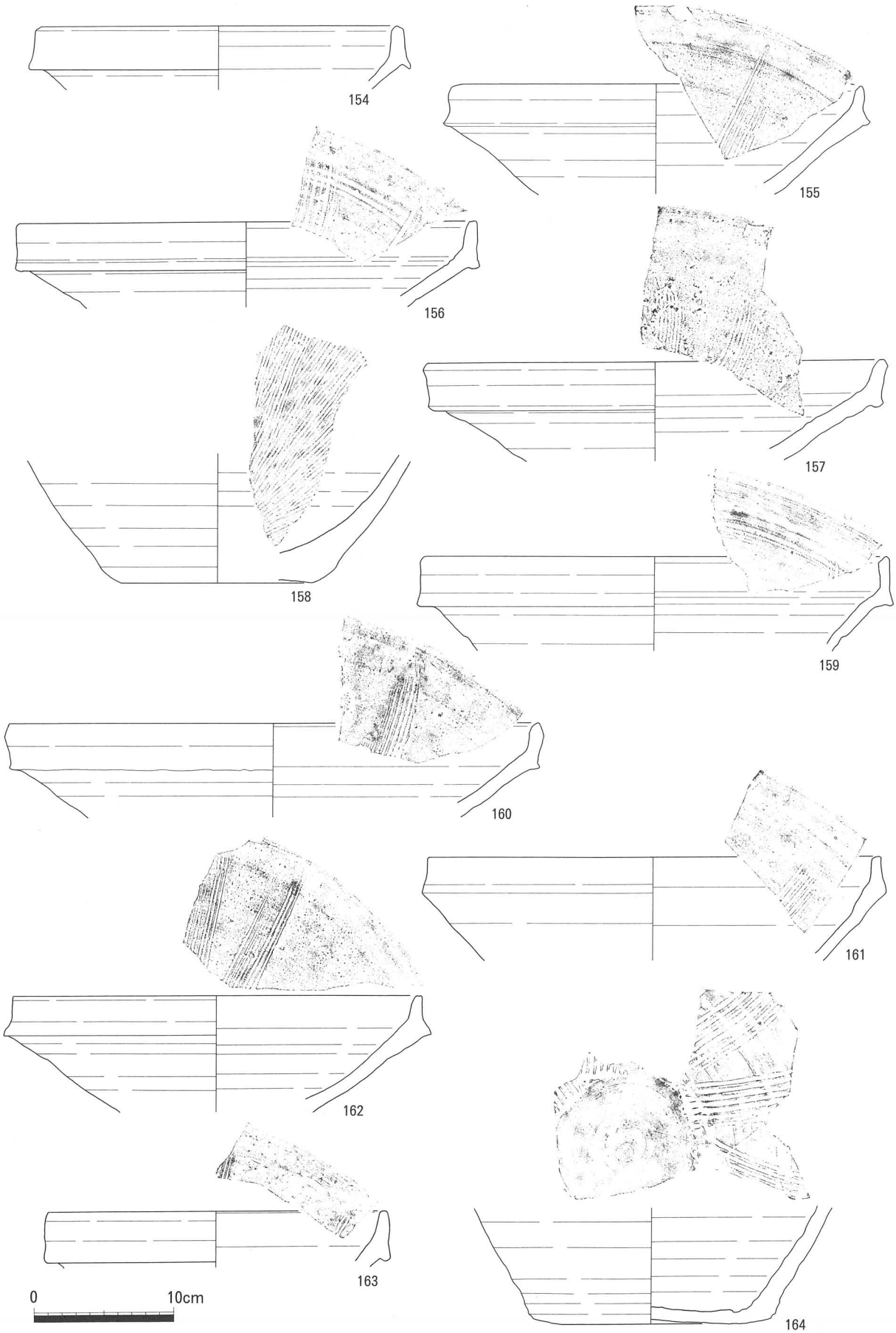
第42図　６房出土遺物２・６房東側トレンチ出土遺物・煙道出土遺物１（1/4）



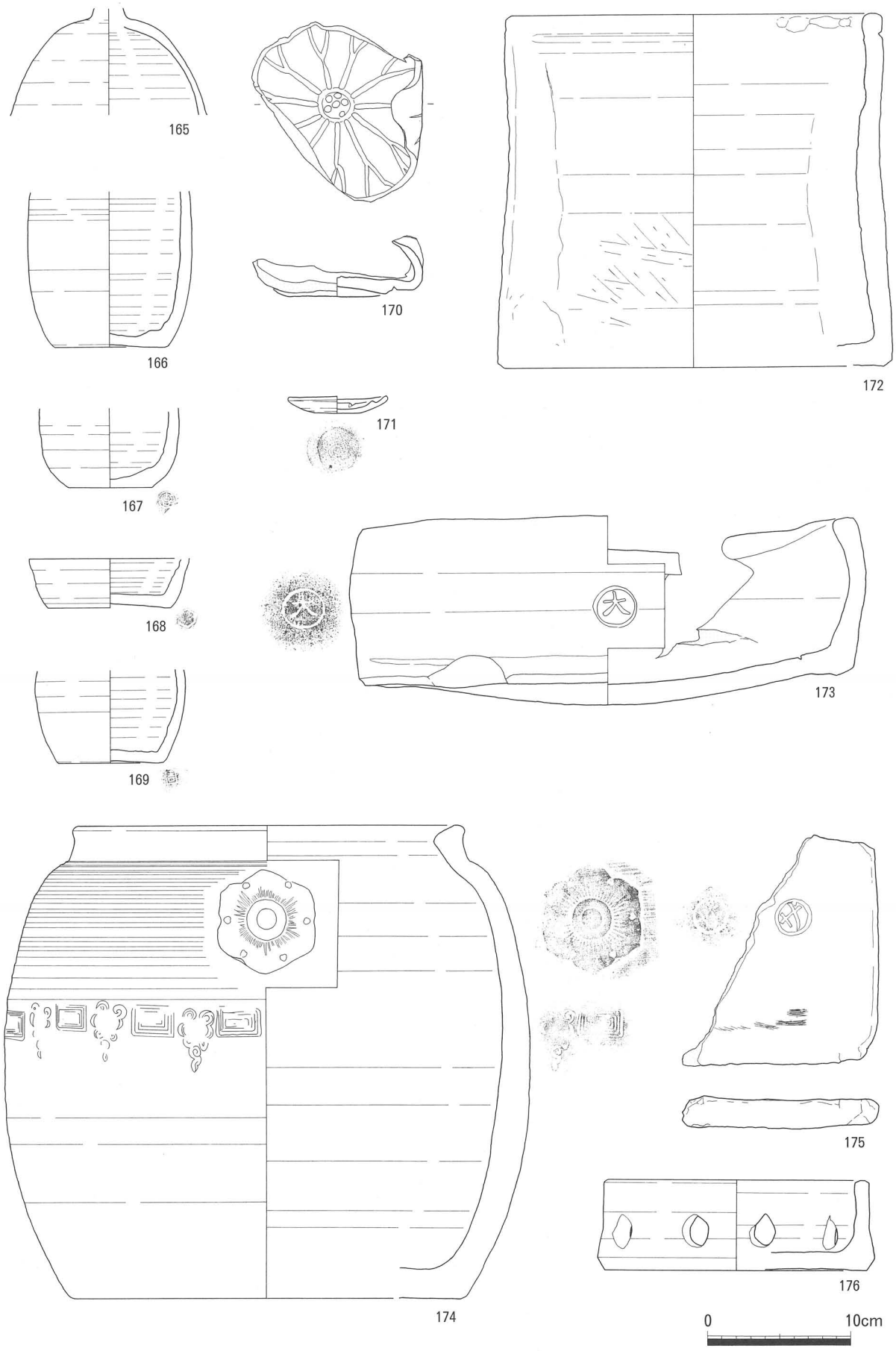
第43図　煙道出土遺物２（1/4）



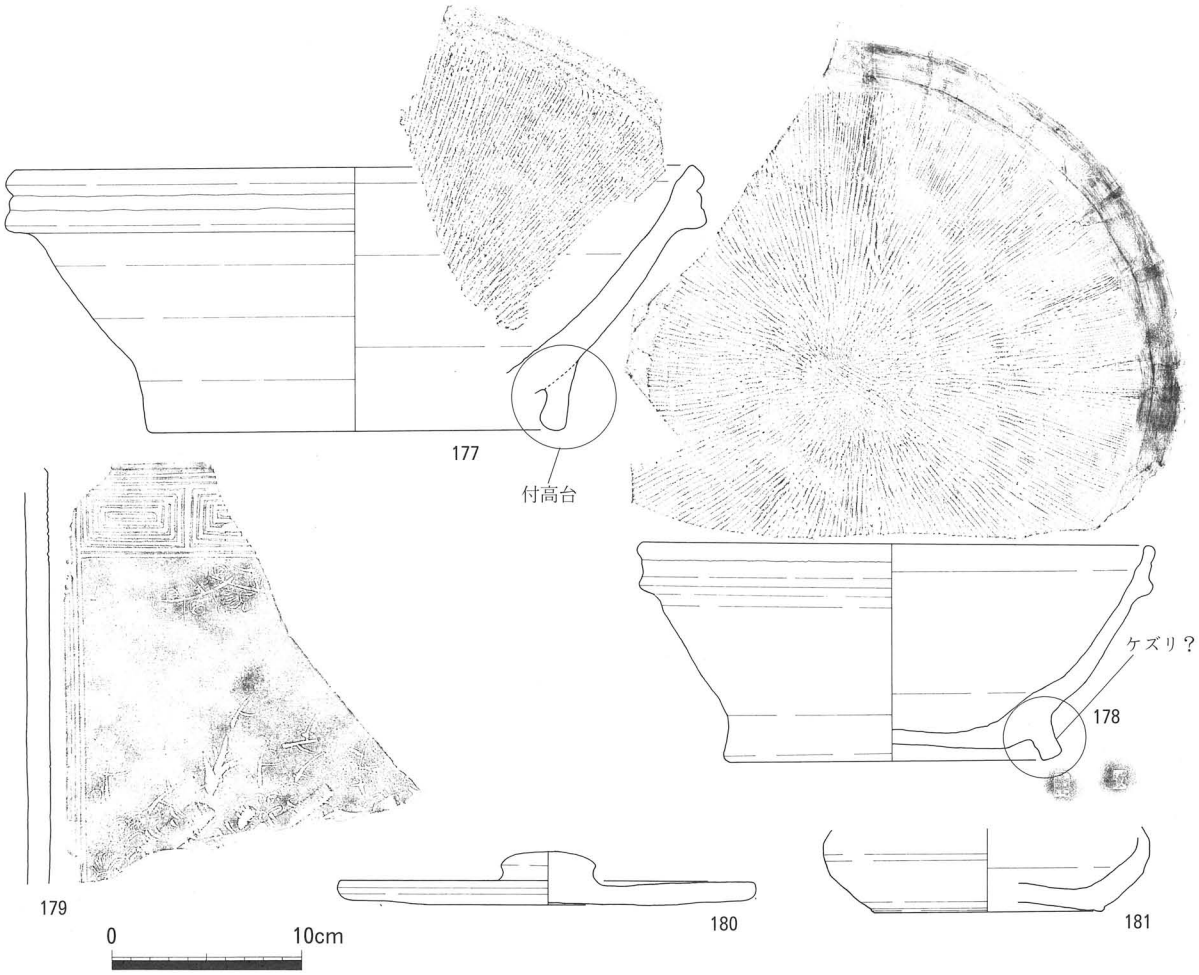
第44図　南北トレンチ出土遺物１（1/4）



第45図　南北トレンチ出土遺物２（1/4）



第46図　初戸上層出土遺物（1/4）



第47図　表採資料遺物（１/４）

該当は165～176である。165～169は徳利で、底部に㊜や固などの陶印が施されている。170は芙蓉をモチーフにした鉢。171は径が約７㎝の灯明受皿。172は丁寧に作られた大形の角形匣鉢、173は㊤の陶印のある大形の丸形匣鉢。174は大形の甕で、頸部から胴部にかけて条線を施した上に菊文を貼り付けている。胴部には雷文と○○文（名称不明）が交互にスタンプで押されている。175は㊦の陶印がある陶板、176は小形の穴あき丸形匣鉢。

13. 表採資料（第47図）

177から181はＫＰ－１地点付近で採取した遺物である。177・178は擂鉢で、177は付け高台、178はケズリ出し高台である。179は巨大な角徳利の胴部片である。180は蓋、181は浅めの鉢である。

（１）西村康「伊部南大窯の探査」『伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅰ』備前市教育委員会 2003

初戸出土（第31～32図）

番号	器種	出土地点	出土日	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	残存部	胎土	焼成	釉薬、色調	成形、技法	文様、意匠、陶印	製作時期	備考
1	蓋	KP-1-初	011116	-	1.4	-	10.1	完存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：10R 5/6 赤 外面：10R 5/4 赤褐	内面3cm幅ケズリ			
2	蓋	KP-1-初	011116	-	1.8	-	14.2	1/2	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10R 5/6 赤 外面：10R 5/5 赤褐	内面2cm幅ケズリ			
3	甕	KP-1-初	011116	15.8	(10.4)	-	16.7	口縁部のみ 1/2	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1mm前後の黒色粒を含む	良好	内面：10R 5/6 赤 外面：10R 4/4 赤褐（塗り土有）				
4	甕	KP-1-初	011116	28.0	(21.5)	-	34.6	口縁部のみ 1/5	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10R 3/6 暗赤（塗り土有、塗り土のはけ（？）の痕跡、顕著） 外面：10R 4/4 赤褐（塗り土有、塗り土のはけ（？）の痕跡、顕著）		菊紋貼付け・ラーメン模様		
5	人形徳利	KP-1-初	011116	-	(17.1)	7.8	11.7	胴部から下残存	0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10R 3/2 暗赤褐 外面：10R 3/3 暗赤褐（塗り土有）		底部に陶印：「凹」		
6	水指	KP-1-初	011116	(9.6)	15.3	4.9	(15.2)	2/3	0.1～2.0mm位の白色粒を多く含む 0.5～2.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5YR 3/4 暗赤褐 外面：10R 3/3 暗赤褐				
7	甕	KP-1-初	011116	15.8	(5.5)	-	16.8	口縁部のみ 1/5	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：7.5YR 4/2 灰褐 外面：10R 3/2 暗赤褐（塗り土有）				
8	甕	KP-1-初	011116	10.6	11.0	7.4	12.4	3/5	0.1mm位の白色粒を多く含む 0.1mm位の黒色粒を含む、極少量の(雲母片？)を含む	良好	内面：10R 5/6 赤 外面：10R 5/4 赤褐（塗り土有）	窯変　火押あり	底部に 陶印：「伊大部日内本」		
9	人形徳利	KP-1-初	011116	-	-	7.6	10.8	3/5	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1mm位の黒色粒を含む	良好	内面：7.5YR 5/3 にぶい褐 外面：10R 3/4 暗赤（塗り土有）	型抜き布袋文貼り付け	底部に陶印：「△」		
10	蓋	KP-1-初	011116	-	4.5	-	8.2	つまみ部分のみ残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.5mm前後の黒色粒を少量含む	良好	内面：10R 5/8 赤 外面：10R 4/6 赤（塗り土有）				
11	徳利	KP-1-初	011116	-	(9.9)	8.6	12.8	-	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1mm前後の雲母（？）を少量含む	良好	内面：10R 4/4 赤褐 外面：5YR 4/6 赤褐（塗り土有）		底部に陶印：「⊕」		
12	六角徳利	KP-1-初	011116	-	(5.1)	7.4	7.6	底部のみ残存	0.1mm位の白色粒を極少量含む	良好	内面：10YR 6/2 灰黄褐 外面：10R 3/3 暗赤褐（塗り土有）				
13	蓋	KP-1-初	011116	-	0.6	-	5.5	つまみ部分欠損	0.1mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：10R 4/4 赤 外面：2.5YR 5/4 にぶい赤褐（塗り土有）	内面1.1cm幅ケズリ			
14	灯明皿	KP-1-初	011116	10.2	1.8	4.0	10.4	1/5	0.1～0.5mm位の白色粒を含む	やや不良	内面：10R 5/6 赤 外面：2.5YR 5/6 暗赤褐	内面1.1cm幅ケズリ			
15	灯明皿	KP-1-初	011116	10.7	1.7	4.4	10.8	1/2	0.1mm前後の白色粒を含む	やや良好	内面：10R 5/4 赤褐 外面：10R 5/6 赤	内面1.4cm幅ケズリ			
16	灯明皿	KP-1-初	011116	9.8	1.5	4.8	10.0	1/4	0.1～0.5mm位の白色粒を含む	やや良好	内面：2.5YR 5/4 にぶい赤褐 外面：2.5YR 5/6 暗赤褐	内面1.5cm幅ケズリ			
17	煎茶器	KP-1-初 KP-1-初 東土居（客土）	011116 011116	-	(5.4)	-	9.2	1/3	0.1～0.5mm位の白色粒を極少量含む	良好	内面：7.5YR 5/3 にぶい褐 外面：5YR 4/6 赤褐	型押 貼付			
18	煎茶器 急須後手形	KP-1-初	011116	-	(3.2)	3.9	7.9	底部から胴部 1/3残存	0.1～0.5mm位の白色粒を極少量含む	良好	内面：7.5YR 5/3 にぶい褐 外面：10R 3/4 暗赤		把手の下に 陶印：「伊大部日」		
19	煎茶器 注口部	KP-1-初	011116	-	-	-	-	注口と胴部 1/8	0.1～0.5mm位の白色粒を極少量含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を極少量含む	良好	内面：10YR 6/3 にぶい黄橙 外面：2.5YR 4/4 にぶい赤褐				
20	絵皿	KP-1-初	011116	9.8	1.1	5.1	10.2	1/5	0.1mm前後の白色粒を少量含む 0.5mm前後の茶色粒を極少量含む	良好	内面：5YR 4/2 灰褐 外面：2.5YR 3/2 暗赤褐	型押			
21	甕	KP-1-初	011116	15.4	(7.5)	-	16.0	口縁部のみ 1/6	0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：7.5R 4/6赤（口縁端部塗り土有） 外面：10R 5/6 赤（塗り土有）				
22	皿 (菓子皿?)	KP-1-初	011116	(11.8)	1.5	(12.0)	(12.2)	5/4	0.5mm前後の黒色粒を含む	良好	内面：5Y 5/3 灰オリーブ 外面：7.5YR 4/1 褐	手ひねり			灰オリーブ色の釉が内面全体に厚く付着
23	窯道具 陶板	KP-1-初	011116	-	厚み 1.1	-	18.8	2/5	0.1～1.5mm位の白色粒を多く含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	上面：2.5YR 4/3 にぶい赤褐 下面：2.5YR 5/4 にぶい赤褐				
24	窯道具 角形匣鉢	KP-1-初	011116	21.6	12.0	21.6	23.8	約1/2	0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.5～2.0mm位の黒色粒を含む 0.5～1.0mm位の茶色粒を含む	良好	内面：2.5YR 3/3 暗赤褐 外面：2.5YR 3/6 暗赤褐				
25	窯道具 丸形匣鉢	KP-1-初	011116	33.2	12.8	30.6	34.8	1/4	0.5～2.0mm位の白色粒を多く含む 0.5～2.5mm位の黒色粒を多く含む	良好	内面：2.5YR 3/3 暗赤褐 外面：10YR 5/2 灰黄褐				
26	窯道具 穴あき 丸形匣鉢	KP-1-初	011116	35.0	11.6	34.4	37.4	1/4	0.1～3.0mm位の白色粒を多く含む 0.5～3.0mm位の黒色粒を多く含む 0.1～1.5mm位の茶色粒を含む	良好	内面：10R 4/3 赤褐 外面：7.5R 4/3 にぶい赤褐				
27	窯道具 陶板	KP-1-初	011116	-	厚み 約0.5	-	-	1/3	0.1～1.5mm位の白色粒を多く含む 0.5～1.0mm位の黒色粒を含む	良好	上面：2.5YR 5/6 明赤褐 下面：2.5YR 5/4 にぶい赤褐		環状繊維付着		
28	名称？ (製品)	KP-1-初	011116	-	厚み 5.8	-	幅 -	?	0.1mm前後の白色粒を少量含む 0.1～0.5mm前後の黒色粒を少量含む	良好	上面：10R 2/3 極暗赤褐 下面：10R 3/3 暗赤褐	直方体形			
29	窯道具 角形匣鉢	KP-1-初	011116	24.0	22.1	26.0	28.0	1/4	0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む 1.0～3.0mm位の黒色粒を多く含む	良好	内面：10YR 7/3 にぶい黄橙 ～5YR 3/2 暗赤褐 外面：10R 3/2 暗赤褐				

表２　ＫＰ－１地点窯跡出土遺物観察表（１）

番号	器　種	出土地点	出土日	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	残存部	胎　　土	焼成	釉薬、色調	成形、技法	文様、意匠、陶印	製作時期	備　考
30	徳利	KP-1-初 上層	011116	-	(4.9)	7.9	10.7	低部のみ 残存	0.1～0.5mm位の白色粒を極少量含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10R　4/2 灰赤 外面：10R 3/2 暗赤褐（塗り土有）		底部に陶印：「□」		
31	窯道具 丸形匣鉢 陶板	KP-1-初 下層	011116	-	厚み 1.3	-	21.2	1/2	0.1～3.0mm位の白色粒を含む 0.5～3.0mm位の黒色粒を多く含む 0.1～2.0mm位の茶色粒を少量含む	良好	上面：5YR 6/3 にぶい橙 下面：5YR 5/4 にぶい赤褐				
32	甕	KP-1-初 下層	011116	25.0	(5.7)	-	30.3	口縁部のみ 1/5	0.1mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：7.5R 4/3 にぶい赤褐（塗り土有） 外面：2.5YR 4/4にぶい赤褐（塗り土有）				
33	徳利	KP-1-初 下層	011116	-	(11.3)	8.0	11.8	低部 1/3残存	0.1mm位の白色粒を少量含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：5YR 5/4 にぶい赤褐 外面：10R 4/4 赤褐（塗り土有）				
34	擂鉢	KP-1-初 下層	011116	22.0	8.8	12.4	23.0	1/3	0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.5～2.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：7.5YR 4/2 灰褐 外面：7.5YR 6/1 褐灰～5YR 7/8 橙				すり目：30mm幅 7本 KP2からの流入
35	窯道具 角形匣鉢	KP-1-初 下層	011116	22.6	13.1	24.6	26.8	1/3	0.5～1.0mm位の白色粒を含む 1.0～5.0mm位の黒色粒を多く含む	良好	内面：10R 3/3　暗赤褐 外面：10YR 5/6 黄褐（ガラス状）		底部に6cm大の溶着片有 胴部に陶印：「㊅」		
36	窯道具 丸形匣鉢	KP-1-初 下層	011116	31.2	(12.5)	32.4	33.0	1/2	0.5～2.0mm位の白色粒を含む 0.5～3.0mm位の黒色粒を多く含む	良好	内面：2.5YR 5/6 明赤褐～10R 3/2 暗赤褐（側面に塗り土） 外面：2.5YR 3/6 暗赤褐（塗り土）		底部に13cm大の溶着片有 胴部に陶印：「△」		

1房出土（第33図）

37	小形徳利	KP-1-① P-1-初　K	011116 011116	1.7	6.9	4.0	6.6	3/4	0.1mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：5YR 5/3 にぶい赤褐 外面：10R 3/4 暗赤（塗り土有）				
38	花立	KP-1-①	011116	-	(6.6)	6.6	9.6	胴部のみ残存	0.5mm前後の白色粒を少量含む 0.1～0.5mm の黒色粒を含む	良好	内面：2.5YR 6/6　橙 外面：10R 4/6　赤（塗り土有）		底部に陶印：「伊大部日陶」		
39	甕	KP-1-①	011116	23.6	(15.7)	-	28.4	口縁部のみ 1/4	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：10R 5/6 赤 外面：10R 4/6 赤（塗り上有）	火襷	菊紋の抜き型貼り付け		ワラ状のもの付着
40	小形 角徳利	KP-1-①	011116	-	(8.7)	-	4.2	1/2	0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：7.5R 4/3 にぶい赤褐 外面：10R 3/6 暗赤 10R 4/2 灰赤				
41	小形 角徳利	KP-1-①	011116	18.0	12.5	4.2	4.9	完存	観察不可	良好	内面：10R 3/4 暗赤 外面：10R 3/4 暗赤（塗り土有）				全体に歪み
42	鉢	KP-1-①	011116	17.7	6.3	8.6	18.0	1/2	0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5Y 4/1　黄橙 外面：10R 4/3 赤褐, 5G 5/1 緑灰	ロクロ目顕著			内面に砂粒状のものが多数付着
43	人形徳利	KP-1-①	011116	-	(14.3)	8.2	11.2	低部から胴部 2/3残存	0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：5YR 6/4 にぶい橙 外面：2.5YR 4/4 にぶい赤褐（塗り上有）		底部に陶印：「伊大部日陶本」		
44	徳利	KP-1-①	011116	-	(14.0)	-	16.4	1/3	0.5mm前後の白色粒を含む 0.1mm位の黒色粒を含む	良好	内面：10R 5/4 赤褐 外面：10R 3/4 暗赤（塗り土有）				
45	窯道具 丸形匣鉢	KP-1-①	011116	(30.6)	12.3	33.1	34.1	1/3	0.1～2.0mm位の白色粒を多く含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：10R 5/6 赤 外面：10R 4/4 赤褐				

2房出土（第34～35図）

46	扁壺形 徳利	KP-1-②	011116	-	(10.1)	-	8.2	胴部のみ 1/3残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10R 4/4 赤褐 外面：2.5YR 3/4 暗赤褐（塗り土有）				
47	徳利	KP-1-②トレンチ	011119	-	(10.3)	8.0	11.7	低部のみ 1/2残存	0.1～1.0mm位の白色粒を少量含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：10R 4/4 赤褐 外面：10R 3/3 暗赤褐（塗り土有）				
48	人形徳利	KP-1-① KP-1-②	011116	-	(18.7)	8.4	11.7	4/5	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10R 5/6 赤 外面：10R 4/4 赤褐（塗り土有）	布袋貼型	底部に陶印：「伊大部日陶本」		
49	甕	KP-1-②トレンチ	011119	8.2	(5.0)	-	9.2	口縁部のみ 1/8	1.0mm前後の白色粒を含む	良好	内面：10R 4/3 赤褐（口縁端部塗り土） 外面：10R 3/4 暗赤（塗り土有）				
50	甕	KP-1-②	011116	16.6	14.9	9.5	17.5	1/2	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：10R 5/6 赤（塗り土口縁部） 外面：10R 4/6 赤（塗り土有）				
51	甕	KP-1-②	011116	21.4	(10.6)	-	22.0	口縁部のみ 1/4	0.1mm位の白色粒を含む 0.5mm前後の黒色粒を含む	良好	内面：10R 4/3 赤褐（塗り土のはけのあと） 外面：7.5R 3/3 暗赤褐（塗り土有）				
52	窯道具 丸形匣鉢	KP-1-②	011116	11.0	6.2	11.7	12.2	ほとんど 完存	0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を多く含む	良好	内面：10YR 6/3 にぶい黄橙 2.5YR 3/6 暗赤褐 外面：2.5YR 4/4 にぶい赤褐		底部に小片が溶着		
53	窯道具 丸形匣鉢	KP-1-②	011116	11.4	6.4	12.8	13.8	1/4	1.0mm前後の白色粒を多く含む 0.5mm前後の黒色粒を含む	良好	内面：　2.5YR 3/6 暗褐色 外面：　2.5YR 5/3 にぶい赤褐				
54	甕	KP-1-① KP-1-②	011116 011116	28.2	(25.0)	-	37.4		0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10R 3/3 暗赤褐（塗り土有、塗り土のはけ(?)の痕跡顕著） 外面：2.5YR 4/6 暗赤褐（塗り土有塗り土のはけ(?)の痕跡顕著）		花紋（？）の抜き型貼り付け		
55	甕	KP-1-① KP-1-②	011116 011116	-	(34.0)	22.6	38.5	低部から胴部 1/3残存	0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：10R 3/6 暗赤（塗り土有） 外面：5YR 3/6 暗赤褐（塗り土有）		底部に陶印：「㊥」		
56	甕	KP-1-① KP-1-②	011116	23.0	29.3	15.2	27.8	1/2	0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10R 5/8 赤（塗り土のたれたあと） 外面：2.5YR 5/8 明赤褐（塗り土有）		菊紋の抜き型貼り付け		

表２　ＫＰ－１地点窯跡出土遺物観察表（２）

3房出土（第36図）

番号	器　種	出土地点	出土日	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	残存部	胎　　土	焼成	釉薬、色調	成形、技法	文様、意匠、陶印	製作時期	備　考
57	徳利	KP-1-③ KP-1-②	011116 011116	-	(17.4)	11.8	16.5	3/5	0.1～0.5㎜位の白色粒を含む 0.1㎜前後の黒色粒を少量含む	良好	内面：2.5YR 5/4 にぶい赤褐 外面：10R 3/6 暗赤（塗り土有）		底部に 陶印：「伊部大日本陶㊋」		
58	鉢 （火入？）	KP-1-③	011116	-	12.4	18.0	18.4	1/5	0.1～0.5㎜位の白色粒を含む 0.1～1.0㎜位の黒色粒を含む	良好	内面：10R 5/6 赤 外面：10R 4/3 赤（塗り土有）		胴部に桜紋のスタンプ		
59	擂鉢	KP-1-③	011116	31.6	12.7	12.4	32.6	1/3	0.1～2.0㎜位の白色粒を含む 0.1㎜前後の黒色粒を含む	良好	内面：10R 4/3 赤褐 外面：10R 4/2 灰赤				高台欠損
60	擂鉢	KP-1-① KP-1-③	011116 011116	32.0	(8.7)	-	33.0	口縁部のみ 1/5	0.1～0.5㎜位の白色粒を含む 0.1～0.5㎜位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10R 4/4 赤褐 外面：10R 4/3 赤褐				
61	甕	KP-1-② KP-1-③	011116 011116	25.0	(18.6)	-	31.8	口縁部のみ 1/3	0.1～0.5㎜位の白色粒を含む 0.1～0.5㎜位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10R 4/6 赤（塗り土のはけのあと有） 外面：2.5YR 3/6 暗赤褐（塗り土有）		花紋の貼り型（欠損）有り		ワラ状センイ付着
62	徳利	KP-1-③	011116	3.4	(3.4)	-	4.0	頸部のみ 1/2残存	0.1～0.5㎜位の白色粒を含む 0.1～0.5㎜位の黒色粒を少量含む	良好	内面：2.5YR 4/3 にぶい赤褐 外面：2.5YR 4/4 にぶい赤褐				
63	甕	KP-1-③	011116	9.2	7.4	4.8	10.0	2/3	0.1～0.5㎜位の白色粒を少量含む	良好	内面：5YR 4/2 灰褐 外面：10R 4/4 赤褐（塗り土有）				
64	擂鉢	KP-1-② KP-1-③	011116 011116	31.0	15.0	17.9	32.6	1/3	0.1～0.5㎜位の白色粒を含む 0.1～2.0㎜位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5YR 4/3 にぶい赤褐 外面：2.5YR 5/4 にぶい赤褐	わずかに注口の凹み 高台削り出し			すり目 22㎜幅　8本

3～4房出土（第37図）

65	灯明皿	KP-1-③～④ 仕切北トレンチ	011121	7.7	0.9	2.9	7.8	4/5	0.1㎜前後の白色粒を少量含む	良好	内面：7.5YR 5/3 にぶい褐 外面：5YR 5/3 にぶい赤褐	1.2cmケズリ			
66	甕	KP-1-③～④ 仕切北トレンチ	011121	21.2	(8.4)	-	25.9	口縁部のみ 1/6	0.1～0.5㎜位の白色粒を含む 0.1㎜前後の黒色粒を少量含む	良好	内面：7.5R 3/6 暗赤（口縁端部塗り土） 外面：10R 4/4 暗赤（塗り土有）	ランダムな強いナデ（ケズリ）			
67	徳利	KP-1-③～④ 仕切北トレンチ	011121	4.2	(4.2)	-	5.0	頸部のみ残存	0.1～0.5㎜位の黒色粒を極少量含む	良好	内面：10R 5/6 赤 外面：10R 5/4 赤褐（塗り土有）				
68	徳利	KP-1-③～④ 仕切北トレンチ	011121	4.8	(4.1)	-	5.4	頸部のみ3/4残存	0.1～0.5㎜位の黒色粒を含む 0.1～0.5㎜位の茶色粒を含む	良好	内面：2.5YR 5/4 にぶい赤褐 外面：10R 5/6 赤（塗り土?）				
69	小形角徳利	KP-1-③東トレンチ KP-1-③～④ 仕切北トレンチ	011126 011121	-	(9.1)	4.3	4.6	低部のみ残存	0.1㎜前後の白色粒を極少量含む	良好	内面：　5YR 4/3 にぶい褐 外面：5YR 2/3 極暗赤褐				
70	小形角徳利	KP-1-③東トレンチ KP-1-③～④ 仕切北トレンチ	011126 011121	-	-	4.4	5.1	胴部 2/3残存	0.1～0.5㎜位の白色粒を少量含む 0.1～0.5㎜位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10R 5/6 赤 外面：2.5YR 3/2 暗赤褐、 N 5/ 灰、10R 5/6 赤				
71	角徳利	KP-1-③～④ 仕切一括	011219	4.4	(7.9)	-	11.5	口縁部～肩部 1/2	0.1㎜前後の白色粒を含む 0.1㎜前後の黒色粒を極少量含む	良好	内面：2.5YR 6/6 橙 外面：10R5/6赤(塗り土?)口縁部 内面：2.5Y　5/1 黄灰 外面：7.5R 3/2 暗赤褐、2.5Y 5/1 黄灰				
72	角徳利	KP-1-③東トレンチ KP-1-③～④ 仕切一括	011126 011219	4.0	12.8	11.2	11.7	ほぼ残存	0.1～0.5㎜位の白色粒を少量含む 0.1～0.5㎜位の黒色粒を極少量含む	良好	内面：2.5YR 6/6 橙 外面：10R 5/6 赤 口縁部2.5YR 4/6赤褐（塗り土有）				
73	角徳利	KP-1-初 KP-1-③ KP-1-③～④ 仕切北トレンチ	011116 011116 011121	4.3	18.8	9.9	11.9	3/4	0.1～0.5㎜位の白色粒を少量含む	良好	内面：2.5YR 4/4 にぶい赤褐 外面：2.5YR 3/4暗赤褐, 10YR 5/1 褐灰				歪が著しい
74	擂鉢	KP-1-③～④ 仕切北トレンチ KP-1-④木北	011121 011116	35.5	(8.8)	-	36.2	口縁部のみ 2/5	0.1～0.5㎜位の白色粒を含む 0.1～0.5㎜位の黒色粒を少量含む	良好	内面：2.5YR 4/6　赤褐 外面：10R 5/6 赤				
75	窯道具 陶板	KP-1-③～④ 仕切南トレンチ	011121	-	厚み 2.2～ 2.8	-	幅 32.6	1/2	0.1～2.0㎜位の白色粒を含む 1.0㎜前後の黒色粒を含む	良好	上面：2.5YR 5/4 にぶい赤褐 下面：2.5YR 6/6 橙				上面に径約30cmにワラ状センイ付着
76	窯道具 陶板	KP-1-③～④ 仕切一括	011219	-	厚み 1.2～ 1.7	短幅 23.0	長幅 24.1	完存	0.5～1.0㎜位の白色粒を含む 0.5～1.0㎜位の黒色粒を少量含む	良好	上面：2.5YR 4/3 にぶい褐 下面：5YR 5/3 にぶい赤褐				上面に径約20cmのワラ状センイ付着
77	窯道具 角形匣鉢	KP-1-③～④ 仕切一括	011219	21.5	12.2	21.4	24.4	2/3	0.5～2.0㎜位の白色粒を多く含む 0.5～2.0㎜位の黒色粒を含む	良好	内面：10YR 6/4 にぶい黄橙 外面：5YR 3/3 暗赤褐（部分的に表面がガラス状）		胴部に陶印：「[illegible]」		
78	窯道具 穴あき丸形匣鉢	KP-1-③～④ 仕切北トレンチ	011116	33.4	14.6	31.8	34.4	1/4	0.5～2.5㎜位の白色粒を多く含む 0.5～2.0㎜位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5YR 4/2 灰赤 外面：2.5YR 2/4 極暗赤褐		胴部に円形、不定形の穴が数個あり		

4房出土（第38図）

79	徳利?	KP-1-④木北	011116	-	(3.8)	5.2	9.8	低部のみ 2/3	0.1～0.5㎜位の白色粒を含む 0.1～1.0㎜位の黒色粒を極少量含む	良好	内面：10R 3/6 暗赤 外面：10R 3/4 暗赤（塗り土有）				
80	蓋	KP-1-④木北	011116	-	(1.2)	-	11.0	1/5	0.1～1.0㎜位の白色粒を含む 0.1～0.5㎜位の黒色粒を極少量含む	良好	内面：10R 4/1 暗赤灰 外面：10R 4/3 赤褐				
81	蓋	KP-1-④木北	011116	-	1.2	-	7.4	2/5	0.1～0.5㎜位の白色粒を少量含む 0.1～0.5㎜位の黒色粒を含む	良好	内面：5YR 5/3 にぶい赤褐 外面：10R 5/6 赤				
82	徳利	KP-1-④木北	011116	4.2	(2.8)	-	4.9	頸部 1/2残存	0.1位の黒色粒を極少量含む	良好	内面：10R 4/6 赤 外面：10R 4/3　赤褐（塗り土有）				
83	掛花生	KP-1-③ KP-1-③～④ 仕切北トレンチ KP-1-④木北	011116 011121 011116	-	(21.0)	9.0	10.0	4/5	0.1～0.5㎜位の白色粒を含む 0.1～0.5㎜位の黒色粒を含む	良好	内面：10R 4/3 赤褐 外面：10R 4/3 赤褐、10YR 5/2 灰黄褐		底部ヘラ描き有り		

表２　ＫＰ－１地点窯跡出土遺物観察表（３）

番号	器　種	出土地点	出土日	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	最大径 (cm)	残存部	胎　土	焼成	釉薬、色調	成形、技法	文様、意匠、陶印	製作時期	備　考
84	角徳利	KP-1-④木北	011116	4.5	(17.8)	-	-	2/3	0.1～1.0㎜位の白色粒を含む	良好	内面：5YR 4/3 にぶい赤褐 外面：2.5YR 4/1 赤灰				
85	窯道具 陶板	KP-1-④木北	011116	-	厚み 1.0～ 1.2	-	17.8	1/2	0.1～1.5㎜位の白色粒を多く含む 0.5～3.0㎜位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5YR 6/6 橙 外面：2.5YR 6/6 橙				
86	窯道具 陶板	KP-1-④木北	011116	-	厚み 0.8～ 1.0	-	16.5	1/2	0.1～2.0㎜位の白色粒を多く含む 0.1～1.5㎜位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5YR 6/6 橙 外面：10R 6/6 赤橙				
87	窯道具 陶板	KP-1-④木北	011116	-	厚み 0.8～ 1.0	-	17.6	1/2	0.1～2.0㎜位の白色粒を多く含む 0.1㎜前後の黒色粒を含む	良好	内面：2.5YR 6/6 橙 外面：2.5YR 6/6 橙				
88	瓢付盃	KP-1-④	011114	-	3.8		幅 (縦) 5.8 (横) 6.6		精微	良好	表面：2.5YR 4/6 赤褐 断面：10R 5/8 赤				
89	甕	KP-1-④木北	011116	-	(18.7)	15.4	24.1	低部のみ 1/3	0.1～1.0㎜位の白色粒を含む 0.5～2.0㎜位の黒色粒を多く含む	良好	内面：10R 5/4 赤褐 外面：10R 3/4 暗赤				
90	甕	KP-1-④木北	011116	-	(10.2)	9.2	18.0	低部のみ残存	0.1～0.5㎜位の白色粒を多く含む 0.1～1.0㎜位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5YR 5/6 明赤褐 外面：10R 4/6 赤（塗り土有）		ロクロ調整の後、布等でナナメにナデ		
91	擂鉢	KP-1-④木北	011116	-	(6.4)	-	-	口縁部の 一部のみ残存	0.1～4.0㎜位の白色粒を含む 0.5～1.0㎜位の黒色粒を含む	良好	内面： 2.5YR 3/4 暗赤褐 外面：2.5YR 2/4 極暗赤褐				第2地点の窯からの流入
92	擂鉢	KP-1-④木北	011116	34.8	(7.8)	-	36.2	口縁部のみ 1/5	0.1㎜前後の白色粒を含む 0.5㎜前後の黒色粒を極少量含む	良好	内面：10R 5/8 赤 外面：10R 5/6 赤				
93	擂鉢	KP-1-④木北	011116	-	(5.5)	17.0	23.6	低部 1/4残存	0.1～0.5㎜位の白色粒を含む 0.1～0.5㎜位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10R 3/4 暗赤 外面：2.5YR 5/4 にぶい赤褐				すり目： 27㎜幅　10本 溶着痕
94	擂鉢	KP-1-④木北	011116	31.2	12.2	14.2	32.4	3/5	0.1㎜位の白色粒を含む 0.1～0.5㎜位の黒色粒を含む	良好	内面：10R 4/6 赤 外面：10R 5/6 赤				すり目： 39㎜幅18本 すり目： 29㎜幅　14本 溶着痕
95	擂鉢	KP-1-④木北	011116	29.3	(8.1)	-	30.0	口縁部のみ 1/5	0.1㎜前後の白色粒を含む 0.1㎜前後の黒色粒を含む	良好	内面：10R 5/6 赤 外面：10R 5/8 赤				

5～6房出土（第39～40図）

96	甕	KP-1-⑤木南	011116	-	(21.0)	11.9	25.0	胴部 1/4残存	0.5㎜前後の黒色粒を含む	良好	内面：10R 4/4 赤褐 外面：7.5R 4/3 にぶい赤褐（塗り土有）				
97	甕	KP-1-⑤木南	011116	-	(8.0)	15.6	26.5	低部 1/2残存	0.5～2.0㎜位の白色粒を含む 0.5～2.0㎜位の黒色粒を多く含む（全体に胎土が荒い）	やや不良	内面：　5YR 7/6 橙 外面：　2.5YR 6/6 橙				径2～3cmの凹み数箇所
98	窯道具 丸形匣鉢	KP-1-⑤木南	011116	30.9	13.1	32.8	34.0	1/5	0.5～2.0㎜位の白色粒を多く含む 0.5～2.0㎜位の黒色粒を多く含む	良好	内面：10R 4/4 赤褐（塗り土のはけ目が顕著） 外面：2.5YR 3/4 暗赤褐（塗り土有）				
99	徳利	KP-1-⑤～⑥壁 東トレンチ	011119	-	(5.0)	9.8	11.2	低部のみ残存	0.1～1.0㎜位の白色粒を含む 0.1㎜前後の黒色粒を極少量含む	良好	内面：10R 5/4 赤褐 外面：2.5YR 4/4 にぶい赤褐（塗り土有）		底部に陶印：「卄」		
100	徳利?	KP-1-⑤～⑥壁 東トレンチ	011119	-	(6.4)	7.0	10.0	低部から 胴部 1/3残存	0.1～0.5㎜位の白色粒を含む	良好	内面：10R 4/2 灰赤 外面：10R 4/3 赤褐（塗り土有）		底部に陶印：「令」		
101	徳利	KP-1-⑤～⑥壁 東トレンチ		2.1	14.7	5.4	9.1	3/4	0.1㎜位の白色粒を極少量含む 0.1～0.5㎜位の黒色粒を極少量含む	良好	内面：2.5YR 6/8 橙 外面：10R 4/4 赤褐（塗り土有）		底部に 陶印：「仝[illegible]」		
102	小甕	KP-1-⑤～⑥壁 東トレンチ	011119	4.0	(2.6)	-	4.4	口縁部のみ 1/4	0.1～0.5㎜位の白色粒を含む	良好	内面：10YR 4/2 灰黄褐 外面：5YR 3/3 暗赤褐（塗り土有）				
103	窯道具 丸形匣鉢	KP-1-⑤～⑥壁 東トレンチ	011119	34.2	13.4	30.4	36.4	1/4	0.1～2.0㎜位の白色粒及び茶色粒を多く含む	良好	内面：2.5YR 3/3 暗赤褐（塗り土のはけ目が顕著） 外面：2.5YR 3/4 暗赤褐(塗り土有)				
104	窯道具 丸形匣鉢	KP-1-⑤～⑥壁 東トレンチ	011119	33.2	12.5	34.5	36.2	1/3	0.1～1.5㎜位の白色粒を含む 0.1～2.0㎜位の黒色粒を含む	良好	内面：10R 4/3 赤褐（口縁端部塗り土） 外面：2.5YR 3/4 暗赤褐（塗り土有）				底部の端に4.2cm×3.2cmの抉りあり
105	窯道具 丸形匣鉢	KP-1-⑤～⑥壁 東トレンチ		21.0	17.6	22.0	23.2	1/5	0.1～2.5㎜位の白色粒を含む 0.1～1.0㎜位の黒色粒を含む	良好	内面：10R 4/2 灰赤 外面：2.5YR 4/2 灰赤		胴部に陶印：「下」		
106	擂鉢	KP-1-⑤～⑥壁 東トレンチ	011119	-	(4.0)	18.4	20.6	低部 1/2残存	0.1～1.5㎜位の白色粒を多く含む 0.5㎜前後の黒色粒を含む	良好	内面：2.5YR 5/8 明赤褐 外面：10R 5/8 赤（塗り土有）				すり目： 25㎜幅　8本
107	擂鉢	KP-1-⑤～⑥壁 東トレンチ	011119	29.0	(10.1)	-	30.4	1/4	0.1～1.0㎜位の白色粒を多く含む 0.5～1.0㎜位の黒色粒を含む	良好	内面：10R 3/3 暗赤褐 外面：10R 3/4 暗赤				すり目： 28㎜幅　8本
108	窯道具 丸形陶板	KP-1-⑤～⑥壁 東トレンチ	011119	-	厚み 0.7	-	8.1	完存	観察不可	良好	内面：10R 5/4 赤褐 外面：5YR 6/3 にぶい橙				
109	窯道具 丸形陶板	KP-1-⑤～⑥壁 東トレンチ	011119	-	厚み 0.8	-	14.0	1/2	0.1～0.5㎜位の白色粒を含む 0.1～0.5㎜位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10R 5/3 赤褐 外面：10R 5/4 赤				
110	窯道具 丸形陶板	KP-1-⑤～⑥壁 東トレンチ	011119	-	厚み 0.8	-	14.2	1/2	0.1～0.5㎜位の白色粒を含む	良好	内面：5YR 4/3 にぶい赤褐 外面：7.5YR 5/3 にぶい赤褐				
111	窯道具 方形陶板	KP-1-⑤～⑥壁 東トレンチ	011119	-	厚み 2.0	短辺 幅 23.7	長辺 幅 -	-	0.5～2.0㎜位の白色粒を含む 0.5～3.0㎜位の黒色粒を含む	良好	内面：10R 4/3 赤褐 外面：10R 3/4 暗赤				
112	鉢	KP-1-⑤～⑥壁 東トレンチ	011119	32.1	17.8	27.2	34.0	1/5	0.1～0.5㎜位の白色粒を含む 0.1～0.5㎜位の黒色粒を少量含む	良好	内面：2.5YR 4/6 赤褐（塗り土のはけ目が顕著） 外面：2.5YR 4/6 赤褐（塗り土有）		底部に陶印：「个」		

表２　ＫＰ－１地点窯跡出土遺物観察表（４）

番号	器　種	出土地点	出土日	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	最大径（cm）	残存部	胎　　土	焼成	釉薬、色調	成形、技法	文様、意匠、陶印	製作時期	備　考
113	窯道具 陶板	KP-1-⑤～⑥壁 東トレンチ	011119	-	厚み 1.9～ 2.2	-	-	19.7cm　残存	0.1～２.0㎜位の白色粒を多く含む 0.5～1.0㎜位の黒色粒を含む	良好	上面：7.5YR 3/3 暗褐（塗り土有、塗り土のはけの痕跡顕著） 下面：7.5YR 4/3 褐（ワラ状のセンイ多数付着）		製品の圧着痕		
６房出土（第41・42図）															
114	鉢	KP-1-⑥	011119	3.5	16.0	-	36.0	1/5	0.1㎜位の白色粒を含む 0.1～0.5㎜位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10R 5/6 赤 外面：2.5YR 4/4 にぶい赤褐(塗り土有)		貼り付けの はかれた跡あり		
115	鉢	KP-1-⑥	011119	33.4	17.7	28.4	35.0	1/10	0.1～0.5㎜位の白色粒を含む 0.1～0.5㎜位の黒色粒を含む	良好	内面：10R 3/6 暗赤（塗り土有） 外面：2.5YR 4/4 にぶい赤褐(塗り土有)				
116	窯道具 角形匣鉢	KP-1-⑥	011119	31.8	12.1	31.8	34.8	約1/4	0.1～1.0㎜位の白色粒を含む 0.5～3.0㎜位の黒色粒を多く含む	良好	内面：2.5YR 4/3 にぶい赤褐 外面：2.5YR 3/3 暗赤褐				
117	窯道具 トチン	KP-1-⑥	011119	-	3.4	-	-	-	0.5㎜位の白色粒を含む 0.1～2.0㎜位の黒色粒を含む	良好	内面：10R 5/6 赤 外面：10R 6/6 赤橙				
118	窯道具 トチン	KP-1-⑥	011119	-	3.0	-	5.2	ほぼ完存	0.5～1.0㎜位の黒色粒を少量含む	良好	内面：2.5Y 7/1 灰白 外面：5YR 4/3 にぶい赤褐				
119	窯道具 丸形陶板	KP-1-⑥	011119	-	厚み 0.9	-	17.4	1/2	0.5～1.0㎜位の白色粒を含む 0.5～1.0㎜位の茶色粒を含む0.5～1.0㎜位の黒色粒を含む	良好	上面：5YR 7/4 にぶい橙 下面：5YR 7/4 にぶい橙				
120	窯道具 丸形陶板	KP-1-⑥	011119	-	厚み 1.1	-	17.4	完存	0.1～1.0㎜位の白色粒を含む 0.1～1.0㎜位の黒色粒を含む	良好	上面：2.5YR 6/4 にぶい橙 下面：2.5YR 6/4 にぶい橙		上面に陶印：「一」		
121	窯道具 陶板	KP-1-⑥	011119	-	厚み 1.1	-	18.3	ほぼ完存	0.5㎜位の白色粒を少量含む 1.0㎜前後の茶色粒を少量含む	良好	上面：5YR 6/6 橙 下面：5YR 7/6 橙		上部に陶印：「一」		
122	小形壺	KP-1-⑥	011119	-	1.9	2.1	4.3	低部のみ残存	0.1㎜位の白色粒を少量含む	良好	内面：10R 5/4 赤褐 外面：10R 4/3 赤褐	底部に糸切			
123	甕	KP-1-⑥	011119	8.2	(5.5)	-	8.6	口縁部のみ 1/8	0.1～1.0㎜位の白色粒を少量含む 0.1㎜前後の黒色粒を極少量含む	良好	内面：2.5YR 4/4 にぶい赤褐 外面：10R 4/4 赤褐				
124	甕	KP-1-⑥	011119	11.7	11.1	7.0	12.6	4/5	0.1～0.5㎜位の白色粒を少量含む 0.1～0.5㎜位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10R 5/6 赤 外面：10R 6/4 にぶい赤橙（塗り土有）		底部に 陶印：「□□ 大日本伊部陶」		
125	甕	KP-1-⑥	011119	15.6	(7.0)	-	16.2	口縁部のみ 1/8	0.1㎜位の白色粒を少量含む 0.5㎜前後の黒色粒を少量含む	良好	内面：2.5YR 4/6 赤褐 外面：7.5YR 5/4 にぶい褐				
126	徳利	KP-1-⑥	011119	2.1	(2.6)	-	2.7	頸部のみ残存	0.1～0.5㎜位の白色粒を極少量含む 0.1～0.5㎜位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10R 4/6 赤 外面：10R 3/6 暗赤（塗り土有）				
127	揺鉢	KP-1-⑥	011119	31.0	13.7	17.1	31.8	1/3	0.1～0.5㎜位の白色粒を少量含む 0.1～0.5㎜位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10R 5/8 赤 外面：2.5YR 4/6 赤褐（塗り土有）		底部に 陶印：「(大) 大日本伊部陶」		すり目： 17㎜幅　7本 内壁面溶着痕
128	揺鉢	KP-1-⑤木南 KP-1-⑥	011116 011119	28.5	12.6	17.2	30.0	2/5	0.1～0.5㎜位の白色粒を少量含む 0.1～1.0㎜位の黒色粒を少量含む	良好	内面：7.5YR 4/3 褐 外面：7.5YR 4/2 灰褐				すり目： 24㎜幅　9本
６房東側トレンチ出土（第42図）															
129	窯道具 陶板	KP-1-⑥ 東側トレンチ	011126	-	厚み 1.1～ 1.4	-	17.6		観察不可	良好	上面：10R　3/4 暗赤 下面：10R　3/6 暗赤				
130	窯道具 角形陶板	KP-1-⑥ 東側トレンチ	011126	-	厚み 1.2～ 1.5	-	-		0.1～2.0㎜位の白色粒を多く含む 0.1～1.0㎜位の黒色粒を含む	良好	上面：2.5YR 5/4 にぶい褐 下面：2.5YR 5/6 明赤褐				
131	窯道具 陶紐	KP-1-⑥ 東側トレンチ	011126	-	短径 1.6	-	長径 1.9	残存長 10.0cm	0.1～0.5㎜位の白色粒を含む 0.1～0.5㎜位の黒色粒を少量含む	良好	10R　5/4 赤褐	手ビネリ　紐状			現代陶の混入の可能性あり
132	窯道具 陶紐	KP-1-⑥ 東側トレンチ	011126	-	短径 2.5	-	長径 2.6	残存長 13.5cm	0.1～0.5㎜位の白色粒を含む	良好	2.5YR　6/4 にぶい橙	手ビネリ　紐状			現代陶の混入の可能性あり
133	窯道具 陶板	KP-1-⑥ 東側トレンチ	011126	-	厚み 1.8	-	幅 33.8		0.1～2.0㎜位の白色粒を多く含む 0.1～1.0㎜位の黒色粒を含む	良好	上面：2.5YR 5/6 明赤褐 下面：5YR 6/4 にぶい橙				
煙道出土（第42・43図）															
134	窯道具 丸形陶板	KP-1-ケド	011112	-	厚み 1.0～ 1.5	-	24.7	完存	0.5～3.0㎜位の白色粒を多く含む 0.5～2.0㎜位の黒色粒を含む	良好	上面：10R　4/3 赤褐 下面：2.5YR　4/2 灰赤				
135	窯道具 角形匣鉢	KP-1-ケド	011112	23.9	12.2	25.4	27.8	1/3	0.5～1.5㎜位の白色粒を多く含む 0.5～2.0㎜位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5YR 5/4 にぶい赤褐 外面：2.5Y　5/1 黄灰				
136	窯道具 丸形陶板	KP-1-ケド	011112	-	厚み 0.7	-	17.0	1/2	0.1～1.0㎜位の白色粒を多く含む 0.1～1.0㎜位の黒色粒を含む	良好	上面：10R 5/4 赤褐 下面：10R 5/4 赤褐				
137	蓋	KP-1-ケド	011112	-	(1.3)	-	15.2	2/5	0.1～0.5㎜位の白色粒を多く含む 0.1～0.5㎜位の黒色粒を少量含む	良好	上面：10R 5/6 赤（塗り土） 下面：10R　6/6 赤橙				内面2cm幅のズリ
138	小杯	KP-1-ケド	011112	5.2	2.1	3.4	5.4	1/2	0.1～0.5㎜位の白色粒を極少量含む	良好	内面：7.5YR 4/1 褐灰 外面：10YR　5/1 褐灰				
139	灯明皿	KP-1-ケド	011112	9.8	1.5 (一枚)	-	10.2	1/4	0.1～0.5㎜位の白色粒を少量含む 0.1㎜前後の黒色粒を含む	良好	内面：2.5YR 6/4 にぶい橙 外面：5YR 6/4 にぶい橙				3個体熔着

表２　ＫＰ－１地点窯跡出土遺物観察表（５）

番号	器　種	出土地点	出土日	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	残存部	胎　　土	焼成	釉薬、色調	成形、技法	文様、意匠、陶印	製作時期	備　考
140	徳利	KP-1-ケド	011112	-	(7.3)	-	9.8	肩部のみ残存	0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：2.5YR 5/4 にぶい赤褐 外面：2.5YR 4/1 赤褐				
141	徳利	KP-1-ケド	011112	2.4	(1.9)	-	2.9	頸部のみ残存	0.5mm前後の白色粒を極少量含む	良好	内面：2.5YR 5/1 黄灰 外面：2.5Y　5/1 黄灰　7.5YR 4/2 灰褐				
142	小皿	KP-1-表採 ケド付近	011126	-	2.6	6.2	11.3	低部1/3残存	0.1～1.0mm位の白色粒を少量含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5YR 6/8 橙 外面：2.5YR 5/6 明赤褐	底部に糸切	内面に×の陶印		KP-2からの流入
143	甕	KP-1-⑤木南 KP-1-⑥ KP-1-ケド	011116 011119 011112	14.7	11.4	9.7	16.6	3/4	0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む 0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：10R 3/1暗 赤灰、10R 5/6 赤 外面：5YR 4/3 にぶい赤褐（塗り土）		底部に陶印：「伊大部自陶本」		
144	徳利	KP-1-表採 ケド付近 KP-1-外東南外	011126 011119	-	(17.7)	-	16.2		0.1mm前後の白色粒を少量含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5YR 5/6 明赤褐 外面：5YR 5/6 明赤褐（塗り土有）				
145	窯道具 角形匣鉢	KP-1-ケド	011112	23.4	11.4	23.3	26.2	2/3	0.1～2.0mm位の白色粒を含む 2.0mm前後の黒色粒を含む	良好	内面：2.5YR 5/3 にぶい赤褐 外面：2.5YR 4/3 にぶい赤褐				

南北トレンチ出土（第44・45図）

146	小形角徳利	KP-1-ケド外 南北トレンチ	011121	-	(10.2)	4.2	4.4	1/4	0.1～0.5mm位の白色粒を極少量含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：2.5YR 6/6 橙 外面：2.5YR 5/6 明赤褐（塗り土有）				
147	角徳利	KP-1-ケド外 南北トレンチ	011121	-	-	-	-	肩部のみ残存	0.1～0.5mm位の白色粒を極少量含む	良好	内面：2.5YR 5/3 にぶい赤褐 外面：10R 4/4赤褐（塗り土有）				歪が著しい
148	土管	KP-1-ケド外 南北トレンチ	011121	36.4	(15.4)	-	41.2		0.1～2.0mm位の白色粒を多く含む 0.1～3.0mm位の黒色粒を多く含む	良好	内面：2.5YR 4/3 にぶい赤褐 外面：2.5YR 3/4 暗赤褐				
149	徳利	KP-1-ケド外 南北トレンチ		-	(9.7)	6.4	10.0	低部から 胴部1/3残存	0.1mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：7.5R 4/2 灰赤 外面：7.5R 4/4 にぶい赤（塗り土有）				
150	窯道具 穴あき丸形匣鉢	KP-1-ケド外 南北トレンチ	011121	11.8	9.6	12.7	13.2	1/2	0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む 0.5～2.0mm位の黒色粒を多く含む	良好	内面：5YR 5/2 灰褐 外面：10R 4/3 赤褐		底なし、底部糸切り		
151	窯道具 角形匣鉢	KP-1-ケド外 南北トレンチ	011121	23.2	13.1	21.4	24.6	2/5	0.5～2.0mm位の白色粒を含む 0.5～2.5mm位の黒色粒を多く含む	良好	内面：10R 4/3 赤褐（塗り土のはけ目が顕著） 外面：10RR 3/4 暗赤（塗り土有）				
152	徳利	KP-1-ケド外 南北トレンチ	011121	-	(5.9)	12.8	17.2	低部 1/4残存	0.1mm位の白色粒を極少量含む	良好	内面：10R 4/3 赤褐 外面：10R 3/4 暗赤（塗り土有）				
153	窯道具 丸形匣鉢	KP-1-ケド外 南北トレンチ	011121	33.0	(9.6)	-	34.2	口縁部のみ 1/8	0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.5～1.5mm位の茶色粒を含む	良好	内面：10R 4/3 赤褐 外面：10R 4/3 赤褐				
154	擂鉢	KP-1-ケド外 南北トレンチ	011121	25.0	(4.5)	-	27.0	口縁部のみ 1/6	0.1～2.0mm位の白色粒や茶色粒を多く含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：5Y 5/1 灰 外面：5Y 5/1 灰				KP-2からの流入
155	擂鉢	KP-1-ケド外 南北トレンチ	011121	29.0	(7.9)	-	30.2	口縁部のみ 1/5	0.5～5.0mm位の茶色粒を含む 0.1～1.0mm位の白色粒を少量含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10YR 6/1 褐灰 外面：10YR 6/2 灰黄褐				すり目： 23mm幅　8本 KP2からの流入
156	擂鉢	KP-1-ケド外 南北トレンチ	011121	32.0	(6.1)	-	32.8	口縁部のみ 1/8	0.1～1.0mm位の白色粒を多く含む	良好	内面：2.5YR 6/6 橙 外面：10R 5/6 赤				すり目： 30mm幅　7本 KP2からの流入
157	擂鉢	KP-1-ケド外 南北トレンチ	011121	31.9	(7.1)	-	33.0		0.1～1.0mm位の白色粒を含む	良好	内面：2.5YR 5/3 にぶい赤褐 外面：5Y 7/3 浅黄				すり目： 21mm幅　8本 KP-2からの流入
158	擂鉢	KP-1-ケド外 南北トレンチ	011121	-	(8.7)	12.6	27.2	低部1/4残存	0.1～1.5mm位の白色粒を含む 0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：5YR 6/6 橙 外面：10YR 6/3 にぶい黄橙				すり目： 20mm幅　8本
159	擂鉢	KP-1-ケド外 南北トレンチ	011121	32.7	(6.7)	-	33.8	口縁部のみ 1/8	0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：7.5Y 6/1 灰 外面：7.5Y 5/2 灰褐				KP2からの流入
160	擂鉢	KP-1-ケド外 南北トレンチ	011121	37.4	(6.7)	-	38.2	口縁部のみ 1/8	0.1～0.5mm位の白色粒を含む	良好	内面：5YR 4/2 灰褐 外面：2.5Y 7/3 浅黄				すり目：20mm幅　6本 口径が多少小さくなる可能性。KP2からの流入
161	擂鉢	KP-1-ケド外 南北トレンチ	011121	31.9	(7.4)	-	33.0	口縁部のみ 1/10	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10YR 5/2 灰黄褐 外面：7.5YR 3/1 黒褐				すり目： 29mm幅　7本 KP2からの流入ガラス質の自然釉付着
162	擂鉢	KP-1-ケド外 南北トレンチ	011121	29.0	(8.3)	-	30.4	約1/4	0.1～1.5mm位の白色粒を含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：10R 4/3 赤褐 外面：10R 4/2 灰赤				すり目： 24mm幅　8本 KP-2からの流入
163	擂鉢	KP-1-ケド外 南北トレンチ	011121	24.0	(4.0)	-	24.6	口縁部のみ1/6	0.1～2.0mm位の白色粒を含む 0.1～3.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5YR 6/6 橙 外面：2.5YR 7/6 橙				KP-2からの流入
164	擂鉢	KP-1-ケド外 南北トレンチ	011121	-	(8.3)	16.8	25.4	低部 1/3残存	0.1～2.0mm位の黒色粒を少量含む	不良	内面：7.5YR 7/4 にぶい橙 外面：5YR 7/6 橙				すり目： 32mm幅　7本 KP2からの流入

初戸上層（客土）出土（第46図）

165	徳利	KP-1-初 東上層（客土）	011116	-	(7.6)	-	13.7	胴部 1/6残存	0.1mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：5YR 4/3 にぶい赤褐 外面：2.5YR 4/3 にぶい赤褐（塗り土有）				大きな歪み有り
166	徳利	KP-1-初 東上層（客土）	011116	-	(11.0)	8.0	11.6	低部 1/2残存	0.1～1.0mm位の白色粒を含む	良好	内面：10R 5/6 赤 ～10R 4/2 灰赤 外面：2.5YR 6/8 橙～2.5YR 4/8 赤褐				
167	徳利	KP-1-初 東上層（客土）	011116	-	(5.6)	5.8	9.8	低部 1/5残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：2.5YR 4/6 赤褐 外面：2.5YR 4/4 にぶい赤褐（塗り土有）		底部に陶印：「㊗」		

表２　ＫＰ－１地点窯跡出土遺物観察表（６）

番号	器種	出土地点	出土日	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	残存部	胎土	焼成	釉薬、色調	成形、技法	文様、意匠、陶印	製作時期	備考
168	徳利	KP-1-初 東上層（客土）	011116	10.0	(3.5)	8.7	11.2	低部のみ残存	0.1～1.0mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：10R 5/8 赤 外面：5YR 3/6 暗赤褐		底部に陶印：「⬡」		
169	徳利	KP-1-初 東上層（客土）	011116	-	(6.5)	7.5	10.5	低部のみ残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む	良好	内面：7.5R 4/2 灰赤 外面：7.5R 4/2 灰赤（塗り土有）		底部に陶印：「 [illegible] 」		
170	涛？	KP-1-初 西上層(客土)	011120	-	4.3	6.8	13.7	1/2	0.1～0.5mm位の白色粒を極少量含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を極少量含む	良好	内面：5Y 6/2 灰オリーブ 外面：2.5Y 3/4 暗赤褐	型押 蓮華形			灰オリーブ色の釉か内面全体に厚く付着
171	灯明受皿	KP-1-初 東上層（客土）	011116	6.7	1.2	3.1	6.9	完存	観察不可	良好	内面：5YR 5/4 にぶい赤褐（塗り土有） 外面：5YR 5/4 にぶい赤褐（塗り土有）				
172	窯道具 角形匣鉢	KP-1-初 東上層（客土）	011116	25.0	25.0	26.4	27.7	1/5	0.1～0.5mm位の白色粒を多く含む 0.5～1.0mm位の黒色粒を含む 0.1～0.5mm位の茶色粒を含む	良好	内面：7.5R 4/6 赤 外面：7.5YR 4/1 褐灰		下から上へカドをナデ上げて調整		
173	窯道具 丸形匣鉢	KP-1-初 西上層(客土)	011120	34.3	13.4	33.0	36.3	完存	0.5～3.0mm位の白色粒を多く含む 0.5～3.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5YR 3/3 暗赤褐 外面：10R 3/2 暗赤褐		焼成時のワレ 胴部に陶印：「 [illegible] 」		
174	甕	KP-1-初 西上層(客土)	011120	26.6	33.5	27.2	37.0	1/5	0.1～0.5mm位の白色粒を含む	良好	内面：10R 5/6 赤（口縁部付近に部分的に塗り土有） 外面：7.5R 3/6 暗赤（塗り土有）				
175	窯道具 陶板	KP-1-初 東上層（客土）	011116	-	厚み 1.8～ 2.2	-	幅 --	?	0.1～2.0mm位の白色粒を含む 1.0～4.0mm位の黒色粒を多く含む	良好	上面：7.5R 3/2 暗赤褐 下面：2.5YR 3/3 暗赤褐				藁状植物繊維付着
176	窯道具 穴あき丸形匣鉢	KP-1-初 東上層（客土）	011116	17.2	6.4	18.3	19.4	1/3	0.1～2.0mm位の茶色粒を含む 0.1～1.0mm位の白色粒を少量含む 0.5～1.0mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：7.5YR 4/2 灰褐 外面：5YR 3/3 暗赤褐				

表採資料（第47図）

177	擂鉢	KP-1-表採	011119	35.3	14.0	21.4	36.6	1/8	0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.1～1.0mm位の茶色粒を多く含む	良好	内面：10R 5/6 赤 外面：10R 4/3 赤褐				すり目： 32mm幅　9本
178	擂鉢	KP-1-表採	011119	26.1	11.3	16.8	26.9	1/2	0.1mm位の白色粒を含む	良好	内面：2.5YR 5/6 明赤褐 外面：2.5YR 4/6 赤褐		底部に陶印：「伊大 富引 尚本 國」		すり目： 19mm幅　8本 擂り目の圧痕有り
179	大角徳利	KP-1-表採	011119	-	(22.0)	-	-	胴部の 一部のみ残存	0.1mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：10R 5/6 赤 外面：10R 5/6 赤（塗り土有				
180	蓋	KP-1-表採	011119	-	2.8	-	22.0	1/4	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を多く含む	良好	上面：10R 5/6 赤（塗り土有） 下面：10R 5/6 赤～2.5Y 7/3 浅黄	内面ケズリ			
181	浅鉢	KP-1-表採	011119	-	(4.4)	12.0	17.0	低部 1/2残存	0.1mm位の白色粒を含む	良好	内面：10R 4/2 灰赤～N 4/ 灰 外面：10R 3/6 暗赤～5Y 5/2 灰オリーブ				

表２　ＫＰ－１地点窯跡出土遺物観察表（７）

第５章　KP－２地点窯跡の調査概要

第１節　位置と調査の概要

KP－２地点窯跡は、国指定史跡「伊部南大窯跡」から西南西方向へ100m、標高40m～45mの北向き緩斜面に位置する。窯跡の立地する場所の小字名は「向山」で付近には「西竈」という場所もあるが、遺跡としては周知されていなかった。調査前の現況としては、幅15～20m、奥行き５m前後の横幅の広い段が、２～３段観察でき、その東側の凹部に多量の擂鉢片の堆積が確認できる。平成12年度に実施した備前市内遺跡分布調査において、擂鉢片や大甕片が採取でき、多量の擂鉢片の堆積状況などから、16世紀前後の相当な規模をもつ窯跡があるのではないかと推定された。

この地点は金重有邦氏宅のすぐ南側にあり、庭に隣接しているため、作業期間や作業地点を最小限にとどめることとした。そのため多量に擂鉢片が確認された地点のすぐ東側の段上に、幅１m弱のトレンチを数mにわたって並行して２本設定し、そのうち１本については多量の擂鉢片を断割る位置をとった。これにより窯跡の有無を確認し、確認できた場合は窯の幅およびその軸方向、また窯と物原との関係が明らかになると考えたからである。作業は、伐採でチェンソーを使用したほかは、すべて手作業で実施した。

第２節　遺構の概要

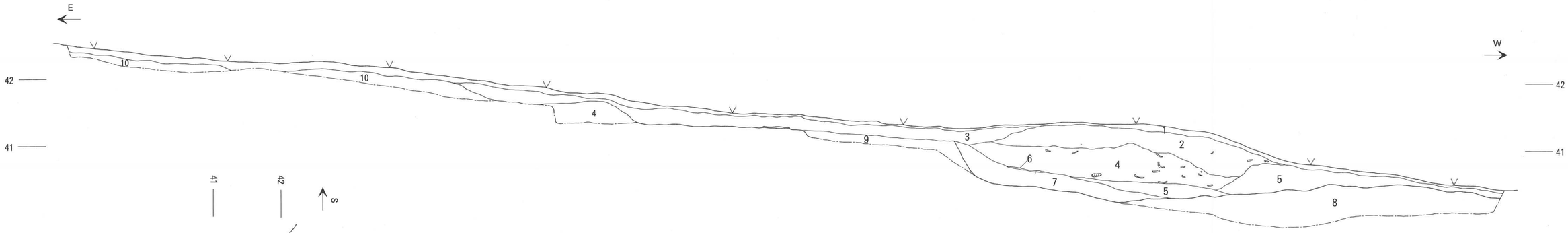
１．大　窯

調査は前節でも記述したとおり、２本のトレンチのみである。南側をトレンチ１、北側をトレンチ２とした。トレンチは約３mの間隔で、ほぼ並行に設定した。

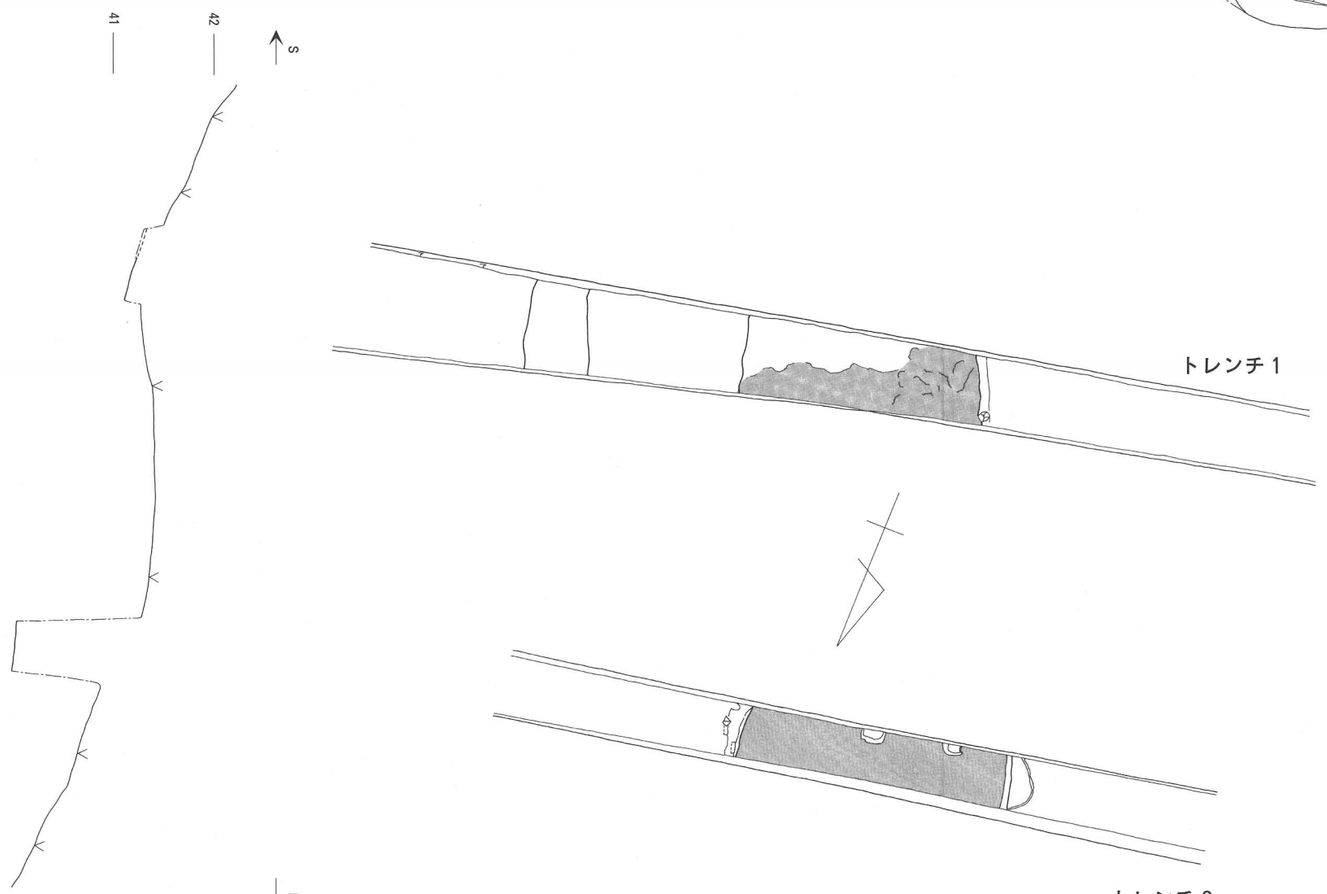
トレンチ１は幅１m弱、長さは東西方向に約21mで、トレンチ２の南側に位置する。トレンチ１のほぼ中央部、現地表下0.3mの浅い部分で、東西方向に幅約2.5mの赤色の被熱面を確認し、そのうち北側３分の２は窯の床面が現存していた。また被熱面から東へ1.5mの地点で、幅0.6mの別の被熱面も検出された。当初窯を保護するための溝に関連するものかと考えたが、原位置での被熱の可能性も考えられ、結論は得られていない。

トレンチの西側部分は擂鉢が多量に堆積していた地点で、トレンチがそれを断割るような形になっている。その結果、先ほどの窯床面から東へ２mの地点で、トレンチ内での幅になるが東西方向５m弱、深さ最大１mの擂鉢を主体とする物原が確認された。物原はレンズ状に堆積していて、その直下には灰黄色土の良質な粘土層が走っている。

トレンチ２はトレンチ１の北側に位置する。幅１m弱で、長さは東西方向に約12mで、ちょうど幅広の段の肩の部分にあたる。トレンチ１のほぼ中央部、現地表下0.7mの深さで、粘土ブロックが一定の範囲にわたってひろがっており、その直下にトレンチ内の計測ではあるが、幅約2.7m、残存高さ約0.6mの窯体を確認した。窯体内は数cmから30cm大の被熱ブロックで層である。窯床面は凹凸がなく断面レンズ状に堅く焼き締まっているが、窯壁については凹凸があり、やや焼きしまり具合が弱

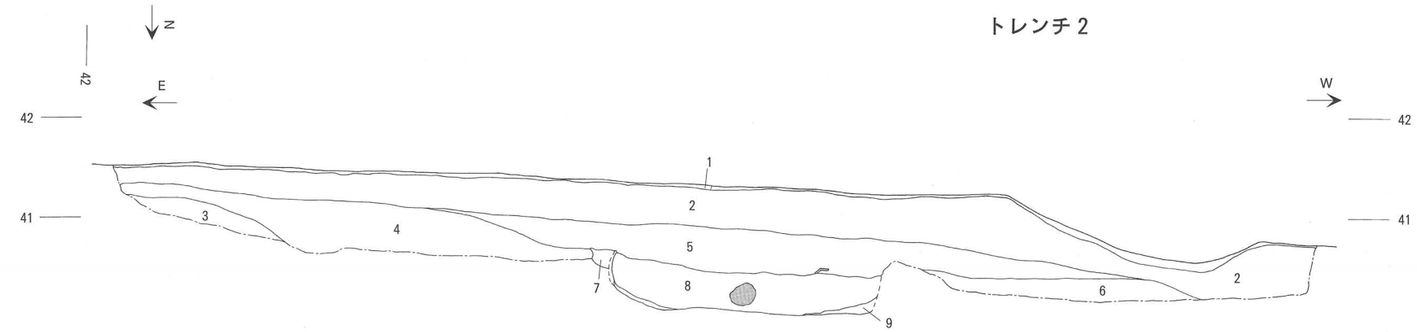


トレンチ１断面



トレンチ１・２縦断面

ＫＰ－２　トレンチ１南壁断面図
1　表層　黒褐色土（7.5YR3/1）
2　物原上面　橙色土層（7.5YR7/6）　やや砂質　サンプル
3　表土直下　にぶい褐色（7.5YR5/4）
4　物原　橙色土層（7.5YR6/8）　大量の擂鉢片を含む。20㎝前後の角礫を含む　サンプル
5　表土直下　にぶい橙色（7.5YR6/4）　数㎝大の角礫を少し含む
6　物原内堆積　灰黄色土（10YR7/2）　数㎝大の角礫を含む。粘性あり
7　物原内堆積　にぶい橙色土（7.5YR6/4）　橙色ブロック（5YR7/8）を多く含む。遺物をごく少量含む　サンプル
8　旧地表内　灰黄色土（10YR7/2）　良質な粘土
9　ベース層　明黄褐色土（10YR7/6）　ベース層。よくしまったやや砂質のある土で、灰色ブロックを含む
10　ベース層　灰白色土（10Y8/1）　10～20㎝大の角礫と粘土からなる層



トレンチ２断面

ＫＰ－２　トレンチ２南壁断面図
1　表　　層　黒褐色土層（7.5YR3/1）
2　　　　　にぶい橙色土層（7.5YR6/4）　やや砂質あり
3　ベース層　灰白色土層（10Y8/1）　10～20㎝大の角礫と粘土からなる
4　物　　原　にぶい褐色土層（7.5YR6/3）　数㎝大の礫、10㎝大の窯体片、擂鉢片を多く含む層
5　　　　　にぶい褐色土層（7.5YR6/3）　やや砂質あり
6　　　　　にぶい褐色土層（7.5YR6/3）　数㎝大の小礫を多く含む層
7　窯　　壁　橙色土（5YR6/8）　被熱層
8　窯内埋土　橙色土（7.5YR6/8）　数㎝～30㎝大の被熱したブロックでなる層
9　窯内埋土　明褐色土（7.5YR5/6）　1㎝大の小さいブロックからなる

0　2m

ＫＰ－２断面図両壁

第50図　ＫＰ－２地点窯跡平断面図（1/80）

いようである。特に西側の壁については、被熱部分が剥落したのか、確認できなかった。東側の壁については、被熱部分が残り、その外側には間接的に熱を受けたと思われる橙色土層が確認できた。この窯体の東側には、数cm大の礫、10数cm大の窯壁片、多量の擂鉢片からなる層が最大50cmの厚さで堆積している。西側は数cm大の小礫を多く含む層である。

このトレンチ内において、築窯時の旧地表についても検出し窯構造を追及する計画であったが、予想外に窯壁が脆弱なことや、調査終了期限が近づいていたため、やむなく中途で埋め戻さざるをえなかった。しかし、ここまでの土層観察の知見では窯が築かれたときの床面は、限りなく旧地表に近いか、掘り窪められたとしても数10cm程度と推定された。

以上のトレンチ調査から、この窯の規模や構造がある程度判明したので、以下に所見をまとめる。標高40～45mの北向きの斜面に築かれた大窯で、ほぼ地上に構築されていたと推定される。幅は2.6m、推定全長30m以上、傾斜角15度、主軸は北北西から南南東に向いている。天井を支える土柱、出入り口は未確認である。窯の両側には、擂鉢片が9割以上を占める物原が形成されている。

第3節　遺　　物

遺物の9割以上が、擂鉢である。調査はこの多量の擂鉢片の堆積からなる物原を断割ることになるので、その取り上げや出土地点の記録についてどのようにするか判断に迷う部分もあった。物原は地表面に露出しているが、窯跡の有無などが判明してない時点なので、その記録については、より困難さを伴うと思われた。そこで機械的に面で区分することとし、トレンチ1は、西（W）、中（M）、極西（FW）、極極西（FFW）とし、物原については上層、下層の分類をした。トレンチ2についても同様に極東（FE）、中（M）、西（W）、極西（FW）とした。

加えてトレンチ1の西側部分、物原については分層し断面図作成後、層序に基づきサンプル的に図化可能な遺物を10点程度取り上げた。

前述のとおり、遺物の9割以上が擂鉢であるため、特徴的なもの、溶着片、擂鉢以外の器種などを中心に記述し、一部平成12年度の分布調査時の表面採取遺物も加えた。

1．トレンチ1（第52図～第63図）

301～314が西側、**315～347**がさらに西側、**348～356**がトレンチの西端、**357～359**がトレンチ中央部で確認された遺物で、東側部分では地表下がすぐ基盤層になっているため遺物がほとんど検出されていない。**305**は内面が火表（炎を直接受けている）になっており、胡麻風の窯変が観察できる。一般的に擂鉢は受け部の上下で自重をささえる重ね焼を行なうため、受け部以外の内面外面は直接炎を受けない状態になる。したがってこの**305**は重ね焼の一番上に置かれていた個体の可能性が高い。**311・319**は胎土が精良で器壁が非常に薄いが、焼歪が著しい。**324・325**も同様であるが、**324**は火ぶくれが著しい。**325**は底部の成形も丁寧である。

317は最大胴径23.7cm、肩部に波状紋、「△」のへら記号が施された壷で、内面はろくろ目が非常に顕著である。**326**は内面にすり目のないこね鉢で、口径は24cm前後と通常の擂鉢よりは小振りである。

328は**305**と同様、内面が火表になる個体で、火ぶくれと胡麻が観察できる。**332**は焼成不良でやや軟質である。受け部端を横方向に強く引き出す特徴的な調整が施されている。**333**は23mm幅に6本の

すり目が施されているが、他の個体に比べて施工具の押圧が弱い。

339・341はともに内面が火表の個体で、339は底面が丁寧に調整されている。343は内面に２～３㎝大の溶着片が付着している。受け部のみで重ね焼ができない法量上の制約があり、このような破片で、焼成後個体どうしが容易に剥離できる工夫をした可能性もある。

348は物原の最下層で確認された壷で、肩に波状紋が施されている。

352・353は受け部の下端を強くなでたため、極端な凹面が形成されている。

２．トレンチ２（第64図～第69図）

360～380までが東側、381～383が中央、384～389が西側、390～400が西端、401・402が窯内、403～405は記録不詳である。

361は内面が火表の個体。362はすり目が35㎜幅に７本と幅広い上、１本１本も太い。365は口径が25.6㎝と小さいうえ器壁も厚い。

366・367は小壷で、366は同じ口径ぐらいの壷の溶着片が底部に観察できる。367は胎土が精良で、胴部がやや扁平である。ろくろは時計回り。壷以外器種の可能性もある。368は甕で、底部にすり目の圧痕があることから、擂鉢の中に入れて焼成したと考えられる。

369は底部に土塊片（窯の床片？）が付着していることから、重ね焼きの際、最下部で窯床直上に置かれたものと推定される。374は内面に自然釉が大量に付着していて、一部は流れだしていることから、明らかに火表にあったことがわかる。378は内面が灰色である。

381～400までは小さい破片が多いため、口径復元の数字についてはやや精度が劣る部分がある。387は受け部下端に強いナデ調整が施されている。388は外面が灰色。393・396・397は受け部の下から４分の１ぐらいの所を鋭く強く押圧している。394は受け部上端部を強くつまみ出している。

401・402は窯内からの検出で、両個体とも調整がシャープではない。

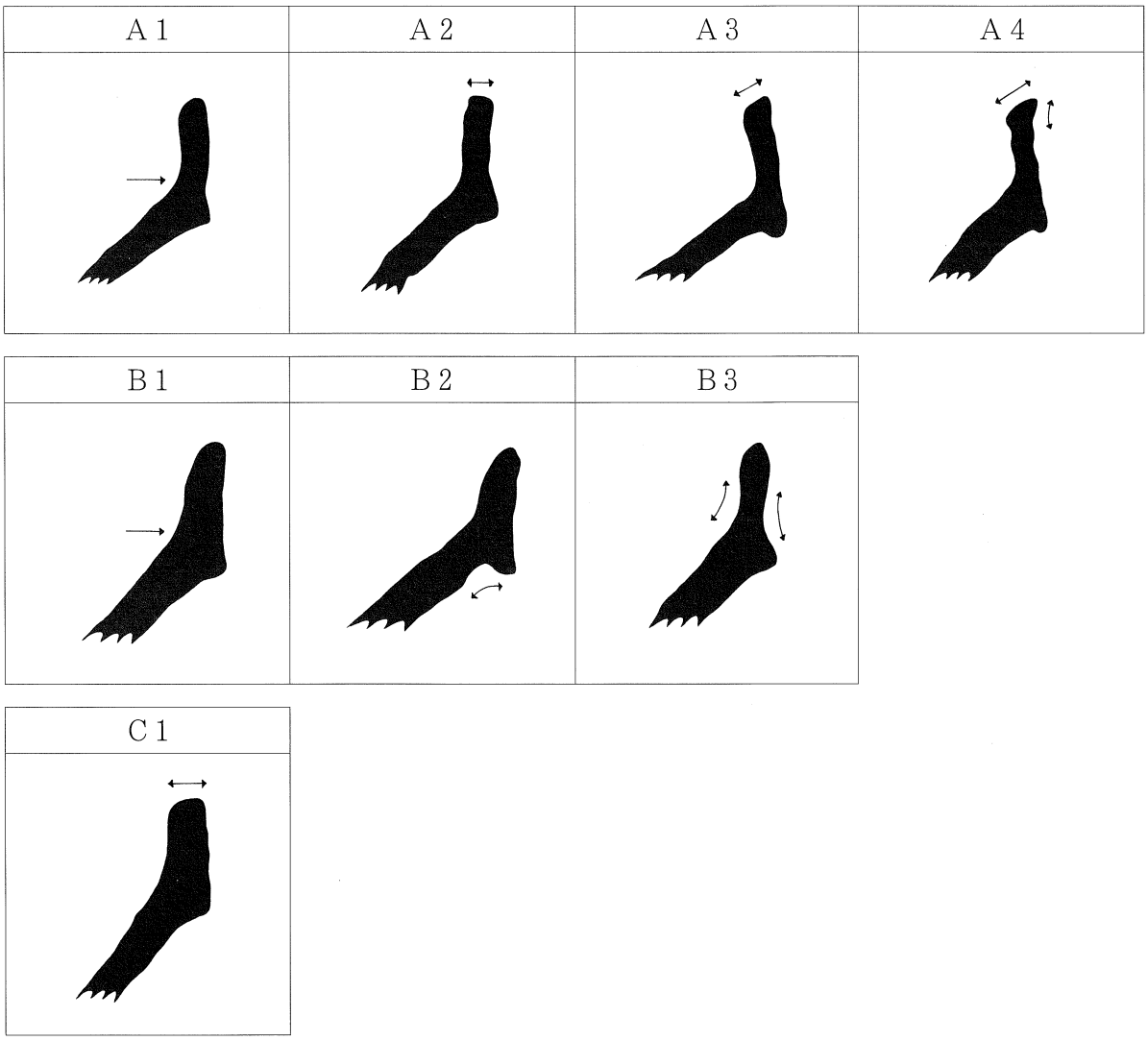
３．その他（第70図～第71図）

406～416は、トレンチ１の西側物原部分で、層序に基づきサンプルとして取り上げたものである。406が２層、407～409・414・415が４層上層、410～413が４層下層、416が７層である。このサンプルについては擂鉢の型式分類との関係で後述する。

417・418は甕の表面採取資料。419はKP－１地点の窯の外側で検出した甕であるが、KP－２地点の窯の遺物の可能性が高い。どの個体も灰緑色の自然釉が付着している。417・418は玉縁状の口縁で扁平化が進んだもので、419は扁平化さらに進み、折り返し下端を強く圧着することで、段を有するものである。

第４節　擂鉢の受け部型式分類と物原サンプル

ここでは遺物の９割以上を占める擂鉢の受け部について、若干の型式分類を行い、物原の層序ごとのサンプルと比較することにより、物原の形成過程なり、陶工集団なり、なんらかの知見が得られないかと考え作業したものである。サンプルとして抽出したものは、物原上面の橙色土層（２層）１点、最大50cmの厚さで擂鉢片が堆積している物原層（４層）の上層５点（うち１点は底部のみ）、下層４



第51図　ＫＰ－２地点窯跡擂鉢型式分類図（１/２）

層　序	型　式（型式名で１点ずつ表示）	点数
２層	Ａ１	１
４層上層	Ｂ２　Ｂ２　Ｂ２　Ｃ　Ａ１～Ｂ１	５
４層下層	Ａ１　Ａ１　Ａ１　Ａ１～Ｂ２	４
７層	Ｂ１	１

表３　物原サンプルと型式

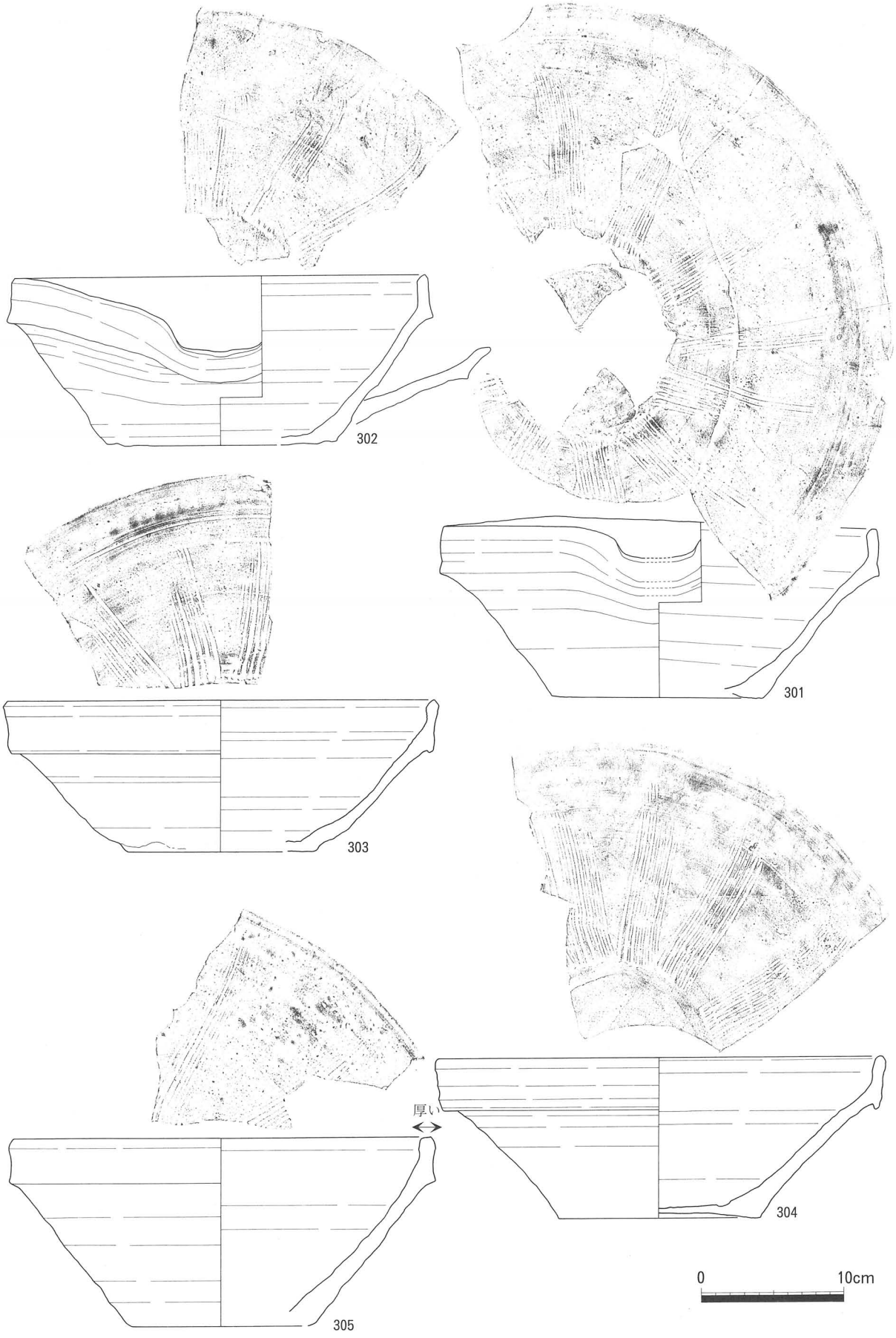
点、物原の最下層で陶片をあまり含まないにぶい橙色土層（７層）１点の計11点である。

前提として図化された擂鉢受け部について、若干の型式分類を試みた。その際、擂鉢は受け部で重ね焼をするため、極端に受け部が内傾したり、歪んだりする事例が多々あるため、受け部の傾きは型式分類の要素とはしなかった。もちろん中間的な型式などあり、主観を完全に排除することはできないが、ここではあくまで予察という形でまとめてみたい。以下、簡単に各型式を記述する。

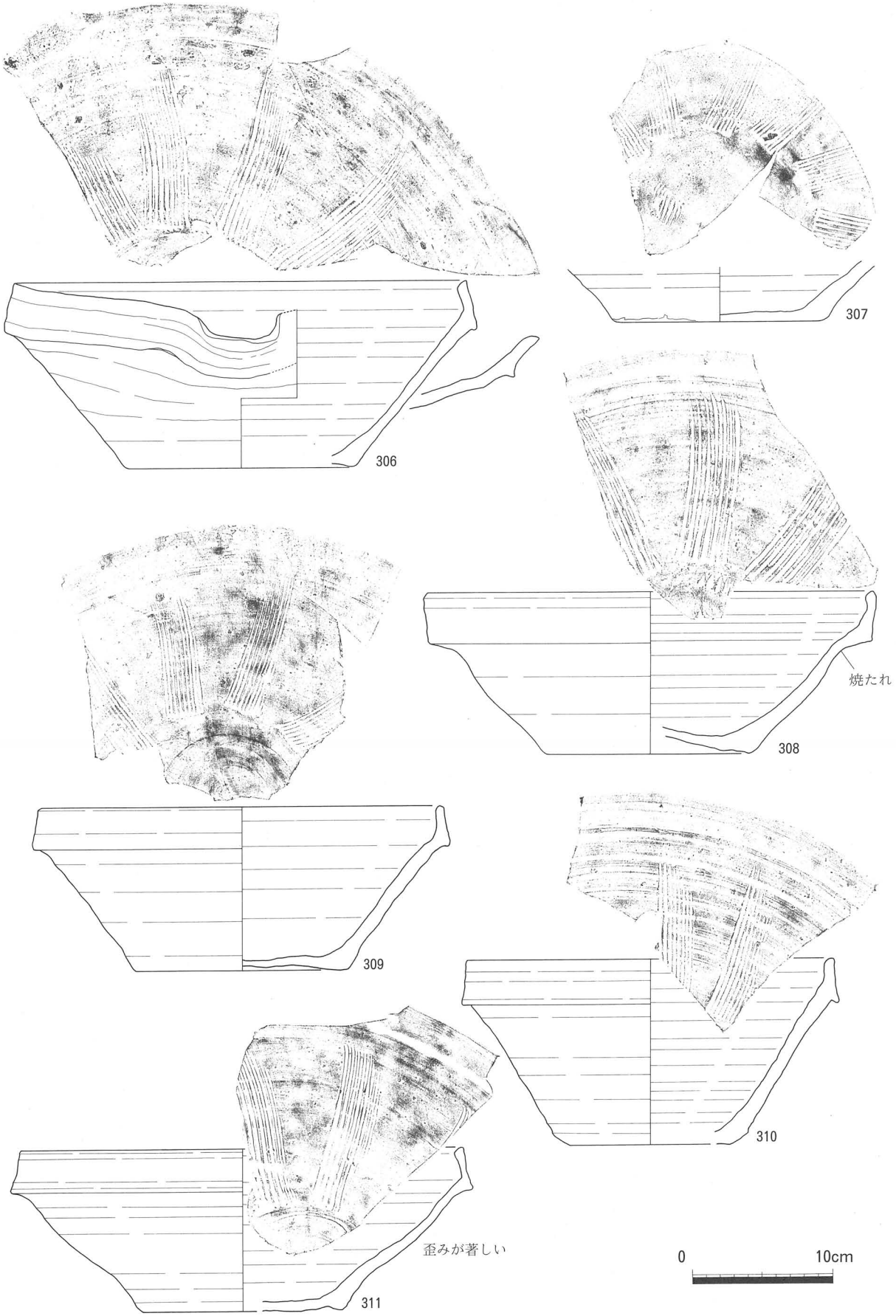
Ａ１…口縁部がほぼ均一の厚さで上方へのびるもの。
Ａ２…口縁部がほぼ均一の厚さで上方へのびるもので、上端部に水平方向に面をもつもの。
Ａ３…口縁部がほぼ均一の厚さで上方へのびるもので、上端部に斜め方向に面をもつもの。
Ａ４…口縁部がほぼ均一の厚さで上方へのびるもので、上端部に面をもち、外側へ端部をつまみ出すもの。
Ｂ１…口縁部が大きく上方へ拡張し、外側も突出するが、均一の厚さではないもの。
Ｂ２…Ｂ１のうち受け部下側を強く押圧することにより、下顎が突出するもの。
Ｂ３…Ｂ１のうち、受け部の下から３分１の箇所を内外面から強く押すもの。
Ｃ１…基本的に口縁部を上方へ拡張したものであるが、体部の厚さに比較して極端に肥厚したもの。

その結果、２層の406はＡ１、４層上層の407・408はＢ２、414がＣ、415がＡ１～Ｂ１、４層下層の410～412はすべてＡ１、413はＡ１～Ｂ２、７層の416はＢ１となった（表３）。４層下層にはＡ１がほとんどで、４層の上層にはＢ２が比較的多数をしめる。２層、７層についてはサンプル数が少なく言及できない。型式的に考えると、ＢからＡと考えるのが妥当であるが、比較的サンプルがまとまった４層の上・下ではＡからＢという変化が看取できる。物原は下層のものが古く上層が新しいという前提条件からすると逆転しているわけである。ただこの場合も、片付け行為がなされていないことや、単純な型式の前後関係を必須条件としているわけである。もちろんＡ型式とＢ型式の同時並存もあり得るだろうし、最近の改変行為も考慮にいれないといけないだろう。

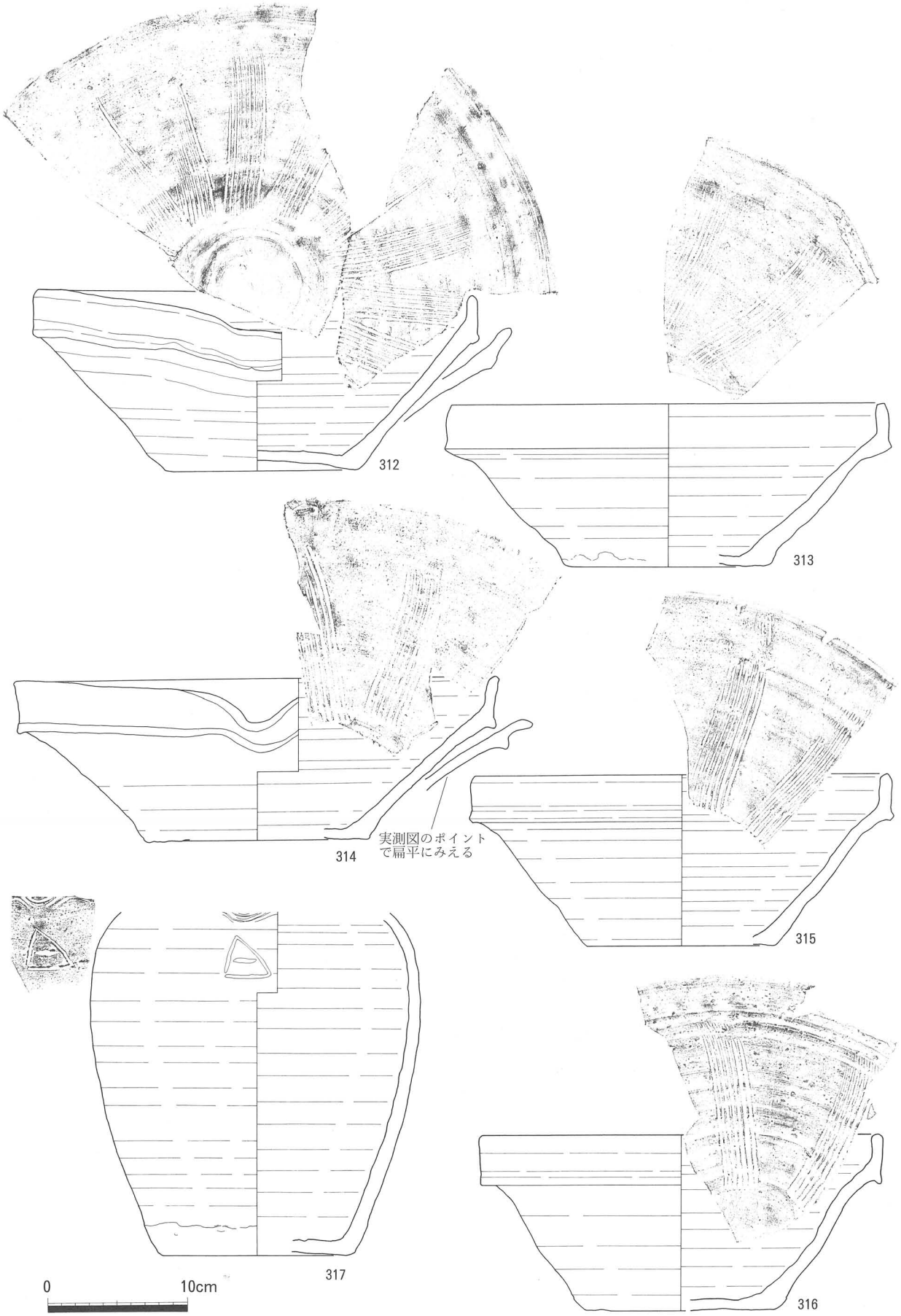
いずれにしてもこの物原層の擂鉢サンプルの分析では、物原の形成過程に知見をえることもできず、また陶工集団などについてなんにも言及できなかった。このようなごく小規模な物原では、サンプル数も少なく限界があり、もう少し規模が大きな物原の、大きな層序のなかで詳細に考える必要があることが結論であろうか。



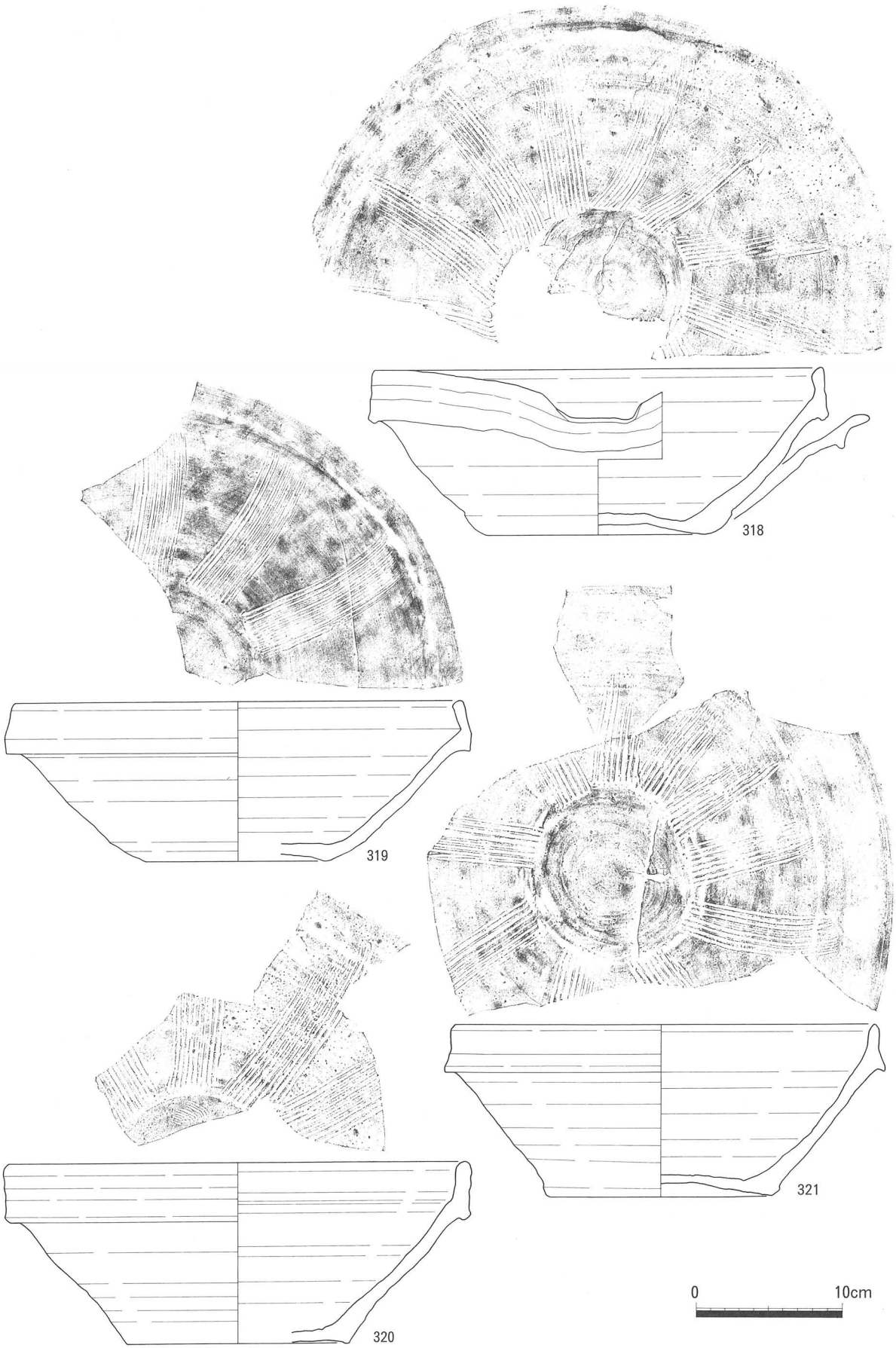
第52図　トレンチ1出土遺物1（1/4）



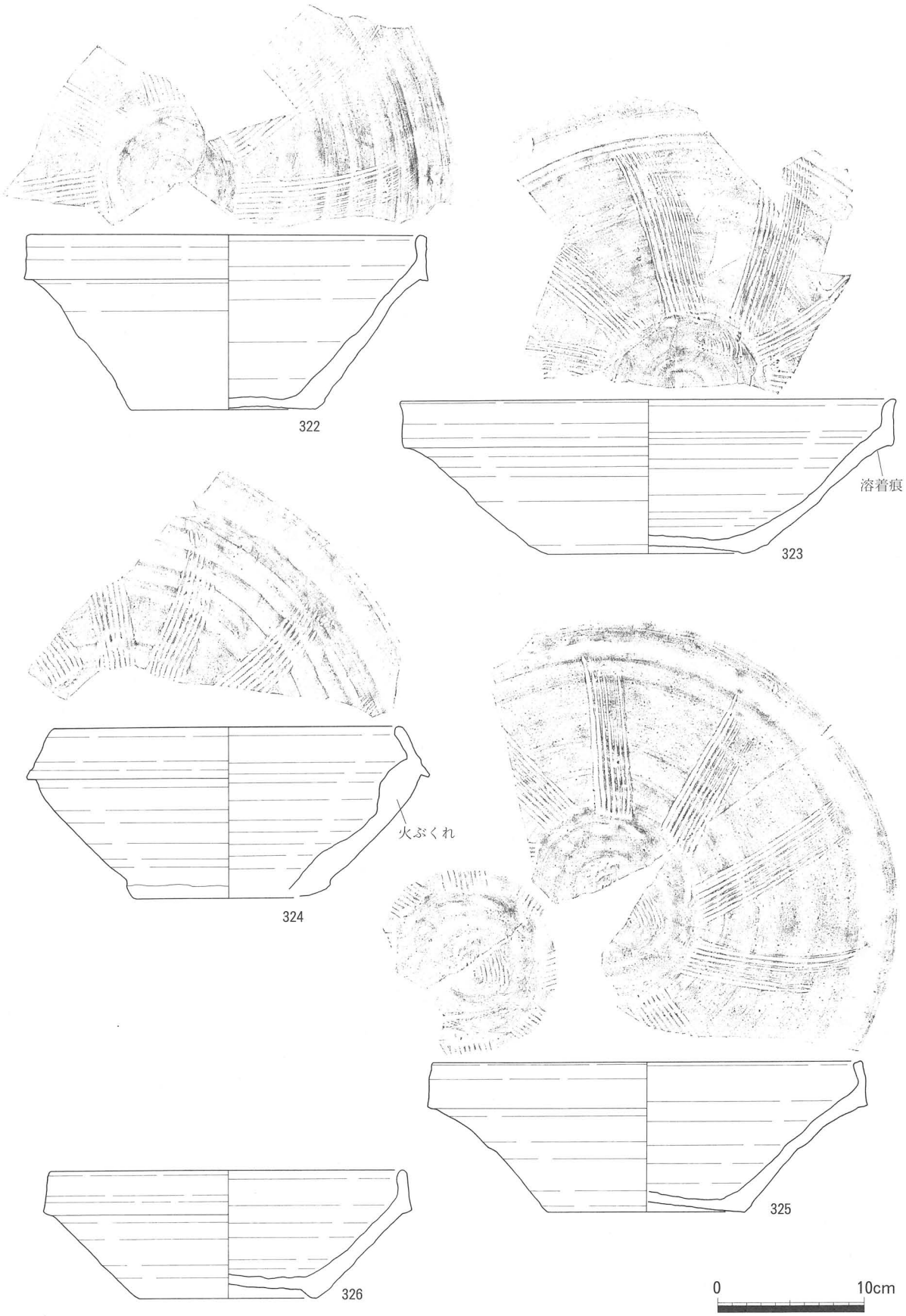
第53図　トレンチ１出土遺物２（1/4）



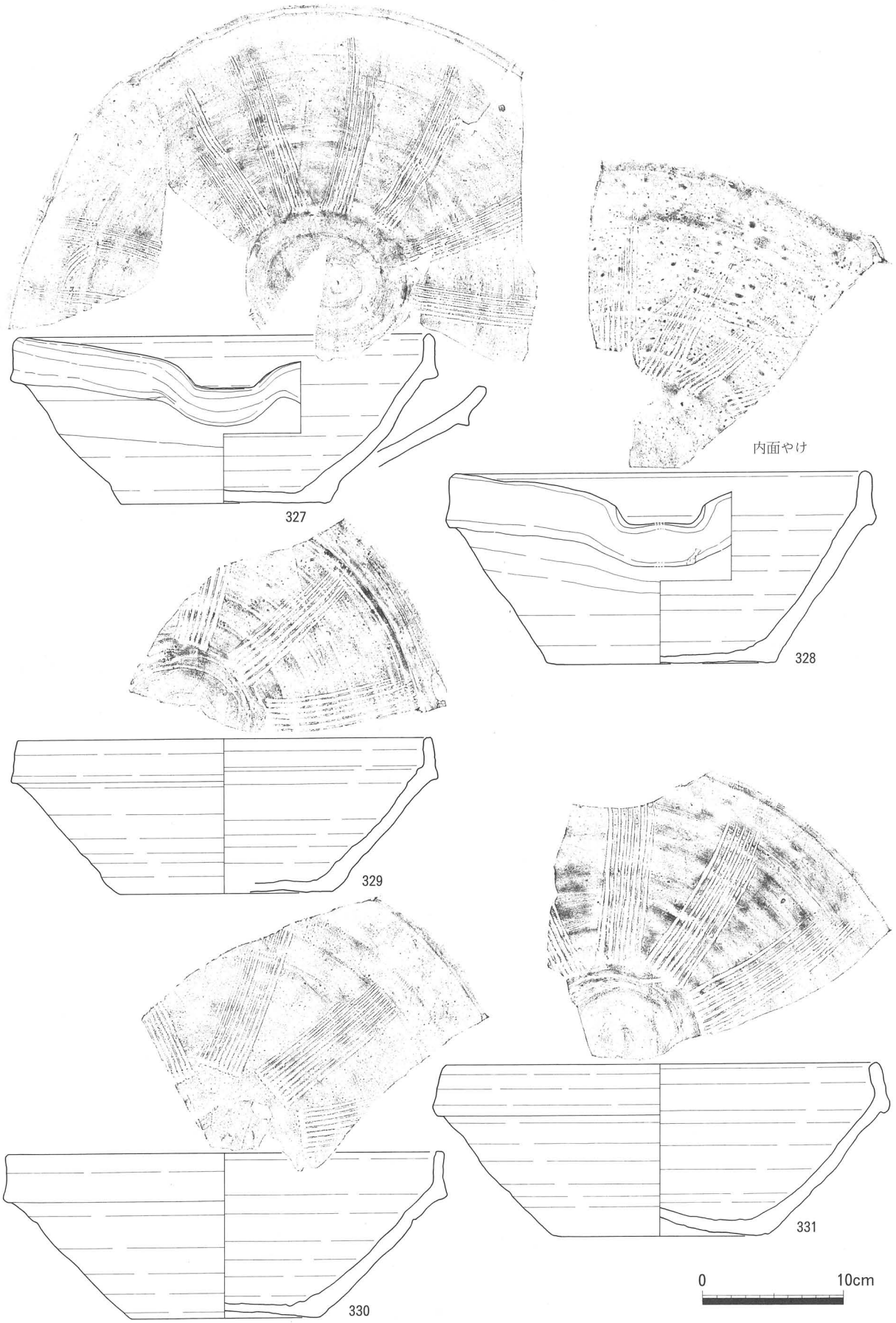
第54図　トレンチ１出土遺物３（1/4）



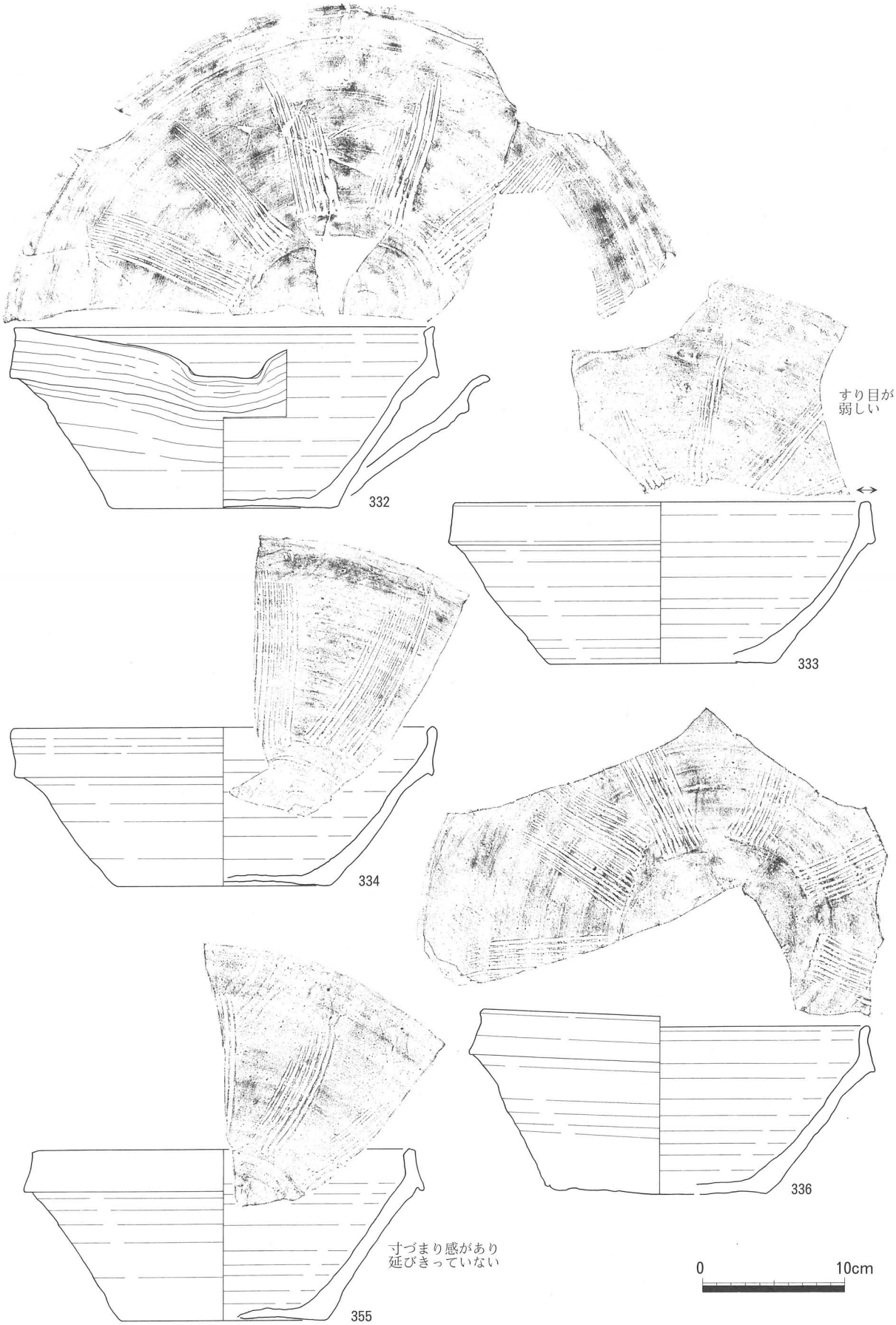
第55図　トレンチ１出土遺物４（1/4）



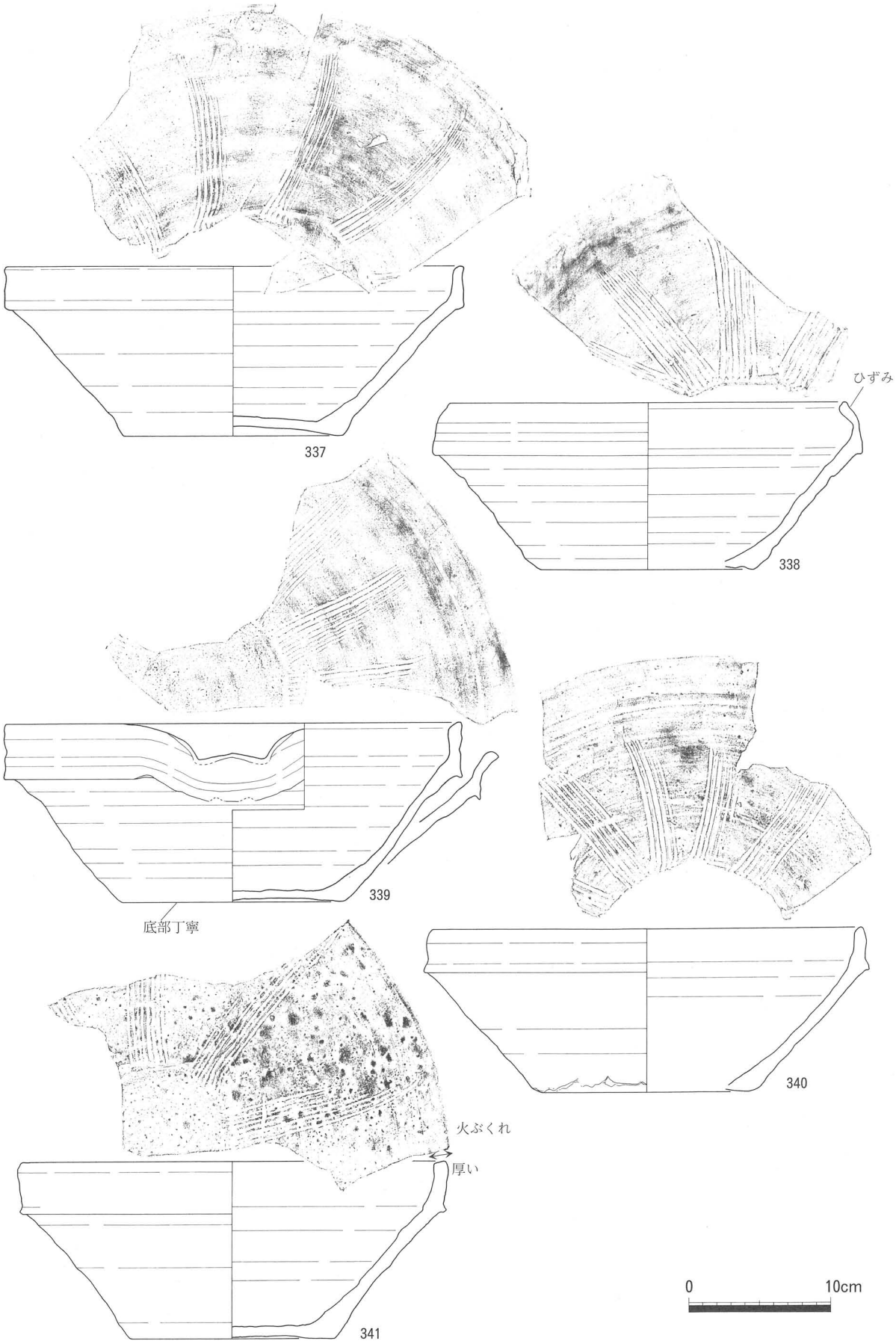
第56図　トレンチ１出土遺物５（1/4）



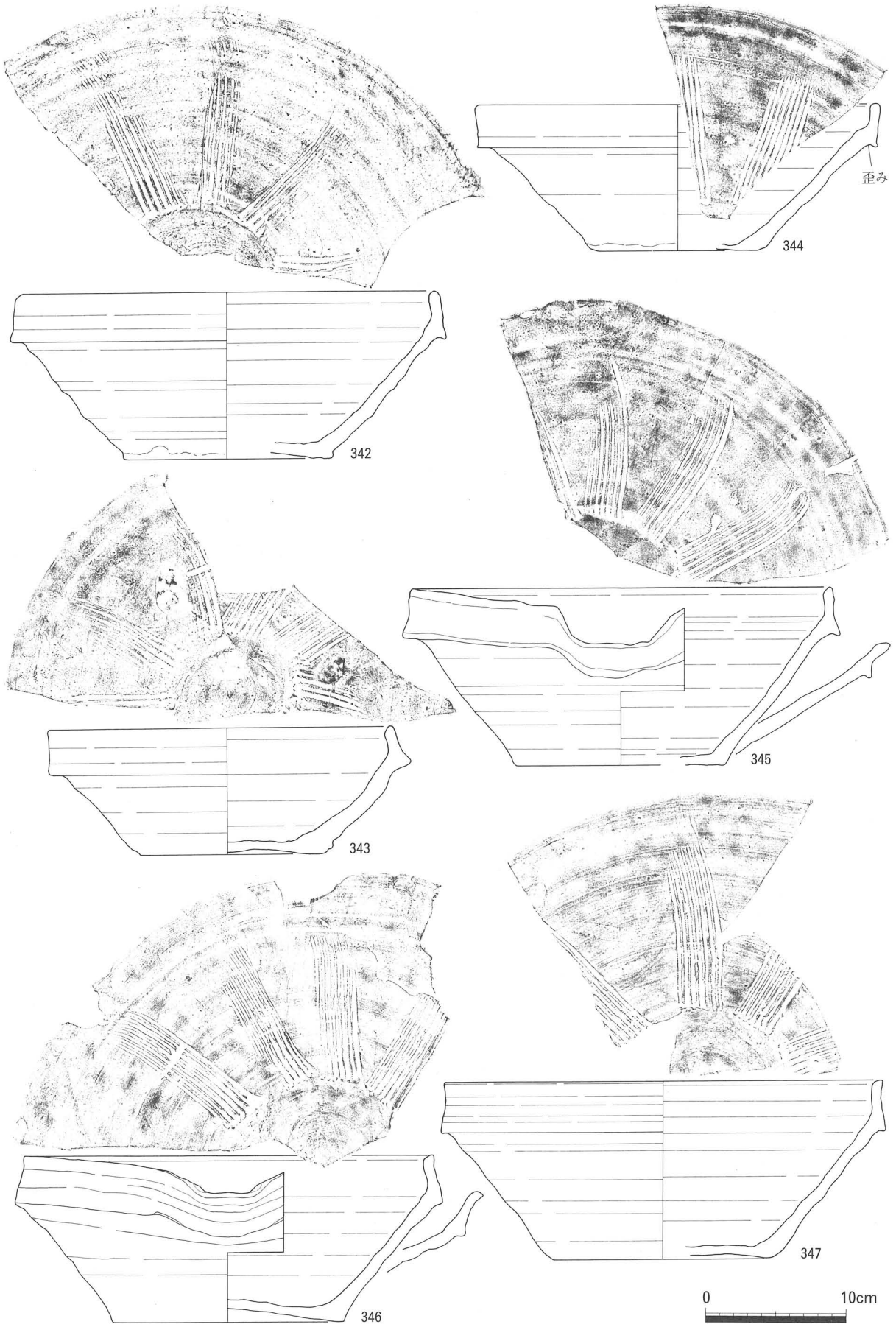
第57図　トレンチ１出土遺物６（1/4）



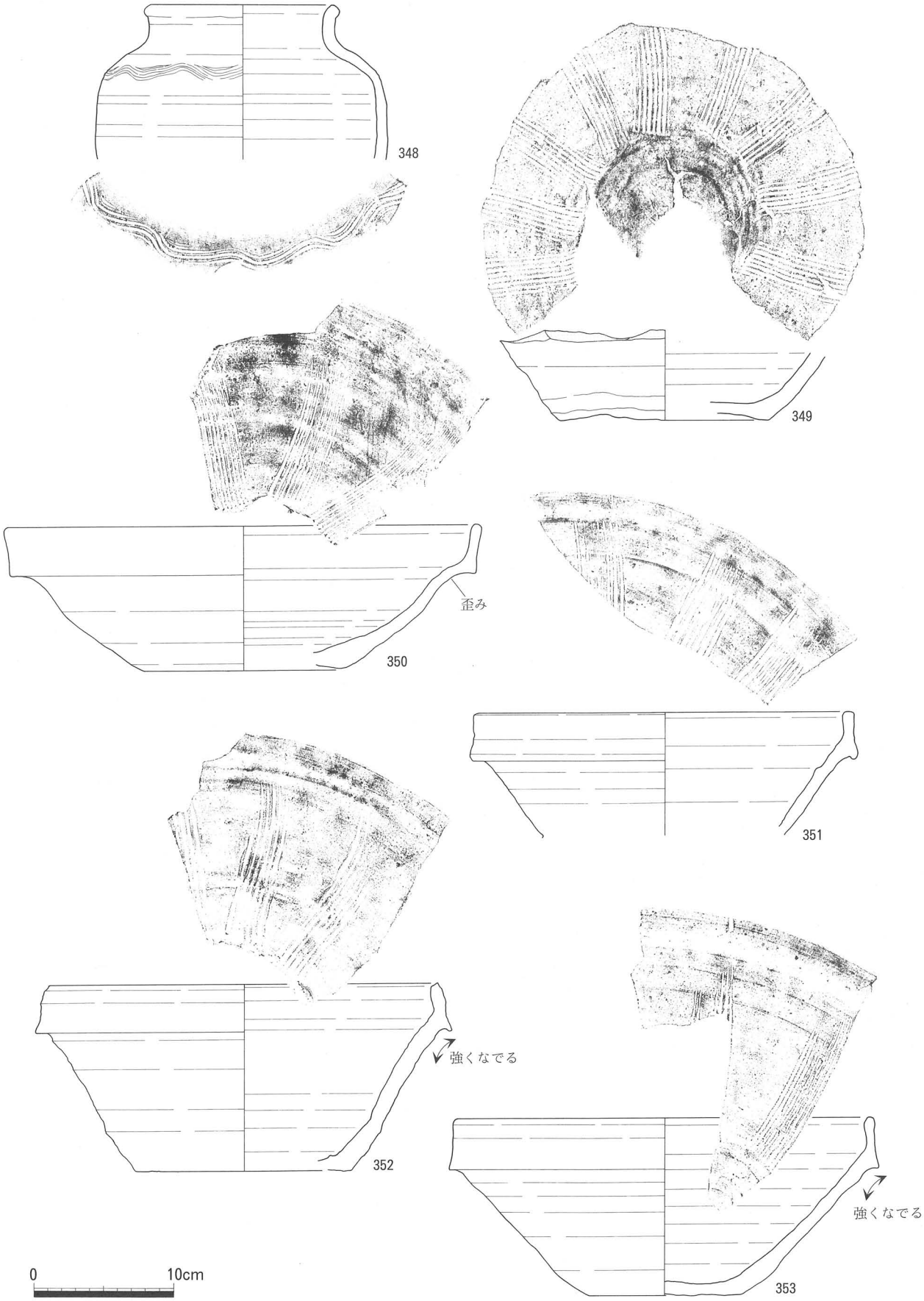
第58図　トレンチ１出土遺物７（1/4）



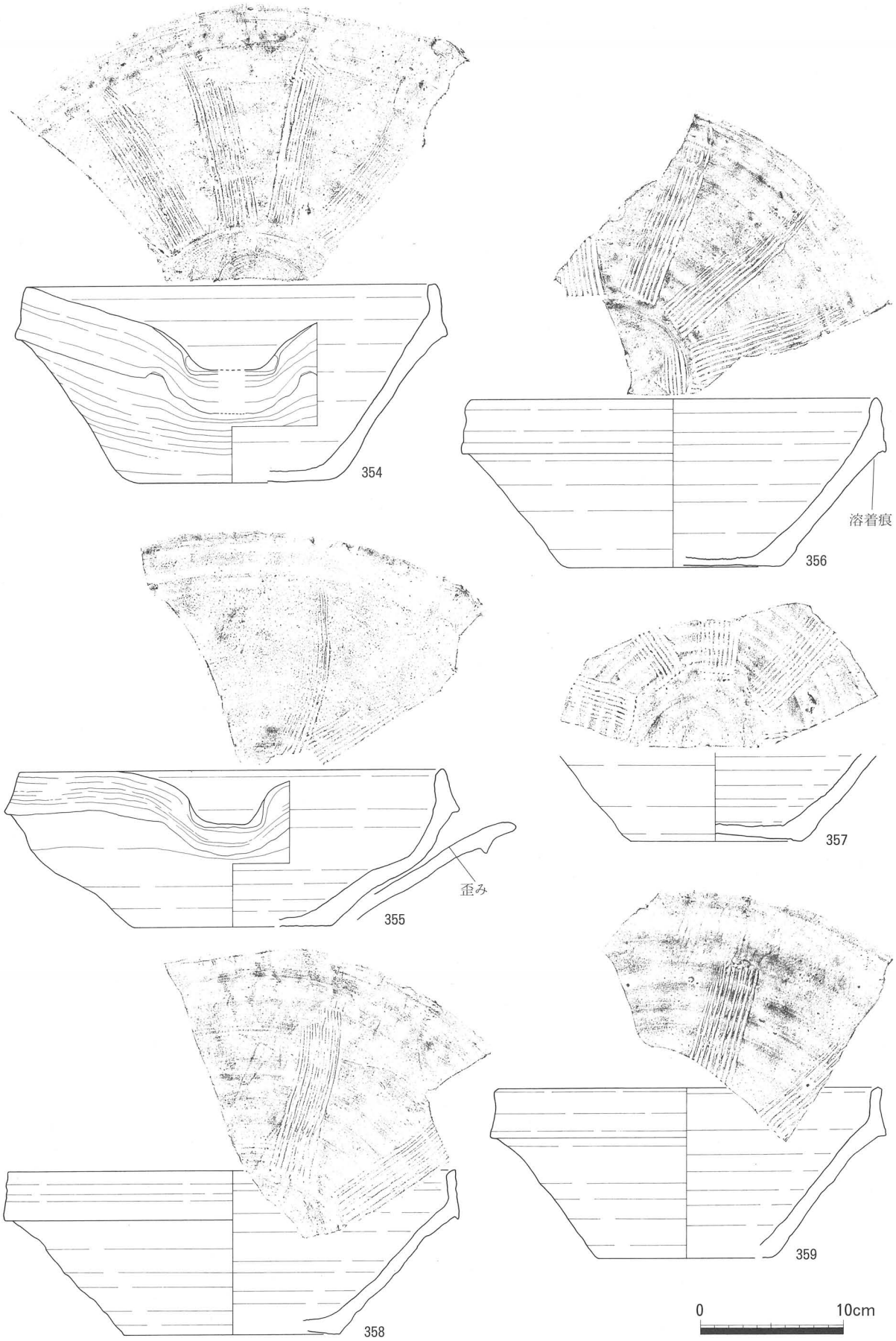
第59図　トレンチ１出土遺物８（1/4）



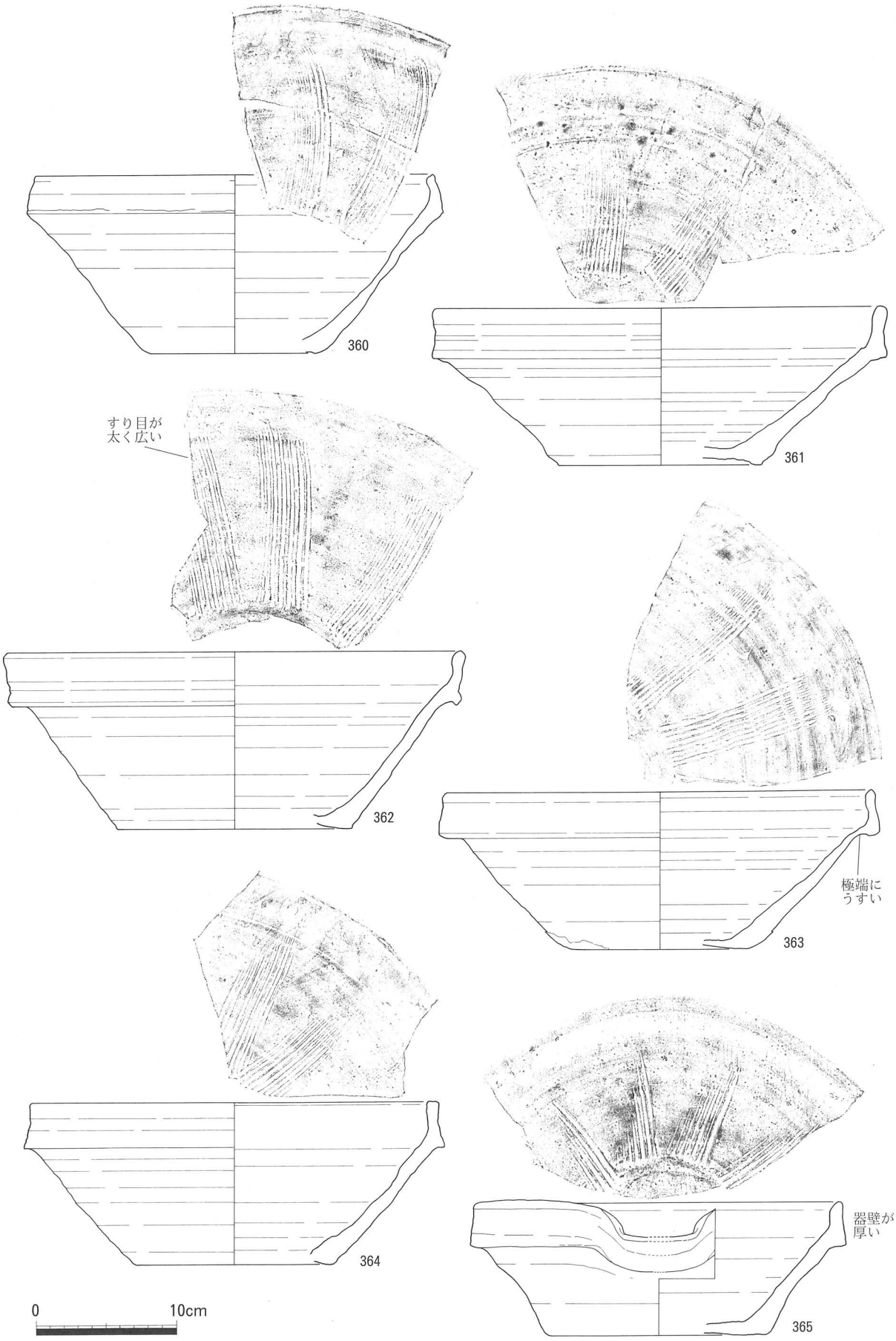
第60図　トレンチ１出土遺物９（1/4）



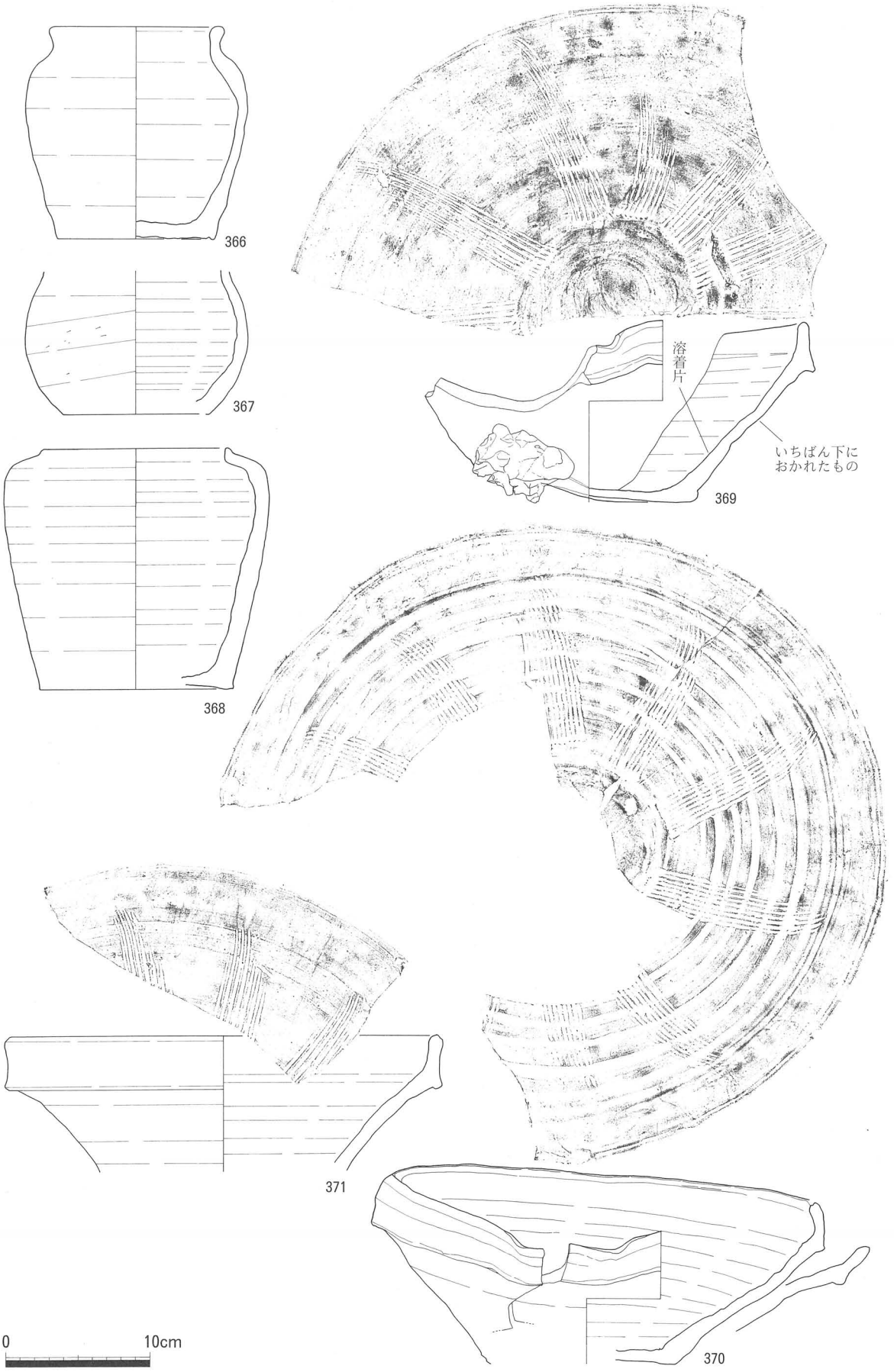
第61図　トレンチ１出土遺物10（1/4）



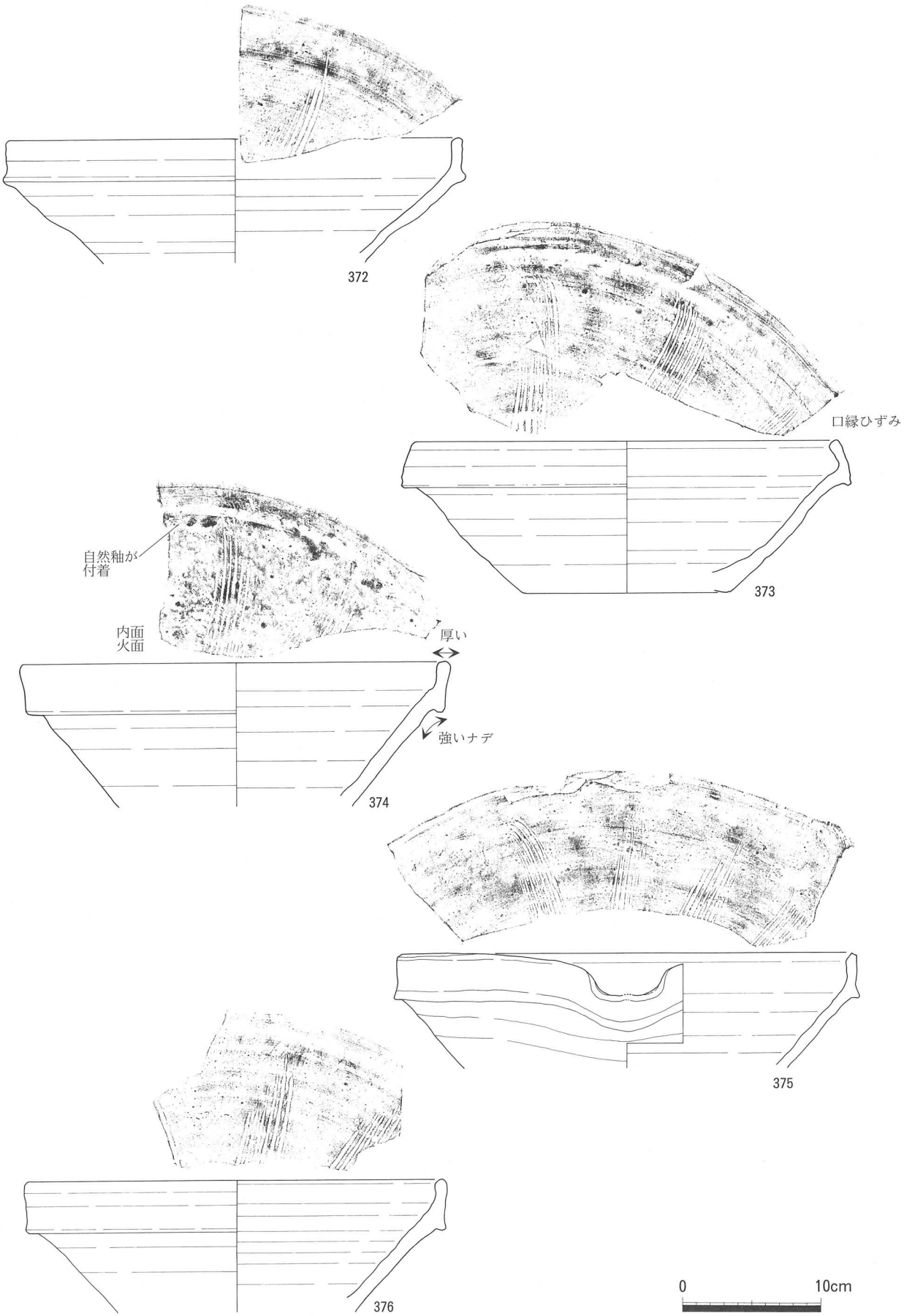
第62図　トレンチ１出土遺物11（1/4）



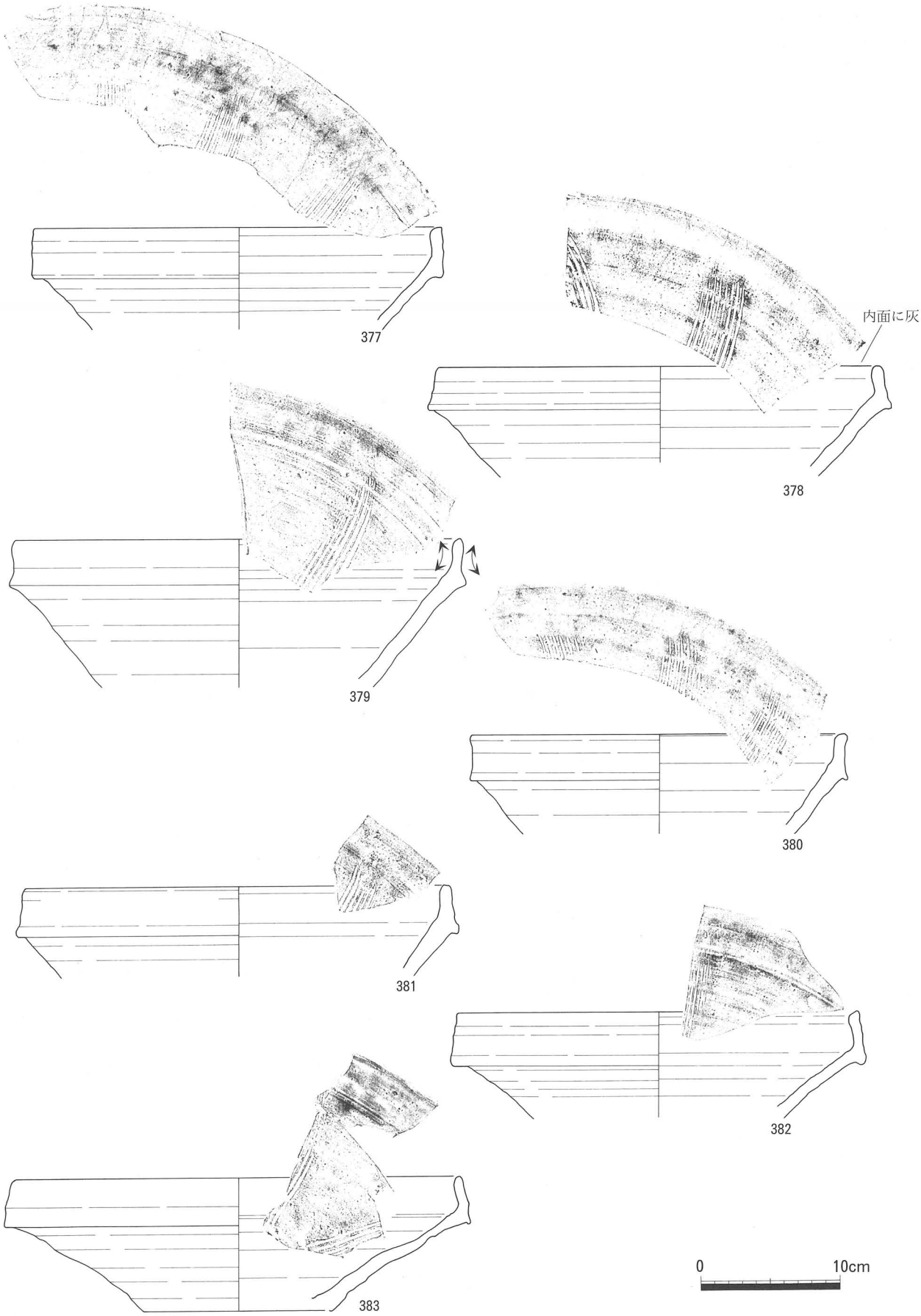
第63図　トレンチ２出土遺物１（1/4）



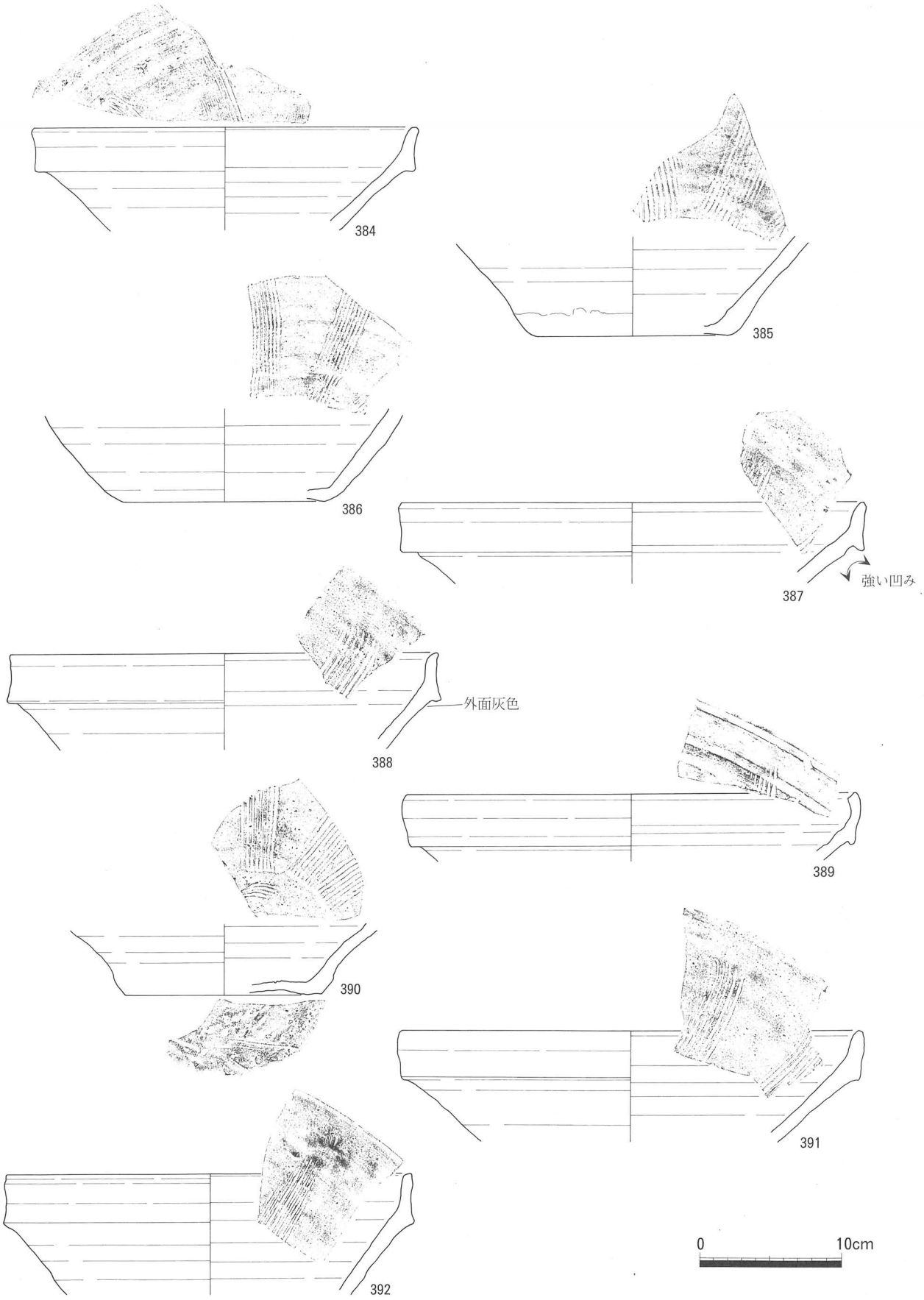
第64図　トレンチ２出土遺物２（1/4）



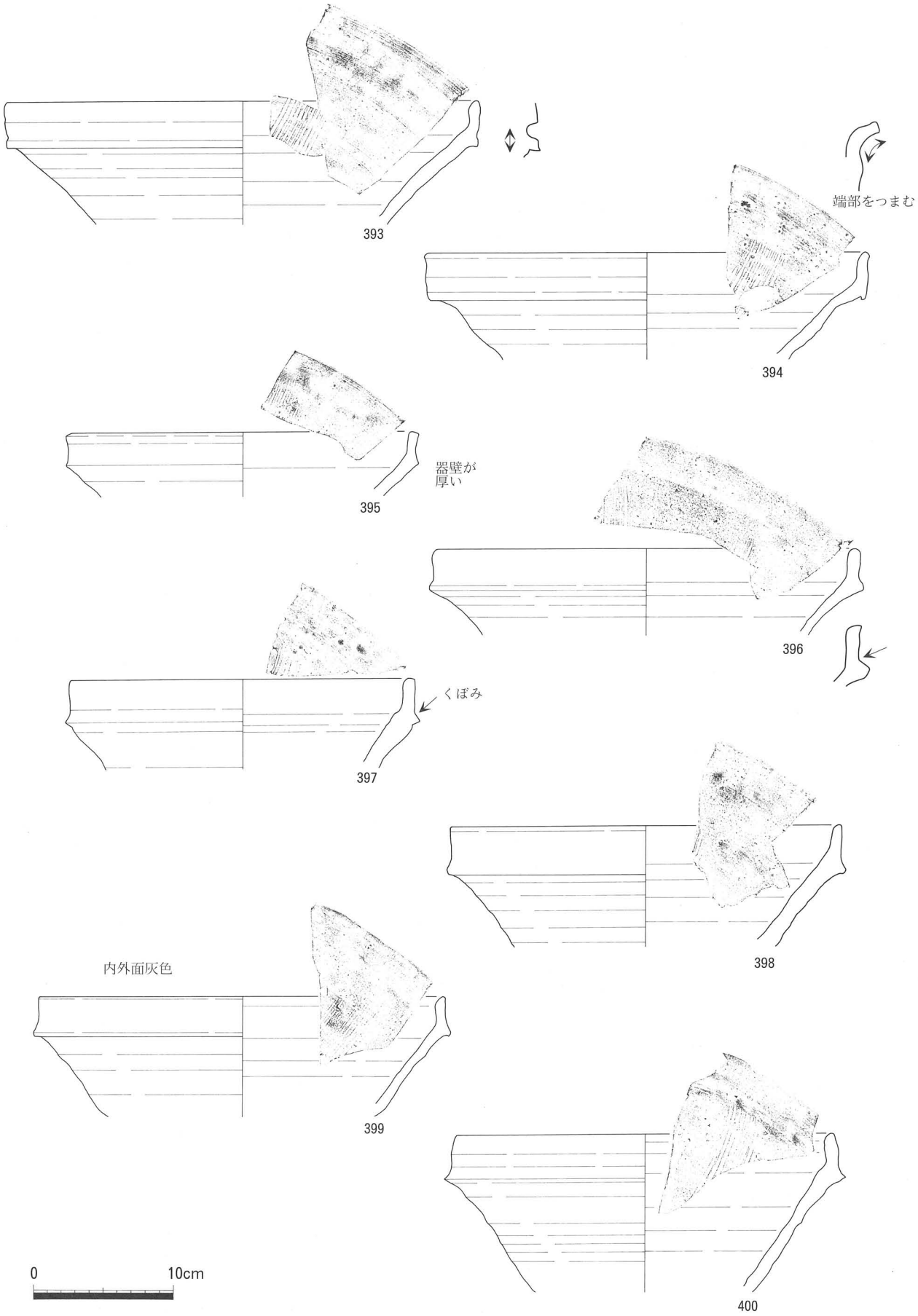
第65図　トレンチ２出土遺物３（1/4）



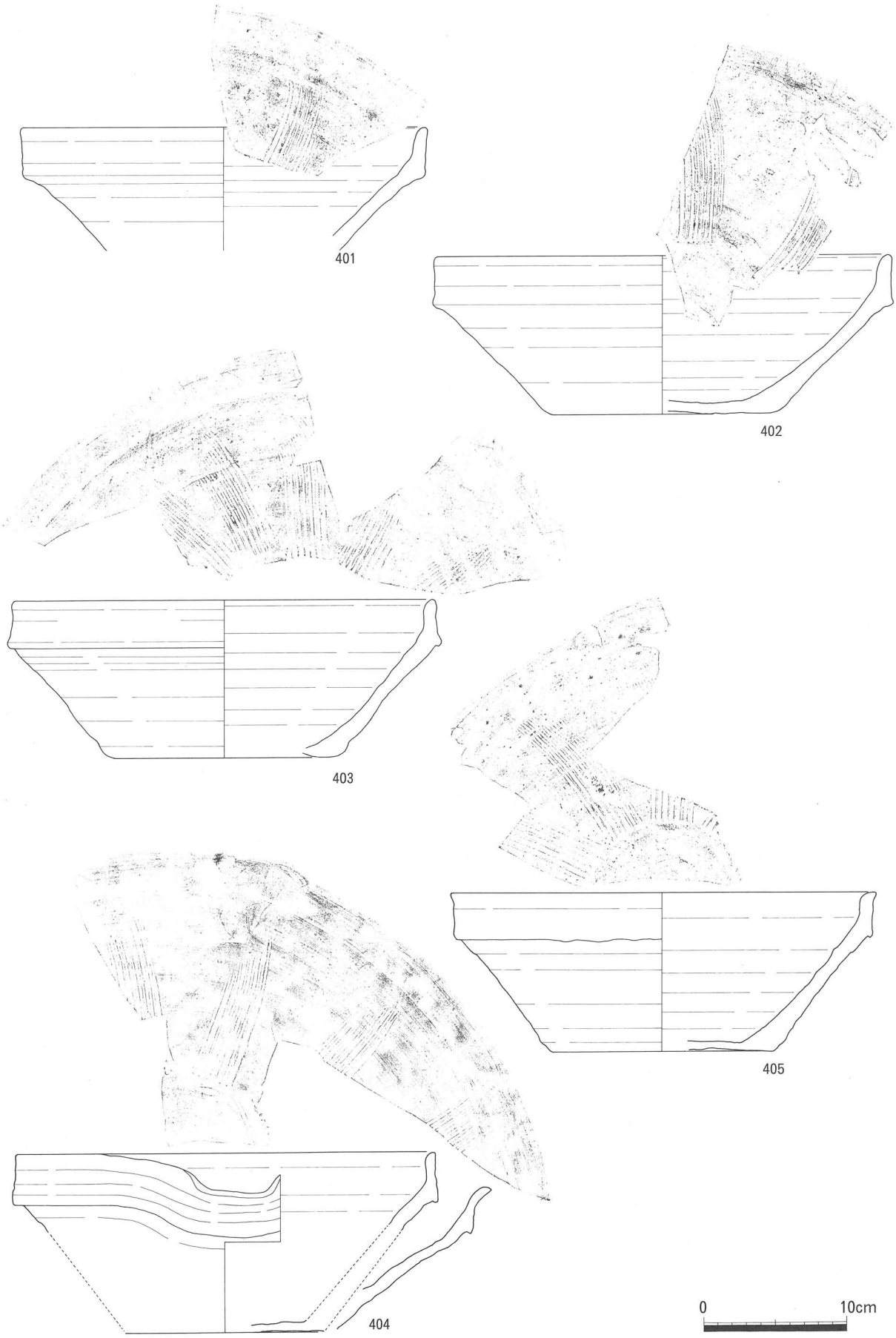
第66図　トレンチ２出土遺物４（1/4）



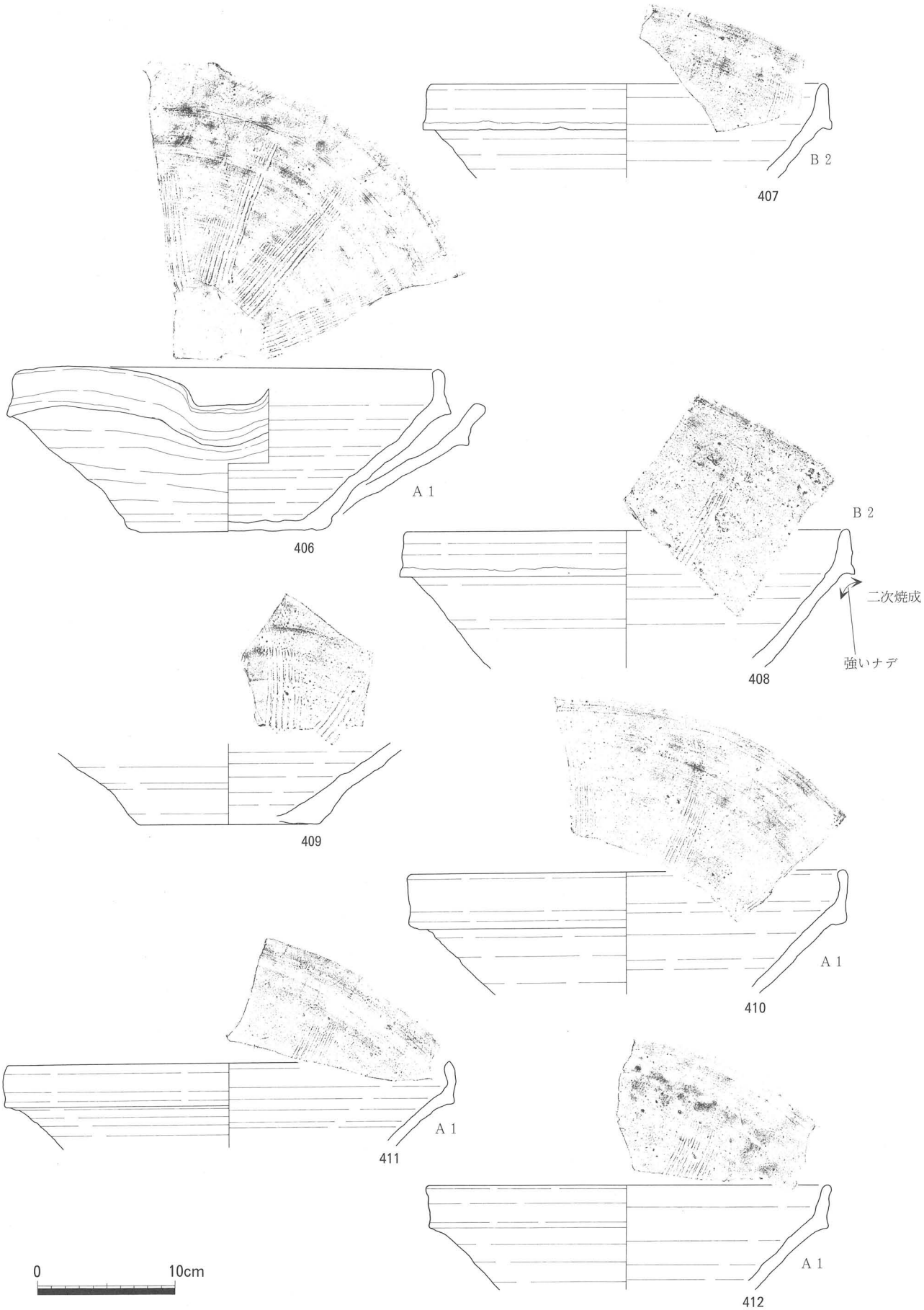
第67図　トレンチ２出土遺物５（1/4）



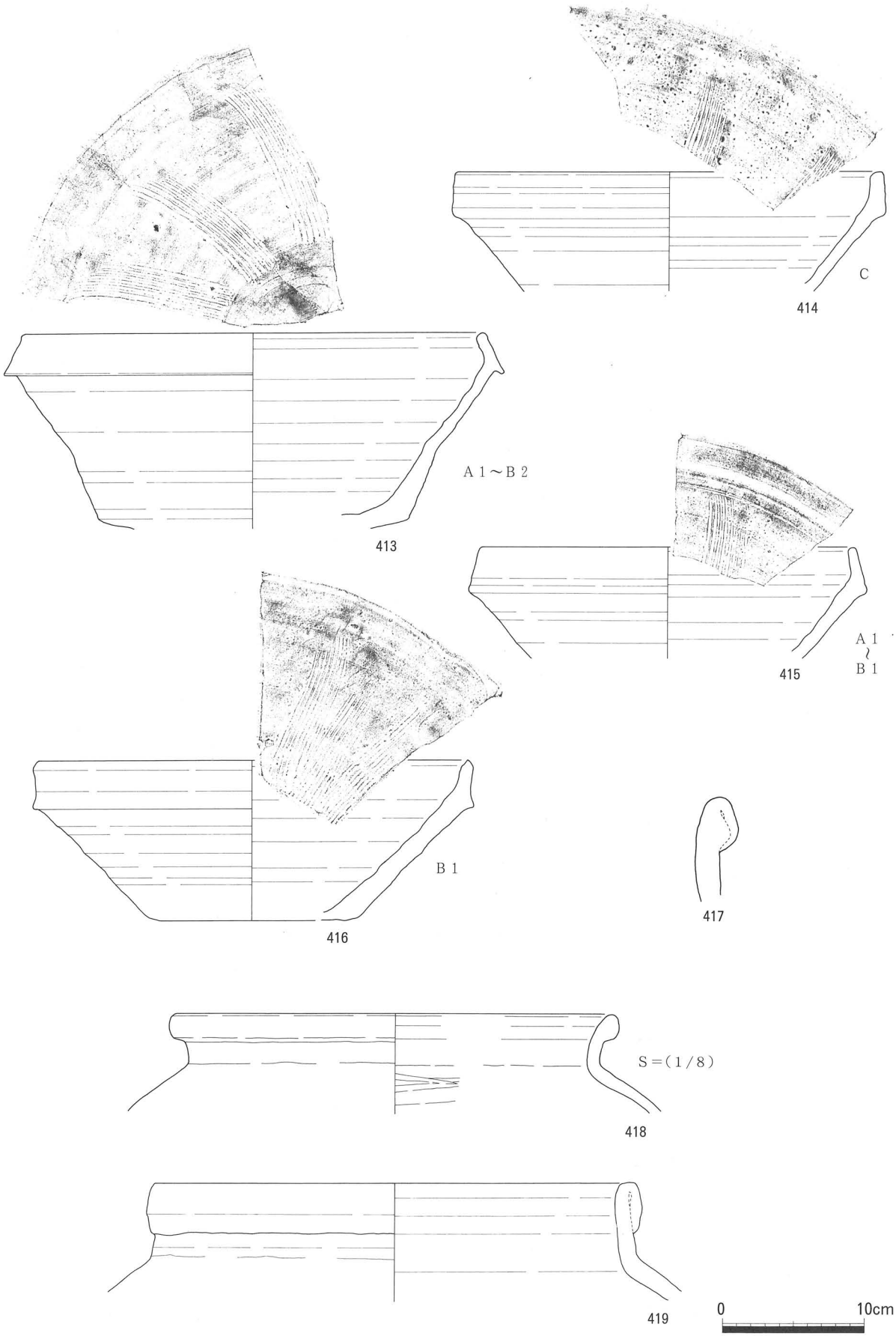
第68図　トレンチ２出土遺物６（1/4）



第69図　トレンチ２出土遺物７（1/4）



第70図　物原出土遺物（サンプル）1（1/4）



第71図　物原出土遺物（サンプル）２・表採資料遺物（１/４）（418のみ１/８）

トレンチ１（第52～62図）

番号	器　種	出土地点	出土日	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	残存部	胎　　土	焼成	釉薬、色調	成形、技法	文様、意匠、陽印	製作時期	備　考
301	擂鉢	KP-2-T1W	011205	30.5	13.5	14.8	31.0	3/4	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1mm位の茶色粒を少量含む	良好	内面：10R 5/6 赤 外面：10R 5/8 赤				すり目：30mm幅　8本
302	擂鉢	KP-2-T1W	011205	28.8	12.1	16.4	30.0	1/4	0.1mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：5PB 5/1 紫灰 外面：5PB 6/1 青灰				すり目：25mm幅　7本
303	擂鉢	KP-2-T1W	011205	30.0	10.8	13.0	30.6	1/5	0.5～1.0mm位の黒色粒を多く含む 0.1～0.5mm位の茶色粒を少量含む 0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：2.5YR 6/6 橙 外面：2.5YR 6/6 橙				すり目：28mm幅　6本
304	擂鉢	KP-2-T1W	011205	31.0	11.4	14.0	31.8	1/3	0.1 mm位の白色粒を少量含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：7.5R 4/4 にぶい赤褐 外面：7.5YR 4/4 にぶい赤褐				すり目：30mm幅　7本
305	擂鉢	KP-2-T1W	011205	29.4	13.4	8.0	30.0	1/5	0.1～1.0mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10R 3/3 暗赤褐 外面：10R 3/4 暗赤		内面火表		すり目：25mm幅　8本
306	擂鉢	KP-2-T1W	011205	31.9	13.4	16.2	33.4	1/2	0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む 0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の茶色粒を含む	良好	内面：2.5YR 6/8 橙 外面：2.5YR 7/8 橙				すり目：30mm幅　8本
307	擂鉢	KP-2-T1W	011205	-	(3.9)	14.0	21.6	底部 1/2残存	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.5～1.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5YR 7/6 橙 外面：2.5YR 5/3にぶい赤褐				すり目：24mm幅　8本
308	擂鉢	KP-2-T1W	011205	31.2	11.6	14.4	31.8	1/4	0.1～1.0mm位の白色粒を少量含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5YR 6/8 橙 外面：10R 5/4 赤褐		焼歪み		すり目：38mm幅　7本
309	擂鉢	KP-2-T1W	011205	28.2	11.7	15.0	29.6	1/3	0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：10R 5/3 赤褐 底部　2.5YR 6/6 橙 外面：10R 4/2 灰赤				すり目：27mm幅　9本
310	擂鉢	KP-2-T1W	011205	25.8	13.3	11.3	26.6	1/4	0.1～1.0mm位の白色粒を少量含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5YR 6/4 にぶい橙 外面：10R 6/6 赤橙				すり目：24mm幅　8本
311	擂鉢	KP-2-T1W	011205	31.2	11.6	14.2	32.8	1/5	0.1～0.5mm位の白色粒を極少量含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を極少量含む	良好	内面：7.5YR 4/2 灰褐 外面：2.5YR 4/3 にぶい赤褐 胎土精良	非常に器壁がうすい	歪が著しい		すり目：29mm幅　7本
312	擂鉢	KP-2-T1W KP-2-T1W-中	011205 011203	31.0	12.5	14.2	32.0	1/2	0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.1～2.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5YR 6/6 橙 外面：10R 6/6 赤橙				すり目：26mm幅　8本
313	擂鉢	KP-2-T1W-溝内	011214	31.0	11.8	15.0	32.0	1/5	0.1～0.3mm位の白色粒を含む	良好	内面：10R 5/6 赤 外面：7.5R 4/4 にぶい赤				すり目：29mm幅　8本
314	擂鉢	KP-2-T1W-溝内	011214	34.4	11.7	16.0	34.8	1/5	0.1～0.5mm位の白色粒を含む	良好	内面：10R 5/6 赤 外面：2.5Y 7/1 灰白				すり目：30mm幅　7本
315	擂鉢	KP-2-T1FW	0112	29.3	12.4	13.4	30.2	1/4	0.1～2.0mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10R 5/6 赤 外面：10R 4/3 赤褐				すり目：34mm幅　8本
316	擂鉢	KP-2-T1FW	0112	28.3	12.7	13.7	28.8	1/5	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：2.5YR 6/8 橙 外面：10R 4/4 赤褐				すり目：26mm幅　7本
317	壺	KP-2-T1FW	0112	-	(24.8)	13.4	23.7	胴部1/3	0.1～1.5mm位の白色粒を含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10R 5/3 赤褐 外面：2.5YR 4/4 にぶい赤褐	内面ロクロ目顕著	肩部に△のヘラガキ		
318	擂鉢	KP-2-T1FW-上	011205	30.6	11.6	15.4	31.6	2/3	0.1mm位の白色粒を少量含む 0.1～2.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：10R 5/6 赤～7.5R 4/2 灰赤 外面：10R 6/8 赤橙～2.5YR 6/8 橙				すり目：30mm幅　9本
319	擂鉢	KP-2-T1FW-上	011205	31.0	11.1	13.0	32.2	1/4	0.1mm位の白色粒を少量含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10R 4/4 赤褐 外面：7.5R 4/1 褐灰　胎土精良	器壁がうすい			すり目：35mm幅 11本
320	擂鉢	KP-2-T1FW-上 KP-2-T1FW-上	011207 011205	31.5	12.7	15.5 (15.5～16.4)	32.4	1/4	0.1～3.0mm位の白色粒を少量含む 0.1mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10R 4/4 赤褐 外面：10R 5/3 赤褐				すり目：37mm幅 10本
321	擂鉢	KP-2-T1FW-上 KP-2-T1FW-下 KP-2-T1W	011205 011205 011205	29.1	12.0	15.5	30.5	1/2	0.1～2.0mm位の白色粒を少量含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5YR 5/3 にぶい赤褐 外面：10R 5/3 赤褐				すり目：29mm幅　8本
322	擂鉢	KP-2-T1FW-下	011205	26.5	12.1	12.8	27.7	1/3	0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：7.5R 3/1 暗赤灰 外面：10R 4/4 赤褐				すり目：32mm幅　9本
323	擂鉢	KP-2-T1FW-上 KP-2-T1FW-下	0112 011205	33.7	10.8	(13.8～15) 図面上13.8	34.0	3/5	0.1～2.0mm位の白色粒を少量含む 0.1～0.5mm位の茶色粒を極少量含む	良好					すり目：34mm幅　9本
324	擂鉢	KP-2-T1FW-上 KP-2-T1FW-下	0112 0112	23.6	11.9	(13～13.5)	27.8	1/3	0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.1mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：5YR 4/2 灰褐 外面：7.5R 4/3 にぶい赤褐 胎土精良	火ぶくれが著しい 器壁がうすい			すり目：27mm幅　7本
325	擂鉢	KP-2-T1FW-下	011205	29.3	10.5	13.6	30.2	1/2	0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：7.5YR 4/2 にぶい赤褐 外面：10R 5/6 赤	器壁がうすい 底部成形丁寧			すり目：28mm幅　8本
326	こね鉢	KP-2-T1FW-下	011205	24.2	8.9	12.2	25.4	1/3	0.1～2.0mm位の白色粒を多く含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：10R 6/6 橙 外面：10R 6/6 橙	すり目の無いこね鉢			
327	擂鉢	KP-2-T1FW-下	011205	29.0	12.0	14.6	30.2	1/2	0.1～2.0mm位の白色粒を含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10R 5/6 赤 外面：10R 5/6 赤				すり目：22mm幅　7本
328	擂鉢	KP-2-T1FW-下	011205	28.9	13.7	16.2	30.4	1/4	0.1～1.0mm位の白色粒を少量含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：2.5YR 4/3 にぶい赤褐 外面：2.5YR 5/3 にぶい赤褐	内面火表			すり目：25mm幅　7本 内面ひふくれ、黄ごまが部分的に有り
329	擂鉢	KP-2-T1FW-下	011205	29.1	11.1	15.3	30.2	1/4	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～2.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：7.5R 4/2 灰赤 外面：7.5R 4/2 灰赤	成形が伸び切っていない			すり目：29mm幅　7本

表４　ＫＰ－２地点出土遺物観察表（１）

番号	器　種	出土地点	出土日	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	残存部	胎　　土	焼成	釉薬、色調	成形、技法	文様、意匠、陶印	製作時期	備　考
330	擂鉢	KP-2-T1FW-下	011205	30.0	11.8	13.5	31.4	1/4	0.1～1.0mm位の白色粒を少量含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：2.5YR 6/6 橙 外面：7.5YR 7/4 にぶい橙,2.5YR 6/1 黄灰				すり目：35mm幅 10本
331	擂鉢	KP-2-T1FW-下	011205	30.4	12.3	15.2	32.4	1/4	0.1～1.0mm位の白色粒を含む	良好	内面：10R 5/3 赤褐 外面：10R 5/4 赤褐				すり目：32mm幅　7本
332	擂鉢	KP-2-T1FW-下	011205	29.5	12.9	16.2	30.2	1/2	0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を含む	やや不良	内面：7.5YR 8/4 浅黄橙 外面：5YR 6/8 橙	受部特徴的			すり目：29mm幅　7本
333	擂鉢	KP-2-T1FW-下	0112	29.0	11.5	15.6	30.1	1/4	0.1mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：7.5YR 5/3 にぶい褐 外面：2.5YR 4/2 灰赤				すり目：23mm幅　6本
334	擂鉢	KP-2-T1FW-下	011205	29.6	11.3	15.0	30.0	1/4	0.1mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：10R 5/3 赤褐～2.5YR 4/2 灰赤 外面：5PB 5/1 青灰				すり目：34mm幅　9本
335	擂鉢	KP-2-T1FW-下	011205	26.0	12.2	14.6	28.2	1/4	0.1mm位の白色粒を含む 0.1～3.0mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：7.5R 4/2 灰赤 外面：7.5R 4/2 灰赤				すり目：25mm幅　6本 溶着痕有り
336	擂鉢	KP-2-T1FW-下	011205	27.0	13.3	15.5	28.7	2/3	0.1～1.0mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：7.5R 4/2 灰赤 外面：7.5R 4/2 灰赤				すり目：31mm幅　9本 全体に歪み
337	擂鉢	KP-2-T1FW-下	011205	32.0	12.0	15.2	32.0	1/2	0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：7.5YR 4/2 灰褐 外面：5PB 6/1 青灰				すり目：20mm幅　6本
338	擂鉢	KP-2-T1FW-下	011205	27.4	11.8	14.8	30.0	1/5	0.1mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：7.5R 5/3 にぶい赤褐 外面：7.5R 4/2 灰赤	口縁部歪			すり目：29mm幅　7本
339	擂鉢	KP-2-T1FW-下	011205	31.8	12.6	15.4	32.1	1/5	0.1mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：5YR 4/2 灰褐 外面：7.5R 4/4 にぶい赤	底面成形丁寧	内面火表		すり目：30mm幅　9本
340	擂鉢	KP-2-T1FW-下	011205	30.0	11.5	14.4	31.2	1/3	0.1mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：5YR 5/4 にぶい赤褐～7.5R 4/3 にぶい赤褐 外面：7.5R 4/4 にぶい赤				すり目：24mm幅　6本
341	擂鉢	KP-2-T1FW-下	011205	29.6	12.5	14.2	30.2	1/4	0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む 0.1～5.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5YR 4/4 にぶい赤褐 外面：10R 3/4 暗赤		内面火表		すり目：27mm幅　8本 内面全体に火ぶくれ有り
342	擂鉢	KP-2-T1FW-下	011205	29.0	12.0	14.6	30.8	約1/3	0.1～3.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：7.5R 4/2 灰赤 外面：7.5R 4/3 にぶい赤褐				すり目：31mm幅　7本
343	擂鉢	KP-2-T1FW-下	011205	24.3	9.1	13.0	25.7	1/2	0.1～0.5mm位の白色粒を多く含む 0.1～5.0mm位の黒褐色粒を少量含む	良好	内面：7.5R 4/1 暗赤灰 外面：7.5R 4/2 灰赤	小振り			すり目：30mm幅　7本 内面に2～3cm大の溶石片が3個付着。右側が多少歪んでいるか注口に近い部分？
344	擂鉢	KP-2-T1FW-下	011205	28.0	(10.5)	11.0	28.8	1/5	0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：2.5YR 6/1 赤灰～2.5YR 4/2 灰赤 外面：2.5R 4/3 にぶい赤褐				すり目：29mm幅　8本 口径は復元すると34.0cm位になるが、あまりにも大きくなるので、歪みを考慮して28.0cmにした
345	擂鉢	KP-2-T1FW-下	0112	29.6	12.7	14.6	31.0	1/4	0.1mm位の白色粒を含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：10R 4/3 赤褐 外面：10R 5/4 赤褐				すり目：29mm幅　7本 溶着痕有り
346	擂鉢	KP-2-T1FW-下	011205	29.0	11.9	16.4	30.4	1/2	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：5YR 7/8 橙 外面：2.5YR 6/8 橙				すり目：29mm幅　7本
347	擂鉢	KP-2-T1FW-下	011205	30.8	12.8	15.4	31.6		0.1～1.0mm位の黒色粒を含む	やや良好	内面：7.5YR 8/6 浅黄橙 外面：7.5YR 7/6 橙				すり目：32mm幅　7本
348	壺	KP-2-T1FW-最下	0112	12.7	(11.1)	-	20.7	口縁部のみ1/2	0.1～3.0mm位の白色粒を含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：2.5YR 6/8 橙 外面：10R 5/4 赤褐				
349	擂鉢	KP-2-T1FFW	011212	-	(6.5)	14.8	23.0	低部5/6残存	0.1～1.5mm位の白色粒を少量含む 0.1～3.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：10R 5/6 赤～7.5R 4/3 にぶい赤褐 外面：7.5R 4/3 にぶい赤褐				すり目：27mm幅　8本
350	擂鉢	KP-2-T1FFW	011212	33.0	10.4	14.0	34.1	1/4	0.1～3.0mm位の白色粒 0.1～0.5mm位の黒色粒	良好	内面：10R 5/3 赤 外面：10R 3/3 暗赤褐				すり目：29mm幅　9本
351	擂鉢	KP-2-T1FFW	011212	26.0	(8.8)	-	27.5	口縁部のみ1/3	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.5～1.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：10R 5/3 赤褐 外面：10R 4/3 赤褐				すり目：32mm幅　7本 溶着片有り
352	擂鉢	KP-2-T1FFW	011212	27.6	13.4	15.2	29.6	1/4	0.1～0.5mm位の白色粒を多く含む 0.1～5.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：10R 5/6 赤 外面：7.5R 4/4 にぶい赤				すり目：26mm幅　6本
353	擂鉢	KP-2-T1FFW	011212	29.0	12.7	10.6	30.4	1/8	0.1～2.0mm位の白色粒を含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5YR 5/4 にぶい赤褐 外面：5YR 6/6 橙				すり目：26mm幅　8本
354	擂鉢	KP-2-T1FFW	011212	28.6	14.0	14.6	30.2	1/3	0.1～3.0mm位の白色粒を多く含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：7.5YR 7/4 にぶい橙 外面：10R 5/4 赤褐,10YR 6/1 褐灰				すり目： 28mm幅　8本
355	擂鉢	KP-2-T1FFW	011212	29.	11.1	14.1	31.8	1/4	0.1～2.0mm位の白色粒を含む 0.5～1.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5YR 4/3 にぶい赤褐 外面：10R 4/2 灰赤				すり目： 25mm幅　8本 胴部、焼成時に変形有り
356	擂鉢	KP-2-T1FFW	011212	28.2	11.9	15.6	29.6	1/4	0.1～3.0mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10R 5/3 赤褐 外面：10R 5/4 赤褐				すり目：27mm幅　8本 溶着痕有り
357	擂鉢	KP-2-T1M-中	011203	-	(6.1)	12.2	22.1	低部1/2残存	0.1～1.0mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：10R 4/2 灰赤 外面：10R 4/4 赤褐				すり目：25mm幅　8本
358	擂鉢	KP-2-T1-中	011207	31.4	11.6	15.0	32.0	1/4	0.1～1.5mm位の黒色粒を含む	やや不良	内面：7.5YR 8/8 黄橙 ～5YR 6/6 橙 外面：5YR 7/6 橙				すり目：30mm幅　7本
359	擂鉢	KP-2-T1-中	011207	26.5	12.0	12.2	27.6	1/4	0.1mm位の白色粒を含む	良好	内面：10R 4/3 赤褐 外面：7.5R 4/2 灰赤				すり目：32mm幅　9本

表４　ＫＰ－２地点出土遺物観察表（２）

トレンチ２（第63～69図）

番号	器　種	出土地点	出土日	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	残存部	胎　　土	焼成	釉薬、色調	成形、技法	文様、意匠、陶印	製作時期	備　考
360	擂鉢	KP-2-T2FE-中～下	011210	27.8	12.7	11.2	29.2	1/5	0.1mm位の白色粒を少量含む 0.5mm位の黒色粒を少量含む	やや不良	内面：10YR 8/6 黄橙 ～10R 6/6 赤橙 外面：7.5YR 8/6 浅黄橙～5PB 5/1 青灰				すり目：28mm幅　8本
361	擂鉢	KP-2-T2FE-中～下	011212	31.0	11.2	14.3	32.0	1/4	0.1mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：　10R 4/3 赤褐 外面：　7.5R 4/2 灰赤	多少火ぶくれ			すり目：30mm幅 10本
362	擂鉢	KP-2-T2FE-中～下	011210	32.0	13.6	16.4	32.5	1/4	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：10R 4/2 灰赤～10R 6/6 赤褐 外面：10R 4/3 赤褐～10R 6/8 赤褐				すり目：35mm幅　7本
363	擂鉢	KP-2-T2FE-中～下	011212	29.8	11.2	12.0	31.0	1/4	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：10R 4/4 赤褐～10R 6/8 赤橙 外面：10R 5/4 赤褐 ～10R 6/8 赤橙				すり目：31mm幅　9本
364	擂鉢	KP-2-T2FE-中～下	011212	27.4	11.5	13.6	29.6	1/5	0.1～0.5mm位の黒色粒を含む	良好	内面：5YR 5/3 にぶい赤褐 外面：7.5YR 6/3にぶい赤褐				すり目：33mm幅　9本
365	擂鉢	KP-2-T2FE-中～下	011210	25.6	9.6	15.0	26.4	1/3	0.1～3.0mm位の白色粒を多く含む	良好	内面：N 4/ 灰 外面：10R 4/3 赤褐				すり目：30mm幅　7本
366	小壺	KP-2-T2FE-中～下	011211	11.0	14.7	10.8	15.2	2/3	0.1mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：2.5YR 3/4　暗赤褐 外面：7.5R 4/3 にぶい赤褐				同じ口径位の壺の溶着片
367	壺?	KP-2-T2FE-中～下	011211	-	(9.9)	10.0	15.2	1/3	0.1～2.0mm位の白色粒を含む	良好	内面：10YR 3/1 黒褐 外面：10YR 5/1 褐灰	胴部が扁平 ロクロ時計回り			
368	甕	KP-2-T2FE-中～下	011211	12.4	16.7	13.2	18.2	1/4	0.1～2.0mm位の白色粒を含む	良好	内面：7.5R 5/2 灰赤 外面：10R 4/1 暗赤灰				水屋甕? 擂鉢の中に入れて焼成
369	擂鉢	KP-2-T2FE-中～下	011211	29.3	12.6	14.8	30.8	1/2	0.1～1.0mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：7.5R 5/2 灰褐 外面：2.5YR 3/3暗赤褐，N6/ 灰	底部に土塊 内面溶着片			すり目：29mm幅　8本
370	擂鉢	KP-2-T2FE-中～下	011211	28.9	13.8	12.5	32.0	3/4	0.1～1.0mm位の白色粒を少量含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5R 4/2 灰赤 外面：10R 3/2 暗赤褐				すり目：30mm幅　9本
371	擂鉢	KP-2-T2FE-中～下	011212	29.2	(9.4)	-	30.0	口縁部のみ 1/4	0.1～1.0mm位の茶色粒を含む 0.1～0.5mm位の白色粒を含む	良好	内面：2.5YR 6/6 橙 外面：10R 6/6 赤橙				すり目：31mm幅　7本
372	擂鉢	KP-2-T2FE-中～下	011212	31.9	(9.0)	-	33.0	口縁部のみ 1/5	0.1～1.0mm位の白色粒を少量含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：2.5YR 6/4 にぶい橙 外面：2.5YR 4/3 にぶい赤褐，N 5/ 灰				すり目：37mm幅　9本
373	擂鉢	KP-2-T2FE-中～下	011212	29.8	11.0	14.8	32.0	1/4	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：2.5YR 5/2 灰赤 外面：10R 4/2 灰赤				すり目：30mm幅　7本
374	擂鉢	KP-2-T2FE-中～下	011212	30.2	(10.3)	-	30.8	口縁部のみ 1/4	0.1～2.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒褐色粒を少量含む	良好	内面：5YR 4/2 灰褐,2.5Y 7/2 灰黄 外面：2.5YR　4/3にぶい赤褐	内面火表			すり目：30mm幅　7本 溶着痕有り。内面に自然釉が多量に溶着
375	擂鉢	KP-2-T2FE-中～下	011212	32.2	(8.3)	-	33.2	口縁部のみ 1/3	0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む 0.1～1.0mm位の黒褐色粒を含む	良好	内面：2.5YR 5/3 にぶい赤褐 外面：2.5YR 6/4 にぶい橙				すり目：26mm幅　7本
376	擂鉢	KP-2-T2FE-中～下	011212	29.5	(9.5)	-	30.2	口縁部のみ 1/4	0.1mm位の白色粒を少量含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：10R 4/2 灰赤 外面：7.5R 4/3 にぶい赤褐				すり目：30mm幅　6本
377	擂鉢	KP-2-T2FE-中～下	011212	28.9	(7.3)	-	29.2	口縁部のみ 1/2	0.1mm位の白色粒を少量含む 0.1～0.5mm位の黒褐色粒を含む	良好	内面：10R 4/4 赤褐 外面：7.5R 4/3 にぶい赤褐				すり目：32mm幅　8本
378	擂鉢	KP-2-T2FE-中～下	011212	31.0	87.9)	-	32.8	口縁部のみ 1/4	0.1～0.5mm位の白色粒を含む	良好	内面：N　5/ 灰 外面：5YR 4/2 灰褐				すり目：33mm幅　8本
379	擂鉢	KP-2-T2FE-中～下	011212	31.6	(10.6)	-	32.4	口縁部のみ 1/5	0.1～1.5mm位の白色粒を含む 0.1～2.0mm位の黒褐色粒を含む	良好	内面：10R 4/3 赤褐 外面：10R 4/2 灰赤				すり目：29mm幅　8本
380	擂鉢	KP-2-T2FE-中～下	011212	26.4	(7.1)	-	26.8	口縁部のみ 1/3	0.1mm位の白色粒を含む	良好	内面：10R 3/4 暗赤 外面：10R 4/3 赤褐				すり目：30mm幅　7本
381	擂鉢	KP-2-T2M	011207	30.0	(6.5)	-	31.4	口縁部のみ 1/12	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1mm前後の茶色粒を少量含む	良好	内面：7.5R 4/2 灰赤 外面：10R 5/4 赤褐				すり目：24mm幅以上 7本以上
382	擂鉢	KP-2-T2M	011207	28.2	(7.6)	-	29.4	口縁部のみ 1/8	0.1mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：N　4/ 灰 外面：N　5/ 灰				すり目：13mm幅以上 4本以上
383	擂鉢	KP-2-T2M	011207	31.6	9.5	13.4	33.2	1/8	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～1.0mm位の黒褐色粒を含む	良好	内面：2.5YR 6/4 にぶい橙 外面：5YR 5/3 にぶい赤褐				すり目：16mm幅以上 4本以上 多少歪有り
384	擂鉢	KP-2-T2W	011207	26.8	(7.4)	-	27.4	口縁部のみ 1/8	0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：7.5R 4/2 灰赤 外面：7.5R 4/3 にぶい赤褐				すり目：24mm幅　8本
385	擂鉢	KP-2-T2W	011207	-	(6.7)	13.7 (13.7 ～ 14.4)	25.1	低部1/3	0.1～2.0mm位の白色粒を含む	良好	内面：10YR 4/1 褐灰 外面：10YR 6/3 にぶい黄橙				すり目：35mm幅 10本
386	擂鉢	KP-2-T2W	011207	-	(6.7)	14.3 (14.3 ～16)	25.5	低部1/4	0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：5YR 5/2 灰褐 外面：5YR 4/1 褐灰				すり目：22mm幅　8本
387	擂鉢	KP-2-T2W	011207	32.6	(5.8)	-	33.0	口縁部のみ 1/12	0.1～1.0mm位の白色粒を含む	良好	内面：7.5YR 5/2 灰褐 外面：5YR 4/3 にぶい赤褐				すり目：26mm幅　7本 以上
388	擂鉢	KP-2-T2W	011207	30.2	(6.9)	-	30.8	口縁部のみ 1/12	0.1～2.0mm位の白色粒を多く含む	良好	内面：10YR 4/2 灰黄褐 外面：10YR 5/1 褐灰				すり目：30mm幅　7本 以上

表４　ＫＰ－２地点出土遺物観察表（３）

番号	器種	出土地点	出土日	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	残存部	胎土	焼成	釉薬、色調	成形、技法	文様、意匠、陶印	製作時期	備考
389	擂鉢	KP-2-T2W	011207	31.6	(4.8)	-	32.4	口縁部のみ 1/8	0.1～0.5mm位の白色粒を極少量含む	良好	内面：10R 4/2 灰赤 外面：10R 4/3 赤褐				すり目：21mm幅　6本以上
390	擂鉢	KP-2-T2FW-中～下	011212	-	(4.6)	14.0	21.9	低部1/4	1.0mm前後の白色粒を含む	良好	内面：N　4/　灰 外面：N　3/　暗灰				すり目：26mm幅　8本
391	擂鉢	KP-2-T2FW-中～下	011212	32.3	(7.9)	-	33.0	口縁部のみ 1/8	0.1～2.0mm位の白色粒を含む	良好	内面：10R 4/2 灰赤 外面：2.5YR 8/3 淡黄、10R 4/1 褐灰	二次焼成			すり目：27mm幅　7本
392	擂鉢	KP-2-T2FW-中～下	011212	28.7	(8.6)	-	29.2	口縁部のみ 1/8	0.1mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：2.5YR 4/3 にぶい赤褐 外面：5YR 4/2 灰褐				すり目：26mm幅　7本
393	擂鉢	KP-2-T2FW-中～下	011212	33.6	(8.9)	-	34.0	口縁部のみ 1/8	0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：7.5YR 8/4 淺黄橙 外面：2.5YR 6/6 橙				すり目：32mm幅 10本 復元口径は他の同様の個体から推定
394	擂鉢	KP-2-T2FW-中～下	011212	31.2	(7.7)	-	31.8	口縁部のみ 1/10	0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5YR 3/3 暗赤褐 外面：10R 4/3 赤褐				すり目：31mm幅　8本以上
395	擂鉢	KP-2-T2FW-中～下	011212	24.5	(4.7)	-	25.2	口縁部のみ 1/8	0.1～2.0mm位の白色粒を含む 0.1～1.0mm位の黒褐色粒を含む	良好	内面：5YR 4/3 にぶい赤褐 外面：5YR 4/2 灰褐				すり目：26mm幅　7本以上
396	擂鉢	KP-2-T2FW-中～下	011212	29.9	(6.2)	-	31.0	口縁部のみ 1/5	0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：2.5YR 3/1 暗赤灰 外面：5YR 3/2 暗赤褐				すり目：27mm幅　7本以上
397	擂鉢	KP-2-T2FW-中～下	011212	24.6	(6.4)	-	25.4	口部のみ	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の茶色粒を多く含む	良好	内面：7.5R 4/2 灰赤 外面：N　5/　灰				すり目：不詳
398	擂鉢	KP-2-T2FW-中～下	011212	28.0	(9.5)	-	28.6	口縁部のみ 1/10	0.1～1.0mm位の白色粒を多く含む 0.5～1.5mm位の黒色粒を多く含む 0.1～0.5mm位の茶色粒を含む	良好	内面：2.5YR 5/4 にぶい赤褐 外面：5PB 6/1 青灰	外面ロクロ目顕著			
399	擂鉢	KP-2-T2FW-中～下	011212	29.2	(8.7)	-	30.0	口縁部のみ 1/8	0.1～1.0mm位の白色粒を多く含む 0.1mm位の茶色粒を含む	良好	内面：5Y　4/1 灰 外面：5P 5/1 紫灰				すり目：30mm幅　8本
400	擂鉢	KP-2-T2FW-中～下	011212	27.0	(11.4)	-	28.6	口縁部のみ 1/9	0.5～2.0mm位の黒色粒を多く含む 0.1mm位の茶色粒を少量含む	良好	内面：7.5R 4/2 灰赤 外面：7.5R 3/2 暗赤褐	ロクロ目顕著			すり目：28mm幅　8本
401	擂鉢	KP-2-T2-室内-上層	011212	28.2	(8.8)	-	28.6	口縁部のみ 1/5	0.1～1.5mm位の白色粒を含む 0.1mm前後の黒色粒を少量含む 0.1mm位の茶色粒を少量含む	良好	内面：10R 5/6 赤 外面：10R 3/6 赤				すり目：30mm幅　8本
402	擂鉢	KP-2-T2-室内-上層	011212	31.8	11.3	15.6	32.4	1/6	0.1～2.0mm位の白色粒を含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を含む 0.5mm前後の茶色粒を含む	良好	内面：　10R 5/6 赤 外面：10R 5/6 赤				すり目：30mm幅　8本 復元口径は他の同様の個体から推定
403	擂鉢	KP-2-T1～2-不明	0112	29.2	11.2	16.2	30.6	1/3	0.1～1.0mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：　10R 4/2 灰赤 外面：10R　4/3 赤褐				すり目：29mm幅　7本
404	擂鉢	KP-2-T1～2-不明	0112	29.6	12.8	14.2	30.0	1/3	0.1～1.5mm位の黒色粒を含む	やや不良	内面：7.5YR 8/8 黄橙 外面：7.5YR 8/8 黄橙				すり目：30mm幅　7本
405	擂鉢	KP-2-T1～2-不明	0112	30.0	11.3	15.6	30.0	1/4	0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：　10R 4/3 赤褐 外面：5YR 4/2 灰褐				すり目：29mm幅　7本

物原（サンプル）（第70・71図）

406	擂鉢	KP-2-T1W-2層-サンプル	011220	30.3	12.2	14.0	32.2	1/4	0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10R 4/2 灰赤 外面：10R 4/3 赤褐			A1	すり目：30mm幅　8本
407	擂鉢	KP-2-T1W-4層上層サンプル	011220	28.4	(6.9)	-	29.6	口縁部のみ 1/6位	0.1mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：7.5R 4/2 灰赤 外面：10R 4/4 灰赤			B2	すり目：不詳
408	擂鉢	KP-2-T1W-4層上層サンプル	011220	32.0	(10.1)	-	32.0	口縁部のみ 1/8	観察不可	良好	内面：2.5YR 3/2 暗赤褐 外面：2.5Y 8/3 淡黄			B2	すり目：25mm幅　7本
409	擂鉢	KP-2-T1W-4層上層サンプル	011220	-	(6.9)	13.4	25.0	低径部のみ 1/4	0.1mm位の白色粒を少量含む 0.1～2.0mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：10R　4/3 赤褐 外面：7.5YR 5/3 にぶい褐				すり目：29mm幅　7本
410	擂鉢	KP-2-T1W-4層下層サンプル	011220	31.4	(9.0)	-	32.0	口縁部のみ 1/4	0.5～1.0mm位の黒色粒を多く含む	良好	内面：10R 3/4 暗赤 外面：10R 3/4 暗赤			A1	すり目：21mm幅　6本
411	擂鉢	KP-2-T1W-4層下層サンプル	011220	32.0	(6.2)	-	32.8	口縁部のみ 1/5	0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：7.5R 4/2 灰赤 外面：10R 3/2 暗赤褐			A	
412	擂鉢	KP-2-T1W-4層下層サンプル	011220	29.0	(7.6)	-	29.4	口縁部のみ 1/5	0.1～0.5mm位の白色粒を含む	良好	内面：2.5YR 6/2 灰赤 外面：7.5R 4/4 にぶい赤			A1	
413	擂鉢	KP-2-T1W-4層下層サンプル	011220	32.0	13.8	12.0	35.0	1/4	0.1～0.5mm位の白色粒を含む 0.1～0.5mm位の黒色粒を少量含む	良好	内面：7.5R 4/6 赤 外面：2.5YR 2/3 極暗赤褐			A1	
414	擂鉢	KP-2-T1W-4層上層サンプル	011220	29.6	(8.4)	-	30.2	口縁部のみ 1/4	0.1～0.5mm位の白色粒を少量含む	良好	内面：10R 4/3 赤褐 外面：7.5R 4/3 にぶい赤褐		内面火表	C	すり目：25mm幅　8本
415	擂鉢	KP-2-T1W-4層上層サンプル	011220	26.0	(7.8)	-	27.8	口縁部のみ 1/5	0.1mm位の白色粒を極少量含む 0.1～1.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：7.5R 4/2 灰赤 外面：10R 4/3 赤褐			A1～B1	すり目：30mm幅　8本
416	擂鉢	KP-2-T1W-7層サンプル	011220	30.0	11.3	13.0	30.8	1/5	0.1～0.5mm位の白色粒を多く含む 0.5～1.0mm位の黒色粒を含む	良好	内面：10R　6/8 赤褐 外面：7.5R 4/4 にぶい赤			B1	すり目：21mm幅　8本

表４　ＫＰ－２地点出土遺物観察表（４）

表採資料（第71図）

番号	器　種	出土地点	出土日	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	最大径（cm）	残存部	胎　　土	焼成	釉薬、色調	成形、技法	文様、意匠、陶印	製作時期	備　考
417	大甕	窯の下西A-表採	010314	-	(7.5)	-	-	口縁部のみ 1/10程度	0.1～0.3mm位の白色粒を少量含む（6.0mmの白色石を含む） 0.1～2.0mm位の黒褐色粒を含む	良好	内面：2.5YR 4/3 にぶい赤褐 外面：2.5YR 3/2 暗赤褐				灰緑色の自然釉付着
418	大甕	KP-2-表採	011128	60.8	(13.8)	-	-	口縁部のみ 1/4	0.1～4.0mm位の白色粒を含む 0.5mm前後の茶色粒を含む	良好	内面：10R 4/3 赤褐 外面：10R 3/4 暗赤、2.5Y 4/2 暗灰黄	不定形な横方向のナデ			緑色の自然釉付着
419	甕	KP-1-ケド外 南トレンチ	011121	33.6	(6.3)	-	40.2	口縁部のみ 1/6	0.1～2.0mm位の白色粒を多く含む 0.1～1.0mm位の茶色粒を多く含む	良好	内面：10R 3/2 暗赤褐 外面：5YR 3/2 暗赤褐				灰緑色の自然釉付着

表４　ＫＰ－２地点出土遺物観察表（５）

第6章　ま　と　め

第1節　はじめに

この章では、今回報告した３基の窯について、その操業期間、窯構造の特徴について記述することを目的とする。また、2003年度に報告した５基の窯とあわせて、備前焼の窯構造の変遷について言及し、その生産についてその状況を明らかにすることである。

発掘された窯の操業期間を明らかにするためには、出土遺物を型式分類する基礎的作業を前提として、実年代がわかる紀年銘資料や文献自然科学的年代測定などから導き出すのが通常の方法である。

東６号窯跡、ＫＰ－２地点窯跡の擂鉢については基礎的な型式分類を行なったが、細部や消費地での状況についてさらに検討を加えていく必要があるため、型式分類・編年については、間壁忠彦氏・間壁葭子氏の長年の成果（註１）、伊藤晃氏（註２）、平井泰男氏（註３）、乗岡実氏（註４）、重根弘和氏（註５）の編年案に依拠することとし、型式名を記述する際は併記する形をとった。

第2節　東6号窯跡の操業期間と窯構造について

1．操業期間

東６号窯の操業期間であるが、備前内での同時期の窯の状況が不明確であることや、本窯で生産された製品がどこに供給されたか追及していない時点での言及には相当の躊躇を覚えるが、福田正継氏、山本悦世氏、武田恭彰氏、中世土器研究会など多くの先学の研究の成果（註６・７・８）や兵庫県の調査事例（註９・10）など参照しつつ少しまとめてみたい。

杯Ｂ類については、３型式ぐらいある。全体的に非常に堅緻に焼き締められた個体が目立ち、中には自然釉がかかり、光沢をもつものまである。杯Ｂ類の蓋はつまみを有する個体はない。杯Ａ類は口径が11～13㎝の法量の中で収まる。底部は押圧されている。他の器種については、個体数が少ない上、全体の器形を復元できるものは少ない。以上から、東６号窯跡の操業年代は、おおむね９世紀の後半を中心とする時期と考えてはよいのではないだろうか。

これらの所見はあくまで暫定的なものであり、土師器製作技術と須恵器製作技術の問題や、佐山地区に展開する須恵器窯跡群との関係など検討していかなければいけない問題が多々あり、事実報告のみのまとめには躊躇を覚える。今後それらの検討課題とともに、深化させていけたらと考えている。

2．構　造

東６号窯跡は概要のところで記述したとおり、標高66～68ｍの北向きに開けた谷急斜面に位置し、流紋岩系の岩の上に形成された明黄褐色土層を掘り込んでつくられた地下式の窯である。窯体は復元全長4.3ｍ（水平3.8ｍ）、最大幅は1.0ｍで、奥に行くほど幅が狭まる平面形をもつ。床面は粘土で被覆してあり、ほぼ30度で直線的に立上る。主軸は焚口側からいうと、北西から南東方向である。

この期の窯構造については、中国・四国地方の窯を集成された池澤俊幸氏（註11）の研究があり、

ここでは池澤氏の分類にあてはめてみたい。

東６号窯跡は、

①「地下式」構造で、上方へ立上る煙道を有するA型

②平面プランは焼成部付近から窯尻へ向かってすぼまるタイプ

③床面の縦段面形は直線的に立上り最大傾斜が30度を越えない２類

④窯尻形態は焼成部末尾からそのまま地山につながるｂ類　　となる。

以上であるが、池澤氏も、「古代後期以降の山陽中～東部では、（中略）中国地方東部では資料が十分ではなく中世諸窯の成立に至る仮定が重要な課題」（註12）と言及しているとおり、東６号窯跡の窯構造の系譜については、今後資料的な増加を待つ中で、改めて追求していきたい。

この東６号窯は、伊部の谷において初めて確認された９世紀代の窯であったため備前焼の初源の問題と絡めて話題となったが、同時期の窯跡が発見されてない現段階においては、12世紀後半以降の連綿とした備前焼の生産とは区別すべきものであることは確認しておきたい。

第３節　ＫＰ－１地点窯跡の操業期間と窯構造について

１．操業期間

ＫＰ－１地点窯跡の操業期間は天保11（1840）年から明治18～19年頃（1885～1886）年ごろの可能性が高い。

その根拠は、確認された遺構が、操業期間が明らかな『天保窯』（備前市指定建造物として現存）や平成12年度の調査で確認された西１号窯跡と酷似していることで、火格子（素穴）の部分の土柱は規格こそ異なるが構造は全く同じである。前回の報告でも記述したが、この天保窯は当時「融通窯」と呼ばれていて、近世末の備前を代表する窯である。当時の備前の窯業は疲弊していて、大量の燃料と長い焼成日数がかかる巨大な「大窯」を維持する力もなくなりつつあり、燃料の節約と焼成日数の短縮が可能なこの形式の窯を導入したらしい。

次の文献も前回報告したとおりであるが再度掲載する。

江戸時代末の著名な知識人として知られる木村平八郎泰武が嘉永２（1849）年著した問答集『五問五頭古伊部神伝録』（註13）に「近くは天保三辰年より小竈三か所築く、北不老山下に一カ所、南榧原山下に二カ所、竈数大小當時六釜是あり」と記述がある。北不老山下の一カ所は先述の市指定建造物の「天保窯」で、南榧原山下に２カ所のうちひとつが、平成12年度調査の西１号窯跡である。もうひとつがこのＫＰ－１地点窯跡である。

『古伊部神伝録』では築窯が天保３（1832）年とあるが、江戸後期に伊部で窯元、医師、文人、村方を代表する人物として多方面に渡って活躍した佐藤陶崖が、天保11（1840）年付けで記した『融通講規定控』（註14）の中に「藩から銀32貫を借用し、新たに２基の窯を築いた」との記述があり、藩からした借金で計６基の窯を「講」組織で運営したことがわかり、天保11年築窯の蓋然性が高いと判断した。その詳細については附編２の小西通雄氏の報文を参照されたい。

廃窯時期については、大正７（1918）年刊行の小橋藻三衛著「伊部陶史」（註15）に「其の榧原山の下に設けた窯は、明治八年頃に之を毀ち・・・」とあり、また桂又三郎は「其の後榧原山の南大窯

の附近へ二基築窯したが之れは藩の許可が未だ出ない中に築き問題をおこしてゐるうち、初窯が失敗したため遂に間もなく取り毀した」(註16) という違う見解をしめしている。

しかし、窯内から「大日本伊部陶」という陶印をもつ甕が多数出土していて、それは明治18〜19年ごろ事業にゆきずまった「陶器改撰所」(註17)とういう会社のものであることが判明した。

以上からＫＰ－１地点窯跡の操業期間は、天保11（1840）年から明治18〜19年頃（1885〜1886）年ごろと推定される。

2．構　造

ＫＰ－１地点窯跡の構造については遺構の章で詳細に記述したが、再度ここでとりまとめてみたい。

規模は全長が水平距離で約18.6m、斜距離で約19.1m、房の幅は最大で約4.5mある。煙出し部を除く燃焼室、焼成室の内寸は18.1m、斜距離で18.5mである。勾配は燃焼部が12°、焼成部が16°、煙出部が４°〜11°、平均13°あり、主軸は南南東から北北西に向いている。最下段は平面形で逆三角形の燃焼室（初戸）があり、これに６つの焼成室（房・部屋）が続き、第６番目の焼成室の後ろは「煙道」と呼ばれる房がつく。その後面は簡易な構造の煙出しになっている。

12年度調査の西１号窯跡と大きく異なる点は、築窯時の構造がよく残る西１号窯跡に対して、本窯は相当改修が加えられている点である。特に５房から６房にかけては、本来の円柱で隔壁を支えていたものを、６本すべて角柱に替えたうえ、床も貼り替えている。この改修により、床面の傾斜角が６房付近で11°、煙道付近で４°とほとんど傾斜をもたなくなっている。

傾斜角の面では、西１号窯跡で初戸と１房の変化が28°から17°から急変しているが、ＫＰ－２地点窯跡ではその部分が12°からと16°と逆に緩くなっている。西１号窯跡の平均勾配は17°、ＫＰ－１地点窯跡は13°で、全体から見てもＫＰ－１地点窯跡は傾斜が緩く築窯されたうえに、さらに煙道部分も緩く改修している。この設計や改修の意図がどこにあるかは不明であるが、窯の西側に形成された相当量の物原からしても、相当回数焼成されていたと推測できるし、推定された操業期間とも大きく異なるものでもない。

この窯の構造は無段斜狭間と呼ばれるもので、年代地域は若干異なるが大阪市福島区の堂島窯跡１号窯など（註18）にその例をみることができる。近年、京焼を中心にして、窯構造などを含む技術の伝播について研究の進展がみられ（註19)、「近世の窯業技術は、肥前系の技術と瀬戸・美濃の技術を基礎とした関西系の技術でほぼ大別できる」(註20）との指摘がなされている。

このような技術伝播の流れの中で、あらためてＫＰ－１地点窯跡や西１号窯跡の構造などを比較すると、窯道具である匣鉢のみを積上げる窯詰めの仕方や、極論すれば大窯に仕切りをしただけの窯構造は、肥前系・関西系の区分で考えるには違和感があり、逆に備前の独自性、保守性といった側面が強く見える。

しかし、前述の佐藤陶崖が「私シ工夫の小釜」(西１号窯跡やKP－１地点窯跡）が「大釜」に比較して経済的で、窯方の衰えを救うためにいかに必要か説いた「陶器忌瓶小釜焼惑問」(註21）という文献があり、その記述から陶崖が京阪の各地で見聞した連房の窯を備前に導入した可能性が高いことが指摘されている。

また、伊部から直線で東へ７㎞ほど離れた閑谷という所では、貞享３（1686）年ごろから宝永７(1710）年ごろにかけて、「閑谷焼窯」(註22）と呼ばれる連房式の「御用窯」(註23）が操業していて

いる。「天保窯」（西１号窯跡・KP－１地点窯跡）の創業の約150年も前に既に「連房式の窯」が伊部にほど近い地域に「藩」の主導とはいいながら導入された事実があるが、京焼の技術者がきて指導したという伝承もある。ただこの「閑谷焼窯」の技術的な系譜は備前の中では途切れることになる。

以上から現時点までの知見ではあるが、西１号窯跡やKP－１地点窯跡などのいわゆる天保窯は、中世から段階的に巨大化した大窯からの発展型ないしは退化型ととらえられ、備前焼の中で自生的に発展した側面が強いが、関西系の技術も取り入れられている。それは陶工が直接備前の地で指導したのではなく、窯組の指導者が関西にて見聞した知見を従来からある備前の窯に応用した結果と推定できる。

第４節　ＫＰ－２地点窯跡の操業期間と構造について

１．操業期間

ＫＰ－２地点窯跡の操業時期について検討してみたい。出土遺物の中に実年代を直接示す年銘資料はない。ここでは出土遺物の多数をしめる擂鉢について、先学の編年に依拠し、相対的年代について記述してみたい。

擂鉢の大部分は、間壁編年Ⅳ－B期、乗岡編年中世５期b、重根編年ⅣB－３期におさまる。口縁部が均一な厚さで上方に立ち上り、端部がまるくおさまる個体が大部分である。中には端部で、内向きに平たい面をもつものがあり、これは重根編年Ⅴ期に相当する片口団地窯跡（新）に多く見られる型式である。Ⅴ期は16世紀の前半期が考えられていることから、KP―２地点窯跡は15世紀の第Ⅳ四半期を中心にした時期の操業と考えられる。操業期間については、物原の遺物量から相当な期間が想定されるが、窯の床の貼り替え回数などの追求ができていないので、詳述することはできない。

２．構造など

KP―２地点窯跡は、前述のとおり標高40～45mの北向きの斜面に築かれた大窯で、ほぼ地上に構築されていたと推定される。幅は2.6m、推定全長30m以上、傾斜角15度、主軸は北北西から南南東に向いている。天井を支える土柱、出入り口は未確認である。窯の両側には、擂鉢片が９割以上を占める物原が形成されている。

操業期間の項でも記述したとおり、KP－２地点窯跡に続く窯跡は片口団地窯跡（新）であるが、緊急時の立会い調査で窯体は未確認のため比較はできない。本窯跡に先行し15世紀の中ごろを中心に操業していた不老山東口窯跡は、推定全長が40m以上、幅が3.2～3.4m、傾斜角度が15～20度で、標高40m前後の丘陵端部に位置する長大な窖窯である。立地や規模、窯断面など近似していて、一連の変遷の中でとらえられるものである。

不老山東口窯跡の出土遺物は現在備前市教育委員会に保管されているが、その数量はテンバコにして千数百箱にも及ぶ。その大部分が「備前擂鉢投げても割れん」と諺にある擂鉢の破片で、KP－２地点窯跡の様子と似ている。また片口団地窯跡（新）の出土遺物の多くは擂鉢であることから、「15世紀はまさに擂鉢の時代」といえるのではないだろうか。

第5節　総　　括

以上みてきたように、本報告は伊部南大窯跡周辺で確認された9世紀代の窯、15世紀末の窯、天保年間から明治はじめ頃にかけての窯、合計3基の発掘調査報告である。南大窯跡周辺の確認調査は平成11年度から行い、本報告の3基を含めて合計8基の窯が確認されている。平成11年度からの調査では、平安時代末ごろ、鎌倉時代前半、安土桃山時代、江戸時代初め、江戸時代末ごろの合計5基の窯が確認され、その調査成果については「伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅰ」として平成15年度に刊行している。

「伊部南大窯跡」は、西大窯跡、北大窯跡とともに近世の備前焼を代表する大窯で、近世の備前焼の生産体制を考えるうえで重要な遺跡であることはいうまでもない。しかし南大窯を含めて3箇所の窯場に集約するまでには、その周辺において備前焼が連綿と生産されてきた歴史がある。その流れは、Ⅰ・Ⅱの報告書の中で詳細に記述したとおりであるが、ここであらためてまとめると以下のとおりになる。

①伊部の谷において9世紀代の小規模な窯が確認された。備前焼の初源の問題と絡めて話題となったが、12世紀後半以降の連綿とした伊部の谷での生産とは区別すべきものであること。ただその意味については本報告書では未消化のままである。

②15世紀末の窯が確認され、「15世紀が擂鉢の時代」であったこと。

③16世紀後半、17世紀初頭の窯を確認することができ、いわゆる「桃山」とよばれる時代の生産状況があきらかになりつつあること。

④天保窯（融通窯）を文献資料どおりあらたに2基確認できたこと。

⑤4年間にわたる調査で新たに8基の窯の知見を得ることができ、備前焼の生産画期や窯構造の変化について言及できたこと。

このようにまとめると多くのことが判明したようであるが、また逆に多くの課題があることが見えてきた。初源の問題は、佐山地区の窯跡群の展開をおさえながら検討していく必要があるし、またこれだけの数量の窯跡を掘りながら、近世以降の壷・甕・擂鉢以外の編年が提示できてないこと、中世段階ではどのような陶工集団によって生産されていたかなど、いくらでもあげることができる。

平成17年10月、文化庁の国庫補助事業として伊部南大窯跡内にある3基の巨大な窯のトレンチ調査を実施した。前述のとおり周辺部の状況は判明したが、史跡地内については未調査であったため、将来的な史跡整備を見据えながら計画したものである。調査は平成18年度にも継続するが、17年度の調査ではさまざまな新知見を得ることができた。膨大な陶片は現在整理中であるが、これらの周辺窯跡群の調査成果を踏まえながら、諸問題を深化させていくことができるかもしれない。

【註】

（1）　間壁忠彦・間壁葭子「備前焼研究ノート（1）～(4)」『倉敷考古館研究集報』1、2、5、18、1966、1966、1968、1984
間壁忠彦「備前焼」『考古学ライブラリー』60　ニューサイエンス社　1991
間壁忠彦・西川宏「岡山県備前町合が淵古窯群」『日本考古学協会年報』19　1971

間壁忠彦「備前焼の編年と分布」『島根県立博物館調査報告』第３分冊　1982
間壁忠彦「備前焼の窯跡」『陶説』569　日本陶磁協会　2000
（２）伊藤晃・上西節雄「備前」『日本陶磁全集』10　中央公論社　1977
伊藤晃「15世紀から17世紀の備前焼」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会　1985
伊藤晃「窯業」『岡山県の考古学』吉川弘文館　1987
（３）平井泰男「中世の遺構・遺物について」「百間川原尾島遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56　建設省河川工事事務所・岡山県教育委員会　1984
（４）乗岡実「備前焼擂鉢の編年について」『第３回中近世備前焼研究会資料』　2000
乗岡実「中世の備前焼甕（壺）の編年案・紀年銘資料にみる大甕（壺）の変遷」『第２回中近世備前焼研究会資料』　2000
乗岡実「近世備前焼擂鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡』　岡山市教育委員会　2002
（５）重根弘和「山崎古窯跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』167　岡山県教育委員会　2002
（６）福田正継・武田恭彰・橋本久和「８．山陽東部」『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会編　2001
（７）山本悦世「吉備考古学ライブラリー７」『寒風古窯址群』　吉備人出版2002
（８）武田恭彰「古代土器生産についての一予察（１）（２）」『古代吉備　第11集　第12集』　1989　1990
（９）神戸市教育委員会『今池尻遺跡　新方遺跡　平松地点　発掘調査報告書』　2003
（10）森内秀造「白沢・志方窯跡群における遺物の特徴」「志方窯跡群Ⅱ－猿投支群－」『兵庫県文化財調査報告第』217　兵庫県教育委員会　2001
（11）池澤俊幸「中国・四国地域の古代後半期須恵器窯跡」『窯跡研究会　第３回シンポジウム　須恵器窯の技術と系譜２－８世紀中頃～12世紀を中心にして発表要旨集』　窯跡研究会　2004
（12）註（11）に同じ
（13）木村平八郎泰武『五問五答古伊部神伝録』　嘉永２（1849）
金森得水・渡會末彰『本朝陶器攷証』　安政４（1857）
（14）佐藤陶崖『融通講規定控』　天保11（1840）
（15）小橋藻三衛「伊部陶史」大阪鵠浦會事務所出版　1918
（16）桂又三郎『古備前大事典』備前館　1975
（17）桂又三郎『明治の備前焼』奥山書店　1976
（18）大阪市文化財協会『堂島蔵屋敷跡』　1999
（19）関西陶磁史研究会『窯構造・窯道具からみた窯業』資料集　2005
（20）大橋康二「わが国の窯業における生産技術の展開」『窯構造・窯道具からみた窯業資料集』関西陶磁史研究会　2005
（21）佐藤陶崖『陶器忌瓶小釜焼惑問』　天保14（1843）
（22）桂又三郎『備前閑谷焼とお庭焼』　大雅堂　1969
臼井洋輔「御庭焼と御用窯⑦備前の藩窯」『茶道雑誌』　河原書店　1992
（23）仲野泰裕「御用窯と御庭焼き」『茶道学大系　第五巻　茶の美術』　淡交社　2000

附編１　二基の天保窯に関する文献史料

備前市文化財保護審議会委員
小　西　通　雄

天保窯に関する文献史料を後掲しているが、その前後の伊部村の状況、及び文献史料について少し述べてみたい。

江戸時代後期、文化・文政期（1804～1830）に農村の経済は、行き詰まり困窮していた。伊部村も同様に文政５年（1822）頃には「・・伊部村散田多并村辻借銀凡六拾貫目、散田凡四拾五町、年々高懸り弥増惣百姓一統及衰微、毎々従御上様莫太之御救被為下候得共、村方行直り不申・・」（１）の状況であった。伊部村内（家数278軒、人数894人）（２）でも農業を経済基盤とする東部と、窯業と農業の混在する西部で村柄が異なり、多々軋轢が生じ、村民の要望により文政11年（1828）伊部村は東分（77軒）、西分（201軒）（３）に分村された。分村によって経済が上向く訳でもなく、諸物価は高騰し、焼き物の値段は下がり、増々村は疲弊して窯方は、焼き上げの仕込み銀にさえ支障を来していた。文政５年には邑久郡虫明村（現瀬戸内市邑久町虫明）で備前焼に似た焼き物を吉蔵なる人物が焼き、伊部の下職人の茂市が関与したことが発覚し、処分を受けている。（４）又分村後には、東分でも平五郎なる人物が、一夜焼きの窯を築き、これを後見する東分と窯組との間で問題が発生している。（５）このような事件も窯組の経済をさらに疲弊させて行ったであろう。

従来３基の大窯（北・西・南組）を運営していた伊部西分の窯組（北窯６人と南窯１人が発起人）（６）は、困窮・逼迫を打開するために藩に小窯の築窯を申請し、天保４年（1833）（７）に不老山麓に１基（天保窯・融通窯とも呼称、現備前市指定文化財）が築かれた。この小窯は順調に運営されていたようであるが、他の大窯組との確執が生じ、新たに小窯築窯の必要に迫られ、「史料１」及び「史料２」に至ったものと考えられる。効率よく窯を運営し、備後鞆浦（現福山市鞆）の保命酒の容器などの生産に活路を開こうとしていた。

天保11年（1840）、新たに藩から借銀し、２基の小窯が南大窯の西に築かれたが、大小６基の運営が、疲弊した窯組の経済再興には、十分な効果をもたらすには至らなかったようである。更に邑久郡虫明村で、再度焼物（虫明焼）が焼かれ、天保13年には藩へ訴訟するなど混乱を来している。（８）弘化３年（1846）頃には資金不足などにより、ある小窯は休窯状態に陥っている。（９）幕藩体制の終末を迎えようとする時代の中で、伊部村だけでなく、農村の経済再生は、いかなる方策も手詰まりになっていたのである。幕末から明治維新（1868）を迎え、更なる苦境に陥るのではあるが、窯に携わる人々の努力によって、小窯から更に縮小され、少人数の共同窯、そして個人窯へと続き、大正・昭和の苦難を乗り越え現代の備前焼の隆盛に至っている。

この度の南大窯周辺の発掘調査で、２基の小窯の所在が確認され、規模・焼成器種など多岐にわたる成果を得て、今後の備前焼研究に寄与できる資料を得た。２基の築窯年は定かではなかったが、発掘調査と同じ頃、伊部の佐藤家より「史料２」を保存されていることを教示戴き、それにより２基の小窯は、天保11年（1840）の築窯であったことが判明した。

そして2005年秋、佐藤家から新たな文書の所在の報を得て、拝見させて戴いた中に「史料１」が含まれていた。築窯前年の史料であり、当時の窯方の状況を知ることのできる史料として、公開の諾を戴き、掲載することができた。佐藤家は、17世紀後半には伊部に住し、医家・売薬業・窯業を生業としてきた。元禄の頃には窯業に携わっている。(10) 史料に記述の「名主与惣兵衛」は、佐藤陶崖(1785～1843) のことで、医師であり画家であり優れた陶工でもあった。当時一流の学者・文化人との交流も幅広く、経済にも明るく『御代の潤ひ』・『堕胎訓解』などの著述がある。村方のためには下役人・大庄屋とも論争に及ぶ気概溢れた人物であった。(11)

備前焼窯趾の発掘調査研究は、他の窯業地より遅れていたが、近年の南大窯周辺の発掘調査で各時代の窯が確認され、近世備前焼の研究は進むであろう。文献史料は『池田家文書』・『岡山県史』及び窯元であった木村・金重・森家の文書の一部は、『和気郡史』や桂又三郎氏などの備前焼研究家の著作物により知ることができる。佐藤家史料のように従来知られていなかった史料が、窯元・名主・大庄屋などにつながる家に未だ多く、蔵されているであろう。それらの史料を掘り起こし調査を進めるならば、発掘調査と併せて近世備前焼研究により寄与できるであろう。

【註】

(1) 佐藤与惣兵衛記述「願い上げ口上」案文　1830頃

(2) 備前藩文書『撮要録』1648頁　但し記事に窯業と農業を誤写していると考えられる部分がある。

(3) 註２

(4) 佐藤与惣兵記述「願い上げ口上」案文　1830頃「伊部村東分平五郎与申者ハ西分釜元下職人ニ而、渡世仕居申候處、・・自身居家屋敷内ニ土器釜ト相名附小釜相築、本う路く様之物焼出し候處當正月ヨリ御産物御献上之御品等、少々宛作り焼立一夜焼ニ而、伊部焼ニ相似セ、・・釜組一統難捨置、・・色々評定候ハ、平五郎義其伯父茂市与申者、同下職人ニ而御座候処、此両人之者文政五年ニ邑久郡虫明村ニ而、伊部焼物之似物仕、厳敷御締被　仰付、御差留ニ相成候舊悪茂有之候者ニ御座候得者、・・平五郎申候者、私釜ハ大庄屋様へ御願申聞済之上ニ而、相始候處、虫明村吉蔵与申者ヨリ注文御座候而、・・其伯父茂市只今ハ死去致候得共、先年虫明村ニ而似物焼致、厳敷御締被　仰附、其節其許ニも虫明村へ手傳ニ罷越、右吉蔵ト申此度之誂人も先年似物師之張本ニ而候得者、・・」

(5) 註４。

(6) 文政８年（1825）頃42軒　嘉永２年（1849）頃には46軒とある。『和気郡史資料編下巻』1983 森家文書

(7) 森家文書には天保４年（『備前焼第五巻第三号』桂又三郎　文献書房 1939）とあるが、『五問五答古伊部神傳録』木村泰武 1849には天保３年とある。

(8) 窯方から虫明焼が伊部焼（備前焼）に似ているため廃窯を藩に求めている。「虫明焼の新資料に就いて」『焼きもの趣味』池上千代鶴 1939

(9) 鞆の保命酒醸造元中村家文書　弘化３年（1846）の条に「・・・近年小窯と云御趣法御座候處、是も一両年御休釜同様に相成候由・・・」とある。

(10) 『備前焼紀年銘土型調査報告書』備前市教育委員会 1998

(11) 『佐藤陶崖』備前市歴史民俗資料館 2000

史料一

奉願上

一、和氣郡伊部村西分、近年小釜御免ニ而焼立試候処、年ゝ結構ニ調子相定、焼立候得共大釜焼立之時分、付釜ニ被　仰付、平日数之勝手次第ニ焼立候事、御免無御座候ニ付、焼物ハ程よく出来揚がり、小釜人数五・六人之業職之益ニ者、急度相成様申候得共、釜組一統之益ニ者相成不申候而、大釜組一統之者之迷惑ニ者相成居申候。小釜組へ加入相談度々仕願入候得共、私欲ニ迷ひ一切熟談致呉不申、此段争論御役介も既ニ出来仕哉ニ御座候処、此度村方一統之為ニ改格仕法相始掛候而、既ニ釜方業職改格ニ而、少シ人氣穏ニ相成居申候。本よ里此小釜ハ村一統之為ニ相成候儀者、只今ニ而者毛頭無御座候ニ付、小釜并大釜迄改格愚案、左之通乍恐奉願上候。

一、小釜毎月一釜宛、釜方一統加入致セ候而、焼出シ御免被為　仰付候ハゝ、一統難有奉存候。左候ハゝ小釜為試築候ニ付、間数凡五間位ニ而、未全備ニ築立居申候ニ而者、無御座候。此小釜尻ニ凡五間位、継延奉願上度奉存候。左様ニ候へ者、釜形全備仕候而、益調子宜敷罷成候而、日数短く毎月一釜宛、焼出し誠莫大之融通ニ相成候而、釜方社倉法相建、当夏ヨリ相始居申候ニ付、釜組社倉金ニ而、散田片付之仕法誕生仕候。是迄度々小釜組五・六人之者ヨリ毎月焼出し御願者、小釜組長十郎ヨリ伊部方様へ願出候得共、一切御免無御座、前文ニ申上候通、一統之為ニ者相成不申。私欲之迷此趣度々利解仕候得共、五・六人者格外之貪欲ニ而、利解も難通大ニ歎敷奉存候。愚案之通被為　仰付候ハゝ一統難有奉存候。尚又仕法立之活法者、相分兼候。御事者乍恐口上ニ而可奉申上候。以上

天保十年　亥七月　　同村名主　与惣兵衛
　　同　　善十郎

右之通申出候ニ付、承糺候處、前文之通相違無御座候。願上之通可被　仰付候哉奉伺候。以上

大庄屋坂根村　山形三郎右衛門

谷藤右衛門様

史料二

融通講規定

高正銀三拾貳貫目也

外ニ講主拂出シ貳貫目掛

但

連中拾五人并講主壱口

都合人数十六人壱人前貳貫目掛

右者伊部村就衰微、為繁栄新ニ小釜貳ッ相築、焼物業職致出情候而、以其餘澤村方再興支度仕法改革奉願上候処、御免許被　仰附候而、御細工人長十郎・名主與惣兵衛右両人之者江、新釜築料御拝借、并釜方引請諸事締役被　仰付難有仕合奉存候。左候ハゝ都合本釜共釜数六ツニ相成候。然ル上者六釜共無懈怠焼出さセ度、依之改革融通釜為仕込ミ銀、此度融通講相企候間御加入被下度、則講連治定左之通

一、来ル丑年より辰年迄拾六ヶ年之間、御申合之通、無滞講主掛出可申候。但講主壱口加入之分、如何様之義有之候共、満講迄入札致間敷候。為後日證書依而如件

天保十一年　子　　御細工人　長十郎
　　名主　與惣兵衛

連中治定

一、右御用御釜融通講致加入候上ハ、御規定之通違例申間敷事

一、席貳番より高三拾貳貫目見込ミ入札仕、落札之者へ以員数割合可致取遣候。尤半口之者堂りとも同様銘々入札致、落札員数割合右同断

一、右得番ニ相當候者之引當家屋敷并山林田畑等、毎年十一月ニ至以書附相當之趣、連中江御尋相御座候ハゝ、無遠慮相糺合不相當之趣ニ候ハゝ、貳番札得番ニ取極可申事

一、連中一統納得之上引當治定ニ候ハゝ、御法之通證文相認其所役人、致奥印外ニ請判等取揃指出可申事

一、銀子取遣之儀無闕年前廣者勝手次第、十二月十日限拂出日、十五日得番之方江相渡し可申事

一、當時之盛衰ニ而、掛銀拂出約定及延引候ハゝ、拂出之儀者引當掛物賣拂之儀者、連中可任指圖并掛銀之義、末迄之懸銀元戻し申候間、後継之者請継可申候。両条共聊兎角申間舗事

附編２　東６号窯跡検出炭化材の放射性炭素年代測定について

㈱吉田生物研究所

１．はじめに

備前市伊部南大窯跡東６号窯跡より検出された遺物１点について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

２．試料と方法

測定試料の情報、調整データは表１のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計（コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

３．結　　果

表２に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行った^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲、暦年較正に用いた年代値をそれぞれ示す。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

４．考　　察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

測定番号	遺構名	試料データ	前　処　理	測　定
1	M06 T601 011023 遺構1炭	試料の種類：炭化物・材 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	NEC製コンパクトAMS・1.5SDH

表１　測定試料及び処理

測定番号	$\delta^{13}C$（‰）	^{14}C 年代（yrBP±1σ）	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲		暦年較正用年代（yrBP±1σ）
			1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	
1	-24.93±0.13	1185±30	780AD(68.2%)890AD	720AD(2.2%)740AD 770AD(88.4%)900AD 910AD(4.9%)950AD	1187±30

表２　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

参考文献

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), 425-430.

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代，3-20.

Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. (2004) Radiocarbon 46, 1029-1058.

附編３　東６号窯跡などから検出した炭化材の樹種同定について

㈱吉田生物研究所

１．試　　料

試料は東６号窯跡の灰原から検出した炭化材２点と切田遺跡（備前市新庄：弥生時代）から出土した木材１点である。

２．観察方法

No.１は剃刀で木口（横断面)、柾目（放射断面)、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

No.２－１、２－２の炭化材は数mm立方の試料をエポキシ樹脂に包埋し研磨して、木口(横断面)、柾目(放射断面)、板目(接線断面)面の薄片プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

３．結　　果

樹種同定結果（広葉樹２種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

１）ブナ科コナラ属アカガシ亜属（Quercus subgen. Cyclobalanopsis）

（遺物No.２－２）

（写真No.２－２）

放射孔材である。木口では年輪に関係なくまちまちな大きさの道管（～200μm）が放射方向に配列する。軸方向柔細胞は接線方向に１～３細胞幅の独立帯状柔細胞をつくっている。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と多数の壁孔を有する。放射組織はおおむね平伏細胞からなり、時々上下縁辺に方形細胞が見られる。道管放射組織間壁孔は大型で柵状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と放射柔細胞の塊の間に道管以外の軸方向要素が挟まれている集合型と複合型の中間となる型の広放射組織が見られる。アカガシ亜属はイチイガシ、アカガシ、シラカシ等があり、本州（宮城、新潟以南)、四国、九州、琉球に分布する。

２）ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節（Sect. Prinus Loudon syn. Diversipilosae, Dentatae)

（遺物No.１，２－１）

（写真No.１，２－１）

環孔材である。木口では大道管（～380μm）が年輪界にそって１～３列並んで孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ、薄壁で角張っている小道管が単独あるいは２～３個複合して火炎状に配列している。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と対列壁孔を有する。放射組織は全て平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と肉眼でも見られる典型的な複合型の広放射組織が見られる。コナラ節にはコナラ、ミズナラ、カシワ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

備前市市内遺跡出土木製品同定表

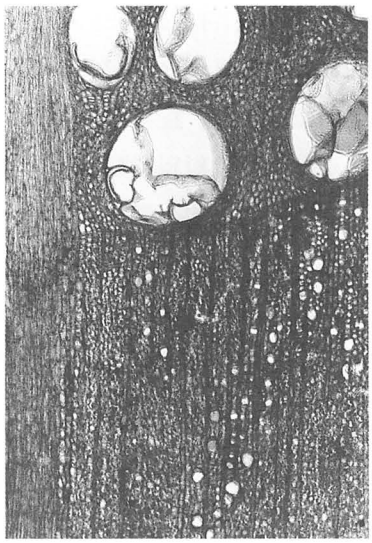
No.	遺跡名	品 名	樹　　種
1	新庄切田遺跡	流　木	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節
2-1	伊部南大窯跡東６号窯跡 011029 T601 東拡張区 下層 炭	炭化材	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節
2-2	伊部南大窯跡東６号窯跡 MOE-6 T601 北拡 黒 011113	炭化材	ブナ科コナラ属アカガシ亜属

参考文献

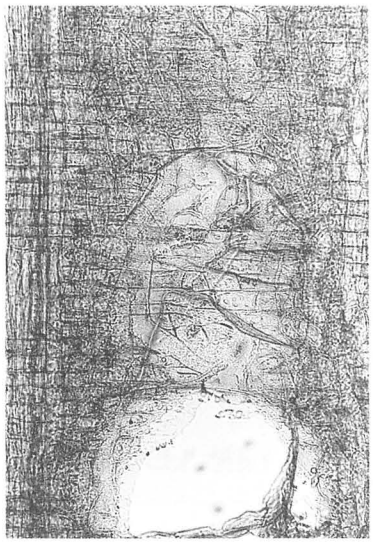
島地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版（1988）
島地 謙・伊東隆夫 「図説木材組織」　地球社（1982）
伊東隆夫　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」 京都大学木質科学研究所（1999）
北村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」　保育社（1979）
深澤和三 「樹体の解剖」 海青社 （1997）
奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）
奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

使用顕微鏡

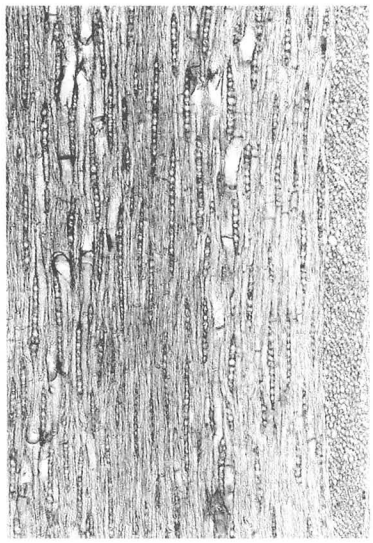
Nikon
MICROFLEX UFX-DX Type 115



木口×40

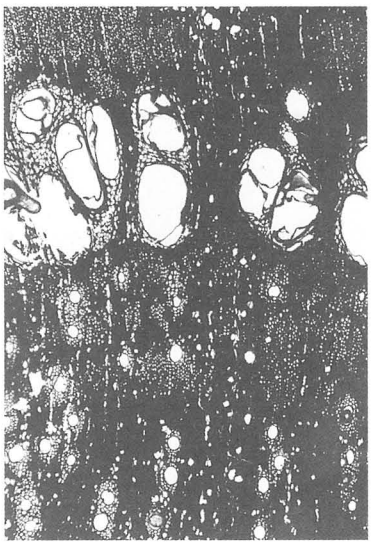


柾目×100

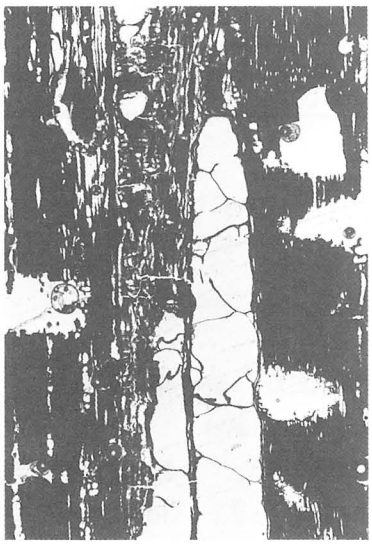


板目×40

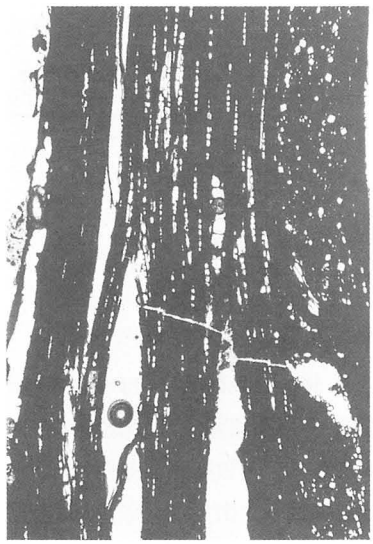
No.1　ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節



木口×40

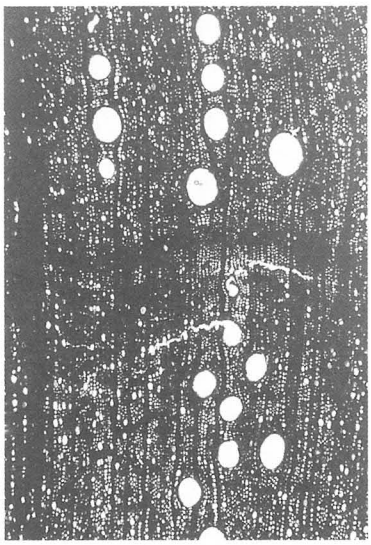


柾目×40

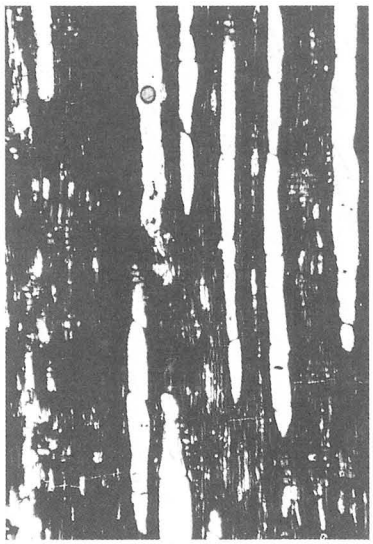


板目×40

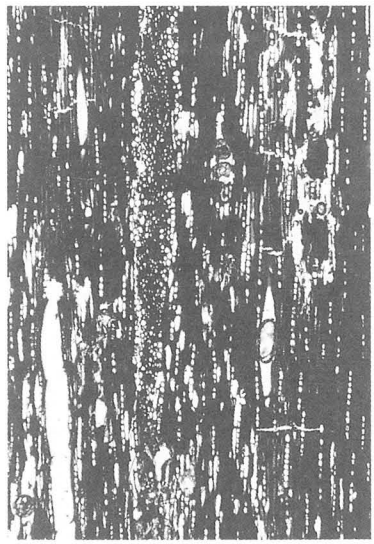
No.2-1　ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節



木口×40



柾目×40



板目×40

No.2-2　ブナ科コナラ属アカガシ亜属

附編４　窯の構造・立地からみる備前焼生産画期の予察

第１節　はじめに

本編は平成17年度備前市で開催した備前歴史フォーラム「備前焼研究最前線Ⅱ」で石井が報告した内容を基本にしたもので、一部に修正を加えている。再掲に及んだ意図は、昨年度報告時においては発掘調査により確認されている備前焼の窯が19例であったが、その後文化庁の国庫補助事業で国指定史跡「伊部南大窯跡」内の調査をおこなうことができ、３例の新たな知見を加えることができたからである。また、その新知見により前回の報告の内容を若干修正する必要が生じたことにもよる。したがって、３例の新知見を加えた合計22例の調査例をもとに、窯構造や立地などの視点から備前焼生産状況の画期を予察というかたちでまとめてみたい。

第２節　窯の分布

備前市の南西部、瀬戸内市長船町に接する佐山地区は、中国地方では最大の須恵器古窯跡群である邑久古窯跡群の北東端に位置する。佐山地区では遅くとも７世紀末ごろには須恵器の生産が開始され、奈良時代に最盛期を迎え、平安時代後半まで続けられるが、その後はこの地で生産されなくなるという。それに呼応するかのように伊部の地で本格的に備前焼の生産が開始される。

12世紀のある時期、西の山窯跡〔田代健二1988〕や大ヶ池南窯跡など伊部の山麓で生産が開始された備前焼は、鎌倉時代中ごろになると山の中腹に立地することが多くなる。南北朝期にはさらに高度をあげ、熊山山上1号窯跡のように標高400mをこえるような熊山山塊に位置するものもある。南北朝期末ないし室町時代はじめ頃には、山崎古窯跡〔重根弘和2002〕、不老山東口窯跡〔河本清・葛原克人1972〕のように、ふたたび山麓に築かれるようになる。その後、16世紀の後半のある段階で、山麓に点在していた窯は北大窯、西大窯、南大窯に集約されることになる〔間壁忠彦・間壁葭子1966ほか・伊藤晃1985・1987〕。

第３節　備前焼の生産開始（12世紀から）

備前焼の生産開始の時期については、「備前焼とは何か」という定義の問題と絡めて、奈良時代説、平安時代末説、鎌倉時代末説などが先学・研究者によって提唱されてきた。それはさまざまな根拠に基づき提唱されているわけだが、本章では、昨年度の備前歴史フォーラムでの討論や、備前焼の椀と瓦器椀の研究をもとに備前焼の生産開始を12世紀代と考えており、以後の記述はその前提で進めたい。

本報告書に掲載している９世紀代の東６号窯跡については、報告のとおり小規模な窯の短期間の操業であり、12世紀代以降にはじまる継続的な築窯や大量生産とは区別して考えている。

12世紀代の窯としては、大ヶ池窯跡、西の山窯跡などを想定しているが、いずれも発掘調査を行なっ

ておらず窯構造についての知見はない。少し時期は下るが、13世紀の半ば頃の操業と推定している南大窯東４号窯は、全長が12.3m以下、幅が1.8m、傾斜角度が26度の害窯である。これは須恵器の窯と大差なく、窯構造という視点から見る限り、古代の窯業とで画期を認めるものではない。ただ11世紀代の窯など前段階の資料も不足しており、今後さらに検討していく必要がある。

第４節　土柱使用と窯の大型化と量産化（14世紀中頃から15世紀初頭）

まず、窯構造の変化の中で、最初に認められるのは、土柱の使用である。15世紀中ごろを中心に操業していたと考えられる不老山東口窯跡で土柱の可能性を指摘している報告例が初見である。14世紀後半頃と報告されている山崎古窯跡は、全長推定20m、幅2.1～2.5mで丘陵の先端部に立地するが、土柱構造は報告されていない。南大窯東５号窯跡、愛ヶ淵北窯〔間壁忠彦・西川宏1965〕、グイビガヶ谷窯跡など、14世紀後半以前に属するものは、窯の規模も全長10m前後、幅も1.5m前後で、須恵器の窯と大差なく、その立地も標高が高い山中に立地するものが多い。山崎古窯の段階で、窯の大型化が指向され、不老山東口窯跡段階で必然的に土柱が用いられると推定できる。土柱は、分焔柱的機能というより、不老山東口窯跡の全長が40m、幅が3.2～3.4mの大形の窯である点からも、天井をささえるための柱と考えられる。窯の立地も丘陵部の先端や、山裾であり、片上湾による搬出の便を考えた結果であろう。

この土柱使用と窯の大型化、立地の変化は、すでに多くの研究者が認める「量産化」にともなうものであることは自明である〔伊藤晃・乗岡実ほか2004〕。不老山東口窯跡から出土した千数百箱にものぼる大量の擂鉢片をみても、その量産化の度合いは想像を絶するものがある。

第５節　窯場の集約と窯道具の使用、器種の爆発的増加と補完する専用窯（16世紀後半～17世紀初頭）

大型化を指向した窯は、南大窯東３号窯跡でひとつのピークを迎える。全長46m以上、幅3.4～４mの長大なもので、天井を支える柱が中央軸にそって規則的な間隔で縦一列に並んだ構造をもち、窯を取り囲むように大規模な溝が掘られている。出土した備前焼も擂鉢、平鉢、鉢、大甕、壷、小壷、茶わん、茶入、徳利、皿、灯明皿、など非常に多岐にわたる。15世紀の終わりごろのＫＰ－２窯跡の器構成が多量の擂鉢とごく少量の壷類である点からも、この段階で、爆発的に器種が増加していることが読み取れる。

この時期は備前焼の最盛期でもあり、「南蛮」を珍重していた茶道においても、それにかわり「備前焼」がひとつのブランドとして確立した段階でもある（註１）。

この爆発的な器種の増加は、その前段階のシンプルな器種構成と対比しても、明らかに消費側からの需要の喚起がある。それは建水や平鉢などの特定の器種ばかり多量に生産していた全長13.6m以上、幅1.3～1.5mの小規模な南大窯跡西２号窯跡などが、大型化した窯と並行して操業している点などからも傍証できる。また、南大窯東３号窯跡においては、専用の窯道具はないが、それから数十年後の南大窯西２号窯跡では、製品をよりよい状態で焼成するため匣鉢や焼台といった窯道具の使用が確認

でき、破損率をさげ、需要に的確に対応する生産側の意図を読み取ることができる（註２）。

窯の立地で、従来から指摘されていることだが、この段階において、備前焼の窯場が榧原山北山裾の「南大窯」、不老山南山裾の「北大窯」、医王山東山裾の「西大窯」の３箇所に集約されることである。この流れは、量産化を指向して搬出に便利な場所に窯場を集約させ、大形の窯で多量に生産するという文脈は読み取れるが、その要因は、消費者側の需要の変化、政治的な外因（註３）、生産地側の燃料や土の問題などが複雑に絡み合っていると考えられる。

第６節　備前焼最大の窯と藩の窯業施策（17世紀前半～17世紀後半）

備前焼の歴史の中で、最大の窯といわれているのは、国指定史跡伊部南大窯跡内にある東側窯跡である。全長約50m、幅約５m、勾配15度前後の巨大な窯である。文献からはその操業開始は延宝６（1680）年ごろではないかと推定されている〔間壁忠彦1991〕。窯の両側には小山のごとく物原（不良品や窯道具を廃棄した場所）が堆積していて、その生産量が膨大であったことが推測できる。その後、調査によりこの東側窯跡の操業年代については、出土遺物から17世紀の前半を中心とする時期と考えられ、従来より多少遡った年代観になっている。

この窯と前述の東３号窯跡の間に操業した窯には、同じ指定地内の中央窯跡、西側窯跡が想定されていたが、調査の結果、中央窯が17世紀初頭で、西側窯が17世紀末から18世紀前期と推定されている。規模は中央窯で全長約25m、幅約2.3mである。従って備前最大の窯に至るまでには、右肩上がりにその規模が拡大していったわけではなく、「ゆりもどし現象」を起こしている。この現象は後述する流通圏域の急激な縮小とも呼応するが、東側窯跡で再度規模が拡大し、備前最大となる。

その後この備前最大の窯がどれくらいの期間操業していたかは遺物検討を行なわなければならないが、後続する窯は西側窯で、全長約33m、幅約2.8mと明らかに縮小傾向にある。また、この西側窯は、物原などの様子からあまり長期間操業はしていないようである。

ちょうどこの時期は「御用窯」である閑谷焼窯が開窯する操業を始めたころであり、藩の窯業施策が大きく転換していった時期でもある。（註４）。

第７節　連房式の窯の導入と商品価値のある特定器種の多量生産（19世紀前半）

備前焼に連房式の窯が導入されるのは、江戸時代後期、天保年間（1829～）頃と考えられている。古文書〔木村平八郎泰武1849・金森得水1857・佐藤陶崖1840〕では、天保年間に３基の小窯が築かれたとあり、南大窯西１号窯跡、ＫＰ－１窯跡、天保窯（備前市指定建造物）がこれに該当する。後二者は天保年間に築窯されたあと、複数回改修がされていて、原形を留めている部分は多くないが、南大窯西１号窯跡は築窯時の平面形がよく残存している。全長16.7m、幅3.7～4.5m、勾配17度、初戸と呼ばれる燃焼室、５房の焼成室、煙道とよばれる煙出し部からなる。無段斜狭間の連房式の窯である。構造的には従来からある大形の備前焼の窯に仕切りをしただけという指摘もあるが、伊部の地において連房の窯が導入されたのはこれが最初であると考えられている。

しかし、伊部から東に７ｋｍほど離れた閑谷という地では、貞享３（1686）年ごろから宝永７

（1710）年頃にかけて既述の「閑谷焼窯跡」〔桂又三郎1696・臼井洋輔1992〕と呼ばれる連房式の「御用窯」〔仲野泰裕2000〕が操業していている。「天保窯」の築窯の約150年も前に、「連房式の窯」が伊部の地からそう遠くない地点で操業しており、伊部の陶工も操業に深く関わったといわれる。「藩」主導で導入された閑谷焼窯跡は、現在でいえば窯業試験場的な性格をもつものであるが、「連房の窯」はその後、伊部の地で用いられることなく、天保窯まで採用されなかったことになる。150年のブランクをどう読み解くかは、今後の課題であるが、大形の窯と並行して操業した「小釜」（註５）の流れがあることは文献からも指摘でき、大形の窯の発掘調査とともに視点にいれておかなければならない。

「天保窯」では、人形徳利、角徳利、甕、灯明皿、土管など焼成している。人形徳利や角徳利は、鞆の浦（広島県福山市）に保命酒という有名な薬酒の容器として、相当量消費されていた〔桑田勝三1937〕。土管は新田開発用に、また擂鉢は備前地域内の郷町、農村での消費という状況である。これは商品価値のある特定の器種のみを多量生産していることになる。

16世紀後半から17世紀にかけて最盛期を迎えた備前焼は、その後、流通圏域を備前一国内へと急激に狭め、人形徳利や灯明皿など特定の器種のみが圏外へ流通するようになる。それは天保窯が当時「融通窯」と呼ばれたように、燃料の節約と焼成日数の短縮が可能なこの形式の窯だからこそ可能な生産形態であったわけで、大窯を焚く時代はすでに終わっていたのである。

第８節　おわりに

以上窯の構造や立地の分析を通して、備前焼の生産状況の画期を設定したわけであるが、端的にまとめると以下のようになる。

12世紀のある段階、須恵器窯と大差ない全長10m前後、幅1.5m前後の窯で備前焼は生産され始める。南北朝期のおわりごろには全長20m、幅2.1～2.5mのやや大型化した窯を丘陵先端部や山裾部に築くようになる。この時期は、西日本において備前焼が国産陶器の需要を独占するようになる傾向とも合致する。

室町時代前半の不老山東口窯跡の段階では、天井をささえる土柱構造の可能性が指摘されており、以後の大形の窯構造の流れをつくるとともに、量産化を押し進める。16世紀終わりごろには、爆発的な器種の増加、窯場の集約がおこるとともに、大型化した窯と並行して特定の器種のみ多量に焼成する小形窯が出現する。これは消費側の需要の変化、為政者の干渉など外的要因が考えられる。

17世紀には、流通圏域の急激な縮小が関係するのか、窯が小形化するゆり戻し現象が起こる。しかし、17世紀前半には備前最大の窯ができ、17世紀後半には「御用窯」の閑谷焼窯跡が閑谷学校建設にともなって築窯される。閑谷焼窯は連房式窯であるが、備前焼の中心生産地である伊部の地にはその後150年間も普及しなかったといわれている。

天保年間（1829～）には合計３基の「融通窯」とよばれる連房式窯が築かれ、人形徳利や灯明皿といった商品価値の高い商品を中心に窯業が営まれる。このとき大形の窯は完全に廃窯になっていたわけではなく、窯規模の縮小、焼成回数の削減などをおこないながら、明治初年頃まで焼きつがれていった。

基本的にはごく少数の調査事例から生産状況の画期を設定したわけであるが、今後調査事例の少な

い12世紀代の窯跡調査が進めば、より詳細な分析が可能になっていくと思う。

（備前市教育委員会　石井啓）

【註】

（１）「なんばん」の「土もの」として珍重されていた安南の焼き締め陶器にかわり、備前が用いられるようになるのは、16世紀後半からといわれている〔赤沼多佳2002〕。

（２）窯道具の使用開始は、ひよせと呼ばれる田土の使用と同時期であり、それは田土が山粘土に比較して、焼成時に扱いにくい点をおぎなうものではないかと考える。

（３）『松屋筆記』という文書の中にこういうくだりがある。「いんべと云ふ村を某は通り候　爰にて　とつくり　かめなど作る所にて候　兼而は備前の國中より作り出すべきと存候所に　此村にかぎり候　亀など焼候かま　あまた候處に　先年太閤様御下向之砌御覧有て　かかる天下の重寶をあまたやき候ては　口惜き由被仰　ことごとくうちやぶらせられ候　唯一所指被置候き・・・」と。

これは文禄元年（1952）、秀吉の朝鮮侵略のため、九州へ向かった常陸佐竹家の家老平塚山城守瀧俊が名護屋（佐賀県）の陣中から国元へ送った書状の一節で、秀吉が多くの窯を破壊し、一カ所だけで窯を焚くように命令したことが記されている。文中に「先年」とあるのは天正15年（1587）ごろのことと考えられていて、今回確認された窯が操業していた時期と重なる。

『松屋筆記』は 国学者高田與清（1783－1847）が、膨大な量の蔵書などを抜粋し、他の文献などを参考に解釈を加えたもので、全部で120巻にもなる。

（４）備前岡山藩主池田光政は寛文８・９年（1668～1669）ごろまで、熊澤蕃山を信任して意見を求めたり、献策を用いたりしていた。その熊澤蕃山は、政治、人君天賦、勧農、国産興隆などにわたった独特の経世治民論を展開した著書「集義外書巻一（寛文12年板行）」の中で、「塩浜と焼物との山林を尽くすことは大なる事なり。それは山林は国の本なり。（中略）国に忠あらん人は塩浜と焼物とを減ずとも増すべからず。其上、古人も山をつくすものは子孫おとろふと申伝候（集義外書巻１寛文12年板行）」と述べている。これによれば過度に拡大した窯業について山林資源との関係で憂いを述べており、藩の窯業施策にも影響を及ぼしたことが推定される。ただ「ゆりもどし現象」や窯規模の縮小化とどう関連するのかは、今後検討していきたい。

（５）佐藤陶崖が「私シ工夫の小釜」（南大窯西1号窯跡など）が「大釜」に比較して経済的で、窯方の衰えを救うためにいかに必要か説いた「陶器忌瓶小釜焼惑問」〔佐藤陶崖1843〕という文献があり、その記述から陶崖が京阪の各地で見聞した連房の窯を備前に導入した可能性が高い。「大窯」についても、「小釜」導入によって完全に廃窯になったわけではなく、短くしたり、床をあげるなどの改窯を行ないながら、「連房」と併行して、明治の初めごろまで操業していたという。

［引用文献］

赤沼多佳2002「伝世品に見る南蛮茶道具の様相」『東南アジアの茶道具』茶道資料館

伊藤晃1985「15世紀から17世紀の備前焼」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会

伊藤晃1987「窯業」『岡山県の考古学』吉川弘文館

伊藤晃・乗岡実ほか2004「中世陶器の物流―備前焼を中心にしてー」『日本考古学協会2004年度広島大会研究発表会資料集』日本考古学協会2004年度広島大会実行委員会

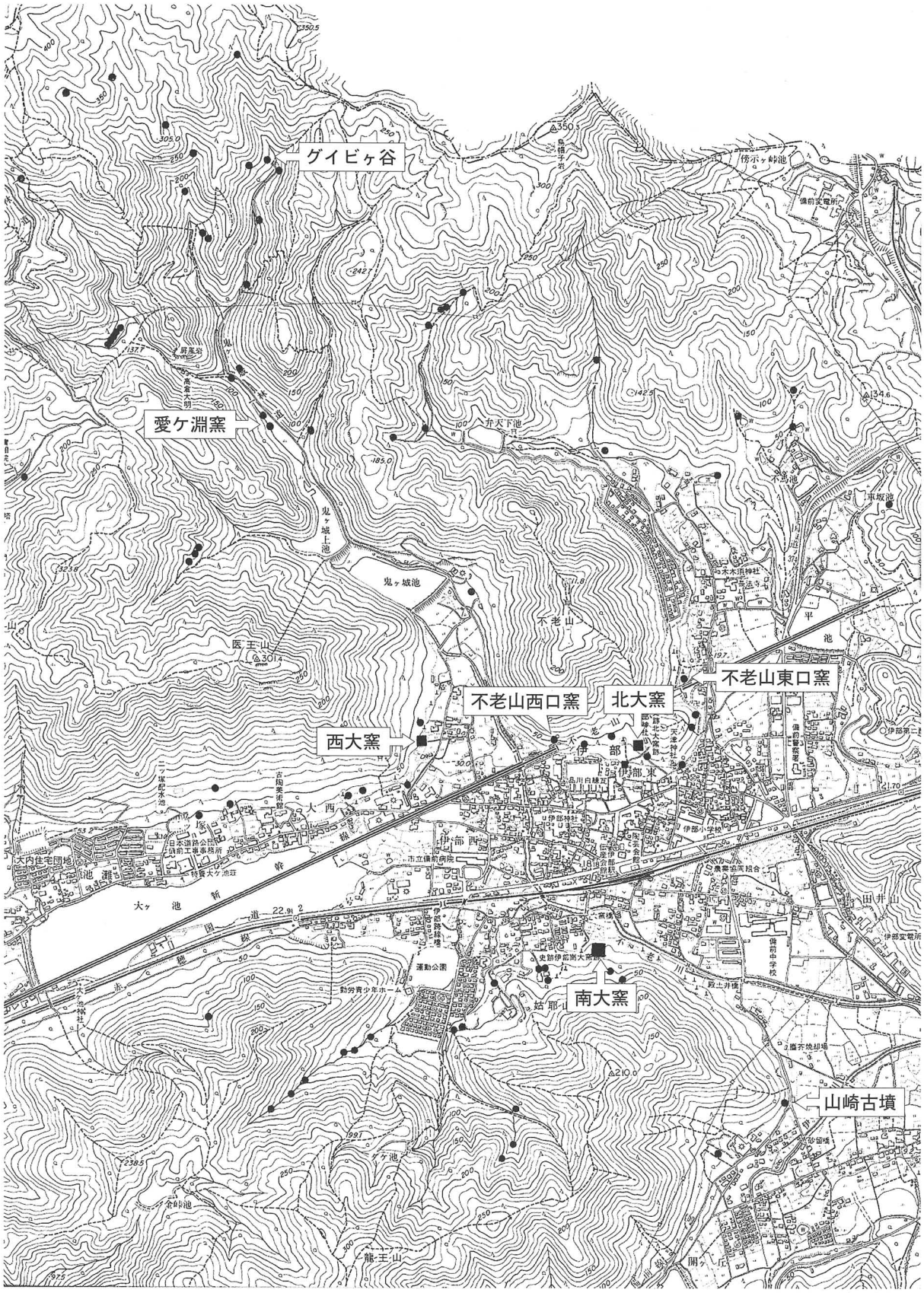
臼井洋輔1992「御庭焼と御用窯⑦備前の藩窯」『茶道雑誌』　河原書店

桂又三郎1952『伊部南大窯址発掘資料』日本陶磁協会

桂又三郎1969『備前閑谷焼とお庭焼』　大雅堂

金森得水・渡會末彰1857『本朝陶器攷証』　安政４

木村平八郎泰武1849（五問五答古伊部紙電路区）　嘉永２
桑田勝三1937「保命酒の徳利（上・下）」『茶わん』73号　74号
河本清・葛原克人1972「不老山古備前窯址」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県文化財保護協会
佐藤陶崖1840『融通講規定控』　天保11
佐藤陶崖1843『陶器忌瓶小釜焼惑問』　天保14
重根弘和2002「山崎古窯跡」『岡山県埋蔵文化財報告』167　岡山県教育委員会
田代健二1988「備前市内採集の遺物について」『古代吉備』第10集
仲野泰裕2000「御用窯と御庭焼き」『茶道学大系　第五巻　茶の美術』　淡交社
乗岡実2002「近世備前焼擂鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡』岡山市教育委員会
備前市教育委員会2003「伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅰ」備前市埋蔵文化財調査報告５
間壁忠彦・間壁葭子1966、1966、1968、1984「備前焼研究ノート（１）～（４）」『倉敷考古館研究集報』１、２、５、18、
間壁忠彦1991「備前焼」『考古学ライブラリー』60　ニューサイエンス社
間壁忠彦・西川宏1971「岡山県備前町合が淵古窯群」『日本考古学協会年報』19
間壁忠彦1982「備前焼の編年と分布」『島根県立博物館調査報告』第３分冊
間壁忠彦2000「備前焼の窯跡」『陶説』569　日本陶磁協会



第１図　主な窯分布図

第1表　調査された備前焼窯跡一覧

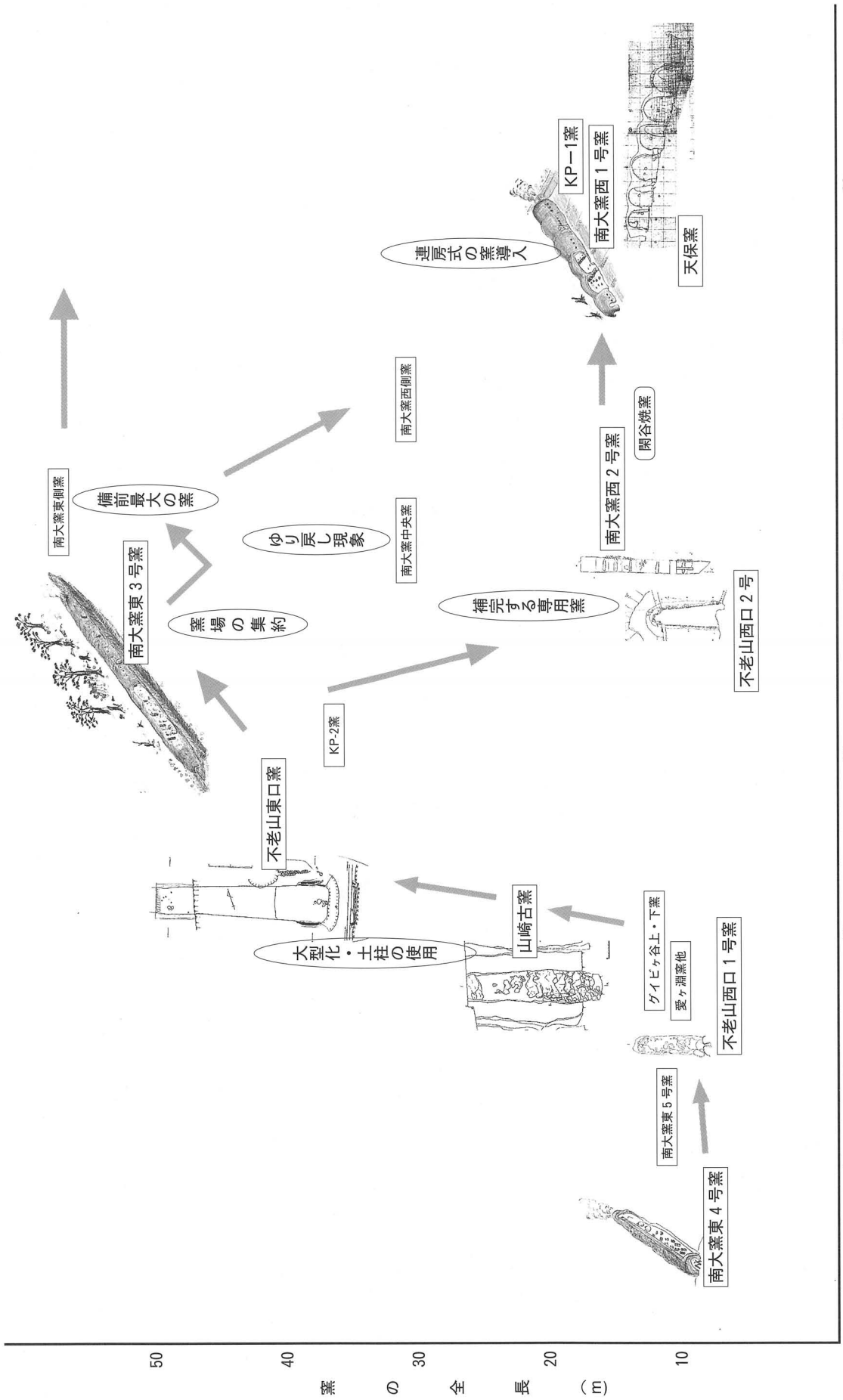
2006年現在

時期	窯名	全長	幅	角度	立地	構造	窯道具	備　　考	参考文献
900	南大窯東6号窯跡	4.5m	0.8～1m	30度	標高67mの谷急斜面	窖窯		伊部地区最古	①
1200	南大窯東4号窯跡	不明	不明	不明	標高38mの緩斜面	不明			②
	片口団地窯跡古	不明	約1m	不明	標高約40mの緩斜面	窖窯			③
	南大窯東5号窯跡	12.3m以下	1.8m	26度	標高55m前後の急斜面	窖窯			②
1300	愛ヶ淵北窯跡	10.1m	1.3～1.4m	22～25度	標高80m弱の谷部・山裾	●			⑤
	愛ヶ淵南2号窯跡	8m以上	1.5～1.6m	17度	標高80m弱の谷部・山裾	●			⑤
	不老山西口1号窯跡	推定約9m	1.6～1.7m	30度	標高約40mの斜面	窖窯			⑥
	グイビヶ谷上窯跡	約12m	約1.4m	約30度	標高190mの谷斜面	窖窯			⑦
	グイビヶ谷下窯跡	約12m	約1.4m	約30度	標高190mの谷斜面	窖窯			⑦
1350	愛ヶ淵南1号窯跡	11.5m	1.3～1.6m	約31度	標高80m弱の谷部・山裾	窖窯			⑤
1400	山崎古窯跡	推定20m以上	2.1～2.5m	20～35度	標高18m前後の丘陵先端部	窖窯			⑧
	不老山東口窯跡	推定40m以上	3.2～3.4m	15～20度	標高40m前後の丘陵端部	長大な窖窯			⑥
1500	ＫＰ2窯跡	推定30m以上	2.6m	18度	標高40m前後の山裾部	半地下式単房窯			①
	片口団地窯跡新	不明	不明	不明	標高40mの緩斜面	不明			④
1575	南大窯東3号窯跡	46m以上	3.3～3.9m	18度	標高40m前後の谷部	長大な大窯			②
	不老山西口2号窯跡	推定10m	2.7m	15度	標高40mの斜面	地上式単房窯			⑥
1600	南大窯西2号窯跡	14.2m以上	約1.5m	15度	標高30m前後の斜面	地上式単房窯	匣鉢・焼台		②
	南大窯跡中央窯跡	約35m	2.0～2.3m	15.5度	標高30m前後の斜面・山裾	地上式単房窯	匣鉢・焼台		⑦
	南大窯跡東側窯跡	53.8m	3～5.2m	17度	標高30m前後の斜面・山裾	地上式単房窯	匣鉢・陶板	備前最大の窯	⑦
	南大窯跡西側窯跡	35.3m	2.3～2.6m	17度	標高30m前後の斜面・山裾	半地下式単房窯	匣鉢・陶板		⑦
1830	南大窯西1号窯跡	16.7m	3.7～4.5m	17度	標高25m前後の斜面・山裾	斜狭間連房式窯	匣鉢・陶板		②
	KP1窯跡	18.6m	約3.6～4.5m	9～16度	標高30m前後の斜面・山裾	斜狭間連房式窯	匣鉢・陶板		①

【参考文献・第2図引用文献】
①備前市教育委員会2006「伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅱ」備前市埋蔵文化財調査報告7（本書）
②備前市教育委員会2003「伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅰ」備前市埋蔵文化財調査報告5
③石井啓　重根弘和2004「備前焼」『第23回研究会「中世須恵器と山茶椀」資料集』日本中世土器研究会
④備前市教育委員会1998「備前焼紀年銘土型報告書」
⑤間壁忠彦　西川宏1971「岡山県備前町合ガ淵古窯群」日本考古学協会年報19
⑥河本清　葛原克人1972「不老山古備前窯址」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県文化財保護協会
⑦鎌木義昌1980「グイビガ谷窯跡群」『岡山県大百科事典』山陽新聞社
⑧重根弘和2002「山崎古窯跡」『岡山県埋蔵文化財報告』167　岡山県教育委員会
⑦桂又三郎1952「伊部南大窯址発掘資料」日本陶磁協会

第２表　伊部南大窯跡周辺窯跡群一覧

窯名	西1号窯跡	西２号窯跡	東３号窯跡	東４号窯跡	東５号窯跡	東６号窯跡	ＫＰ１窯跡	ＫＰ２窯跡	南大窯東側窯跡	南大窯中央窯跡	南大窯西側窯跡
全長	16.7m	14.2m以上	46m以上	不明	12.3m以下	4.5m	18.6m	30m以上	53.8m	役35m	35.3m
全幅	3.7～4.5m	約1.5m	3.3～3.9m	不明	1.8m	約0.8～１m	約3.6～4.5m	2.6m	３～5.2m	２～2.3m	2.3～2.6m
傾斜角	17度	15度	18度	不明	26度	30度	9～16度	18度	17度	15.5度	17度
構造	■無段の連房式の窯 ■初戸(燃焼室)と煙道(煙出)が燃焼室の前後につく ■素穴と呼ばれる火格子 ■斜狭間	■半地上式単房窯 ■窯壁の一部が石組 ■長軸に直交する形で規則的な間隔で溝	■主軸方向に規則的に並んだ柱 ■窯壁は角礫を積上げ	■不明	■窖窯	■窖窯	■連房式の窯 ■初戸と煙道が焼成室の前後につく ■火格子と土管を使った簡易な煙出 ■床面一度張替え・角柱に交換	■半地下式単房窯 ■窯壁がよく焼き締まる	■規則的に並んだ土柱 ■焚口三本の巨大柱 ■焚口3回以上造り替え ■窯の中ほどに別の焚口	■土管を芯にした土柱 ■壁を1回貼り替え ■煙出し部で改造、複数回焼成か ■16世紀代の古い窯の上に築窯	■地山を掘り込んで築窯 ■操業が短期間
房数	5（＋2）	1	1	不明	1	1	6(＋2)	不　明	単　房	単　房	単　房
出入口	東西交互に全部で7(初戸と煙道を含む)	不明	不明		不明	前面	東西交互で８ヵ所（２箇所確認）	不明	確認できず	確認できず	確認できず
外部施設	物原・溝	不明	窯を取囲む溝	物原	物原	灰原	物原・溝	物原・溝	東側に溝・物原	物原	
遺物	人形徳利・角徳利・甕・花生・皿・鉢・細工物	小形擂鉢・擂鉢・大平鉢・大甕・建水・徳利・蓋・窯道具	擂鉢・平鉢・大甕・壷・徳利・茶碗・茶入・建水・灯明皿	椀・鉢・甕・瓦	椀・甕・壷・鉢	杯・鉢・土錘	角徳利・甕・擂鉢・鉢・灯明皿・土管・窯道具	擂鉢・大甕・壷	灯明皿・徳利・擂鉢・甕など	擂鉢・甕・徳利・灯明皿・茶入・建水・平鉢	徳利・擂鉢・獅子巻き毛
特徴	構造的には「大窯」に仕切り	■窯が事故で廃棄 ■遺物に茶道具が多い ■備前では特異な形態の窯構造	■長大な大窯 ■物原が極小規模	■物原のみで窯体未確認	■前庭部に黒色土とともに多量な遺物	■急傾斜をもつ ■伊部の谷で最古の窯	斜狭間	■擂鉢を9割以上生産した窯 ■2箇所のトレンチのみで確認	■地上に築窯 ■窯を短く改造 ■備前焼最大の窯	■土管が芯の柱、備前で初 ■大量の桃山様式の遺物	土管窯？
時期	天保11(1840)～明治初年代(1868)	17世紀の第1四半期を中心とする時期	16世紀の第4四半期で文禄年間まではくだらない	12世紀末	13世紀中葉	9世紀～10世紀初	天保11(1840)～明治18・19(1886)年ごろ	16世紀第１四半期	17世紀前半～	17世紀初～	18世紀初～
調査年月	平成11(1999)年４月	平成11(1999)年４月	平成12(2000)年４月	平成12(2000)年４月	平成12(2000)年４月	平成13(2001)年10月／平成14(2002)年４月	平成13(2001)10月	平成13(2001)11月	平成17(2005)10月	平成17(2005)10月	平成17(2005)10月


南大窯東側窯
備前最大の窯
南大窯東３号窯
窯場の集約
ゆり戻し現象
南大窯西側窯
南大窯中央窯
KP-2窯
大型化・土柱の使用
不老山東口窯
山崎古窯
補完する専用窯
連房式の窯導入
KP－1窯
南大窯西１号窯
天保窯
南大窯西２号窯
閑谷焼窯
不老山西口２号
ゲイビヶ谷上・下窯
愛ヶ淵窯他
不老山西口１号窯
南大窯東５号窯
南大窯東４号窯
12
13
14
15
16
17
18
19
20
年　代（世　紀）
50
40
30
20
10
窯の全長（m）

第２図　窯の規模と年代

写真図版

1．東６号窯跡調査着手時（東より）

2．トレンチ601灰原（一部）

3．トレンチ603（北西より）

4．東６号窯跡作業風景（北西より）

5．トレンチ602断面一部（北より）

6．トレンチ602（東より）

図版２

１．トレンチ605・東６号窯跡煙出（西より）

２．トレンチ605・東６号窯跡煙出（南西より）

３．トレンチ606断面（北東より）

４．トレンチ601灰原（南西より）

５．トレンチ605煙出（西より）

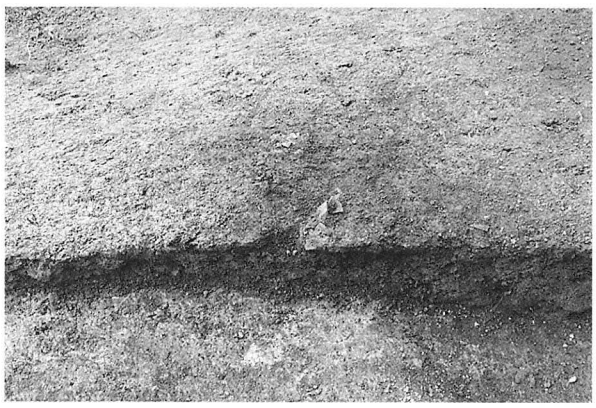
６．トレンチ601灰原（南より）

１．トレンチ604（北西より）

２．トレンチ601サブトレンチ（北より）

３．平成14年度調査開始（北西より）

４．トレンチ602東区（北西より）

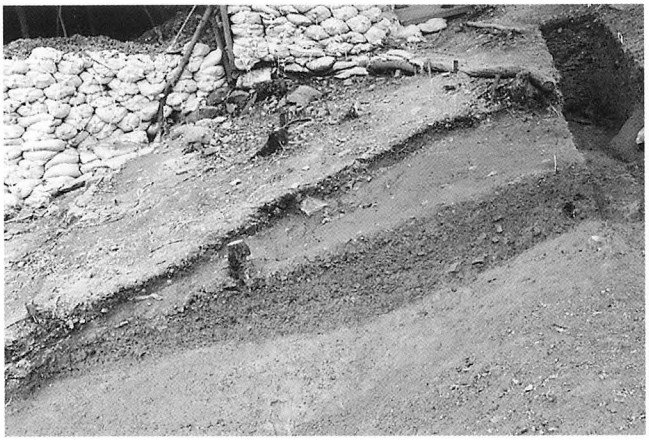


５．トレンチ601南区南端土壌断面（南より）

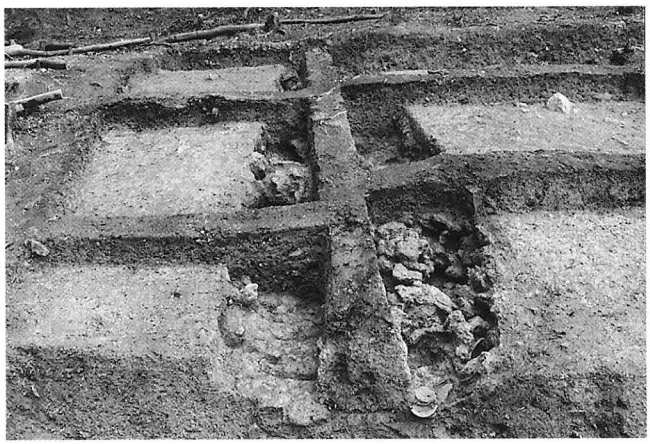
６．作業風景（北より）

図版４

１．トレンチ602南区窯検出時
（北上より）



２．トレンチ601南区窯延長断面（西より）

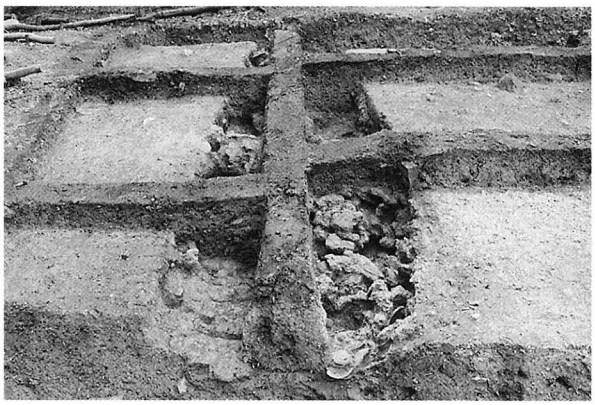


３．トレンチ602南区窯調査中（北より）

４．トレンチ602南区窯調査中
（北上より）

５．トレンチ602南区窯中央断面（西より）

６．トレンチ602南区窯中央断面（西より）



１．トレンチ602南区（北より）

２．トレンチ601南区西壁断面（東より）

３．トレンチ601灰原検出時部分

４．トレンチ601灰原最終検出時
（北上より）

５．トレンチ601灰原検出時部分

６．トレンチ601灰原（南上より）

図版６

１．トレンチ601南区窯中軸延長断面（西より）

２．トレンチ602南区窯長軸断面（西より）

３．トレンチ602南区窯横軸断面（北より）

４．トレンチ602南区煙出部断面（西より）

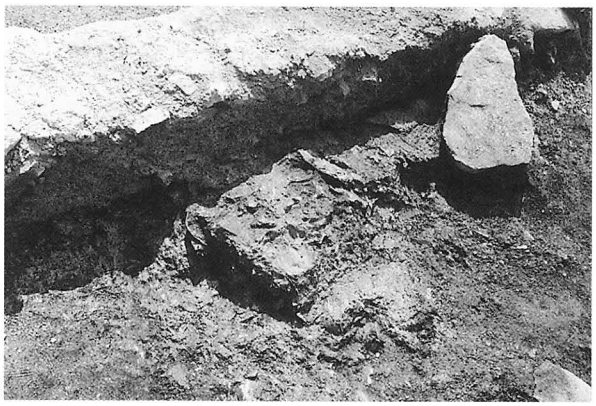
５．トレンチ602南区焚口部分（北上より）

６．トレンチ602南区焚口部分
（南上より）

１．トレンチ602南区窯全景
（北上より）

２．トレンチ602南区煙出部（北上より）

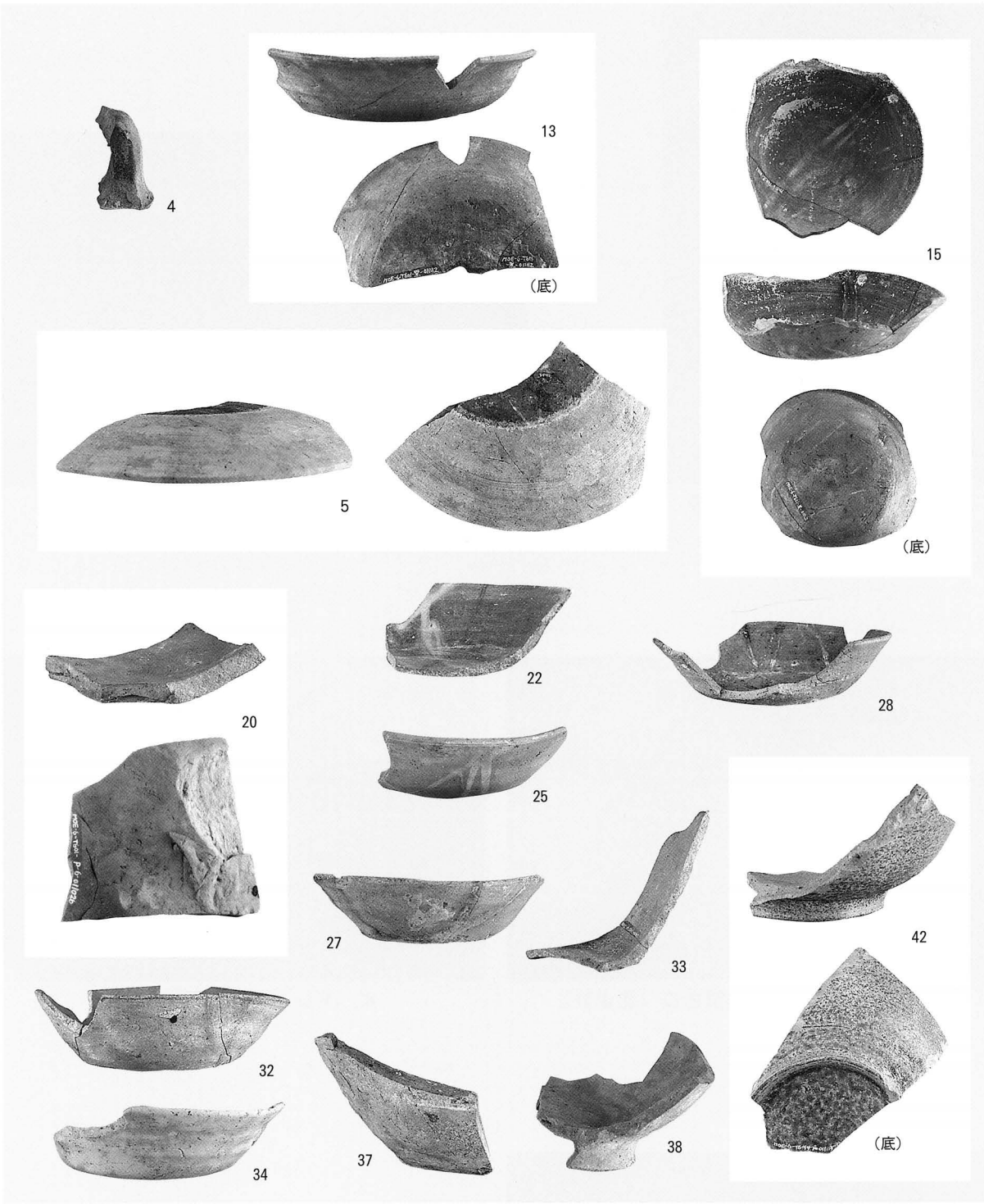
３．トレンチ602南区焚き口（北より）



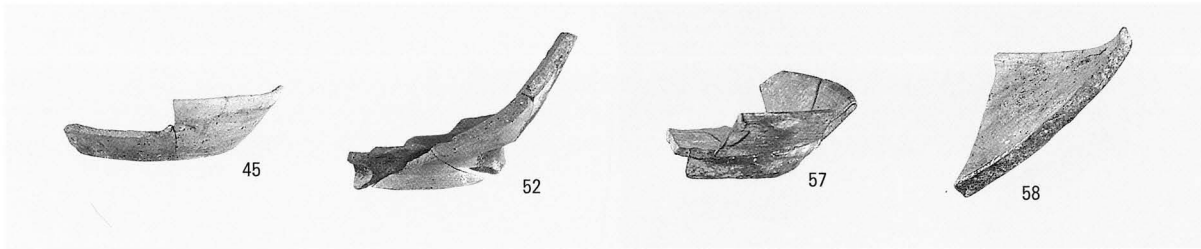
４．トレンチ601灰原粘土塊

５．東６号窯跡埋め戻し

図版８

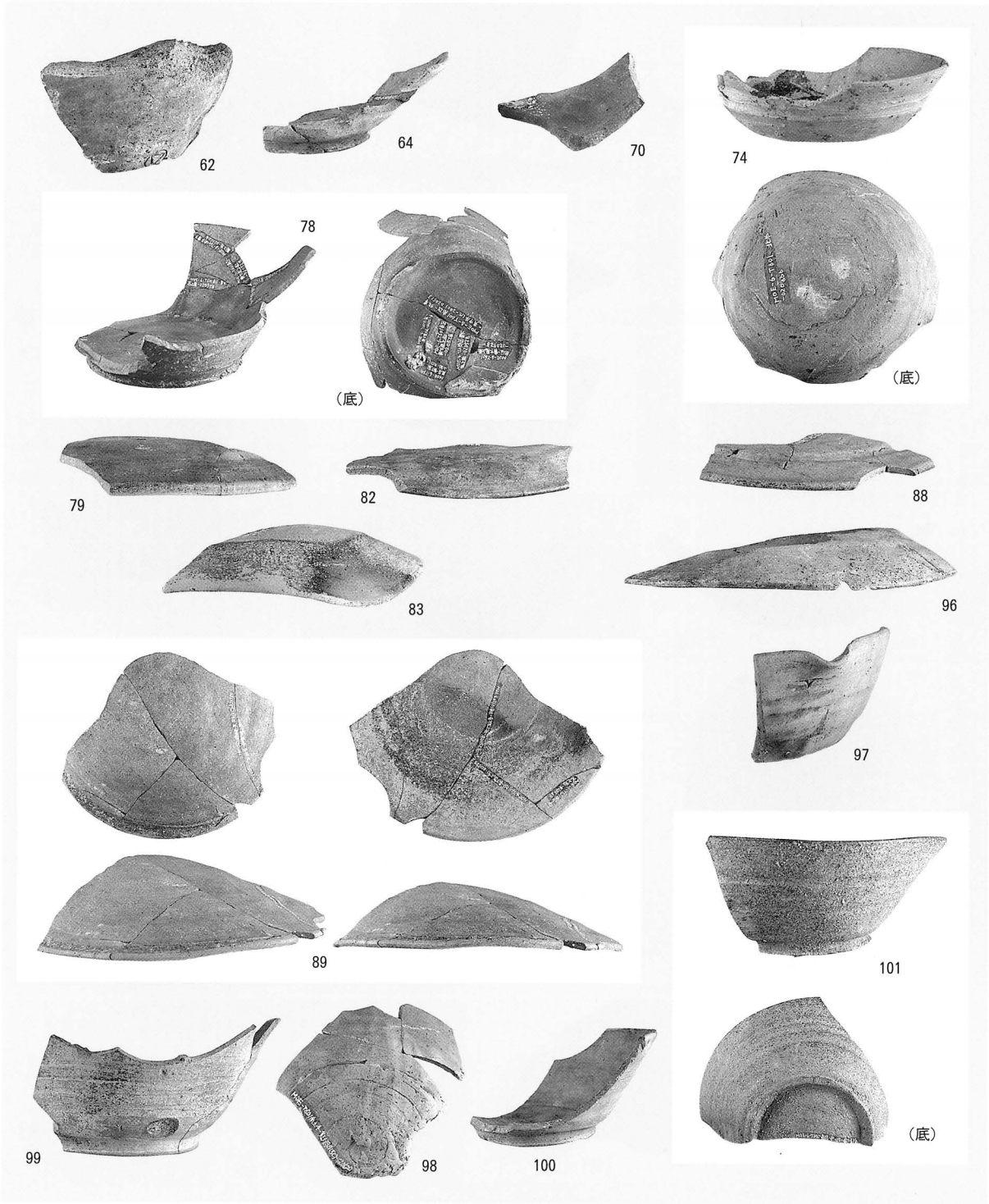


トレンチ601出土遺物



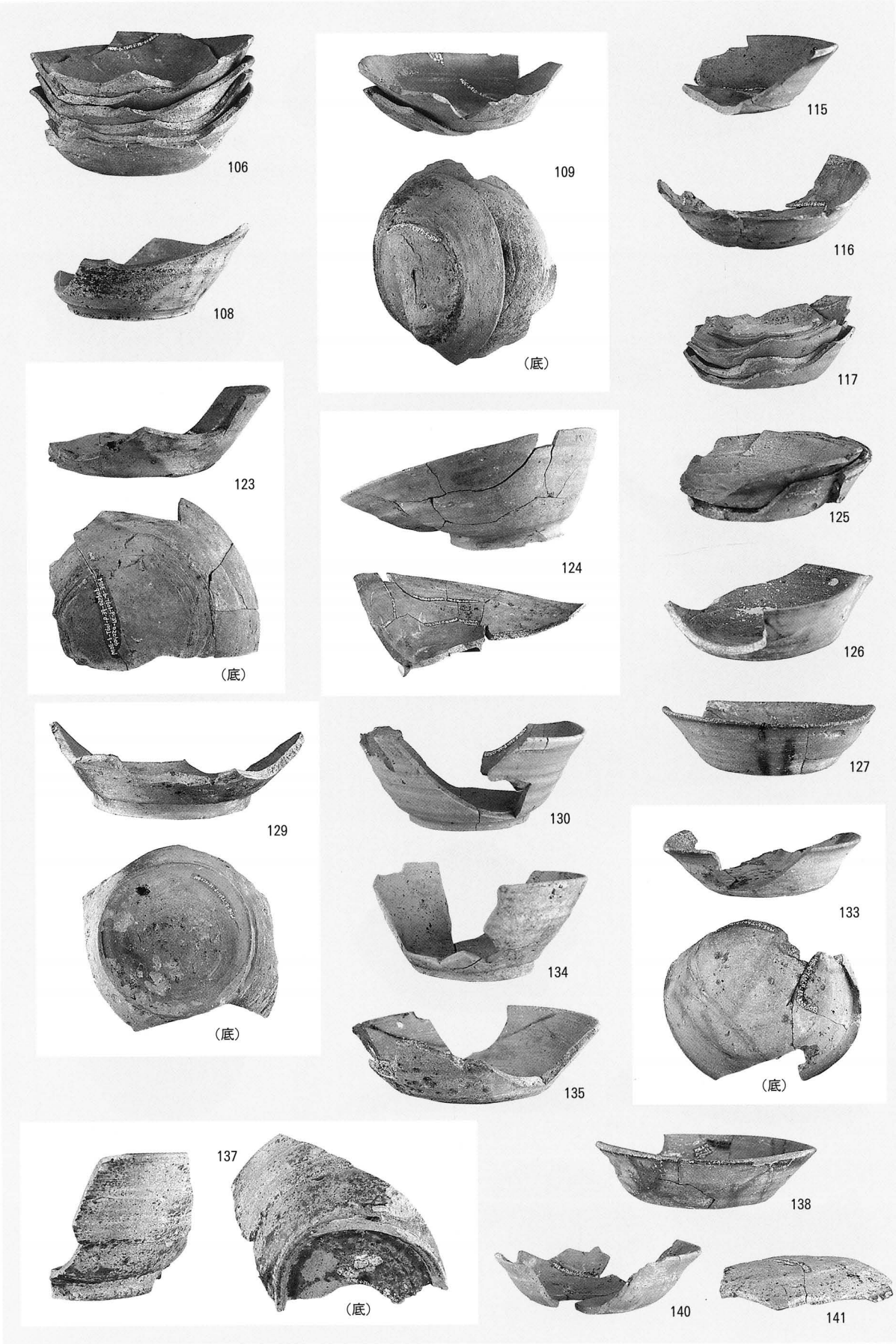
トレンチ602出土遺物

トレンチ605出土遺物

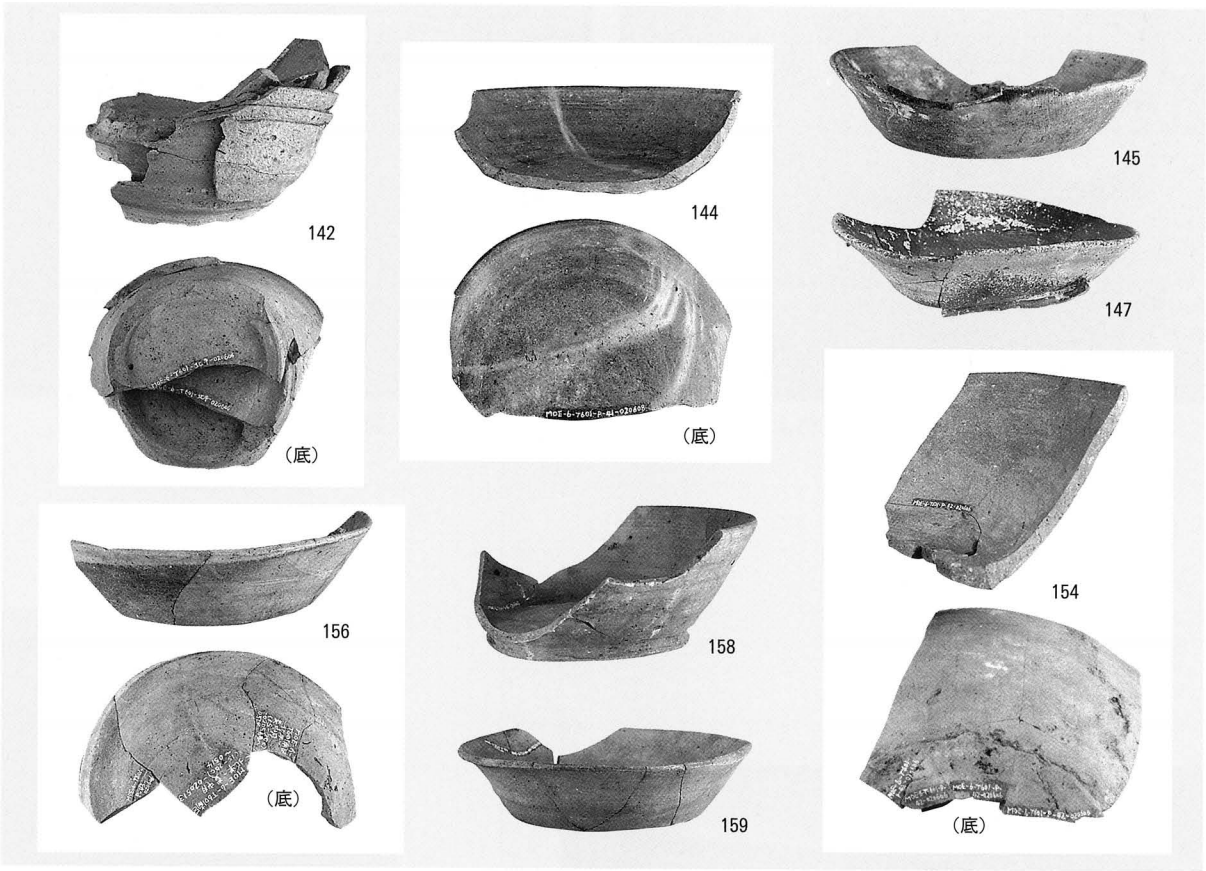


トレンチ601出土遺物（１）

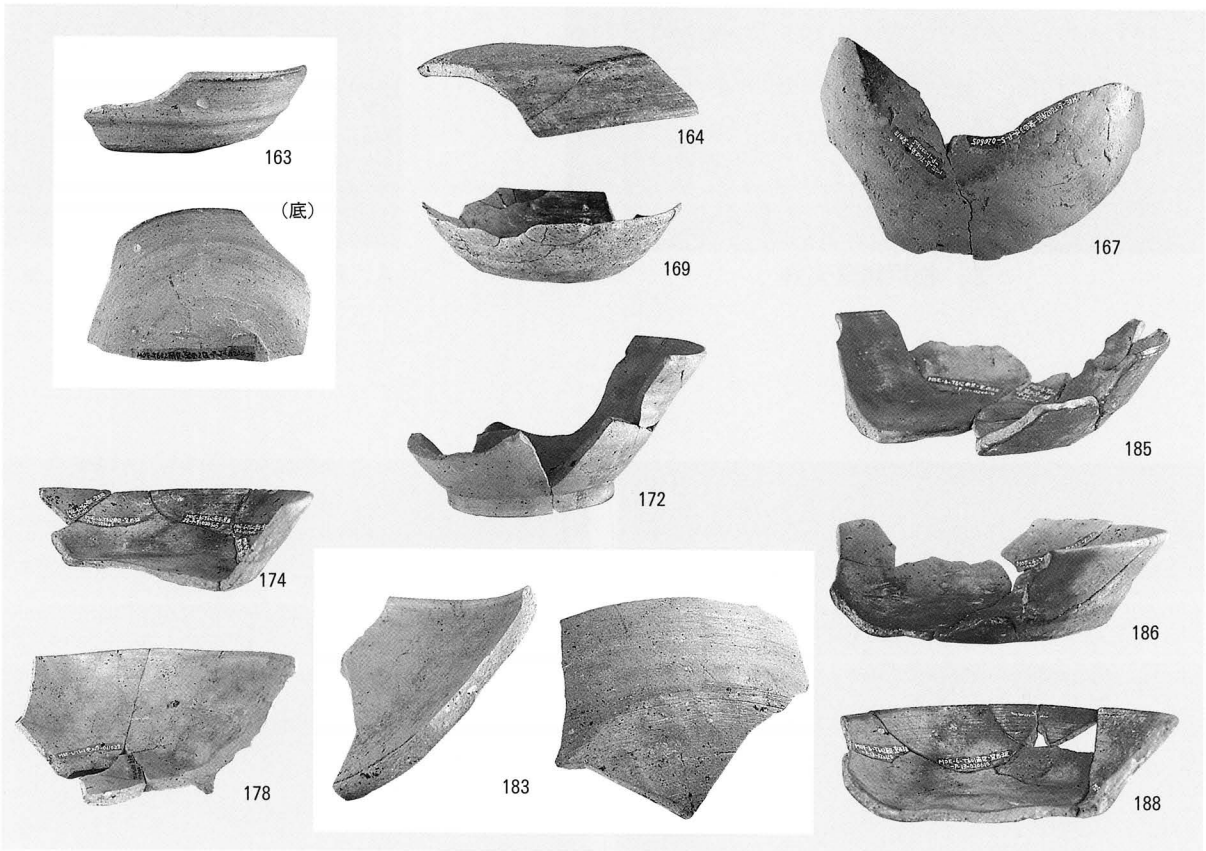
図版10



トレンチ601出土遺物（２）



トレンチ601出土遺物（３）

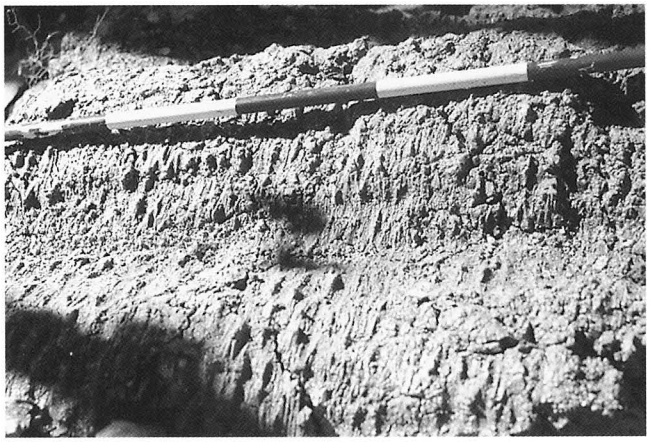


トレンチ602南区出土遺物

図版12

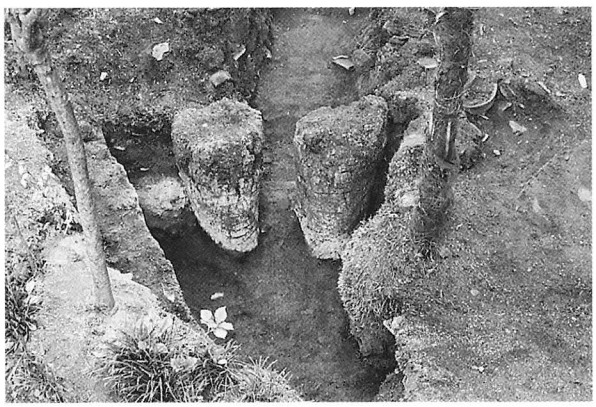
1．KP-1地点調査前（北より）

2．調査風景（北より）



3．初戸崩落天井

4．KP-1地点窯跡全景（北より）



5．初戸土柱（北上より）

6．初戸土柱（東より）

1．２房の板状窯道具（北より）

2．２～３房仕切（北より）

3．３～４房仕切（南西より）

4．４房入り口（西より）

5．５～６房仕切り（西上より）

6．６～煙出仕切り（北より）

図版14

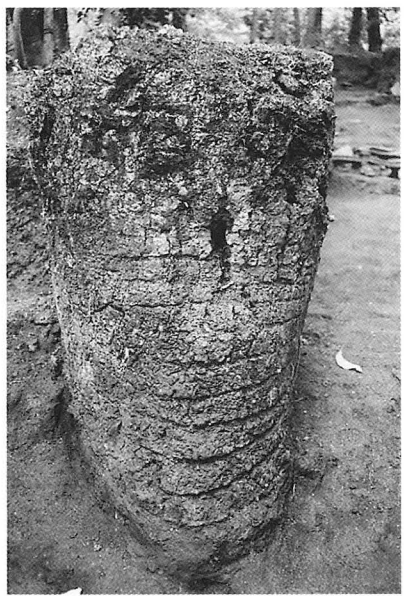
1．６～煙出（東より）

2．煙出から焚口方向をみる（南より）

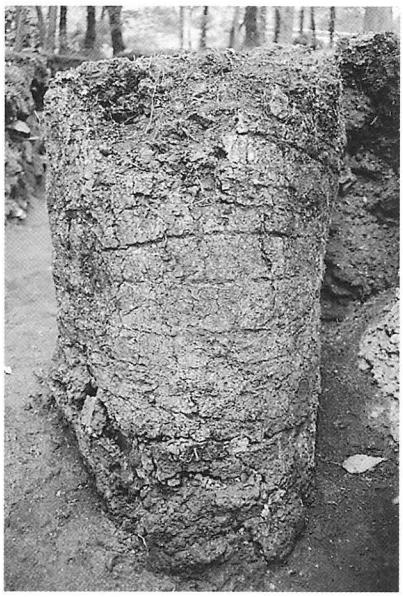
3．初戸（北より）

4．初戸入口（南より）

5．初戸土柱（北より）



6．初戸東側土柱（北より）



1．初戸中央土柱（北より）

2．初戸床面（北より）

3．初戸（南西より）

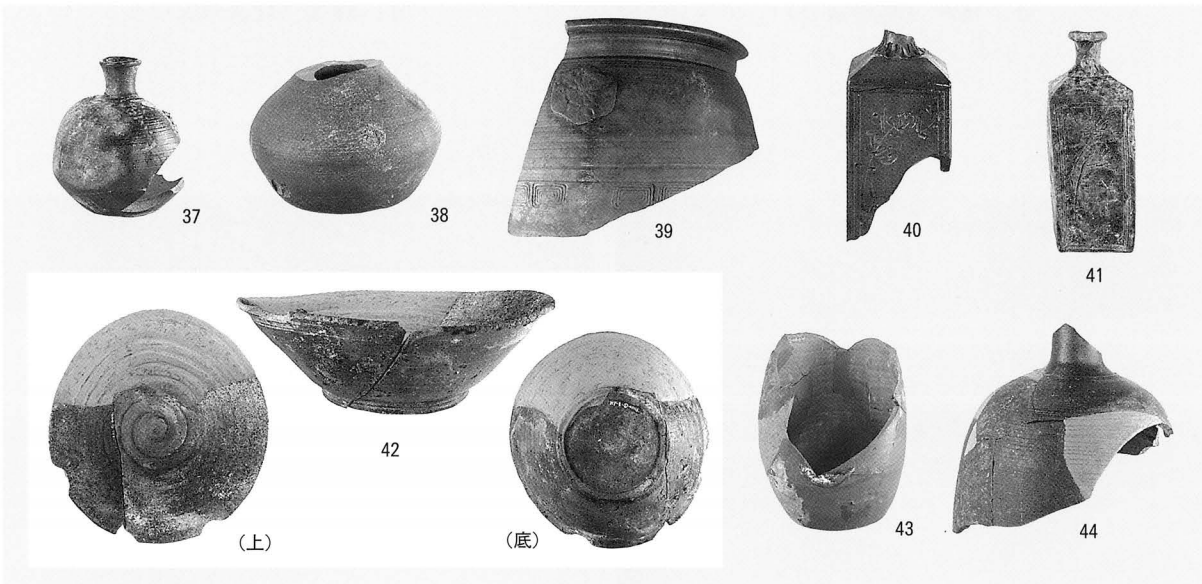
4．煙出（北より）

5．煙出南溝断面（東より）

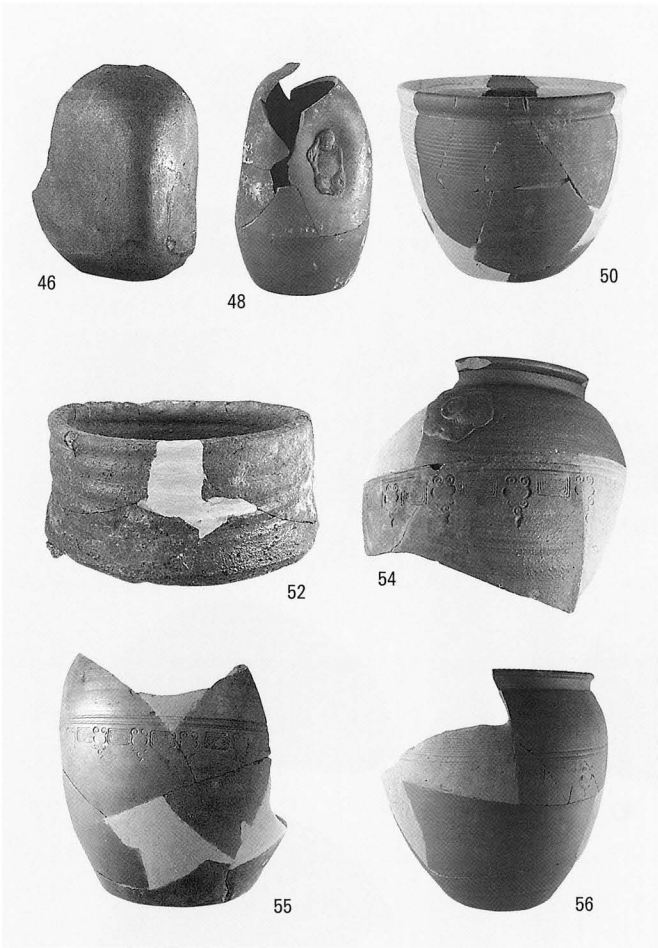
6．煙出（北西より）

図版16

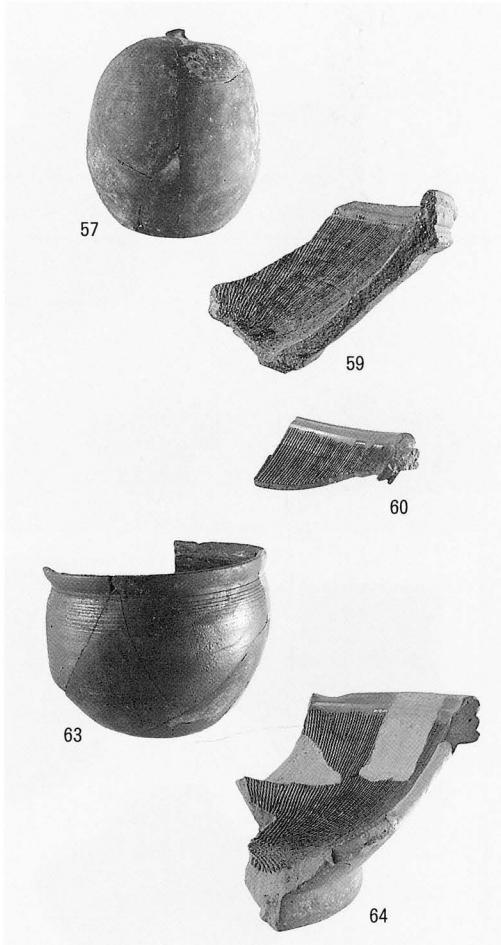
初戸出土遺物



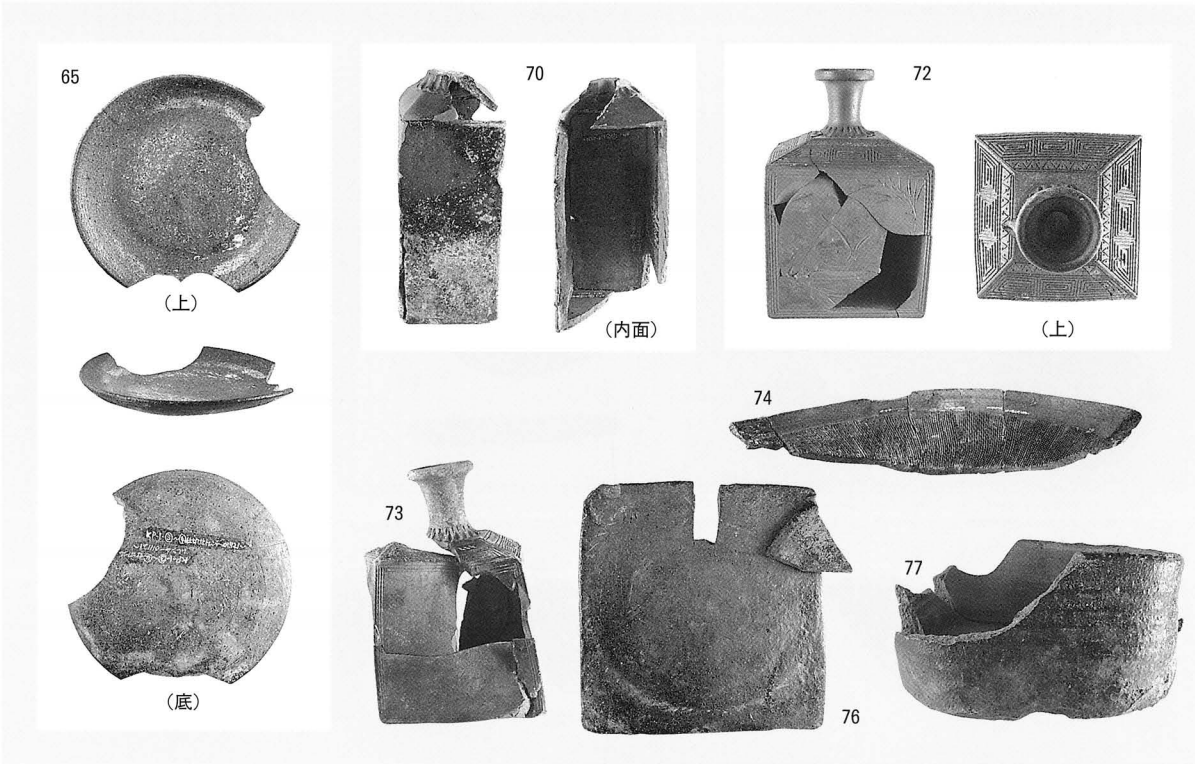
1房出土遺物



2房出土遺物

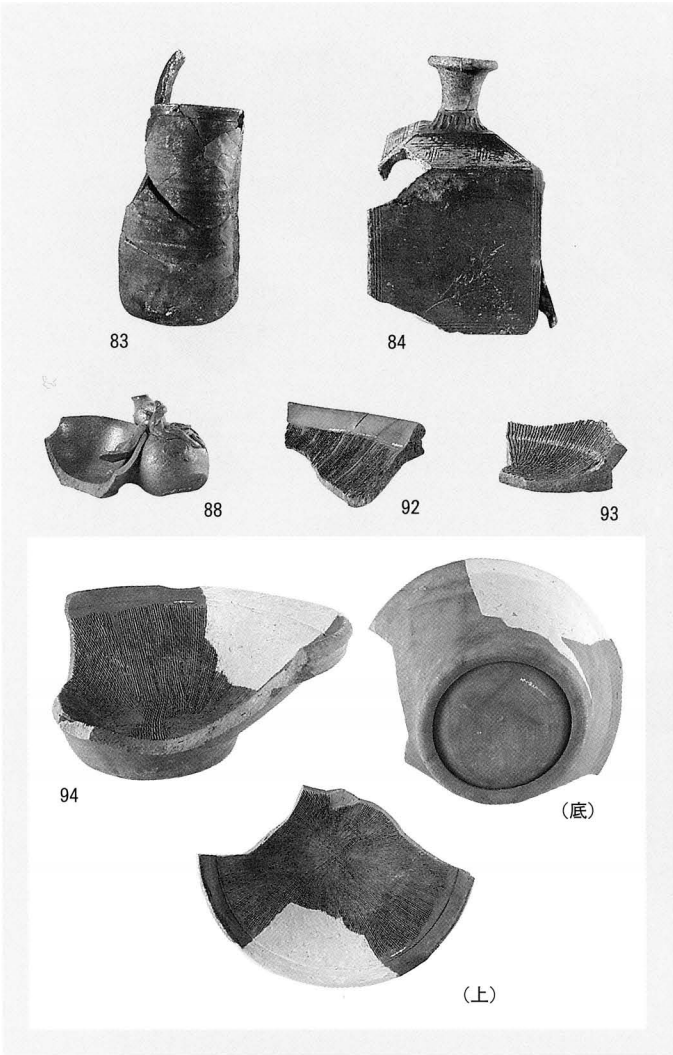


3房出土遺物



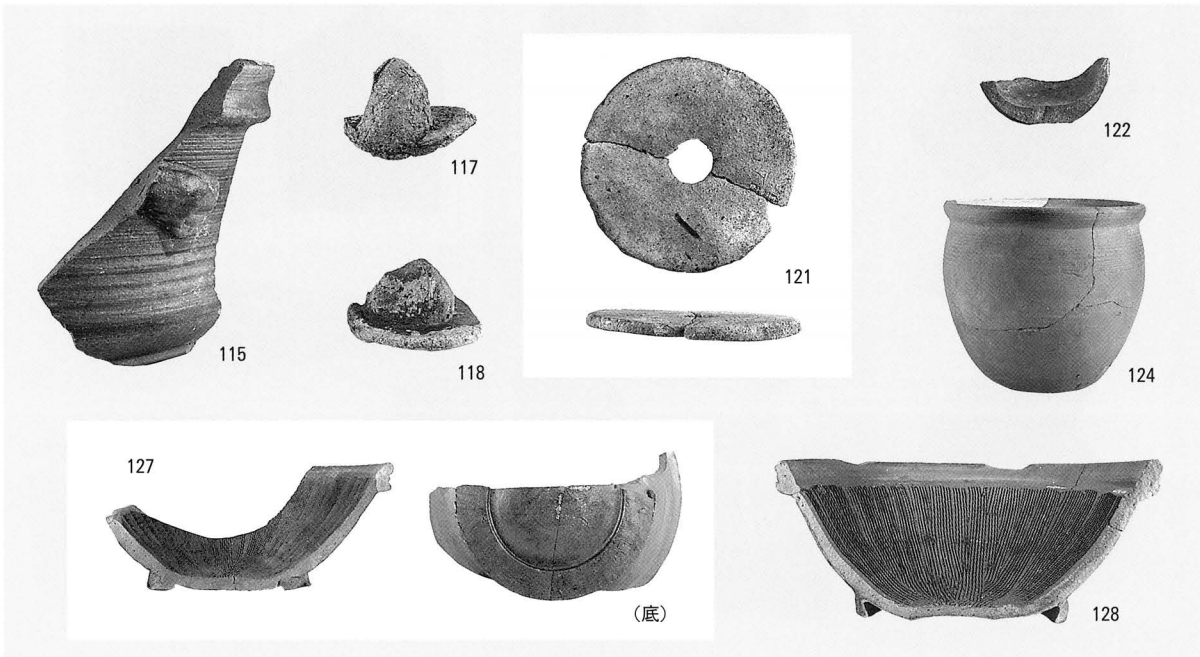
3～4房出土遺物

図版18

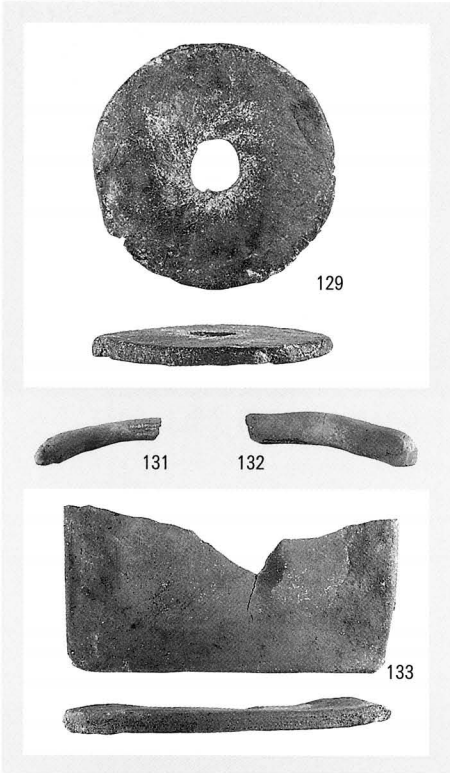


4房出土遺物

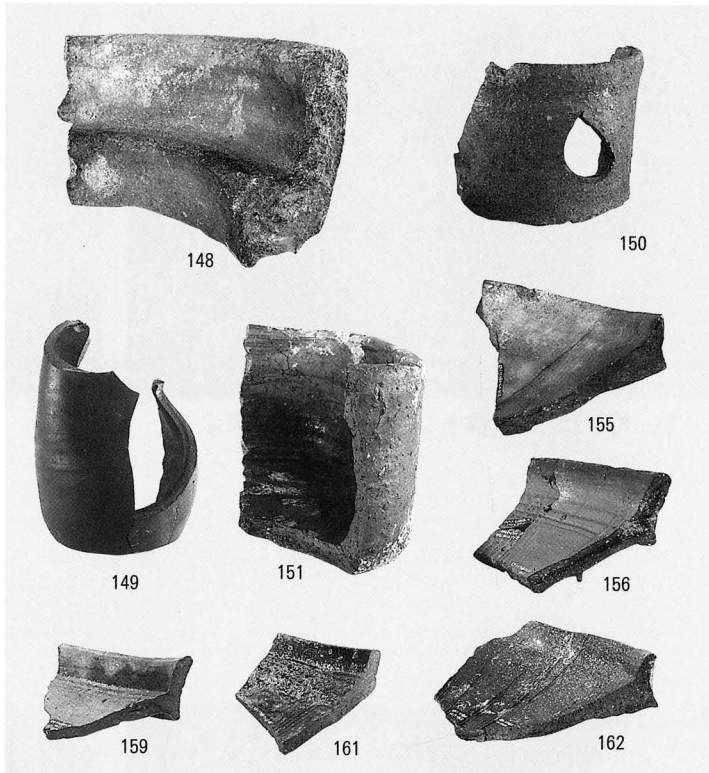
5房出土遺物



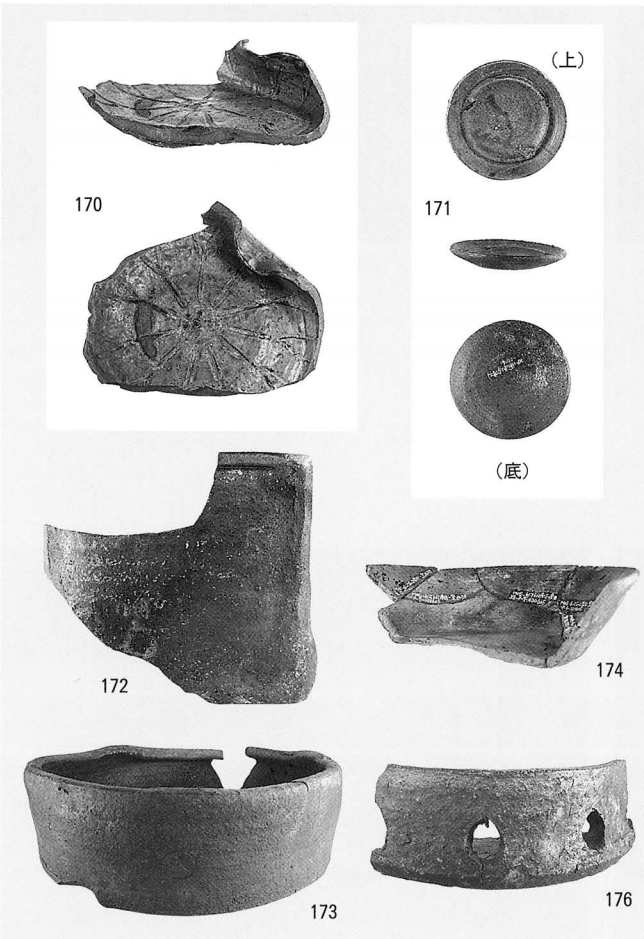
6房出土遺物



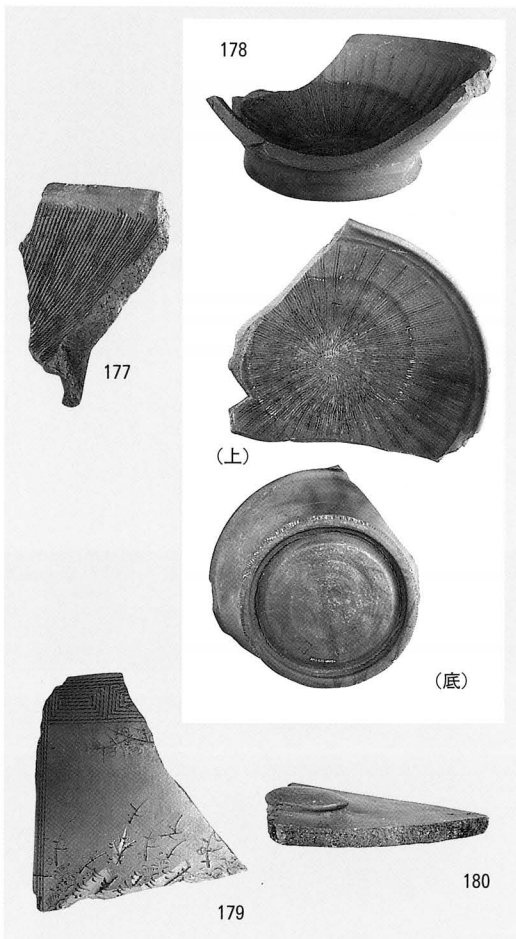
6房東側トレンチ出土遺物



北トレンチ出土遺物



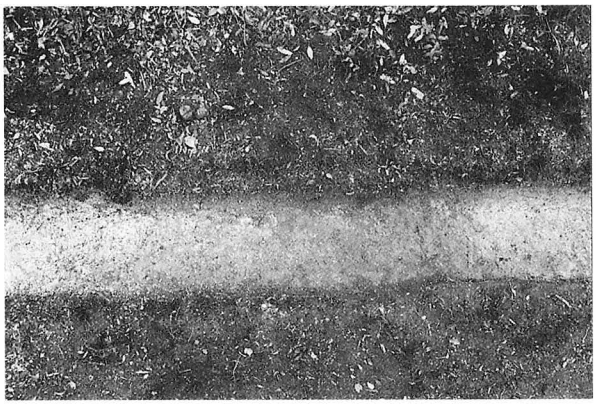
初戸上層出土遺物



表採資料出土遺物

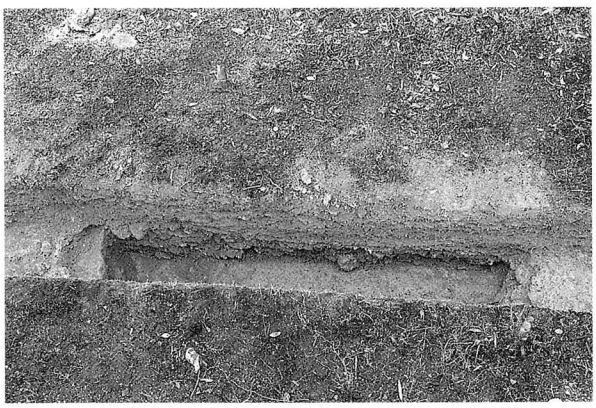
図版20

1．KP-2地点窯跡トレンチ１・２（東より）



2．トレンチ１窯床面（北上より）

3．トレンチ１・２西半（東より）



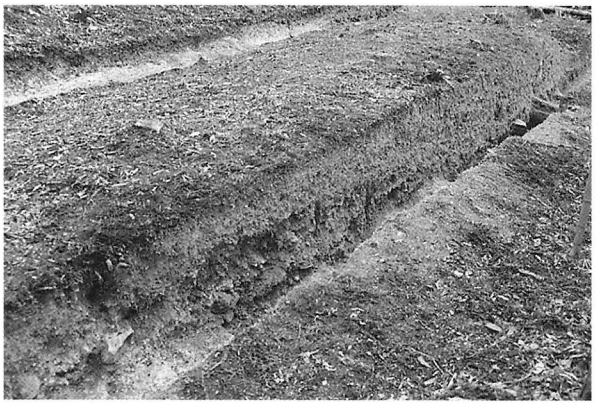
4．トレンチ２窯検出（南上より）

5．トレンチ１・２東半（西より）

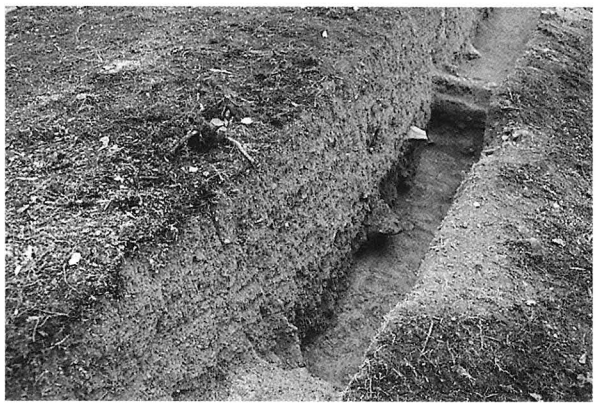
6．トレンチ１断面（北東より）

1．トレンチ１物原断面（北東より）

2．トレンチ１物原断面（北西より）



3．トレンチ２断面（北東より）



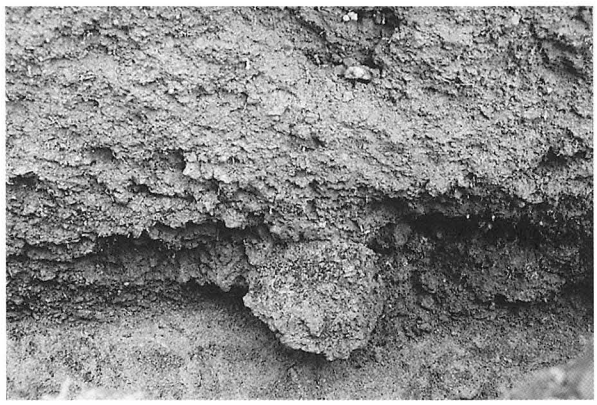
4．トレンチ２窯断面（北東より）

5．トレンチ２断面（北西より）

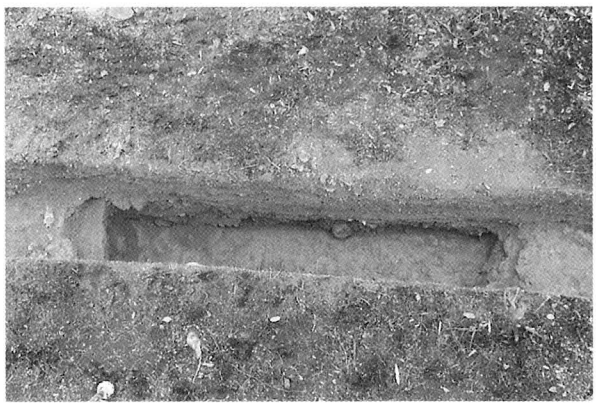
6．トレンチ２東側窯壁（西より）

図版22

1．トレンチ２西側窯壁（東より）

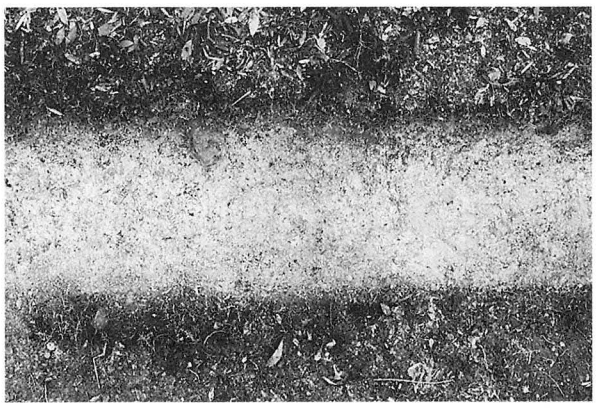


2．トレンチ２窯中央部断面（北より）

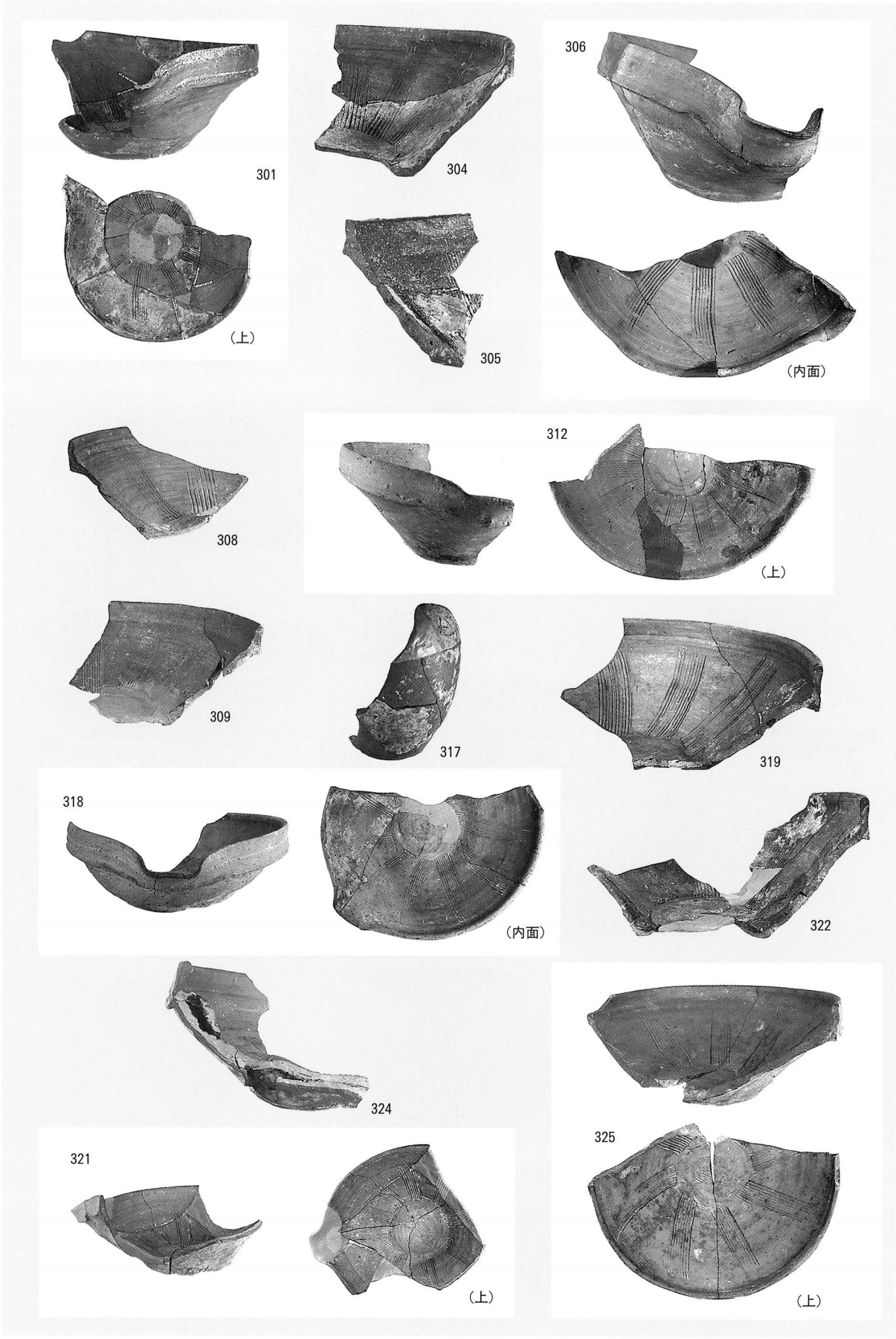


3．トレンチ２窯窯（北上より）

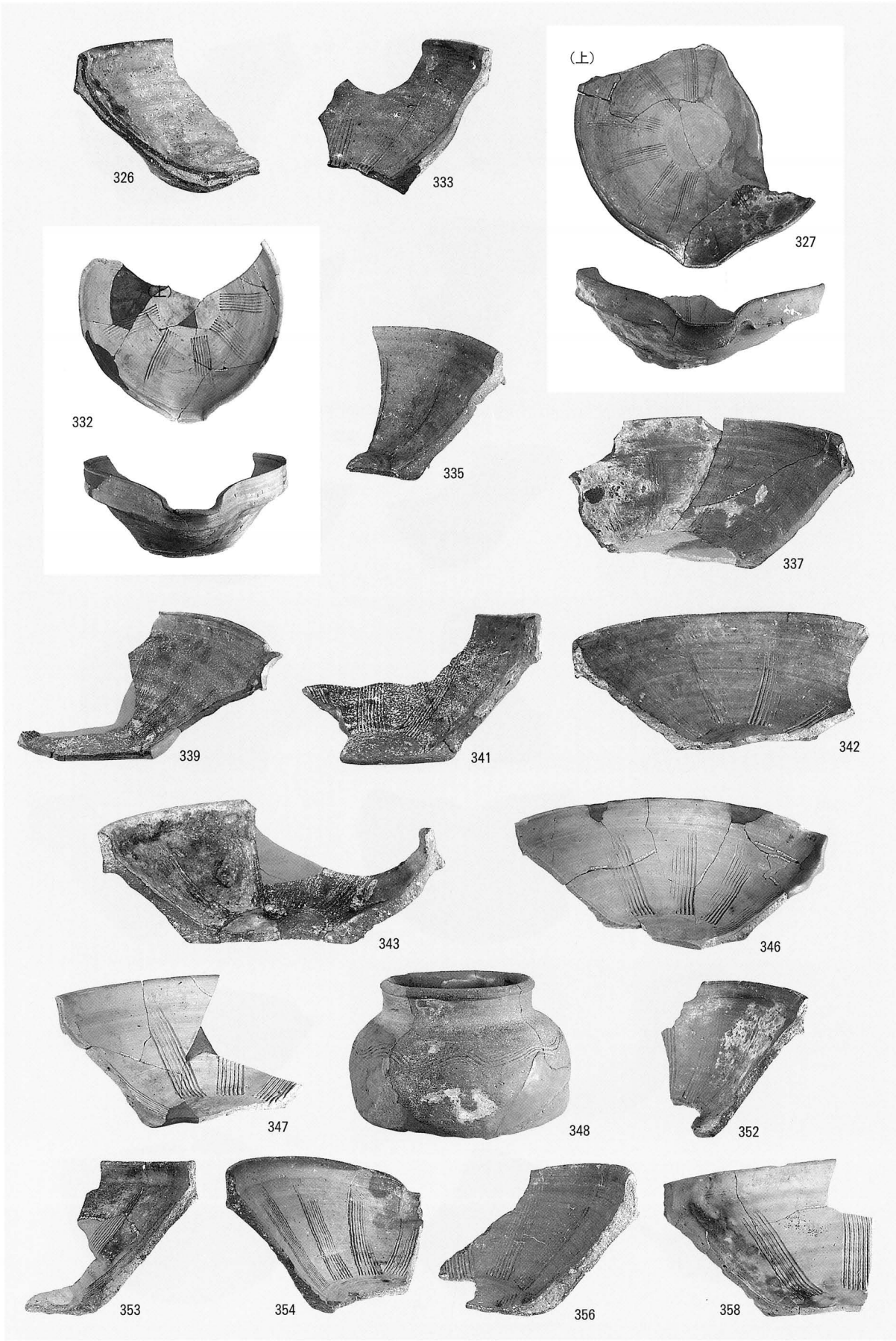
4．トレンチ１物原サンプル断面



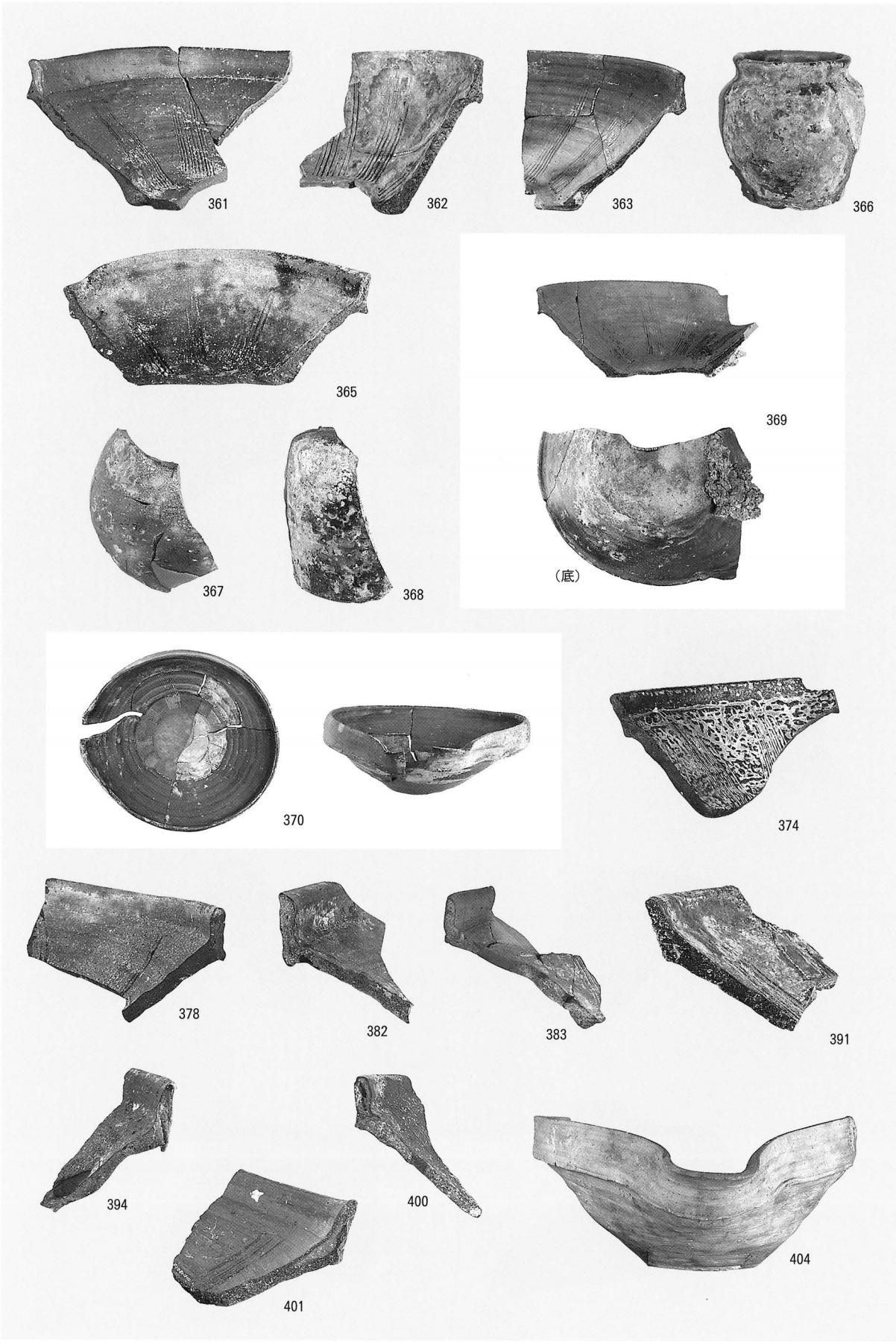
5．トレンチ１溝？（北より）


301
（上）
304
305
306
（内面）
308
312
（上）
309
317
319
318
（内面）
322
324
321
（上）
325
（上）

トレンチ１出土遺物（１）

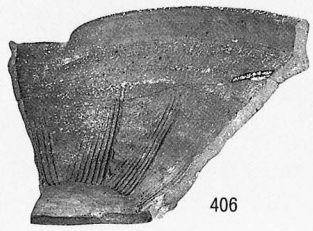

326
333
(上)
327
(上)
332
335
337
339
341
342
343
346
347
348
352
353
354
356
358

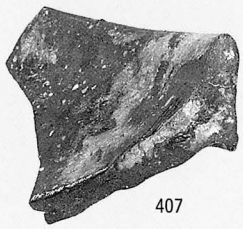
トレンチ１出土遺物（２）


361
362
363
366
365
369
367
368
(底)
370
374
378
382
383
391
394
400
404
401

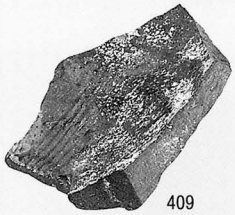
トレンチ２出土遺物

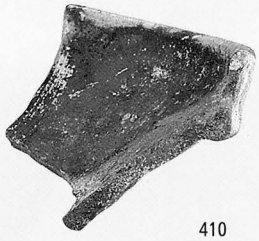
図版26

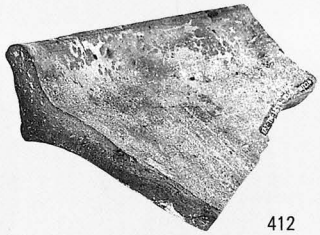

406


407

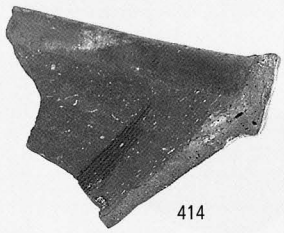
408


409

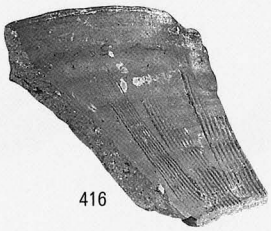

410


412

413


414

415


416

417

418

419

物原等出土遺物

あとがき

本書は、備前市教育委員会が「伊部南大窯跡」周辺窯跡群の調査成果をまとめたもので、「伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅰ」に続いて２冊目の報告書になります。ここに刊行できますのは、文化庁、史跡伊部南大窯跡整備委員会、岡山県教育委員会、地元関係者の方々のご協力・ご指導のおかげと感謝しております。

さて、岡山県において行政発掘が開始されたのは、昭和42年から43年にかけて山陽新幹線の建設にともなって実施された「不老山東口窯跡」「不老山西口窯跡」が嚆矢と聞いております。その調査にあたられたのが、河本清先生、葛原克人先生でありました。膨大な量の備前焼片と毒蛾に悩まされたと聞いております。

時を経ること30有余年。国指定史跡「伊部南大窯跡」の周辺において公園の開発計画が持ち上がったのを契機に、平成14年「史跡伊部南大窯跡整備委員会」が設置され、委員長に河本清先生が選出されました。委員会では、整備の手法や整備スケジュールなどを検討し、その成果を「史跡伊部南大窯跡整備基本構想」としてまとめました。

そのような中、設置当初から委員として強力なリーダーシップを発揮し、指導いただいておりました葛原克人先生が、平成17年12月14日に急逝されました。先生のご逝去は伊部南大窯跡整備事業にとりまして大きな痛手であります。

先生はご多忙にもかかわらず整備委員会に出席する時間をたびたびつくっていただきました。委員会では、懇切に指導助言をいただき、また重要な事案については適切なご助言もいただきました。先生が出席された最後の整備委員会は平成17年２月６日の日曜日でした。その18日後の２月24日、先生は職場で倒れられました。雪が降る寒い日、会議中と聞いております。先生はこの時期ご多忙を極めておられ、予定が空いている６日の日曜日に設定したところ、「日曜日ぐらいやすませてくれよ。殺すきかー」と冗談でおっしゃられたのを記憶しております。今思えば、強引に会議日を設定したことが悔やまれてなりません。

昭和52年「水の子岩海底遺跡」の調査にあたられた先生は、先駆的な調査手法で中世の海上交通についての多くの知見をもたらされ、また、平成７年から３年間にわたり文化庁国庫補助事業として実施した「備前焼紀年銘土型調査事業」では調査員のとりまとめ役として事業を推進されました。先生は、備前焼の研究について地元行政の奮起を常にうながされていました。本来であれば本書を備前焼研究の成果の一部として献呈できたはずですが、残念でなりません。

ここで謹んで先生のご冥福をお祈りしますとともに本書の刊行をご報告したいと思います。

報 告 書 抄 録

ふりがな	いんべみなみおおがまあとしゅうへんようせきぐんかくにんちょうさほうこくしょ
書名	伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書
巻次	Ⅱ
シリーズ名	備前市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	7
編著者名	石井啓・小西通雄
編集機関	岡山県備前市教育委員会
所在地	〒705-8602　岡山県備前市東片上126　TEL 0869－64－1841 E-mail : syougai@city.bizen.okayama.jp
発行年月日	西暦2006年7月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″ （日本測地系）	東経 °′″ （日本測地系）	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
いんべみなみおおがまあと 伊部南大窯跡 しゅうへんようせきぐん 周辺窯跡群	おかやまけん 岡山県 びぜんし 備前市 いんべ 伊部	211	－	34° 44′ 01″	134° 09′ 45″	2001.10.5～ 2001.12.26 2002.4.2～ 2002.6.13	184	ボランティア団体による公園開発

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
伊部南大窯跡周辺窯跡群	窯跡	平安時代	東6号窯跡	杯・鉢	伊部で最古の窯跡
	窯跡	室町時代	KP-1地点窯跡	備前焼	
	窯跡	江戸～近代	KP-2地点窯跡	備前焼	第3の天保窯

備前市埋蔵文化財調査報告７

伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅱ

平成18年７月28日　編集
平成18年７月31日　発行

編集・発行　備前市教育委員会
岡山県備前市東片上126

印　　刷　㈱大西商店印刷部
岡山県備前市西片上62